



移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能

住田, 哲郎

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2011-12-21

(Date of Publication)

2012-11-12

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3172

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003172>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



神戸大学博士論文

移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能

住田 哲郎

～ 目 次 ～

序章 はじめに

1. 本研究の研究対象	1
2. 本研究の目的	3
3. 本論の構成	4

第1章 逆向態とは何か

1. はじめに	5
1.1 英語学におけるヴォイス	5
1.2 国語学・日本語学におけるヴォイス	7
1.2.1 寺村 (1982)	7
1.2.2 益岡 (1987)	9
1.2.3 日本語記述文法研究会(編) (2009)	10
1.3 ヴォイスの成り立ちと本研究における定義	10
2. 逆向態	12
2.1 逆向態の概要	12
2.2 他のヴォイスとの比較	13
2.3 逆向態を有する諸言語	15
2.3.1 平原クリー語	15
2.3.2 ナヴァホ語	15
2.3.3 ノクテ語	16
2.3.4 サハプティン語	17
2.4 受動態と逆向態の違い	19
2.4.1 Klaiman (1991)	19
2.4.2 Thompson (1994)	21
3. 日本語に逆向態は存在するか	22
3.1 Klaiman (1991) の基準による検討	22
3.2 Thompson (1994) の基準による検討	26
4. 結び	30

第2章 テクルの用法分類

1. はじめに	33
2. 先行研究	33
2.1 吉川 (1976)	34
2.1.1 空間的移動を意味するもの	34
2.1.2 アスペクトをあらわすもの	37
2.2 寺村 (1984)	38
2.2.1 V-V 型	38
2.2.2 v-V 型	39
2.2.3 V-v 型	39
2.3 Shibatani (2007)	40
2.3.1 テミエルとの交替	40
2.3.2 結合価に関する分析	41
2.3.3 否定のスコープに関する分析	42
2.4 先行研究の問題点	42
3. テクル文の分析	43
3.1 空間的用法について	44
3.1.1 V+V 型：独立動作	44
3.1.2 Vm-V 型：様態・付帯状況移動	47
3.1.3 V-V 型：求心的移動	52
3.1.4 V-v(I)型：逆向態	57
3.2 アスペクト用法について	63
3.2.1 V-v(A1)型：状態・状況変化	63
3.2.2 V-v(A2)型：継続	65
4. 結び	67

第3章 テクル文における逆向態用法の特徴

1. はじめに	69
2. 先行研究	69
2.1 Nariyama (2000)	70
2.2 Shibatani (2003)	73
2.3 住田 (2006)	77
2.4 古賀 (2008)	78
2.5 山田 (2004)	82
2.5.1 主体移動動詞	82

2.5.2 対象移動動詞	84
3. テクルの逆向態用法の特徴	86
3.1 V-V 型・V-v(V)型 における前項動詞の分類	86
3.2 テクル付与の義務性と嫌悪性	88
3.3 実況型文脈に見られる驚嘆の意味・機能	92
3.4 未完了性	93
4. 結び	96

第4章 移動動詞「来る」の文法化

1. はじめに	99
2. 文法化とは	100
2.1 文法化の具体例	100
2.2 文法化に見られる現象	102
2.2.1 脱意味化	102
2.2.2 使用範囲の拡張	103
2.2.3 脱カテゴリー化	103
2.2.4 音韻的減少	103
2.3 文法化のメカニズム	103
2.3.1 再分析と類推	104
2.3.2 推論	104
2.4 文法化の基準	106
3. 先行研究	106
3.1 クルの文法化に対する先行研究の見解	107
3.2 坂原 (1995)	108
4. 考察	110
4.1 テクル用法の6分類	110
4.2 各用法の文法化の度合い	112
4.3 テクル用法の意味・機能変化	113
4.3.1 V+V 型と V _m -V 型の派生	114
4.3.2 V-V 型の派生	115
4.3.3 V-v(I)型の派生	116
4.3.4 V-v(A1)型と V-v(A2)型の派生	117
5. 結び	119

第5章 日本語ヴォイスの機能分布

1. はじめに	121
2. 先行研究	122
2.1 山田（2004）の考察	123
2.2 テクルとテクレルの関連性	123
2.3 レル・ラレルとテモラウの関連性	125
2.4 テモラウと使役	126
3. 日本語のヴォイス	128
3.1 受動態と能動態	128
3.1.1 受動態とレル・ラレル文	128
3.1.2 能動態	129
3.2 逆向態と順向態	130
3.2.1 逆向態とテクル文	130
3.2.2 順向態とテイク文	131
4. ベネファクティブ	132
4.1 ベネファクティブとヴォイス	133
4.2 非恩恵型ベネファクティブ	134
4.2.1 非恩恵型テヤル	134
4.2.2 非恩恵型テクレル	135
4.2.3 非恩恵型テモラウ	136
5. 日本語ヴォイスと心的態度の関連性	137
5.1 日本語ヴォイスの構造	137
5.2 日本語ヴォイスのメカニズム	139
5.3 日本語ヴォイスの機能分布	140
6. 社会心理学的観点からの考察	141
7. 結び	142

第6章 日本語ヴォイスの事象構造

1. はじめに	145
1.1 イメージスキーマ	145
1.2 意味役割	146
1.3 プロファイルとベース	148
2. 受動態の先行研究	149
2.1 松下（1930）	149
2.2 三上（1953）	150

2.3 鈴木 (1972)	150
2.4 益岡 (1991)	152
3. 受動態の認知モデル	153
3.1 直接受動文	153
3.2 間接受動文	160
3.3 降格受動文	164
3.4 属性叙述受動文	166
3.5 先行研究の再検討	168
4. 逆向態の認知モデル	173
4.1 直接逆向文	173
4.2 間接逆向文	176
5. 結び	180
終章 結論と今後の展望	
1. 本研究のまとめ	183
2. テクルの文法化研究について	188
2. 言語研究の言語教育への応用について	188
用例の出典	191
参考文献	192

グロス部分の略語一覧

ACC	accusative	対格
ASSOC	associative	連結辞
DC	declarative	叙述
DIR	direct	順向
ERG	ergative	能格
FUT	future	未来
IMPERF	imperfect	未完了
INV	inverse	逆向
NOM	nominative	主格
OBJ	object	目的語
OBL	oblique	斜格
OBV	obviate	非近接
PASS	passive	受動
PAST	past	過去
PL	plural	複数
PROX	proximate	近接
SG	singular	単数
SUBJ	subject	主語
TOP	topic	主題

序 章

はじめに

1. 本研究の研究対象

日本語の動詞「来る」は、次の例文(1a)から(1c)に見られるように移動の意味をあらわすだけではなく、例文(1d)、(1e)のようにアスペクトをあらわす機能も持っている。

- (1) a. ちょっと食堂で昼ごはんを食べて来ます。
- b. 妹がお茶を運んで来た。
- c. 兄がやっと部屋から出て来た。
- d. あいつの話を聞いていると、だんだん気分が悪くなってきた。
- e. 生まれてからずっと神戸で暮らしてきた。

また、現代日本語においては「来る」は、次のような使われ方もしている。

- (2) a. 先日の件とは、彼の家へ行くという話だった。あまり気乗りはしなかったが、断る理由も思いつかなかった。ここで断ったところで、また何らかの形で招待してくるに違いないのだ。
(『変身』: p.206)
- b. 正体をつかんだと思わせた瞬間、するりとすり抜け、新たな展開を予感させながら、またしても微妙な徒労感を残す。それは常に、素数が使ってくる手だった。
(『博士の愛した数式』: p.176)

例文(2a)、(2b)のような例の「来る」には実質的な移動の意味は全くない。相手と自分との相互的なやりとりの中で「来る」が後続する前項動詞の意味内容が、ソト(相手)からウチ(自分)へと向かってなされているということをあらわしている。また、例文(2a)の場合は相手「彼」も自分も人間(有生物)であるが、例文(2b)は、自分は人間でも相手は「素数」という抽象的な存在である。このように「来る」は、空間的なやりとりにおける相手と自分との関わり方だけではなく、心的なやりとりにおいても、同様に使えるところが興味深い。

では、次のような場合はどうであろうか。

2009年3月24日、WBC ワールド・ベースボール・クラシック決勝戦、日本対韓国の試合は、歴史に残る白熱した試合展開となった。3対3で迎えた10回の表、2アウト2、3塁。韓国のピッチャーは守護神、林昌勇(イム・チャンヨン)。バッターは侍ジャパンのチームリーダー、イチロー。ボルテージが最高潮に達したドジャーススタジアムは、その時まさに最高の瞬間を迎えようとしていた。次の瞬間、林昌勇は渾身の8球目をミット目掛けて投げた。迷いなくバットを振り抜くイチロー。ボールはセンター前にはじき返され、値千金の2点タイムリーヒットとなった。

事実は1つ。以下の通りである。

(3) イチローが林昌勇からセンター前ヒットを打った。

しかしながら、その1つの客観的事実に対する捉え方は立場によって様々に異なる。例えば、話者の立場によって同じ1つの客観的事実に対する見方、言い方は次のように異なってくる。

(4) イチローがヒットを打ってくれた。

(5) 林昌勇がイチローにヒットを打たれた。

日本チームを応援している人であれば、おそらく例文(4)のように喜びを表現するだろうし、韓国チームを応援している人であれば、例文(5)のように表現するであろう。例文(4)からは話者の喜びのようなポジティブな感情が感じ取れるし、例文(5)からは、悔しさのようなネガティブな感情が感じ取れる。このように同じ1つの客観的事実に対しても立場によって、その言語表現の仕方は異なってくる。

同じ1つの事態について述べているにもかかわらず、この例文(4)、(5)のように異なった話者の感情を感じ取れるのは、「ヴォイス (Voice)」と呼ばれる文法カテゴリーの働きによるところが大きい。人間はある事態に対する自らの心的態度(考え・気持ち)を、ヴォイスを利用して表現し、自らの気持ちを相手に伝えたり相手の気持ちを汲み取ったりしながら、より円滑なコミュニケーションを実現しているのである。

ここでもう一度、例文(2)を見てみよう。例文(2)は相手と話者との単なるやりとりをあらわしているだけではなく、「あまり気乗りはしない」「微妙な徒労感を残す」といった表現からもわかるように、話者のネガティブな感情が感じ取れる。このことから考えると、どうやら例文(2a)、(2b)のような「来る」は、例文(4)と(5)と何か関係がありそうである。

本研究では、以上のような「来る」に関する言語表現のヴォイス的側面を詳細に分析し、さらにその他のヴォイス機能を有する形式群（レル・ラレル文とベネファクティブ）との関係性を明らかにする。また、日本語において「来る」がどのような役割を果たし、そして、どのような変化のメカニズムによってそのような機能を果たすようになったのかを追究する。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、以下の2つである。

- [1] 移動動詞「来る」の補助動詞用法が持つ各種の用法を、先行研究の考察をもとに再分類し、特にそのヴォイス機能を有する用法の特徴と各種用法の文法化現象について言語学・日本語学的な立場から分析し、記述すること
- [2] ヴォイス機能を有するテクルとレル・ラレル、ベネファクティブマーカ（テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウ）との機能面における関連性について考察し、インターアクティブな他動的事象における日本語ヴォイスの機能分布を提示し、さらに受動態と逆向態（Inverse）を認知文法論的立場から分析して「ヴォイスの意味」について論じること

[1]については、第1章から第4章にかけて主にテクル形式に焦点を絞って議論する。
[2]については、第5章、第6章で、より広い視点から各ヴォイスマーカと受動態、逆向態との関係性について論じる。

言語研究に対する考え方は学者によって様々であるが、筆者は角田（2009）による次の考え方に共感を覚える。

学問の世界に理論的構築物というものがある。理論的構築物とは、何かの現象を説明しようとして、学者が提案する考え方である。理論的構築物を提案する際に問題となることは、実際にそんな物が有るか無いかではない。そういう物が有ると、仮に考えたら便利であるか、或は、そんなものが有ると考えても無駄であるか、ということである。便利なものだったら、学問に採用する価値が有るし、役立たないものだったら、学問に採用する価値は無い。（角田（2009：193）より）

本研究においてここで言う「理論的構築物」に相当するものは、「逆向態」ということになる。本研究の意義は、現在の日本語学においてはまだ定着しているとは言えない「逆

向態」という概念を日本語のヴォイスの分析に導入することで、これまでにはなかった視点から、日本語の複数の言語形式に見られるヴォイス現象を統合的に説明できることを示し、さらに、日本語のヴォイス体系の中に逆向態を位置づけることで、世界の言語の中における日本語の特性（個別性）を示すことにある。その意味で、本研究で得られる知見が日本語の文法記述においてだけでなく言語学への学問的寄与のひとつと成り得るものであることを示したい。

3. 本論の構成

本稿は、序章、本論となる6つの章、終章の全8章から成る。

第1章では、本研究において議論のベースとなる「ヴォイス」という文法カテゴリーについて概観する。その中でも特に中心テーマとなる受動態、および逆向態という概念がどのような現象を指すのかという点について議論する。

第2章では、テクル文に見られる各種用法について分析する。移動動詞「来る」と、それが文法化してテ形補助動詞となったテクル形式の用法分類について、これまでの先行研究における議論を再検討し、先行研究には見られなかった新たな視点からテクル文を再分類する。

第3章では、第2章で提示したテクルの6つの用法のうち、特に逆向態用法に焦点を当て、その特徴的な機能について議論する。

第4章では、これまで様々な言語の言語現象をもとに確立された文法化理論に基づき、移動動詞「来る」が文法化してテ形補助動詞へと意味・機能が変化していくプロセスと、その派生関係について論じる。

第5章では、第4章までの議論を踏まえて、テクル形式の逆向態用法を他のヴォイスマーカーと比較対照しながら、日本語における受動態と逆向態の機能的関連性について明らかにする。

第6章では、認知文法論的な立場から受動態と逆向態があらわすインターアクティブな他動的事象を分析し、「ヴォイスの意味」について論じる。

第1章

逆向態とは何か

第1章では、本研究全体の中心テーマとなる「逆向態 (Inverse)」¹⁾という概念について概観し、それを日本語の言語現象（テクル文やテクレル文）に適応することの是非について検討する。

逆向態というヴォイスは、主にアルゴンキン諸語 (Algonquian languages) に見られる現象で、これまで言語類型論を中心とする領域で研究が進められてきた。日本語のヴォイス研究と言えば、古くから「受身／受動態 (Passive)」や「使役 (Causative)」を中心に論じられることが多く、逆向態についてはこれまでほとんど論じられてこなかった²⁾。

そのような研究背景を踏まえ、本章では逆向態の上位の文法カテゴリーである「ヴォイス (Voice)」と逆向態に関する言語類型論の論考を概観し、日本語のテクル文について逆向態としての用法が存在するか否かという問題について検討する。

1. はじめに

まず、本論に入る前に「逆向態」の上位概念にあたる「ヴォイス」という文法カテゴリーについて触れておきたい。今日、世界に存在する言語の数は 5000 とも 7000 とも言われ、その様相も種々様々である。現在のところ、この「ヴォイス」という概念については言語学者のコンセンサスを得るような決まった定義はないと言ってよい。

そこで、ここではまず英語学と国語学・日本語学における「ヴォイス」について確認する。

1.1 英語学におけるヴォイス

現代の英語学においては、「ヴォイス (Voice)」はどのように定義されているのだろうか。まずはじめに『現代英文法辞典』(荒木・安井(編) (1992) : 1566) における定義を見てみよう。

¹⁾ 住田 (2005, 2006, 2010) では Comrie (1981b) とその邦訳を参考に *Inverse* を「逆行態」と呼んでいたが、本研究ではその機能性に注目し「逆行」ではなく「逆向」の字を当て「逆向態」と呼ぶことにする。

²⁾ 管見の限り、はじめて日本語に *Inverse* (逆向態) という概念を適用して論じたのは Nariyama (2000) である。以後、Shibatani (2003)、住田 (2006)、古賀 (2008) などで論じられるようになった。

(1) Voice (態) :

文の主格 (NOMINATIVE) と他動詞 (TRANSITIVE VERB) の表す動作との関係を表す形態をいう。英語には、受動態 (PASSIVE VOICE) と能動態 (ACTIVE VOICE) との2つの種類がある。He *opened* the door. といえは能動態であり、The door *was opened*. といえは受動態である。能動態と受動態とは、同じ知的意味 (COGNITIVE MEANING) を持つ文となる。

～ (中略) ～

インドヨーロッパ祖語においては、受動態は存在せず、能動態と中間態 (middle voice) の2つが存在していただけである。英語には、本来この中間態というものはなく、The book *sells* well. (この本はよく売れる) のような能動受動態 (ACTIVO-PASSIVE) が、この中間態に近い表現となる。

次の(2)は、Matthew (1997 : 398) *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics* における定義である。

(2) Voice (態) :

Used conventionally from the late Middle Ages for a grammatical category by which forms of verbs are opposed as active or passive, or as active, passive or middle. Thus in *Everyone admired Margaret* the verb *admired* is in the active voice; in *Margaret was admired by everyone*, *was admired* or the participle *admired* is in the passive voice.

Thence of any grammatical opposition in which different verb forms are associated with changes in the syntactic roles of units related to them. Thus in *Everyone admired Margaret*, *Margaret* is the object; in *Margaret was admired* or *Margaret was admired by everyone* it is instead the subject. [以下省略]

(中世末期以降、「能動と受動」、あるいは「能動、受動と中間」のように動詞の形式が対立するような文法カテゴリーに対して慣習的に用いられてきた用語。

Everyone admired Margaret の動詞 *admired* は能動態、*Margaret was admired by everyone* の *was admired*、あるいは分詞 *admired* が受動態である。

それゆえ、異なる動詞の形式が、それらの動詞が持つ構成単位の統語的役割の変化と連動するような文法的対立のことを指す。*Everyone admired Margaret* では *Margaret* は目的語であるが、*Margaret was admired*、あるいは *Margaret was admired by everyone* では、*Margaret* はその代わりに主語となっている。³⁾

³⁾ 訳は筆者による。

以上のように、現代の英語学では「ヴォイス」は能動態、受動態、中間態の文法的な対応関係を中心とする文法カテゴリーと見られている。

では次に、日本語研究者が「ヴォイス」という文法カテゴリーをどのように捉えているのかを確認していくことにする。

1.2 国語学・日本語学におけるヴォイス

日本語研究における「ヴォイス」という用語は、国語学においては伝統的に「相」という訳があてられていたが、最近では「態」と訳されることがほとんどである。ここでは寺村（1982）、益岡（1987）、日本語記述文法研究会(編)（2009）を取り上げる。

1.2.1 寺村（1982）

寺村（1982）は、まず日本語の述語と様々な名詞句との結びつきにおいてその全ての型に通じてあらわれる主格の補語「X ガ」に注目した。この主格補語の「X ガ」は、どの述語にとってもまず第一に問題になる名詞であり、動的事象においては、すべての述語があらわす動作、作用の主体となる。また、それに伴って登場する二つ目以下の補語は、主体の動作、作用に関係する対象、または場所（出どころ、通り道、到達点）となると述べた。動作、作用の主体をコトの主役と見立てるのが‘普通’の描き方ではあるが、仕手と対象が存在する場合、対象を主役としてコトを描こうとすることもまた極めて‘自然’なことであり、登場人物が主役から脇役にまわったり、脇役のどれかが主役としてコトの中心に座ったりすること、つまり文法的に言えば「格」の交替が述語の形態に規則的に対応している場合は、文法で扱う1つの部門となると述べ、ヴォイス現象の核心に触れている⁴⁾。

寺村（1982）では、国語学の成果を踏まえつつ、印欧語の長い歴史の変遷を経てきたヴォイスという概念を日本語の文法体系の記述に組み込むために、形態・統語・意味の3つの面からの明確な特徴づけが必要であるとし、ヴォイスというのは「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」とであると規定した。寺村（1982）で注目すべき点は、この規定のもと、日本語においてヴォイス現象として扱う領域について議論している点であろう。

まず寺村は格の移動と対応する動詞の形の中に、出現予測ができる形態素を抽出できるものを「文法的な態」の1つの下位分類と認め、予測が不可能な、つまり辞書に個別に記述すべき形態的対応関係にあるものを「語彙的な態」とした。

(3) a. 太郎ガ浜辺デ亀ヲツカマエタ

b. 亀ガ浜辺デ太郎ニツカマエラレタ

⁴⁾ ここで言う‘普通’或いは‘自然’というのは、認識論や心理学の対象としてではなく、どちらを文法的に基本的な形式と考えるかという問題である。

c. 亀ガ浜辺デ太郎ニツカマッタ

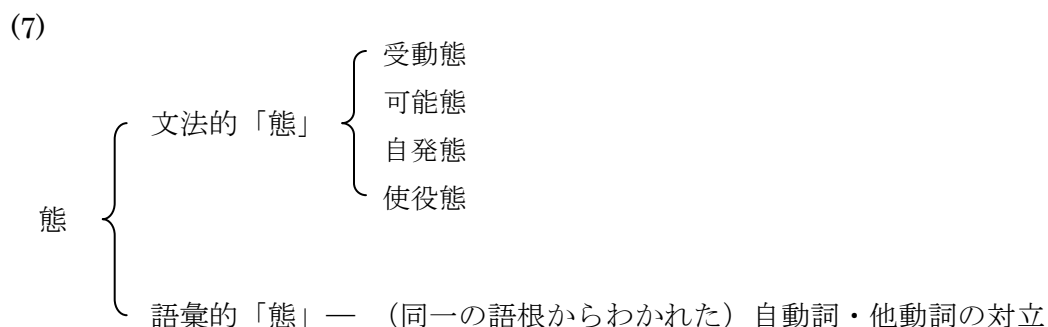
例えば、(3a)は仕手「太郎」を主役として描いた文であるが、受け手の「亀」を主役にする(3b)のように「太郎」が脇役にまわる受身文になる。「ツカマエラレタ」は「ツカマエ(ル)」という動詞の語幹に「ラレ」という形態素がついた規則的な派生に導かれる形であり、その形態素の付加と「太郎ガ→太郎ニ」、「亀ヲ→亀ガ」という補語の形(格)の変化とが相関関係にあるため、これを「文法的な態」の1つの型であるとした。

一方、「亀ヲ」を「亀ガ」に変えた文には、(3c)のような例もある。「ツカマエル→ツカマル」という対応は、一方をもとにした規則的派生ではなく、このような情報はひとつひとつ語彙項目中に記すほかない語彙的なものである。しかし、「格の移動と動詞の形態の相関」という大きな枠では当然取り扱わなければならない現象であり、寺村(1982)では、このようなものを「語彙的な態」として扱った。ただし、以下の例に見られるように、格の移動に伴う述語の変化が全く異なる2つの動詞として現れる場合や全く動詞の形に変化がない場合は、「態」の枠の中で論じる必要はないと述べている。

- (4) a. 太郎ガ花子ト結婚シタ
b. 花子ガ太郎ト結婚シタ
- (5) a. 小津ガ篠田ニ影響ヲ与エタ
b. 篠田ガ小津ニ影響ヲ受ケタ
- (6) a. 太郎ガコノ亀ヲツカマエタ
b. コノ亀ハ太郎ガツカマエタ

相互動作を表す(4)では、格が移動しても述語の形が変わらない。逆に(5)では全く違う動詞が対応している。そして、(6b)のような題述文については、一文の主題としてある補語を取り立てたのであって「格」が移動したのではないとし、これと「態」とは区別されなければならないと述べている。

以上のような分析をもとに、寺村(1982)では、次のような「態」の枠組みが提案されている。



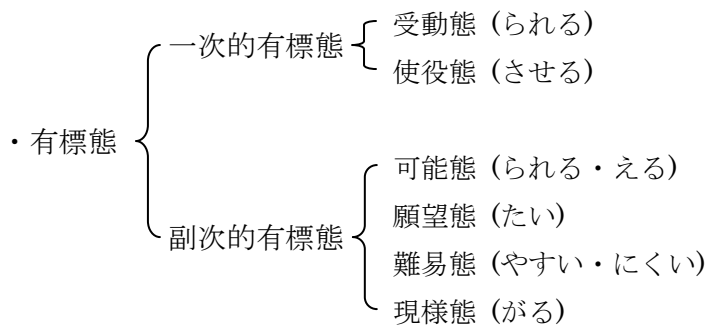
それまでのヴォイス研究は、主に寺村の言う「文法的な態」について論じられてきたわけだが、いわゆる動詞の自他対応についても「語彙的な態」としてヴォイス体系に組み込んだ点は、寺村（1982）の特筆すべき点であろう。

1.2.2 益岡（1987）

次に益岡（1987）を取り上げる。益岡（1987）は、まず「辞書」に語彙情報を直接記載すべき述語と生産的接辞が添加されて形成される述語とを区別し、それぞれ「単純述語」、「複雑述語」と呼んだ。例えば、「食べる」は単純述語であり、これに接尾辞「られる」が添加された「食べられる」は複雑述語である。そして、単純述語を取る述語句とそれに対応する複雑述語を取る述語句との間に、述語の項が取る表現形式のあり方、すなわち、項の格表現のあり方に一般的・規則的な相違が見られ、同時に、両者の間に意味の面でも一般的・規則的な相違が見られるならば、「ヴォイスの対立」が認められるとの立場に立ち、ヴォイスという概念を「述語の生産的接辞添加にかかわる、単純述語・複雑述語の対立のあり方と、これらの述語が取る項の表現形式（格表現）に見られる対立（及び、それに付随する意味的対立）のあり方との関係の体系」と特徴づけた。以下は、益岡（1987）によるヴォイス体系である。

(8)

・無標態 — 能動態



益岡は、単純述語を取る述語句の格表現のあり方と、対応する複雑述語を取る述語句の格表現のあり方との間に、規則的な異なりが認められ、且つ意味的にも両者の間に規則的な相違が見られる時、前者を「無標態」、後者を「有標態」と呼んだ。そして、有標態のうち、「動的事象における主体の把握の仕方にかかわる有標態」を「一次的有標態」と呼び、「受動態」と「使役態」がこれに当たるとした。また、「複雑述語の派生に付随して格表現が影響を受ける有標態」を「副次的有標態」と呼び、これには上の表にあるような「可能態」、「願望態」、「難易態」、「現様態」を例として挙げている。ただし、

「フランス料理が食べたい／フランス料理を食べたい」の両方が言えることからわかるように、副次的有標態における格の変更は必ずしも義務的ではない。述語の状態性という語彙特徴に深く関わるという意味で、副次的有標態は一次的有標態に比べてより語彙論的色彩の濃い概念であるとしている。

1.2.3 日本語記述文法研究会(編) (2009)

日本語記述文法研究会(編) (2009 : 207-212) では、ヴォイスとは「事態の成立に関わる人や物を表す名詞が、どのような形態的なタイプの動詞とともに、どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリー」とされている。そしてさらに、ヴォイスの中心的な表現として能動文、受身文、使役文をあげ、ヴォイス表現の周辺として可能構文、自発構文、相互構文、再帰構文をあげている。

- (9) 田中が佐藤をたたいた。(能動文)
- (10) 佐藤が田中にたたかれた。(受身文)
- (11) 鈴木が田中に佐藤をたたかせた。(使役文)
- (12) 佐藤さんは英語が話せる。(可能構文)
- (13) 私にはふるさとが懐かしく思い出される。(自発構文)
- (14) 佐藤さんは山本さんと助けあうことにした。(相互構文)
- (15) 鈴木は服を着た。(再帰構文)

このように、国語学・日本語学における「ヴォイス」という文法カテゴリーについては研究者により捉え方は様々である。しかしながら、以上にあげた論考すべてに受動態、使役態、可能態の3つのヴォイスがあることからしても、これらが国語学・日本語学におけるヴォイス研究の主流となっていたことが見てとれるであろう。

1.3 ヴォイスの成り立ちと本研究における定義

ここまで、英語学と国語学・日本語学におけるヴォイスについて見てきたが、ヴォイスという概念そのものについて論じた論考についても紹介しておきたい。

柴谷 (2000) によると、ヴォイスとは、ギリシャ語の古典文法に由来する概念であるとされている。日本語研究者の間で「態 (あるいは相)」と訳される英語の術語 *voice* は、ラテン語の *vox* (「音声」「言語」) を直訳したもので、ギリシャ語の文法用語である「 $\delta \iota \alpha \theta \epsilon \sigma \iota \varsigma$ (*diathesis*)」にあてられたものであるという。*diathesis* は、ギリシャ語で「配置」「構成」「状態」「態度」「気持ち」などを語義とする語であるが古代ギリシャの文法家はこれを文法用語として使用していたとされる。

現存する最古のギリシャ語の文法書は、Dionysius Thrax の *Technê Grammatikê*

(『文法の技巧』、紀元前 1~2 世紀?) とされており、それによると、ギリシャ語には *enérgeia*、*páthos*、*mesótês* の 3 つの *diathesis* があったとされている。

- (16) a. *tuptô* 私は殴る (*enérgeia*)
 b. *tuptomai* 私は殴られる (*páthos*)
 c. *diephthora* 私は破滅している (*mesótês*)
 egrapsamên 私は自分のために書き付けた (*mesótês*)

enérgeia はラテン語の文法用語 *activum* を経て「*active* (能動態)」に、*páthos* は *passivum* を経て「*passive* (受動態)」という術語になった。また *mesótês* は語義的には *medium* を経由し「*middle* (中相)」になったが、Dionysius が *mesótês* と呼んでいたものは、今で言うところの「中相」ではなく、形態と意味が混交したもの、つまり形態的には *páthos* でありながら意味的には *enérgeia* を表していたり、あるいはその逆の状況を表す形式のことであった。

細江 (1928) は、印欧語と日本語の相 (ヴォイス) にはかなりの違いがあると認識しつつも、その原義、発達の経路についてはかなり類似点があるとし、日本語と印欧語との言語事実を照らし合わせることで日本語の「能相・中相・所相」の成立を解明した。細江 (1928) によると、ギリシャ語で能動、受動、中相の 3 つあったヴォイスの区別は、ラテン語では能動と受動の 2 つになり、中相については、一部は受動態に流れ込み、一部は最初は能動態に、その後、再帰動詞によりその内容が表されるようになったとされている。このような流れの中で、ヴォイスという概念は能動態と受動態を中心に据える概念へと発展していった。

以上の議論でわかったことは、まず「ヴォイス」という概念の起源であるギリシャ語の古典文法においては、ヴォイスという概念は、受動態ではなく中相を中心とする文法カテゴリーに対して用いられる傾向が強かったが、それが時代を経るにつれ言語変化の影響もあり、現代の英語学においては受動態を中心にヴォイス現象を捉える傾向が強くなったと推測されることである。またその一方で、国語学・日本語学においては使役態、可能態、自発態のみならず、願望態や難易態など、より広い視野を持って言語現象を観察し、広くヴォイスのカテゴリーを捉えるようになったと推測される。

以上のように、ヴォイスという文法カテゴリーは研究者によってその射程が異なる。しかしだからと言って、ヴォイスという文法カテゴリーを曖昧にしたまま議論を進めることはできない。そこで本研究では、以上の先行研究を踏まえ、次のようにヴォイスを定義し、以下議論を進める。

(16) 本研究におけるヴォイスの定義

ある事態における行為の起こりとその影響の動向が、動詞の形態と文構造にどのように反映されているかという問題に関わる文法カテゴリー

では次に、本研究の中心テーマとなる逆向態 (Inverse) というヴォイスについて具体的に見ていこう。

2. 逆向態

以下では、主に言語類型論に関する先行研究を概観しながら、言語学において逆向態と呼ばれているヴォイスがどのような概念と考えられているのかを確認し、その具体例について見ていくことにする。

2.1 逆向態の概要

まず、言語学において逆向態という概念がどのように捉えられているのか見てみよう。Matthews (1997 : 186) では、逆向態を次のように定義している。

(Form of verb, affix) indicating, e.g. in Algonquian Languages, that distinctive features that of two elements in a clause that differ on some scale of empathy, it is the one lower on the scale that is the agent.

Opp. direct. Thus, if third person forms are lower on the scale than first persons, a sentence meaning 'I kissed the sister' will be marked as direct: schematically, with the persons marked respectively by a prefix and a suffix, 1ST-*kissed*-DIR-3RD *sister*. A sentence meaning 'The sister kissed me' will instead be marked as inverse. Thus, with the persons marked in the same way in the same positions, 1ST-*kissed*-INV-3RD *sister*.

((動詞、接辞の形式について) 例えば、アルゴンキン諸語では、節内における共感度が異なる2つの要素があれば、共感度の低い方が動作主となることを示す。

その逆、順向態。もし3人称の形式が共感度において1人称よりも低ければ、I kissed the sister という意味をあらわす文は、順向のマーカが付与される。その人称をスキーマとしてそれぞれ接頭辞や接尾辞を用いて標示すると、1ST-*kissed*-DIR-3RD *sister* となる。代わりに The sister kissed me という意味をあらわす文には、逆向のマーカが付与される。上記と同様、同じ位置に人称を標示すると、1ST-*kissed*-INV-3RD *sister* となる。⁵⁾

⁵⁾ 訳は筆者による。

また、Thompson (1994 : 60) では、逆向態について次のように述べている。

An inverse construction indicates a deviation from the normal degree of relative topicality between agent and non-agent. Traditional uses of the word “inverse” have been limited to those languages⁶⁾ in which inverse constructions are based on the ranking of persons. In such system, speech act participants are viewed as being greater in rank than third person and inverse morphology is used when the agent is third person and the non-agent first or second person.

(逆向構文は、動作主と非動作主の相対的話題性が通常のあり方から逸脱することを示す。伝統的に *inverse* という用語は、逆向構文の適用が人称のランクに基づいている諸言語に対してのみ用いられてきた。そのようなシステムでは、SAP (1 人称と 2 人称) が 3 人称よりも高いランクにあり、動作主が 3 人称、非動作主が 1 人称や 2 人称である場合に逆向の形態素が用いられる。⁷⁾

以上 2 つの定義、記述からすると、「逆向態 (Inverse)」という用語は、ある事態に参与する 2 者 (動作主と非動作主) に対して生じる共感度・相対的話題性の差によって何らかの形態的マーカーが発生することをあらわしていると言える。

次に、逆向態と非常に近い関係にある他のヴォイスと比較することで、逆向態という概念を説明した Givón (1994) について見ていこう。

2.2 他のヴォイスとの比較

世界の様々な言語の文法関係、格関係、意味関係の関連性を考察していくと、ヴォイスという文法カテゴリーが、いかに複雑に文法がコード化された機能領域に関するカテゴリーであるかがわかる⁸⁾。たとえ、共時的に見て形式と意味、あるいは構造と機能において非常に類似性のある言語同士であったとしても、通時的に見れば個々の言語形式はそれぞれ全く異なる語彙領域から文法化してきた可能性がある一方で、逆に現在、意味的にも機能的にも同じと見られる言語形式同士が、今後、全く異なる機能を担うことになる可能性もあるのである。言語はそのようなダイナミックな流れの中で常に変化している。類型論的観点から言語を広く観察すると、同じ受動態であっても構造面はかなり多様である。これは、言語ごとに受動態の起源が異なるからであり、たとえ共時的に見て同じ受動態として機能していても、構造面に注目すると元の形式的・構造的痕跡が残っていることがある。つまり、ヴォイス現象を考察する際には、表面化した形式・構造にのみ注目するのではなく、機能面をより深く考察する必要がある。

⁶⁾ ここでいう *those languages* とは、Thompson (1994) で分析の対象とされたコユコン語 (アサバスカ語族)、平原クリー語 (アルゴンキン語族)、チェパン語 (チベット・ビルマ語族) 等を指す。

⁷⁾ 訳は筆者による。

⁸⁾ Shibatani (1985)、Haspelmath (1994)、Croft (2001) を参照。

Givón (1994) は、Cooreman (1987) 等を参考に、能動・順向態、逆向態、受動態、逆受動態の4つのヴォイスの機能性の差について、各ヴォイスにおける事態参与者（動作主と被動作主）の相対的な話題性の違いをもとに、次の表1のようにそれぞれを区別した。

表1 4つのヴォイスにおける動作主・被動作主の相対的話題性

態 (Voice)	相対的話題性 (Relative topicality)
能動・順向態 (Active-Direct)	AGT > PAT
逆向態 (Inverse)	AGT < PAT
受動態 (Passive)	AGT << PAT
逆受動態 (Antipassive)	AGT >> PAT

※AGTは動作主 (Agent)、PATは被動作主 (Patient)

さらに Givón (1994) は、表1で示した4つのヴォイスの機能性の違いについて語用論的観点から説明し、各ヴォイスを次のように定義している。

(17) Givón (1994) による4つのヴォイスの定義

① 能動・順向態 [基準] :

被動作主 (Patient) よりも動作主 (Agent) の方が話題性を持つが、被動作主 (Patient) もかなりの話題性を保持している。

② 逆向態 :

動作主よりも被動作主の方が話題性を持つ。しかし動作主もかなりの話題性を保持している。

③ 受動態 :

動作主よりも被動作主の方が話題性を持つ。そして動作主にはほとんど話題性がない。(降格)

④ 逆受動態 :

被動作主よりも動作主の方が話題性を持つ。そして被動作主にはほとんど話題性がない。(降格)

このように、逆向態というヴォイスは受動態や逆受動態等、他のヴォイスとの関連性から相対的に定義することができる。Givón (1994) では、まず能動・順向態を基準として定めた上で、その他のヴォイス (逆向態、受動態、逆受動態) については、事態参与者の相対的な話題性の違いの程度から(17)のように定義した。

2.3 逆向態を有する諸言語

ここまで、先行研究をもとに逆向態というヴォイスの概要について見てきた。では次に、諸言語における逆向態の言語現象について具体的に見ていくことにする。

2.3.1 平原クリー語

平原クリー語 (Plains Cree) は、アルゴンキン語族 (Algonquian) に属する言語である⁹⁾。平原クリー語の逆向態は、次のような例文に見られる¹⁰⁾。

- | | | |
|---------|-----------------------|------|
| (18) a. | ni-sēkih-ā-nān | atim |
| | 1PL-scare-DIR-1PL.3SG | dog |
| | “We scared a dog.” | |
| b. | ni-sēkih-iko-nān | atim |
| | 1PL-scare-INV-1PL.3SG | dog |
| | “A dog scared us.” | |

平原クリー語では、名詞句の性質に基づき「2 人称 > 1 人称 > 3 人称・近接 (proximate) > 1 人称・非近接 (obviative)」という人称・有生性のハイアラーキーが見られ、文構造はその制約を受ける。まず例文(18a)において、動作主は1人称複数の「私達」、そして被動作主は「犬」であり、行為は「私達」から「犬」に向かって働いている。動詞「sēkih」には、その前部に人称一致の標示として1人称複数の参加者がいることを示す「ni-」が付与され、動詞の後続部には3人称単数の参加者がいることを示す「-nān」が付与されている。そしてこの場合、影響の方向は1人称から3人称へと向かっており、人称・有生性のハイアラーキーにしたがい順向態のマーカ「ā」が付与されている。一方、例文(18b)を見ると、(18a)の場合とは逆に行の方向は「犬」から「私達」、つまり3人称から1人称へと向かっており、ハイアラーキーの低い方から高い方へと逆方向に作用している。そのため、動詞には逆向態マーカ「iko」が付与されることになる。このように平原クリー語では、順向態、逆向態の選択は、文のあらゆる事態の参加者が人称・有生性のハイアラーキーにおいて、どのランクにあるかによって決定されている。

2.3.2 ナヴァホ語

ナヴァホ語 (Navajo) はアサバスカ語族 (Athabaskan) に属する言語である¹¹⁾。ア

⁹⁾ アルゴンキン語族の諸言語は、カナダや米国、特に5大湖周辺と東部の海岸線など北米の広い地域で話されている。

¹⁰⁾ Wolfart (1973) による。

¹¹⁾ アサバスカ語族の諸言語は、米国南西部およびカナダとアラスカの西部で話されている。ナヴァホ語は北米インディアン諸語のうちでは最大の話者数(約10万人)を持つと言われている。

サバスカ語族にも平原クリー語と同様、ある程度の有生性のハイアラキーがあることが確認されている (Kraus (1985 : 183))。

- (19) a. *diné* *líí* *yi-ztał*
 man horse DIR:3-kick
 “The man kicked the horse.”
 b. *diné* *líí* *bi-ztał*
 man horse INV:3-kick
 “The horse kicked the man.”

例文(19)では、事態に参与者する要素として *diné* (男)、*líí* (馬) という 2 つの要素があるが、ナヴァホ語のハイアラキーにおいては「男」の方が「馬」よりも上位となる。そのため、よりハイアラキーの上位にくる「男」が主語、下位の「馬」が目的語となる場合は順向態を表す接頭辞 *yi-* が動詞に付与され、逆に上位の「男」が目的語、下位の「馬」が主語にくる場合は、逆向態を表す接辞 *bi-* が動詞に付与されることになる。

2.3.3 ノクテ語

ノクテ語 (Nocte) は、チベット・ビルマ語派に属する言語である¹²⁾。次の例文は、ノクテ語における逆向態の例である¹³⁾。ノクテ語においても事態に参与する名詞句が人称・有生性のハイアラキー上、どこに位置するかによってあらわされる態が異なる。

- (20) a. *nga-ma* *ate* *hetho-ang*
 I-ERG he teach-1SG
 “I will teach him.”
 b. *ate-ma* *nga-nang* *hetho-h-ang*
 he-ERG I-ACC teach-INV-1SG
 “He will teach me.”

例文(18)、(19)と同様、事態参与者をあらわす名詞句のハイアラキーにおけるランクと行為の及ぶ方向に注目しながら例を見ていくと、例文(20a)は 1 人称単数から 3 人称単数へと行為が及ぶ、すなわちハイアラキーの上位から下位へと行為がなされた例で、例文(20b)はその逆に 3 人称単数から 1 人称単数へと行為が及んでいる例である。例文(18)、(19)と同様、例文(20)においても、ハイアラキーを逆向するように行為が及んでいる(20b)のような場合に、動詞に逆向態のマーカ-*h-*が付与されている。しかし、

¹²⁾ チベット・ビルマ語派は、主にアジア大陸中央部の西方と南方地域に分布する大言語群である。

¹³⁾ Delancey (1981) による。

(20a)のように 1 人称から 3 人称へと行為が及んだ場合に順向態マーカーが付与されていないという点では、例文(18)、(19)とは異なっている。ただし、この場合においても文の項構造に変化は見られていないという点では同じである。

2.3.4 サハプティン語

次はサハプティン語 (Sahaptin) の例である。サハプティン語は、ネズパース語とともにサハプティン語族を形成する¹⁴⁾。サハプティン語には、意味的逆向態と語用論的逆向態があるとされている¹⁵⁾。サハプティン語においても、これまでの例と同様、名詞句の人称に関して「1 人称>2 人称>3 人称」というハイアラキーがある。当該事態において動作主が被動作主よりも上位であれば能動・順向態が、被動作主がより上位にすれば逆向態が義務的に適応される。

(21) 能動・順向態

- a. áw-mash twána-ta
now-2SG←1SG DIR/follow-FUT
“I shall follow you now.”
- b. túk’wash-mash ní-ta
cane-2SG←1SG DIR/give-FUT
“I shall give you a cane.”

(22) 逆向態

- a. ku-nam áw pá-yk-sha
and-2SG now INV-hear-IMPV
“And now you hear me.”
- b. níipt-nam pá-ni-ta
two-2SG INV-give-FUT
“You[OBV] will give me[PROX] two.”

上の例文(21a)、(21b)はともに意味的に見て他動詞文であると言える。動作主が 1 人称で、被動作主が 2 人称の場合、能動・順向態を示す「-mash」という接辞が前から 2 番目の位置に表示される。一方、例文(22)は動作主が 2 人称で被動作主が 1 人称となっており、このような場合は逆向態であらわさなければならない。逆向態としてあらわされる場合は、動詞に「pá-」という接辞がつく。これが意味的逆向態とされるものである。

次に語用論的逆向態を見てみよう。語用論的逆向態は、特に事態参加者が両方とも 3 人称である場合に適用され、逆向態を用いるか否かは任意となる。

¹⁴⁾ サハプティン語は、米国のワシントン州およびオレゴン州の 2 州にわたって話されている。

¹⁵⁾ Rude (1994) を参照。

(23) 能動・順向態

iwínsh i-q'ínun-a wapaanLá-n
man 3/NOM/DIR-see-PAST grizzly-OBJ
“The man[PROX] saw the grizzly[OBV].”

(24) 逆向態

ku pá'-in-a pch'imya-n piyáp-in
and INV-tell-PAST wild.cat-OBJ elder.brother-OBV/ASSOC
“And the elder brother[OBV] told the wild cat[PROX].”

(25) 順向態 + 順向態

iwínsh i-q'ínun-a wapaanLá-n ku i-'ítL'iyawi-ya
man 3/NOM/DIR-see-PAST grizzly-OBJ and 3/NOM/DIR-shoot-PAST
“The man[PROX] saw a grizzly[OBV] and he[PROX] killed it[OBV].”

(26) 順向態 + 逆向態

iwínsh i-q'ínun-a wapaanLá-n ku pá'-ítL'iyawi-ya
man 3/NOM/DIR-see-PAST grizzly-OBJ and INV-shoot-PAST
“The man[PROX] saw a grizzly[OBV] and it[OBV] killed him[PROX].”

上の例文(23)、(24)、(25)、(26)からもわかるように、語用論的逆向態においては順向態であらわすか逆向態であらわすかの選択は、文脈における参与者、つまり 3 人称の動作主と被動作主の相対的な話題性によって決まる。動作主がより話題性を持つ場合は近接 (proximate) の格表示 (上記の例文ではすべてゼロ表示) を、被動作主は非近接 (obviate) の格表示 (例文(24)の *-in*) を要求し、文としては能動・順向態であらわされる。被動作主がより話題性を持つ場合は、格表示は逆になり文としては逆向態であらわされることになる。

ちなみに、サハプティン語で見られたような事態参与者が両方とも 3 人称である場合の近接／非近接の別は平原クリー語においても見られる。Dahlstrom (1991 : 11) によると、アルゴンキン系のヴォイスシステムでは意味的な他動詞文において事態参与者が 3 人称の動作主と 3 人称の被動作主であった場合、より話題性のある要素が近接 (proximate) として表示され、より話題性の低い方は非近接 (obviate) として表示されると述べている。つまり、動作主が近接、被動作主が非近接になる場合は能動・順向態が用いられ、被動作主が近接、動作主が非近接となる場合は逆向態が用いられることになる。

次の例を見てみよう。

(27) 順向態

aya.hciniw-**ah** nisto e.h-nipah*a.t* awa na.pe.sis
Blackfoot-OBV three kill 3-OBV/CONJ [DIR] this boy
“The boy killed three Blackfoot(men).”

(28) 逆向態

osa.m e.=sa.kh*ikot* ohta.wiy-**ah** aw o.skini.kiw
too much love OBV-3/CONJ[INV] his father-OBV this young man
“(For) his father too much cherished this young man.”

例文(27)では、被動作主である要素に非近接のマーカ-**ah** が付与されており、例文(28)では、動作主側に **ah** が付与されている。

以上、逆向態を有する言語について、ごく一部ではあるがその具体例を概観した。Givón (1994) では、逆向態について論じることに対し、「逆向態に関する類型論研究はまだ時期尚早であって、自身の研究はこのような逆向態に関する類型論研究に必要な準備段階としての役割を果たすものである」と述べている。つまり逆向態という概念をヴォイスという文法カテゴリーの中でどのように位置づけるのかということについては今後も追求すべき課題であり、この研究領域は数多くの問題を抱えているということを示唆している。

2.4 受動態と逆向態の違い

次に、ヴォイスの中でも関係性の深い受動態と逆向態とを比較しながら、両者の違いについて見ていく。

2.4.1 Klaiman (1991)

Klaiman (1991 : 182-185) では、受動態と逆向態にある種の並行性・類似性があることを指摘しつつも、両者には見過ごすことのできない違いが3つあるとしている。1つ目は、結合価の変化 (Valence alteration) の有無、2つ目は、逆向態が用いられる場合、当該 (他動的) 事象の2つの項は有生性のハイアラーキーに従うということ、そして3つ目は、順向態と逆向態間の態の交替は、能動態と受動態とが交替する場合とは異なり、交替の前後で論理的意味は同じにはならないということである。

[1] 結合価の変化の有無

まずは、結合価の変化の有無についてである。言語類型論的に見て受動態へと態が交替すると脱他動化を引き起こし項の数を1つ減らすことが知られている¹⁶⁾。次の例を

¹⁶⁾ Shibatani (1985)、Keenan (1985) 等を参照。

見てみよう。

- (29) a. 太郎が 次郎を 殺した。 (能動態)
Taro-SUBJ Jiro-OBJ kill-PAST
b. 次郎が 太郎に 殺された。 (受動態)
Jiro-SUBJ Taro-OBL kill-PASS-PAST
(30) a. John hit Mary. (能動態)
b. Mary was hit by John (受動態)

まず、日本語の例文(29)を見てみよう。例文(29a)の動詞「殺す」は、動作主 (Agent) と被動作主 (Patient) の2つの項をとり、それぞれ主語 (ノガ格) と目的語 (ノヲ格) であらわしている。その一方で、例文(29b)のように受動文であらわされる場合は、被動作主は主語 (ノガ格) に立ち、動作主は斜格 (Oblique) であらわされ、「殺される」のとする項は1つとなっている。英語の例である例文(30)においても同様のことが言える。例文(30a)のような能動文では、動詞 hit は動作主の John と被動作主の Mary という2つの項をとるが、例文(30b)のような受動文では動作主は主語から降格し、by であらわされている。このように類型論的に見て能動態から受動態へと態が交替すると項が1つ減るということが確認されている¹⁷⁾。

次に順向態と逆向態の交替について見てみよう。ここでは上述したナヴァホ語の例文(19)を再提示する。

- (19) a. *diné híí, yị́ztał*
man horse DIR:3-kick
“The man kicked the horse.”
b. *diné híí, bị́ztał*
man horse INV:3-kick
“The horse kicked the man.”

例文(19a)、(19b)を比較すると、両者の違いは動詞に前接する *yị́* と *bị́* の部分のみであるが、これらはいずれも例文(19a)、(19b)の動詞がとる2つの項の降格を示してはおらず、ナヴァホ語では項の数は減っていないということがわかる。このように、順向態と逆向態の交替においては結合価の変化は見られない。

[2] 有生性のハイアラキーに基づく2項

上述したように受動態と逆向態は連続性を持った関係にあると言えるが、逆向態を受

¹⁷⁾ ここでの記述は主に直接受動文に関するもので、日本語の間接受動文のような場合、項は減少しない。

動態と見て分析することは無駄に説明を複雑にするだけである (Klaiman (1991:184))。その連続的である両者の違いとして2つ目にあげるのは、逆向態はある特別な場合に生じるということである。逆向態への交替は一般的に有生性のハイアラーキーに基づいており、動詞がとる2つの項がどちらも有生物である他動的事象であることが前提となっている。仮に片方の項が有生物であったとしても、もう片方が無生物であるような場合は普通、態の交替は起こらないとされている。

[3] 態交替による論理的意味変化の有無

受動態と逆向態に見られる3つ目の違いとしてあげられるのは、能動態と受動態とが交替する場合とは異なり、順向態と逆向態が交替する場合は、交替の前後で命題内容が等価にならないという点である。

- (31) a. ni-sēkih-ā-nān atim
 1PL-scare-DIR-1PL.3SG dog
 “We scare a dog.”
 b. ni-sēkih-iko-nān atim
 1PL-scare-INV-1PL.3SG dog
 “A dog scares us.”
- (32) a. We scare the dog.
 b. The dog is scared by us.

例文(31)のあらわしている内容を見ると、順向態(31a)のあらわす動作主と被動作主の対象と、逆向態(31b)のあらわす動作主と被動作主の対象が逆転していることがわかる。一方、例文(32)では(32a)から(32b)へと態が交替しても動作主と被動作主は同じ対象をあらわしており、両者の命題内容に変化はない。

以上のように Klaiman (1991) では、受動態と逆向態の異なる性質として以上3つの項目について言及している。

2.4.2 Thompson (1994)

次に Thompson (1994) による分析について見ていこう。Thompson (1994) は世界の様々な言語を考察した上で、結論として、受動態と逆向態とを区別する手掛かりとなる5つの項目を挙げている。

(33) 受動態と逆向態を区別する手掛かり

- [1] 3人称が主語で発話行為参与者 (speech act participants) が目的語となる時、

逆向態の形式が義務的になる。

[2] 格表示は対応する能動・順向態節におけるそれと同じである。

[3] 動詞は他動的で能動的 (active) である。

[4] 被動作主以外の非動作主 (non-agent) が影響を受ける可能性がある。

[5] 逆向態と同様、順向態に対する特別な形態素がある。

以上にあげた Klaiman (1991) の 3 項目、Thompson (1994) の 5 項目を基準に、次節、日本語の言語現象に逆向態を認めるか否かという問題について議論する。

3. 日本語に逆向態は存在するか

ここ 10 年程の間に、逆向態という概念を日本語に適応し、移動動詞の補助動詞用法のテクル文、ベネファクティブのテクレル文を逆向態と見る論考が増えてきた¹⁸⁾。しかしながら、いずれの論考においても日本語に逆向態というヴォイスのカテゴリーを適応することの是非については、それほど議論されていない。そこで、ここではまず、先に提示した Klaiman (1991)、Thompson (1994) の分析をもとに、日本語のテクル文とテクレル文を逆向態と認めることの是非について検討したい。ただし、テクル文と逆向態に関する詳細な考察については第 2 章と第 3 章で行う。

3.1 Klaiman (1991) の基準による検討

まずは、Klaiman (1991) が提示した受動態と逆向態の違いに関する 3 項目について検討していこう。

Klaiman があげた 1 つ目の項目は、結合価が変化するか否かというものであった。例文(29)からもわかるように、日本語の受動態、特に直接受動文の場合は、結合価が 1 つ減少するのが一般的である。では、日本語の逆向態についてはどのようなことが言えるのであろうか。次の例を見てみよう。

(34) a. 僕が君をなぐった。

b. 君が僕をなぐってきた。

(35) a. 僕はある女性に話しかけた。

b. ある女性が僕に話しかけてきた。

(36) a. 僕が君に英語を教えてあげた。

b. 君が僕に英語を教えてくれた。

(37) a. 弟は田中に料理を作ってやった。

b. 田中が弟に料理を作ってくれた。

¹⁸⁾ Nariyama (2000)、Shibatani (2003)、住田 (2006)、古賀 (2008) などがある。

本研究では、上にあげた例文(34)から(37)の b のような例を逆向態と考えている。例文(34b)、(35b)は移動動詞の補助動詞用法のテクル文、例文(36b)、(37b)はベネファクティブのテクレル文である。しかし、対応する能動・順向態について見ていくとテクル文とテクレル文で違いが見られる。テクル文に対応する能動・順向態は動詞に特別なヴォイスマーカ―がつかないゼロマーキング、つまり普通の他動詞文となっているのに対し、テクレル文の方は、テアゲル、テヤルという 2 つの形式が対応する能動・順向態マーカ―となっている。これについては後述する。

では 1 つ目の項目について検討してみよう。まずテクル文の例文(34)において、事態参加者は「僕」と「君」の二人である。例文(34a)、(34b)の間で「僕」と「君」の意味役割が動作主から被動作主へ、あるいは被動作主から動作主へと変わってはいるが、(34a)、(34b)のいずれにおいても動作主はガ格（主語）、被動作主はヲ格（目的語）であらわされており、結合価はいずれも 2 である。次にテクレル文の例文(36)について見てみると、例文(36)の事態参加者も「僕」と「君」の二人で、例文(34)の時と同様、例文(36a)、(36b)の間で「僕」と「君」の意味役割が動作主から被動作主へ、あるいは被動作主から動作主へと変わっている。また(36a)、(36b)では動作主はガ格（主語）、被動作主はニ格（間接目的語）、対象となる「英語」はヲ格（直接目的語）であらわされており、結合価はいずれも 3 となる。このように能動・順向態から逆向態へと交替しても結合価に変化は見られない。これは例文(35)、(37)においても同様のことが言える。

次に 2 つ目の項目について検討する。Klaiman (1991) が提示した受動態と逆向態の違いを示す 2 つ目の項目は、事態に参加する 2 つの項が有生性のハイアラキーに基づいているということであった。まず、上にあげた例文の事態参加者はいずれも有生生物であることを確認しておきたい。それを踏まえて、さらにハイアラキーの観点から例文(34)から(36)を見てみると、まずそれぞれの a の文、すなわち能動・順向態の文では、(34a)、(36a)は 1 人称から 2 人称への行為、(35a)は 1 人称から 3 人称への行為があらわされており、「1 人称 > 2 人称 > 3 人称」という一般的な人称・有生性のハイアラキーの上位から下位への行為が反映されていると言える。その一方で、それらに対応する逆向態の文では、(34b)、(36b)では 2 人称から 1 人称への行為、(35b)では 3 人称から 1 人称への行為をあらわしており、ハイアラキーの下位から上位への行為が反映されている。

それでは例文(37)のように 3 人称から 3 人称への行為については、どう分析すべきであろうか。例文(37)の二人の事態参加者「弟」と「田中」は、どちらも同じ 3 人称名詞ではあるが、「弟」が上位、「田中」が下位となる。これは次の例文(38)のように 2 つの要素を逆転させると不自然な文になることから伺うことができる。

(38) a. ??田中が弟に料理を作ってやった。

b. ??弟が田中に料理を作ってくれた。

多くの言語において人称・有生性のハイラーキーは「1人称 > 2人称 > 3人称」となるのが一般的であろうが、日本語の場合は少し様相が異なる。次の例を見てみよう。

(39) a. 僕（君／太郎）が花子に電話をかけた。 (1、2、3 → 3：能動・順向態)

b. 僕が君に電話をかけた。 (1 → 2：能動・順向態)

c. 君（太郎）が僕に電話をかけてきた。 (2、3 → 1：逆向態)

d. 太郎が君に電話をかけてきた。 (3 → 2：逆向態)

e. 山田さんが娘に電話をかけた。 (3 → 3：能動・順向態)

f. 山田さんが娘に電話をかけてきた。 (3 → 3：逆向態)

g. 君が娘に電話をかけてきた。 (2 → 3：逆向態)

(39a)から(39d)までの例文は、一般的な人称・有生性のハイラーキーにおける動作主と被動作主の関係によって比較的きれいに説明され得るが、(39e)、(39f)、(39g)の場合は、より文脈に基づいた語用論的な説明が求められる。つまり、日本語では3人称から3人称への行為の場合、動作主と被動作主のどちらがより話し手に近い存在であるのかによって、テクル形式がつくか否かが決定される。例えば、例文(39e)と(39f)においては「娘」が「山田さん」の娘である場合は、(39e)のように能動・順向態として表現されるであろうし、「娘」が話し手の娘であれば、(39f)のようにテクル形式が用いられるであろう。また、(39g)のように2人称から3人称への行為であったとしても3人称名詞句が相対的に見て2人称名詞句よりも話し手に近い存在であるならば、テクル形式が用いられるはずである。

このことを踏まえて、例文(37)についてももう一度見てみると、例文(37)の事態参与者となる名詞句は「弟」と「田中」であるが、話者の身内である「弟」の方が「田中」よりも近い存在であることは明白であり、ハイラーキーにおいては「弟」の方が「田中」よりも上位にくることになる。従って上位の「弟」から下位の「田中」へと行為がなされる(37a)のような場合は、能動・順向態であらわされ、逆に下位の「田中」から上位の「弟」へと行為がなされる(37b)のような場合は、逆向態が選択されることになるのである。

以上のような日本語のハイラーキーについては、牧野（1996）による「ウチ人称」と「ソト人称」という概念を用いるとより明確に説明することができる。牧野（1996）では「ウチ人称」と「ソト人称」を次のように定義している。

(40) ウチ人称・ソト人称の定義

ウチ人称：話し手か話し手が発話時に心理的に自分のウチの人だと認知している人

ソト人称：話し手が発話時に心理的に自分のソトの人だと認知している人

つまり、日本語の逆向態を支配している人称・有生性のハイアラーキーは次のようにあらわすことができる。

(41) 1人称 > ウチ人称 > ソト人称

日本語の逆向態は、上記の(41)のハイアラーキーにおいて下位から上位へと行為がなされる場合に起こり得ると説明することができる。

またさらに、この項目については注意すべき点がある。先に例文(34)から(37)にあげた用例の事態参与者はすべて有生物であると述べたが、次の例からもわかるように無生物が事態参与者となることも可能である。

(42) 後ろの車がクラクションを鳴らしてきた。

(43) 会社が現場の苦しさも知らず、高い目標を設定してきた。

例文(42)の「後ろの車」や(43)の「会社」は有生物ではない。しかし、いずれの例においても動作主の行為によって影響を受けているのが「話し手」であることからわかるように、この場合の「後ろの車」や「会社」は擬人化された対象、つまり、有生物相当の性質を持つ名詞句であると言える。このように、逆向態であらわされる文の事態参与者は必ずしも有生物である必要はなく、それに準ずる性質を持つ名詞句であれば許容される。

次に Klaiman (1991) が提示した 3 つ目の項目についてである。Klaiman (1991) によると、能動態と受動態とが交替する場合にはその命題内容は等価になるが、順向態と逆向態が交替する場合は、その交替の前後で命題内容は等価にならないとされている。ここで再度、日本語の受動態の例として提示した例文(29)と逆向態の例文(34)から(37)を検討してみよう。

(29) a. 太郎が 次郎を 殺した。 (能動態)

Taro-SUBJ Jiro-OBJ kill-PAST

b. 次郎が 太郎に 殺された。 (受動態)

Jiro-SUBJ Taro-OBL kill-PASS-PAST

能動態の例である(29a)では、動詞「殺す」のとり 2つの項、すなわち動作主と被動作主はそれぞれ「太郎」と「次郎」である。この2つの要素は受動態になると統語関係が変化するものの、例文(29b)からもわかるとおり意味役割の面では変化がない(「太郎」が動作主で「次郎」が被動作主)。つまり、ヴォイスが交替しても命題内容は等価であると言える。

それに比べて、例文(34)から(37)の能動・順向態、逆向態の例では、意味役割と統語関係の対応関係に変化は見られないが、いずれも動作主、被動作主の役割を担う対象の中身が a と b の文で逆転している。例えば、能動・順向態の例である例文(35a)において、「話しかける」という動詞のあらわす行為を行った動作主は「僕」、被動作主は「ある女性」であるが、対応する逆向態の例(35b)では意味役割を担う要素が逆転し、動作主が「ある女性」、被動作主が「僕」となっている。このように、能動・順向態から逆向態へとヴォイスが交替した場合は、命題内容は等価にならない。

以上、Klaiman (1991) の提示した3つの項目をもとに日本語のテクル文、テクレル文について検討した。

3.2 Thompson (1994) の基準による検討

次に、Thompson (1994) が提示した受動態と逆向態とを区別する5項目について検討する。

Thompson が1つ目にあげた項目は「3人称が主語で SAP¹⁹⁾が目的語となる時、逆向態の形式が義務的になる」というものであった。まずはベネファクティブのテクレル文から見てみよう。

- (44) a. 僕は山田に昼飯をおごってあげた。
b. * 山田は僕に昼飯をおごってあげた。
(45) a. * 僕は山田に昼飯をおごってくれた。
b. 山田は僕に昼飯をおごってくれた。

例文(44)はテアゲル文、(45)はテクレル文で、それぞれ a が(41)のハイアラーキーの上位(1人称)から下位(3人称)への行為をあらわしており、b は下位(3人称)から上位(1人称)への行為をあらわしている。先にあげた例文(37)、(38)や、これらの例からもわかるように、ハイアラーキーの下位から上位へと行為がなされる場合は、逆向態のテクレル形式を義務的に付与しなければならない。

次にテクル形式について見てみよう。上記のとおり、ハイアラーキーの下位から上位

¹⁹⁾ SAP は speech act participants の略で、ここでは1人称と2人称のことを指す。

へと行為がなされる場合、テクレル形式については動詞に付与することが義務付けられているが、テクル形式については必ずしも義務的とは言えない。

- (46) a. 僕が太郎に電話をかけた。
b. ??太郎が僕に電話をかけた。
c. 太郎が僕に電話をかけてきた。

例文(46)を見ると、(46a)は「僕 (1 人称)」から「太郎 (3 人称)」へ電話をかけるという行為がなされているということをあらわしている。しかし、この動作主「僕」と被動作主「太郎」を入れ替えると(46b)のように不自然な文になってしまう。このような場合、日本語では(46c)のようにその行為をあらわしている動詞にテクル形式をつける必要がある。

しかし、テクル文については次のような例もある。

- (47) a. 野良犬が僕にかみついた。
b. 野良犬が僕にかみついてきた。
(48) a. 弟が僕をにらんだ。
b. 弟が僕をにらんできた。

例文(47)、(48)はいずれもハイアラーキーの下位から上位へと行為がなされているが、(47a)、(48a)のように若干据わりの悪さを感じる人もいるかもしれないが、テクル形式をつけなくても許容される。このようにテクル形式については、動詞によって付与が義務的なものもあれば、義務的でないものもある。

次は2つ目の項目「格表示が対応する能動・順向態のそれと同じであるか」という点について見ていこう。

- (49) a. 僕が太郎の宿題を手伝ってやった。 (能動・順向態)
b. 太郎が僕の宿題を手伝ってくれた。 (逆向態)
(50) a. 僕は山田に昼飯をおごってあげた。 (能動・順向態)
b. 山田は僕に昼飯をおごってくれた。 (逆向態)

例文(49a)と(50a)は、能動・順向態の例で、例文(49b)と(50b)が逆向態の例である。例文(49)の場合、動作主は能動・順向態も逆向態もともにガ格で表示されており、動作の影響(恩恵)を受けている人はノ格で表示されている。例文(50)の場合、動作主は a の文も b の文も主題をあらわすマーカーである「ハ」で表示されており、動作の影響(恩

恵)を受けている人は二格で表示されている。テクル文についても同様に、上にあげた例文(47)、(48)を再度見てみると、例文(47)の場合は、能動・順向態の(47a)、逆向態の(47b)のどちらにおいても動作主はガ格、動作の影響の受け手は二格で表示されており、また例文(48)の場合は、動作主は能動・順向態も逆向態もともにガ格で表示されており、動作の影響の受け手はヲ格で表示されている。

このように、テクレル文においてもテクル文においても、逆向態の格表示は対応する能動・順向態の格表示と同じになっている。

では、3つ目の項目について見ていこう。3つ目の項目は「動詞は他動的で能動的である」というものであった。ここで、「他動的」とは、動詞が少なくとも動作主と被動作主等の意味役割を担う2つの名詞を要求するということを意味し、「能動的」とは、自ら他に積極的に働きかけ影響を及ぼすことを意味すると考える。ここまでになげた例文の動詞は以下のようなものであったが、どの例文においても動作主と被動作主（あるいは影響の受け手）が存在し、動作主の積極的な働きかけによって相手に影響が及んでいることをあらわしている。つまり、他動的で能動的であると言えるのである。

テクレル文：教える、(料理を)作る、おごる、手伝う等

テクル文：なぐる、話しかける、(電話を)かける、かみつく等

次は4つ目の項目についてである。4つ目の項目は「被動作主以外の非動作主(non-agent)が影響を受ける可能性がある」というものであった。次の例を見てみよう。

(51) 友人が息子にお菓子を買ってくれた。

例文(51)は、動作主である「友人」が「お菓子を買う」という行為を「息子」に対して行ったことをあらわしている。この時、直接的に影響(恩恵)を受けたのは「息子」であるが、その一方で自分の息子に対する行為に感謝している「話者」の存在も同時に読み取れる。つまり、被動作主の「息子」以外に、非動作主の「話者」も影響を受けていると説明できるのである。では、次の例はどうであろうか。

(52)a. 後ろの男が彼女のスカートの中を覗いた。

b. 後ろの男が彼女のスカートの中を覗いてきた。

c. ??後ろの男がその女性のスカートの中を覗いてきた。

まず例文(52a)について考えると、これは単に客観的にある事態を述べた言い方であ

り、スカートの中を覗かれた被動作主である「彼女」はある一般女性を指した代名詞に過ぎない。つまり、(52a)において影響を被った可能性があるのは、「彼女」当人のみであり、話者はその事実をただ言語として表現したに過ぎない。一方、(52b)のようにこの事態をテクル形式を用いてあらわすと、この場合の「彼女」というのは、ある一般女性ではなく話者と関係の深い女性であることが読み取れる。つまり、直接影響を受けたのは「彼女」本人ではあるが、それ以外にも間接的に「後ろの男」の行為に影響を受けた（嫌悪感を抱く）話者の存在を読み取ることができるのである。ちなみに被動作主を「彼女」から一般女性を表す「その女性」という名詞句に代えると、テクル文としては不自然な文になる。

以上の考察から、4つ目の項目「被動作主以外の非動作主（non-agent）が影響を受ける可能性がある」については、テクレル文もテクル文も満たしていると言える。

最後に「逆向態と同様、順向態に対する特別な形態素がある」という項目について見ていきたい。まずベネファクティブについてであるが、逆向態マーカーとして機能するテクレル形式に対する能動・順向態マーカーとしては、ここまで考察してきた例文でも何度も提示してきたテアゲルとテヤルがあげられる。

一方、テクル文については少し様子が異なる。ここまでの議論では、逆向態マーカーのテクルに対応する能動・順向態はゼロマーキングと考え、一般的な他動詞文をそれと見なしてきたが、対応する能動・順向態マーカーとしては、「来る」とは逆方向のダイクシスをあらわす移動動詞「行く」のテ形補助動詞であるテイクも考えられる。順向態マーカーのテイクの例はそれほど多くはないが、以下のような例は確認されている²⁰⁾。

- (53) 初めは別の子と帰っていたら、A君と出会い、前に試合をして負けたのが悔しかったのか、いきなり息子ウルフのサッカーチームの悪口を言ってきたらしい。それで、言い合いになり、息子ウルフから殴っていったとの事。

例文(53)では、インターアクティブな事態の中で、「言ってきた」と「殴っていった」のように、テクルとテイクが対応して使用されていることがわかる。ただし、(53)のような順向態と見られるテイク文の例は、逆向態を表しているテクレル文に比べると出現頻度はそれほど高くない。そのため、現段階では日本語のテイクが順向態に相当するマーカーであるとは言い切れない。しかしながら、Shibatani (2003) において「類型論的に言語形式の側面を見ると、逆向態形式は順向態形式よりも有標性が高く、言語における両者の組み合わせとしても、有標の逆向態カテゴリーと無標の順向態カテゴリー、あるいは逆向態、順向態ともに有標である言語は確認されているが、無標の逆向態カテゴリーと有標の順向態カテゴリーの組み合わせというのではない」と指摘されていること

²⁰⁾ 例文(53)はインターネット検索による。

から考えても、この最後の項目に関しては、完全に満たしていないからと言って、必ずしも逆向態用法の存在を否定するものではないとも言える。

以上、Thompson (1994) の提示した 5 つの項目をもとに日本語のテクル文、テクレル文について検討した。

ここまで検討してきた受動態と逆向態とを区別する合計 8 つの項目は、あくまでも類型論研究を基にした逆向態の傾向を示すものであり、この項目が満たさなかったからといって必ずしも逆向態である可能性を否定するものではない。しかし、これらの検討項目は類型論的考察に基づいて導き出された客観的な傾向であり、この 8 つの項目をどの程度満たしているかによって、その言語形式の逆向態マーカーとしての度合いを示すことは可能であると思われる。

4. 結び

第 1 章では、まず本研究の中心テーマとなる「逆向態 (Inverse)」というヴォイスの概要について、言語類型論の先行研究をもとに確認した。そして、次章以降で詳しく見ていく日本語の移動動詞「来る」が文法化したテクル形式と、ベネファクティブのテクレル形式が逆向態マーカーとして機能していることを主張するにあたり、Klaiman (1991) が提示した 3 つの項目と、Thompson (1994) が提示した 5 つの項目について検討した。検討の結果は以下のとおりである。

表 2 テクレル形式・テクル形式を逆向態マーカーと見ることの是非

	Klaiman (1991)			Thompson (1994)				
	[1]	[2]	[3]	[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
テクレル形式	○	○	○	○	○	○	○	○
テクル形式	○	○	○	△	○	○	○	△

表 2 を見る限り、テクレル形式については先行研究のあげた 8 つの項目すべてに適合しており、逆向態マーカーと見ることにまったく問題はない。また、テクル形式については、逆向態マーカーとしての使用が必ずしも義務的ではなく、対応する順向態マーカー「テイク」がそれほど発展していないという状況ではあるが、その他の項目については十分に満たしているため、テクルについても逆向態マーカーと見ることに問題はないと思われる。

以上、本章の議論をまとめると、日本語の逆向態については次のようなことが言える。

(54) 日本語における逆向態

形態的側面

ベネファクティブの場合はテクレル形式が義務的に、それ以外の場合はテクル形式が任意で、動詞に有標のマーカ―として付与される

統語的側面

動詞に有標マーカ―が付与されても、もとの文構造に影響を及ぼさない

意味・機能的側面

ソト（の動作主）からウチ（の被動作主）へと動詞のあらわす行為がなされることをあらわし、動作主の行為により影響を受けた者（受影者）の話題性を高め、かつ動作主にもある程度の話題性を保持させる

語用論的側面

「1人称 > ウチ人称 > ソト人称」というハイアラキーの下位から上位へと行為がなされる他動的現象において逆向態は起こりうる

本章では、ベネファクティブのテクレル形式と移動動詞「来る」が文法化したテクル形式について考察してきた。テクレル形式は、すでにテアゲル／テヤル形式、テモラウ形式とともにベネファクティブという機能においてひとつのパラダイムを形成しており、文法化もかなり進んでいると言える。またこれについては研究もかなり進んでいる。一方、テクル形式は、まだまだ文法化の中途段階にあり、今後さらにその使用範囲を拡大していくことが予想される。特にテクル形式の逆向態用法については、まだまだ研究の余地が残されているのではないかと思われる。そこで本研究では、このテクル形式を中心に議論を進める。テクル形式に逆向態としての機能を認め、その用法を確立することで、はじめて日本語のヴォイスを体系的に説明することが可能となる。以下、これまで漠然と指摘されてきたテクル形式のヴォイスとしての機能性に焦点を当て、その詳細について明らかにしていく。

第2章

テクルの用法分類

現代日本語の移動動詞「くる」には、本動詞としてのみならず補助動詞「テクル」としての用法も存在し、多義構造を持つ。この事実は吉川（1976）、寺村（1984）など、先立つ数々の論考によりかなりの部分が明らかにされてきてはいるが、いずれの論考においてもその詳細においてはまだ分析の余地が残されている。本章では、まず日本語の移動動詞「来る」が文法化して補助動詞となった「テクル」に関する先行研究を概観し、その用法・分類について再検討する。そして、テクル文には本研究で「逆向態 (Inverse)」と呼ぶヴォイスの文法カテゴリーに属する用法を新たに設定し、テクル文全体の体系を明らかにする。

1. はじめに

日本語の移動動詞「くる」は、求心的な直示的意味を有している。本動詞として用いられるだけではなく、接続助詞「て」＋「くる」という形で、いわゆるテ形補助動詞としての用法もある（以下、「テクル」と表記する）。補助動詞テクルの用法には、大きくわけて空間的用法とアスペクト用法の2つがある。この事実は、吉川（1976）、寺村（1984）等、これまで数多くの論考により明らかにされてきた。ここではまず、これまでの先行研究による成果と特にテ形補助動詞としての用法に関連する言語現象を再考した上で、文法化が最も進んで移動の意味が消失したテクルを逆向態用法として設定し、それを含めてテクル用法全体の多義性と機能性について新たな考察を加える。

まず2節では、吉川（1976）、寺村（1984）、Shibatani（2007）を取り上げ、その概要と問題点について指摘する。3節では、2節で概観した先行研究を踏まえて新たなテクル用法の体系を提示する。そして4節では、第2章全体のまとめを行う。

2. 先行研究

テクル文の用法分類に関する先行研究は数多くあるが、ここでは吉川（1976）、寺村（1984）、Shibatani（2007）を取り上げ、その概要を見ていくことにする。

2.1 吉川 (1976)

吉川 (1976) では、「テクル」「テイク」の補助動詞性について用例を広く検討し、次の表 1 に示すように前項動詞との緊密性から A、B、C、D、E の 5 段階において分析している。A から E は「テクル」「テイク」とその前にくる動詞との緊密さをあらわしており、A が最もゆるやかで、E へ行くに従い緊密になるとしている。

表 1 吉川 (1976) によるテクル文における前項動詞の分類

	前の動詞の種類	意味の重点	語の挿入	前の動詞と「来る・行く」との関係
A	一般の動詞	両方	可	互いに独立
B	移動を表す動詞 (方向の概念なし)	来る・行く	可	前の動詞が「来る・行く」を修飾する
C	「もつ」の類の動詞	どちらとも言えない	可	前の動詞の結果で「来る・行く」
D	移動を表す動詞 (方向の概念あり)	前の動詞	不可	「くる・いく」によって前の動詞が規定される
E	一般の動詞	前の動詞	不可	前の動詞にまつわる陰影を表す

- (1) a. 女中のおいて行った夕刊を読んでいる。
- b. ヨットが走って行く。
- c. 早くでばを持って来い。
- d. 大きなももが流れて来ました。
- e. 一休みしているうちに眠くなって来た。

上の例文(1a)、(1b)、(1c)、(1d)、(1e)は、それぞれ表 1 の A、B、C、D、E の分類に対応する例である。

吉川 (1976) では、D、E のような場合に「テクル」「テイク」が補助動詞として機能しているとし、特に E はアスペクトの機能を有していると分析している。また、吉川 (1976) は、テクル・テイクの意味全体を調べるのが課題であるとしながらも、特にアスペクト形式としてのテクル・テイクを重要視し、「空間的移動を意味するもの」と「アスペクトをあらわすもの」の 2 つの枠組みでテクル文、テイク文を分析している。以下、本論との関係上、テクル文に絞ってその概要を見ていくことにする。

2.1.1 空間的移動を意味するもの

まず、空間的移動を意味するもの 4 種を見ていこう。

[A]「くる」まえにする動作

一般的に、「～て～」という言い方は、前項動詞が後項動詞に先行する動作をあらわす。例えば、「ご飯を食べて寝る」では、「食べる」ことが「寝る」に先立って行われることをあらわしている。このタイプのテクル文の前項にくる動詞には、主に、①何かを手に入れることを意味するもの（例：買う、くむ、さらう、取る、拾う、もらう等）と、②何かを手放すことを意味するもの（例：預ける、置く、届ける、忘れる等）があり、さらにその他として「遊ぶ」、「見る」のようなものとされている。

- (2) 看護婦は、まどべのコップからひとたばのすみれの花を取ってきて、それを少年に差し出しながら言いました。
- (3) ゆりこさんは、ぼうしをきょうしつにわすれてきたことに、きがつけました。
- (4) 女「火をみてくるわ。」

[B]「くる」方法

一般にいわれる「テ形」の意味のひとつに「方法をあらわす」というものがある。例えば、「泳いで渡った」「走って逃げた」のような例においては「泳いで」「走って」はそれぞれ「渡り方」「逃げ方」を示している。同様に、「泳いできた」の「泳いで」は「来方」つまり来る方法をあらわしている。このタイプのテクル文の前項にくる動詞は、方向性のない移動をあらわす動詞（例：歩く、泳ぐ、かける、つく、とぶ、走る等）がくる。

- (5) 白鳥の中には、吉川さんをおぼえていて、「こうい、こうい。」とよぶと、すぐ岸へおよいでくるのもいました。
- (6) 六わの白鳥が、このみずうみにとんできました。

[C]「くる」ときの状態

上記[B]のグループに属するものも、ある意味で「状態」をあらわすと言えるが、このグループの「状態」とは、[B]で扱ったもの以外について言うたされている。例えば、「持ってくる」は「持つ—持っている—はなす」という過程の途中の状態、つまり「持っている」という状態で「来る」ということを意味している。このタイプのテクル文の前項にくる動詞には、①「持ってくる」のように過程の途中の状態を表すもの（例：かつぐ、くわえる、連れる等）の他に、②主体の状態を変化させる意味の動詞（例：隠す、着る等）や③継続的動作をあらわす動詞（例：どなる、ながめる等）¹⁾、④「持つ」と同時に「移動」も意味するもの（例：はこぶ、はこばれる等）がある。

¹⁾ 継続的動作をあらわす動詞の用例（例文(9)）については、吉川（1976）に該当する用例がなかったため、筆者による作例を提示する。

- (7) 山田さんのおねえさんは、ねこがさかなをくわえてきて、ぬれえんで食べているのを見つけました。
- (8) 「家の人に見つからなければいいが。」と、心配しながら、左の手でこぶをかくしてきました。
- (9) 上司がすごい剣幕でどなってきた。
- (10) 女が食事を搬んでくる。

[D] 発言者のいる所へちかよる動作・作用

吉川（1976）では、このタイプのテクル文の前項にくる動詞として、主に①方向性のある移動動詞（例：集まる、落ちる、下りる、帰る、駆け込む、かけつける、急降下する、崩れ落ちる、すべる、せまる、たれる、近づく、伝わる、つめよる、出る、飛び込む、飛び出す、流れ込む、のぼる、入る、引き返す、舞い降りる、戻る、やる、よじのぼる、よる、渡る、送る等）を挙げている。また、それとよく似た意味で、テクルがつくと「動作が発言者の関心のある所へ向かう」という意味を表し、移動動詞以外がくる（動作があるものに及ぶ）場合があるとし、②方向動詞（例：いう、うったえる、おそいかかる、おそう、かぶさる、さしかける、とびつく、なげかける、はたらきかける、ほえかかる、むしゃぶりつく、おどりかかる、ぶつかる等）の例も挙げている。次の(11)、(12)は移動動詞の例、(13)、(14)は方向動詞の例である。

- (11) そこへ、その家から、おばあさんが出てきました。
- (12) 白いばらの花からは、よいかおりを送ってきました。
- (13) 男の人が、「早くはいてくれ。」と、言ってきました。
- (14) ……いぶかるような視線を投げかけてくる。

ここで、吉川氏の方向動詞に関する考察についてもう少し加えておきたい。

方向動詞の性質として①主体が移動することをあらわさない、②「行く」という意味を基底に持たない、③間接対象が「～に」で示される（移動動詞では移動の方向が二格または、へ格で示される）という相違点を挙げているが、テクルとの関係については曖昧な説明に終わっている²⁾。

²⁾ 山田（2004：32-55）は、ベネファクティブのテクル形式とテクル・テイクの関係性に注目しながら、吉川（1976）が「発言者のいる所へちかよる動作・作用」と分析した言語現象について考察している。山田（2004）は、吉川（1976）が「方向動詞」と呼んだ動詞群について、それらが「移動」という概念で捉えられないことは認めながらも、空間移動をあらわすテクル・テイクを補助動詞として取り得ることを理由に、それらを「移動」の枠組みで捉えて論じている。

2.1.2 アスペクトをあらわすもの

次に、アスペクトをあらわすものについて見ていく。吉川（1976）ではアスペクトをあらわすものを[E]にひとまとめにしていたが、その下位分類として次の4つの用法を認めている。

[ア] 出現の過程

出現の過程をあらわす動詞につけて、その過程に具体的叙述性を与える。（例：あらわれる、うまれる、うかぶ、こみあげる、よみがえる、わく等）

(15) ことばは生活の中から生まれてきます。

(16) ……ちょうどその場にいるかのような実感さえわいてくる。

[イ] 変化の過程

変化動詞にテクルをつけて、変化の過程をはっきりさせるものがある。このような文は「しだいに、だんだん、ますます」のような副詞、「～につれて、みるみるうちに」のような副詞句を含むことが多いとされている。（例：なつく、ふえる、へる、おもくなる、かなしくなる、たてこむ、きたなくなる、ながくなる、はげしくなる、ひくくなる等）

(17) だんだんおなかがすいてきました。

(18) 日がたつにつれて、白鳥の数が、ふえてきました。

[ウ] 過程（動作・作用）のはじまり

テクルをつけて過程のはじまりをあらわすものがある。この種のテクル文の前項にくる動詞には、上記の変化動詞（例：ふくらむ、おもくなる、きいろくなる、なきたくなる、[動詞]ようになる等）や出現の過程をあらわす動詞（例：あらわれる等）のほか、その両者のどちらでもない「ばらつく」「ふる」のような動詞、消めつの過程をあらわす動詞（例：かすむ、きえる、なくなる等）、感覚や可能をあらわす動詞（例：きこえる、あしおとがする、よかんがする、みえる、わかる、おもえる、おもわれる等）がある。

(19) ねむりにつきあったおかげで、まぶたが、重くなってきた。

(20) ……その人の生活にたいへんな差があらわれてくると、私は信じています。

(21) そのうちに、雨がふってきました。

(22) 火がきえてきた。

(23) しばらくして、遠くから答えのたいこが聞こえてきた。

[エ] ある時点までの継続

「てきた／てきました」の形であらわれて、ある動作・作用が過去においてはじまって、現在まで継続していることをあらわす。この種のテクル文の前項にくる動詞には「スケールの大きな動詞（例：成長する、そだてる等）」と「スケールの小さな動詞（例：買う、乗る、たおれる等）」があり、スケールの大きな動詞は「遠い過去からの継続」（例文(24)）をあらわし、スケールの小さな動詞は「遠い過去からのくりかえしの継続」（例文(25)）と「近い過去からの継続」（例文(26)）をあらわすとされている。

- (24) それにしても、ここまで成長してきたあなたたちは、さまざまなことを覚えたとし、また、わざを身につけました。
- (25) おたがいにはげまし合ってきた、この年月。
- (26) さっきからずっと書いてきた。

以上が、吉川（1976）の考察である。では、次に寺村（1984）を見てみよう。

2.2 寺村（1984）

寺村（1984）は、前項動詞と後項のテ形補助動詞との関係を V-V 型、v-V 型、V-v 型の 3 つのタイプに分類して分析を行っている。特に、アスペクト形式としてのテクルは、動詞のテ形と移動動詞のクルとの結びつきが強まって文法形式化したものであると指摘し、どのようなテクルを「本動詞＋アスペクト」の補助動詞とするのか、あるいは何をそうとしないのかという観点から分析を行っている。寺村（1984）では、V-V 型、v-V 型、V-v 型の 3 つのタイプのうち、特に V-v 型に属するテクル形式を補助動詞形式と捉えている。

2.2.1 V-V 型

V-V 型とは、動詞のテ形にクルが結びついた形に、独立したコトの述語 2 つが並列的に結びついたものである。具体例としては、次の例文(28)のような例がそれに当たる。

- (27) 毎朝喫茶店へ寄って、コーヒーを飲んで、それから会社へ来る。
- (28) a. 疲れたから、ちょっとコーヒーを飲んでくる。
b. 日本へ来る途中、香港に寄って来ました。

まず例文(26)において、異なる動作が継続的に起こることをあらわしていることと問題はないであろう。例文(27a)の例は、例文(26)のような例のかなり一体化が進んだものとなっているが、「コーヒーを飲んで」それから「来る」という順序で 2 つの動

作が並ぶと見ることは可能である。例文(27b)についても同様に、「香港に寄って」それから「(日本へ) 来た」と言い換えてもあまり違いはない。このように、はじめに「～テ」という動作があり、次に「クル (その他の動作)」という動作があると考えることができるような結びつきを「V-V」とあらわすとしている。

2.2.2 v-V 型

v-V 型とは、一方が他方に従属的に付属して主要部分に副次的な意味を添え、全体としては1つの述語のように結合が固まったものとされている。次の例を見てみよう。

- (29) a. 毎朝会社へ歩いてくる。
b. 学校へは自転車に乗ってきます。

例文(29a)は、「歩いて」それから「来る」のではなく、前項の「歩いて」が「どういう来方で来るのか」ということをあらわしている。その意味で「クル」が主たる述語、「～テ」がそれを副詞的に限定・修飾しているという従一主の関係で結びついたものとなっている。例文(29b)についても同様に、「自転車に乗って」は来方（この場合は手段）をあらわしている。このような結びつきを寺村（1984）では「v-V」とあらわすとしている。

2.2.3 V-v 型

このタイプのテクル形式は、次の例文(30)に見られるようにアスペクトの意味を持つとされている。

- (30) a. ピアノの音が聞こえてくる。
b. 空が明るくなってきた。

寺村は、V テクルのアスペクトの意味を、前項動詞 V があらわす現象が物理的、心理的に自分に向かって次第に接近するということとし、「アスペクト」という概念を広く捉えている。そして、次の例文(31)のようなものも例文(30)と本質的には同じ働きをしていると見る事が可能であると論じている。現象の接近には対象（～テクルの主体）が移動し接近してくる場合と、感覚で捉えられた現象の、無 $\longleftrightarrow$ 有、小 $\longleftrightarrow$ 大、隠 $\longleftrightarrow$ 顕の変化の場合がある。

次の例文(31)は前者の例である。

- (31) a. 見知らぬ男が近づいてきた。
b. 来週、父が中国から帰ってくる。

- c. 園児たちがバスに乗りこんでくる。
- d. 犬が銀行に入ってくる。
- e. 犬が銀行から出てくる。
- f. 白鳥たちが海を渡ってくる。

対象が人や動物のような意志を持つもので、Vが意志的な動作をあらわす場合、テクルはその対象が移動して自分（話し手）に次第に接近することをあらわす。

次の例文(32)、(33)は感覚で捉えられた現象の変化（例文(32)は物理的な変化、例文(33)は心理的な変化）をあらわしている。

- (32) a. 富士山が見えてくる。
- b. 鐘の音が聞こえてくる。
- c. 竹が生えてくる。
- d. 水かさが増してくる。
- e. 梅の花がほころびてくる。
- (33) a. その仕組みが分かってくる。
- b. 彼女の気持が分からなくなってくる。
- c. 気持が沈んでくる。

対象が意志を持たないもの、あるいは事である場合は、Vは「おのずから然る」ことをあらわす動詞にほぼ限られ、仮に対象が人や動物であってもこの種のテクルの主格に立つ場合は、意志を持たない「物」として描かれることになるかとされている。

以上が寺村（1984）の考察である。では、次に Shibatani（2007）を見てみよう。

2.3 Shibatani (2007)

Shibatani（2007）は、直示的移動動詞「行く」と「来る」の文法化について論じている。特にテイク、テクルの用法を分類しているというわけではなく、それぞれの文法化の度合いについて主に脱カテゴリー化の観点からいくつかのテストを介して論じている。ここでは Shibatani（2007）で用いられているいくつかの統語テストについて紹介しておきたい。

2.3.1 テミエルとの交替

まずはじめは、「来る」と「来る」の尊敬語として機能する「見える」との交替についてである。次の例文(34)に見られるように移動動詞「来る」と「見える」は置き換えることができる。

(34) 夜になると、たくさんの客が来る（／見える）らしい。

「来る」が複合動詞の後項として機能する場合は、置き換えが可能な場合と不可能な場合とがある。

- (35) a. 山田先生は学校に歩いてきた（／みえた）。 (寺村の v-V 型)
b. 山田先生が教室に入ってきた（／みえた）時・・・ (寺村の V-v 型)
c. 山田先生は一杯飲んできた（／*みえた）。 (寺村の V-V 型)

例文(35)に見られるように、寺村(1984)の v-V 型、V-v 型に相当する例文(35a)、(35b)はテクルとテミエルの置き換えが可能であるが、V-V 型にあたる(35c)の例では、置き換えると不自然な文になるとされている。

2.3.2 結合価に関する分析

次に、動詞の結合価に注目した分析について見ていこう。本研究との関係上、ここではテクル文についてのみ見ていくことにする³⁾。

移動の本動詞「来る」は起点 (source) と着点 (goal) を項に持つ⁴⁾。日本語では「歩く、泳ぐ、這う」のような様態移動動詞は、例文(36a)からもわかるように着点を項に持たない。着点をあらわしたい場合は、(36b)のようにテクルを付与する必要がある。つまり、これは「歩いてくる」が着点を項にとることができるということを意味していることになる。

- (36) a. * 太郎は学校へ歩いた。
b. 太郎は学校へ歩いてきた。

では、別のタイプのテクル文はどうであろうか。例文(37)、(38)を見てみよう。

- (37) a. 太郎は自分の部屋を出て、リビングに来た。
b. * 太郎はリビングに自分の部屋を出てきた。
(38) a. 太郎はリンゴを食べて、学校へ来た。
b. * 太郎は学校へリンゴを食べてきた。

³⁾ 例文(37)、(38)は Shibatani (2007) の例をもとに筆者が「来る」を使った例に変更したものである。

⁴⁾ ただし、「来る」については直示の情報が語彙的に登録されており、着点の項はあまり表面に出てこないとされている。

例文(37a)、(38a)のように「来る」が本動詞として機能している場合は、着点とることができるが、例文(37b)、(38b)のようにテクル文として表現されると、着点をとることができなくなる⁵⁾。これは、例文(37)、(38)のようなタイプのテクル文が、本動詞「来る」の「着点を項に持つ」という特性を失っているということを意味している。

2.3.3 否定のスコープに関する分析

最後に、否定のスコープに関する考察についてである。それぞれのタイプのテクル文に「誰モ〜ナイ」構文を当てはめると、それぞれ異なった意味を導き出す。前項動詞、後項動詞の両方を否定するような広い読み (wide scope)、前項動詞だけを否定し、後項動詞、つまりテクルを否定しない狭い読み (narrow scope) とがあり、型によってどのような読みを許容するかという点において違いがあらわれる。次の例文(38)は、上から順に寺村 (1984) のいう v-V 型、V-v 型、V-V 型に属する文である。

- (38) a. 誰もバスに乗ってこなかった。
- ・ 誰一人とバスに乗ってこなかった。(wide scope)
 - ・ 人は来たが、誰もバスでは来なかった。(narrow scope)
- b. 誰も部屋から出てこなかった。
- ・ 誰一人と出てこなかった。(wide scope)
 - ・ × (narrow scope)
- c. 誰もご飯を食べてこなかった。
- ・ × (wide scope)
 - ・ 人は来たが、誰もご飯は食べていなかった。(narrow scope)

例文(38a)のようなタイプのテクル文 (寺村の v-V 型) は、広い読みと狭い読みの両方が可能であるのに対し、例文(38b)のようなタイプのテクル文 (寺村の V-v 型) は広い読みしか許されず、また例文(38c)のような例 (寺村の V-V 型) は狭い読みしか許されないとされている。

2.4 先行研究の問題点

以上、代表的なテクル文に関する先行研究をいくつか見てきた。しかし、これらの先行研究の分析にはどれも一長一短がある。

まず吉川 (1976) は、多くの用例を集め前項にくる動詞の意味をもとに広くテクル

⁵⁾ ただし、次の例のように「(お酒を飲んで) お酒が残っている状態で来る」ということを述べる場合や、行為の結果が移動の事象と重複しているような場合は可能であるとされている。これらの例は例文(36)のタイプに似た振る舞いをする。

(例 1) 学校に酒を飲んでくるとは何事か。

(例 2) 花子は学校に短いスカートをはいてきた。

文を分類しているが、各用法間の関係性についての説明が不十分である。移動を含まない「方向動詞」というカテゴリーを設定した点は重要であるが、「方向」というのは、必ずしも前項動詞の特徴ではなく「ソトからウチへの方向」という後項のテクルが持つ特性であると考えられる。

寺村（1984）は、前項動詞と後項動詞との関係性を記号化して分類しているため非常にわかりやすい。しかしながら、記号の設定の仕方に疑問が残る。詳細は次節で説明する。

吉川（1976）が前項動詞、複合動詞全体の意味・用法について広く検討し、言語現象を詳細に記述したのとは対照的に、寺村（1984）は、複合動詞の前項と後項の意味の比重、文法化の度合からより理論的に分析している。しかしその分、本来であればわかるべきカテゴリーが同類のものとして分析されているのではないかと思われる。次の表 2 は、吉川（1976）と寺村（1984）の分析の対応関係を示した表である。

表 2 先行研究による分析の比較

吉川（1976）			寺村（1984）
空間的移動を意味するもの	A	「くる」前にする動作	V-V 型
	B	「くる」方法	v-V 型
	C	「くる」ときの状態	
	D	発言者のいる所へちかよる動作・作用	V-v 型
アスペクトをあらわすもの	E	出現の過程	
		変化の過程	
		過程の始まり	
		ある時点までの継続	∅

Shibatani（2007）は、テクル用法の分類というよりは、テクルの文法化について脱カテゴリー化の観点から各用法の文法化の度合いを分析したものである。吉川（1976）、寺村（1984）とは異なり、各用法の統語的振る舞いの違いに着目して分析している点が特に興味深い。ただ、検討している用例数が少なく、単純化し過ぎているため、見落とされている言語現象が少なくない。テクル用法（とその文法化）の全貌を明らかにしているとは言えない。

3. テクル文の分析

本研究では、テクル用法を分類する枠組みとして寺村（1984）を参考に次のような 4 つの型（V-v はさらに 3 つに下位分類される）を想定する。

【テクルの6用法】

空間的用法

- ・ V+V 型：独立動作
- ・ V_m-V 型：様態・付帯状況を伴う移動
- ・ V-V 型：求心的移動
- ・ V-v(I)型：逆向態

アスペクト用法

- ・ V-v(A1)型：状態・状況変化
- ・ V-v(A2)型：継続

先行研究と大きく異なる点は、空間的用法にヴォイスの一種である逆向態の機能を有する V-v(I)型を加えたことである。それ以外の用法については、先行研究と多少見方が異なる部分はあるが、基本的に扱っている言語現象は同じようなものである。ただし、先行研究の分類において機能的観点から同類と見なせるものは極力同じカテゴリーに分類した。

3.1 空間的用法について

テクル形式のもととなる移動動詞「来る」は、本来、「人、事物がこちらに向かって近づく」ということを表すもので、それが徐々に文法化するにしたがって意味が弱化、スキーマ化し、テクルの機能領域を広げていると考えられる。その中でも特に空間的、物理的な作用に関わるような用法を、本研究では「空間的用法」と呼ぶことにする。

3.1.1 V+V 型：独立動作

このタイプのテクルは、前項動詞のあらわす事柄の起こりと後項動詞のあらわす事柄の起こりに時間的な差があるため、寺村（1984）の V-V 型で「-（ハイフン）」を用いて表示されていた部分を「+」に変更することで、前項動詞と後項動詞が並行する他の型との差別化を図ることにする。

この型に属するテクル文は、前項動詞のあらわす行為が行われた（あるいは事態が生じた）後、本動詞「来る」があらわす直示的移動が起こるという意味をあらわす。この型の前項には、幅広く行為をあらわす動詞がくる。以下に例を挙げる。

- (39) ちょっと家でご飯を食べてきます。
- (40) 水曜はレディースデーだから、バイト帰りに映画観てご飯食べて、楽しん
できます。 (『AERA』 第23巻50号：p.34)
- (41) 今日あの病院の中を見てきたが、それほど悪い環境ではなかった。
(『変身』：p.308)
- (42) ところがその日チケットのモギリをしていたバイトの女の子が今日は休みで
ね、わざわざ自宅まで行ってきた。 (『容疑者 X の献身』：p.93)

- (43) 「『まりあん』で聞いてきたの？」 (『容疑者 X の献身』: p.130)
- (44) 博士は受付から取ってきた問診表の裏に、黒丸を三角の形に並べて書いた。
(『博士の愛した数式』: p.108)
- (45) 何の本を買ってきたの？ 見てもいい？ (『変身』: p.102)
- (46) 「東和大学のものです。堂元教授の下で働いています」
準備してきた嘘をいった。 (『変身』: p.150)
- (47) 大きめの石を拾ってきて、ビニールシートをかぶせた上から、何度も殴りました。
(『容疑者 X の献身』: p.319)
- (48) まあとにかく汗を流してこいよ。 (『変身』: p.112)
- (49) ルートが図書館から借りてきた『プロ野球名選手図鑑』をめくっていて、私は一つの数字にはっとした。
(『博士の愛した数式』: p.90)
- (50) 教科書は全部学校においてきた。
- (51) 子供を実家に預けてきた。
- (52) 帽子を教室に忘れてきた。
- (53) どうせ僕の酒じゃないんです。前に実家に帰った時に、くすねてきたものですから。
(『変身』: p.126)
- (54) あと、下の欄の部署に行って、それぞれの印を貰ってきてほしいんですけど。
(『変身』: p.342)
- (55) 「間違いないと思います。うちの自転車です」草薙が差し出した写真を見て、山辺曜子はきっぱりといった。その写真には自転車が写っている。草薙が鑑識から預かってきたものだ。
(『容疑者 X の献身』: p.62)
- (56) 彼は車を持っていないから、どこかで調達してこなきゃならない。
(『容疑者 X の献身』: p.241)
- (57) 石神の口調には淀みがない。無論、ここへ出頭するまでに、頭の中を十分に整理してきたに違いない。
(『容疑者 X の献身』: p.314)
- (58) トキニ内海は如何も飛だ事で、実に気の毒にな、今も往って慰めて来たが塞切ッつている。
(『浮雲』: p.89)

以上のように、V+V 型の前項動詞には、様々な行為動詞がくることができる。上述したように、このタイプのテクル文では、前項動詞のあらわす事柄の起こりと後項動詞のあらわす事柄の起こりに時間的な差が見受けられる。そのため、「テ」と「クル」の間に接続詞「それから」を挿入して事態を二つにわけることが可能となる。その際、「それから」を挿入する前と挿入した後とでは論理的意味が保持される。

- (59) ちょっと家でご飯を食べて、それから来ます。
- (60) バイト帰りに映画観てご飯食べて楽しんで、それから来ます。

(61) 一回病院の中を見て、それから来ました。

例文(59)、(60)、(61)は、それぞれ「それから」という接続詞を挿入できることからわかるように、前項動詞と後項動詞はそれぞれが独立した動作をあらわし得る。

では次に、Shibatani (2007) の分析を参考に、テミエルとの交替について見ていきたい。Shibatani (2007) の分析では、この型のテクルはテミエルと交替できないとされていた。次の例文(62)から(67)が不自然な例となっていることからしても、Shibatani の分析は正しいように思われる。

(62) ??山田さんが公園で子猫を拾ってみえた。

(63) ??山田先生が銭湯で汗を流してみえた。

(64) ??山田先生が図書館でこの本を借りてみえた。

(65) * 山田先生が食材をくすねてみえた。

(66) * 山田先生が車を調達してみえた。

(67) * 山田先生が自分の机を整理してみえた。

しかし、様々な用例を調べていくと、次の例のようにテクルとテミエルが交替可能な例もある。

(68) 私は、皆さんが食べてみえた日本蕎麦が気になります。

(70) 当旅館のうわさを聞いてみえた方もいました。

例文(68)から(71)を見ればわかるように、この型のテクレルであっても、テミエルとの交替が可能である場合もある。

次に、結合価に関する分析を見ていくことにする。Shibatani (2007) の分析によると、この型のテクル文では着点を項にとることができないとされていた。

(72) * 太郎が大学に映画を楽しんできた。

(73) * 太郎が大学にあの病院を見てきた。

(74) * 太郎が大学に三宮へ行ってきた。

(75) * 太郎が大学に銭湯で汗を流してきた。

(76) * 太郎が大学にビデオを借りてきた。

(77) * 太郎が大学に子供を幼稚園に預けてきた。

(78) * 太郎が大学に成績証明書を貰ってきた。

以上の例文(72)から(78)では、着点「大学に」を項とすることができない。これを見る限り、Shibatani (2007) の分析は正しいようである。しかし、多少不自然ではあるが言えそうな例もある。

(79)? 太郎が大学にプリンターを買ってきた。

(80)??太郎が大学に試験の準備をしてきた。

ただし、総じて言えばV+V型のテクル文では着点を項にとることができないと結論づけることができるであろう。

次に、否定のスコープについて見ていく。Shibatani (2007) によると、この型のテクル文に「誰モ～ナイ」構文を当てはめると狭い読みしかできないとされている。

(81) 誰もご飯を食べてこなかった。

(N: 人は来たが、誰もご飯は食べていなかった。)

(82) 誰もあの病院を見てこなかった。

(N: 人は来たが、誰もあの病院を見ていなかった。)

(83) 誰も三宮に行ってこなかった。

(N: 人は来たが、誰も三宮に行っていなかった。)

(84) 誰も肉を買ってこなかった。

(N: 人は来たが、誰も肉を買っていなかった。)

(85) 誰もゴミを拾ってこなかった。

(N: 人は来たが、誰もゴミを拾っていなかった。)

(86) 誰もカバンを家に置いてこなかった。

(N: 人は来たが、誰もカバンを置いていなかった。)

(87) 誰も子供を幼稚園に預けてこなかった。

(N: 人は来たが、誰も子供を幼稚園に預けていなかった。)

(88) 誰も自分のロッカーを整理してこなかった。

(N: 人は来たが、誰も自分のロッカーを整理していなかった。)

例文(81)から(88)を見ればわかるように、V+V型のテクル文を「誰モ～ナイ」であらわすと、狭い読みしかできない。

3.1.2 Vm-V型：様態・付帯状況移動

Vm-V型のテクル文とは、寺村(1984)では前項の「～テ」が副詞的に後項を限定・

修飾していることから **v-V** とされていた型である。寺村が **v-V** 型としたものは、特に前項動詞の意味が弱化したわけではないため小文字の「**v**」は大文字の「**V**」とし、さらに、前項動詞の移動の方法や状態、または移動に伴う付帯状況等を総じて、移動の様態 (**Manner**) と捉え、その英語の頭文字を小文字で付与して **Vm-V** 型とした。本研究では、移動に伴う手足の動き、移動の仕方、手段 (乗り物など) のように移動と直接関わる付随的要素を移動の「様態」と呼び、また「持ってくる」のように移動からは独立した付随的要素のことを「付帯状況」と呼ぶ⁷⁾。**Vm-V** 型に属するテクル文は、前項動詞の性質ごとに次のように分類できる。

様態移動① (有生物が移動) : 歩く、走る、飛ぶ、跳ぶ、泳ぐ、滑る、転がる

- (89) 毎朝会社へ歩いてくる。
- (90) 天の河は二人が走って来たうしろから前へ流れおりて、駒子の顔は天の河のなかで照らされるように見えた。 (『雪国』: p.176)
- (91) 太郎がああ島からこの海岸まで泳いできた。
- (92) 山の上から滑ってきた。

様態移動② (無生物が移動) : 流れる、漂う、転がる

- (93) まずコンベアに乗って部品が流れてくる。 (『変身』: p.205)
- (94) 台所から炊飯器の湯気が漂ってきた。 (『博士の愛した数式』: p.100)

様態移動③ (乗り物を利用) : 乗る、運転する、漕ぐ

- (95) 学校へは自転車に乗ってきます。
- (96) 舟を漕いできた。

付帯状況 : 運ぶ、持つ、引っ張る、くわえる、抱える、忍ぶ、着る、かぶる、身につける、添えられる、連れる、つく

- (97) この蝶を飼うには、まずその花をここに運んできて育てなくてはならない。 (『1Q84 Book1』: p.151)
- (98) 美智雄さんが 20、30 人引き連れてくると踏んでいたのに、実際は数人だけ。それで小沢さんは嫌気がさしたんです。 (『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.68)
- (99) 橘さんがポストカードとサインペンを持ってきた。 (『変身』: p.36)
- (100) 靖子たちは銀座の中華料理店に来ていた。工藤が、ぜひ美里ちゃんも一緒にといったから、渋る美里を無理矢理引っ張ってきたのだ。 (『容疑者 X の献身』: p.301)

⁷⁾ 松本 (1997 : 129) を参照。

- (101) 猫が魚をくわえてきた。
 (102) いかにも高そうな壺を大事そうに抱えてきた。
 (103) 赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。 (『坊っちゃん』: p.169)
 (104) 太郎が校則違反の制服を着てきた。
 (105) 応募原稿に写真が添えられてくるわけではない。 (『1Q84 Book1』: p.53)

それでは、V+V 型と同じ手法で V_m-V 型について分析していこう。

<ソレカラ挿入>

まずは「それから」の挿入についてである。V_m-V 型のテクル文は、前項が後項動詞を副詞的に限定・修飾しているため、前項動詞とテクルの関係性は V+V 型よりも密になっており、テとクルの間に「それから」を挿入することが難しくなっている。

- (106) a. 毎朝会社へ歩いてくる。
 b.* 毎朝会社へ歩いて、それから来る。
 (107) a. 学校へは自転車に乗ってきます。
 b.* 学校へは自転車に乗って、それから来ます。

次の例文(108)、(109)、(110)からもわかるように、V_m-V 型に属する「歩いてくる」「走ってくる」「泳いでくる」であっても、V+V 型と解釈できる場合があり、これらの例については「それから」を挿入すると、やや不自然さは感じられるが言えないわけではない。

- (108) 時間もあるし、ちょっとその辺を歩いて、それから来るよ。
 (109) ちょっと最近太ってきたから、ちょっと近くを走って、それから来るよ。
 (110) 天気もいいし、海で泳いで、それから来ます。

ただし、これらの例はテとクルの間に「それから」を挿入する前と後で、論理的意味が変わっている。

<テクル・テミエル交替>

では、テミエルとの交替についても見てみよう。Shibatani (2007) によると、この型のテクルはテミエルと置き換えることが可能とされていた。次の例を見てみよう。

- (111) 社長が会社へ歩いてみえた。
 (112) 待合室で待っていると外科の先生が走ってみえた。

- (113) 校長先生が車に乗ってみえた。
- (114) 旅館の若女将が料理を運んでみえた。
- (115) 患者さんが生まれたばかりの赤ちゃんを連れてみえた。
- (116) テレビ局の人がたくさんの機材を持ってみえた。

例文(111)から(116)を見る限り、Shibatani (2007) の分析通りこの型のテクルはテミエルとの交替が可能であるように思われる。しかし、これについてもいろいろと用例を見ていくと、必ずしもそうとは言えないことがわかる。

- (117)* 山田先生が舟を漕いでみえた。
- (118)?? 山田先生がこの海岸まで泳いでみえた。
- (119)?? 山田先生が渋る美里を引っ張ってみえた。
- (120)?? 山田先生が魚をくわえてみえた。
- (121)?? 二人の先生が診察室から子供についてみえた。

例文(117)から(121)に見られるように、この V_m-V 型においてもテミエルとの置き換えができないテクル文がある。

このように、V+V 型にもテクルとテミエルの交替が可能なものと不可能なものがあり、また V_m-V 型にも交替可能なものと不可能なものがある。Shibatani (2007) では、このテクル・テミエル交替のテストは V+V 型とそれ以外 (V_m-V 型と V-V 型) とを区別できるものとされていたが、上記の結果を踏まえると、このテクル・テミエル交替テストは用法を区別するテストとしては不適当であることがわかる。そのため、本研究では V+V 型とそれ以外の型とを区別する手段としては、「それから」をテとクルの間に挿入して、論理的意味が保持されるか否かという点で判断することにする。

<着点>

では、引き続き結合価の分析について見ていこう。V_m-V 型のテクル文では、次の例文(122)から(128)を見てもわかる通り、基本的に前項動詞にどのような動詞がきても着点を項にとることができる。

- (122) 太郎が学校に走ってきた。
- (123) 太郎が山頂からこちらに滑ってきた。
- (124) ミントのいい香りがこちらに漂ってきた。
- (125) 病院に太郎がついてきた。
- (126) 太郎が大学に自転車に乗ってきた。
- (127) 太郎がリビングに観葉植物を運んできた。

(128) 太郎が学校に校則違反の制服を着てきた。

<否定のスコープ>

次に、否定のスコープについてである。Shibatani (2007) の分析によると、Vm-V 型のテクル文は広い読みと狭い読みの両方が可能であるとされているが、様々な用例を検討していくと、実際は同じ Vm-V 型であっても前項動詞の性質によって読みのパターンが異なっていることがわかる。例えば、次の例文(129)から(133)では、Shibatani の分析通り広い読みと狭い読みが可能である。

(129) 誰もこの海岸まで泳いでこなかった。

(W: 誰もここにこの海岸に来なかった。)

(N: 人は来たが、別の手段 (ボートに乗ってくるなど) で来た。)

(130) 誰も山の上から滑ってこなかった。

(W: 誰も (山の上から麓の方に) 来なかった。)

(N: 人は来たが、(歩くなどして) 滑ってきたわけではない。)

(131) 誰もバスに乗ってこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: 人は来たが、別の手段 (徒歩など) で来た。)

(132) 誰も植木鉢を運んでこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: 人は来たが、植木鉢は運ばなかった。 / 手ぶらで来た。)

(133) 誰も渋る美里を引っ張ってこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: 人は来たが、美里は引っ張って (連れて) こなかった。)

しかし、次の例文(134)から(136)のように、広い読みしかできないものもある。

(134) 何も川上の方から流れてこなかった。→W

(135) 隣の部屋からは何も漂ってこなかった。→W

(136) 誰も病院についてこなかった。→W

例文(134)、(135)は「誰モ～ナイ」ではなく「何モ～ナイ」という構文を当てはめたことからわかるとおり、移動物が無生物となっている。「狭い読み」というのは、前項動詞のあらわす行為と後項動詞のあらわす行為 (クル) とを否定と肯定で違えるということであり、これには移動物に行為を選択するための意志性が必要とされる。よってこのように移動する対象が無生物の場合には、狭い読みができなくなってしまうと推測

される。

次に例文(136)についてであるが、例文(136)の「ついてくる」は、複合動詞全体で「一緒にくる」「同伴してくる」という意味をあらわしていて一語化が進んでいると見られる。そのため「狭い読み」ができないと推測される。例えば、誰かに何かを頼むとき、「泳いで。」「滑って。」「乗って。」「運んで。」「引っ張って。」と言うことはできるが、「*ついて。」と言うことはできない。

では、次の例のように、前項動詞が受身になった場合はどうであろうか。

- (137) 誰も担架で運ばれてこなかった。
(W：誰もここに来なかった。)
(N：人は来たが、(自分で歩いてくるなど) 担架で運ばれてはいない。)
- (138) 応募原稿には何も添えられてこなかった。
(W：何もここに届かなかった。)

前項動詞が受身になった場合も、移動の対象が有生物か無生物かによってスコープの範囲が異なってくる。例文(137)のように移動するものが有生物である場合は、「広い読み」「狭い読み」の両方が可能であるが、例文(138)のように移動するものが無生物である場合は、「広い読み」しかできない。

では、次のような例はどう考えればよいであろうか。

- (139) 誰も校則違反の制服を着てこなかった。
(人は来たが、誰も校則違反の制服は着ていなかった。)

例文(139)は、V+V型と同じように「狭い読み」しか許されない。しかし、その一方で例文(128)からもわかるように、結合価においては、Vm・V型と同じように着点を項にとることができる。このことから考えて、この「着てくる」はV+V型とVm・V型の中間的な例と見ることができる。

3.1.3 V-V型：求心的移動

このV-V型は、主に前項動詞も後項動詞も共に「移動」をあらわすもので、寺村(1984)ではV-vと表示されていた型である。寺村が後項のクルを小文字のvで表示していることからわかるように、寺村(1984)では、この用法を補助動詞用法と見なしている。しかしながら、この型の後項のテクルは依然として移動の意味を保持しており、機能的に見てもこれを補助動詞と呼べるかどうかは疑問である。そこで、本研究では複合動詞

全体が「移動＋移動」のように「移動」の要素が前項動詞、後項動詞の両者に重複して見られるような型を V-V 型とし、後項のテクルの「(主体の) 移動」の意味が消失したものを次の逆向態用法 (V-v 型) として、両者を区別することにする。また、この V-V 型テクルの前項には、主語に立つ主体が移動することをあらわす移動動詞 (主体移動動詞) がくる。

では、V-V 型のテクル文の用例を見ていこう。V-V 型のテクル文については「前項動詞がヲ格を項にとるか否か」という基準をもとに考えていくことにする。

前項動詞がヲ格をとらない場合

前項動詞がヲ格をとらない場合は、移動するものが有生物であろうが、無生物であろうが特筆すべき違いは見られない。

- (140) 兄がうちに帰ってきた。
- (141) 心から喜んでいたら、そこにパンチと一緒にメイキングのカメラも突入してきた。
(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.74)
- (142) 誰かが何かを始めると、自然とメンバーが集まってきてマネをする。
(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.53)
- (143) 彼がいつ入ってきたのか、僕は気がつかなかった。 (『変身』 : p.18)
- (144) 堂元教授と若生助手は一旦部屋を出ていったが、しばらくして若生助手だけが戻ってきた。 (『変身』 : p.35)
- (145) 彼女の方が人をかきわけて近づいてきたのだ。 (『変身』 : p.38)
- (146) 隣に越してきた者だと母親らしき女性が挨拶した。
(『容疑者 X の献身』 : p.385)
- (147) 木の上からりんごが落ちてきた。
- (148) とうとう掃除当番が僕にまわってきた。

まず、有生物が移動する例文(140)と無生物が移動する例文(147)に注目してこの型の特徴を見てみよう。例文(140)の「帰ってくる」という複合動詞は、前項の「帰る」があらわす移動と後項のテクルがあらわす移動の 2 つの移動の意味が重複しているが、これらは各々、移動以外の意味も持ち合わせている。前項の「帰る」は、兄がまず一度「うち」から出て行ったことを前提とし、その後再び「うち」に移動した (戻った) ということを意味する。後項のテクルは、「話者の領域 (話者のいる) への移動」という求心的なダイクシスの意味を前項動詞の意味に付与している。例文(147)の場合も「落ちてくる」の前項「落ちる」は、重力によって上から下に急に位置が変わるという意味をあらわし、後項のテクルは「話者の領域 (話者に近い所) への移動」という意味を付与している。このように、この型のテクルの主な機能は、前項動詞の移動の意味に「話者の

領域への移動」という意味を付与することであると言える。以下、テストに基づいてV-V型の特徴を見ていく。

<ソレカラ挿入>

この「帰る」という移動動詞は主体の位置を変えるような動作・作用を表す動詞で、前項動詞と後項動詞の間に「それから」を挿入しても「*兄がうちに帰って、それから来た」という非文になってしまう。

- (149)* カメラマンが突入して、それから来た。
- (150)* 太郎が部屋に入って、それから来た。
- (151)* 彼女が僕に近づいて、それから来た。
- (152)* 木の上からりんごが落ちて、それから来た。
- (153)* 掃除当番が僕にまわって、それから来た。

例文(149)から(153)を見てもわかるように、この型のテクル文ではテとクルの間に「それから」を挿入することはできない。

<着点>

例文(140)や(146)に既に示されているように、この型のテクル文は着点を項にとることができる。その他の例も、同様に着点をとることができる。

- (154) 僕の部屋にいきなりカメラが突入してきた。
- (155) 自然と広場に人が集まってきた。
- (156) 若生助手が部屋に戻ってきた。
- (157) 木の上からりんごが僕の足元に落ちてきた。

ただし、これらのテクル文は前項動詞も着点（場所）を項にとることができるため、この着点項が、前項動詞がとる項なのか後項のクルがとる項なのかは判別できない。

<否定のスコープ>

次は否定のスコープについてである。Shibatani (2007) によると、この型のテクル文に「誰モ～ナイ」、構文を当てはめると広い読みしかできないとされている⁸⁾。

- (158) 三兄弟は誰も家に帰ってこなかった。
- (159) 誰も広場に集まってこなかった。

⁸⁾ 移動物が無生物の場合には「何モ～ナイ」を適応させる。

- (160) 誰もこの部屋に戻ってこなかった。
 (161) 木の上から何も落ちてこなかった。
 (162) (何かしらの当番について) 僕には何もまわってこなかった。

例文(158)から(162)は、複合動詞全体があらわす事態を否定する広い読みしか許されない。話者の領域には、当該事態において言及されている人やモノは誰も来ていないし、何もないということをあらわしている。

では次に、前項動詞がヲ格をとる場合を見てみよう。

前項動詞がヲ格をとる場合

前項動詞がヲ格をとる場合のヲ格は、主に対象、経路、起点をあらわす。以下は、その用例である。

- (163) 両親が、いつ訪ねてくるかわかりませんからね。 (『変身』: p.126)
 (164) 太郎が橋を渡ってきた。
 (165) 啓子が屋根の上に梯子をのぼってきた。
 (166) 美里は靖子をちらりと見ると、運動靴を脱ぎ、無言で部屋に上がってきた。
 (『容疑者 X の献身』: p.25)
 (167) 太郎はあの険しい山を越えてきた。
 (168) 太郎が部屋を出てきた。
 (169) タクシーから降りてきた時の靖子の表情を、石神は今もはっきりと覚えている。
 (『容疑者 X の献身』: p.161)

では次に、各テストを用いてヲ格をとる V-V 型の特徴を見ていこう。

<ソレカラ挿入>

ヲ格を項にとる場合でもヲ格をとらない場合と同様、基本的にテとクルの間に「それから」を入れると不自然な文になる。

- (170)* 両親が僕を訪ねて、それから来た。
 (171)?? 太郎があの橋を渡って、それから来た。
 (172)?? 啓子が屋根の上に梯子をのぼって、それから来た。
 (173)?? 太郎はあの険しい山を越えて、それから来た。
 (174)?? 太郎は部屋を出て、それから来た。

ヲ格を項にとる V-V 型には、かなり不自然ではあるが例文(171)、(172)、(173)、(174)

のように前項動詞のあらわす意味と後項動詞のあらわす意味とをわけると（V+V型とみなす）ことが可能な例がある。しかし、この場合も V_m-V 型の場合で見たのと同様、テとクルの間に「それから」を挿入する前と後で、論理の意味が変わっている。

<着点>

前項動詞がヲ格をとる移動動詞の中には、「向こう岸に渡った」「屋根の上にのぼった」「二階にあがった」「地上に降りた」のように二格を項にとるものもあれば、「*研究室を訪ねた」「*この町に越えた」のように二格をとらないものもある。二格をとる動詞の場合は、例文(165)、(166)のようにテクルが付与されても二格をとることができる。一方、二格をとらない場合は動詞によって少し容認度が異なるように思われる。

(175) 友人が研究室に僕を訪ねてきた。

(176)? 太郎はこの町にあの険しい山を越えてきた。

例文(175)の場合は複合動詞「訪ねてくる」は問題なく二格をとれるが、それに比べると、例文(176)の場合は、少し不自然な感じがする。しかし、多少不自然さはあるが言えないことはない。

<否定のスコープ>

次は、否定のスコープについてである。

(177) 誰も僕を訪ねてこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: なし)

(178) 誰も橋を渡ってこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: 人は来たが、(橋を渡らない) 別のルートで来た。)

(179) 誰も梯子をのぼってこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: 人は来たが、(家の中の階段を使うなど) 別のルートで来た。)

(180) 誰もあの険しい山を越えてこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: 人は来たが、(山道を通らない) 別のルートで来た。)

(181) 誰も部屋を出てこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: なし)

(182) 誰もタクシーを降りてこなかった。

(W: 誰もここに来なかった。)

(N: なし)

ヲ格が対象や起点をあらわす場合(例文(177)、(181)、(182))は、広い読みしか許されないが、例文(178)から(180)のようにヲ格が経路をあらわすテクル文の場合は、広い読みも狭い読みも可能となる。Shibatani (2007) の分析からすれば、この V-V 型のテクル文は広い読みしか許されないはずであるが、V-V 型であってもヲ格が経路をあらわす場合は、Vm-V 型に近い特徴を有していると言える。

以上で見てきた V+V 型、Vm-V 型、V-V 型は、意味的な観点からすると後項のテクルが「移動」の意味を保持している型である。これらを Shibatani (2007) の分析を参考にいくつかのテストを用いて詳しく分析していくと、それぞれの型ごとに特有の傾向が見られ、文法化の度合いに違いが見受けられる。しかし、「脱意味化」の観点からすると、これら 3 つの型は文法化はあまり進んでいないと見ることができる⁹⁾。

3.1.4 V-v(I) 型: 逆向態

V-v 型には、後項のテクルが移動をあらわさなくなった逆向態用法と、アスペクトをあらわす用法とがある。この V-v 型を本研究では補助動詞用法と考える。アスペクトをあらわす用法は、さらに状態・状況変化用法と継続用法とがある。以下の議論では、逆向態として機能するテクル文を V-v(I)、状態・状況変化をあらわす用法を V-v(A1)、継続をあらわす用法を V-v(A2)と表示することにする¹⁰⁾。

それではまず、V-v(I)型に属するテクル文について見ていこう。V-v(I)型に属する逆向態用法のテクルは、移動の本動詞「来る」が本来持っていた移動の意味を失い前項動詞のあらわす動作、行為の(ソトからウチへの)直示的な方向性のみをあらわすヴォイスマーカーとして機能している形式である。

逆向態用法のテクルの前項には、主に、動作主(主体)の実質的な移動を意味せず、事態参加者のインターアクティブな他動的な事象をあらわす対象移動動詞、非明示的移動動詞、行為動詞がくる。以下、動詞の種類ごとにそれらが前項となるテクル文の用例を挙げていく。

対象移動動詞

対象移動動詞とは、主語に立つ動作主(主体)の行為が起こることによって、対象(ヲ格名詞句)が移動することをあらわす動詞のことである。

⁹⁾ 文法化については第4章で論じる。

¹⁰⁾ V-v(I)の I は Inverse の頭文字、V-v(A1、2)の A は Aspect の頭文字をとっている。

(183) 実家の母が僕にみかんを送ってきた。

(184) 太郎が僕にボールを投げてきた。

非明示的移動動詞

ここで言う非明示的移動動詞とは、動作主（主体）の行為によって視線や音、あるいは発話を含む言表内容など抽象的なものの移動、また身体部位（「なぐる」は実際には「手」が動いている）など主語にも目的語にもあらわれない要素の移動を潜在的に含む動詞を指す。

(185) 「話が合うかどうかなんて訊いちやいない。裏は取れてるのかと訊いてるんだ」草薙は手帳を閉じ、肩をすくめた。「取れてません」「それでいいと思ってるのか」間宮はじろりと見上げてきた。 (『容疑者 X の献身』: p.85)

(186) 湯川の目が草薙を見据えてきた。ふだんあまり見せたことのない冷徹な表情に変わっていた。 (『容疑者 X の献身』: p.217)

(187) 後ろの車が僕の車にしつこくクラクションを鳴らしてくる。

(189) テレビは、音声だけでなく、映画と同じような画面も放送するので、目と耳とに同時にうったえてくる。 (吉川 (1973) より)

(190) 10 年来の友人だった 4 歳年上の男性が、飲み会の席でさりげなく、こう誘ってきた。「ディズニーシー行かない？」(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.40)

(191) 番組の視聴率が悪い時はみんなそれぞれの立場でいろんなことを言ってくる。 (『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.78)

(192) 「例の高校の先生、今朝も来た？」休憩している時に小代子が問いかけてきた。 (『容疑者 X の献身』: p.12)

(193) 「石神が共犯だとして、彼の役割は一体どういうものだろう？」早速湯川が質問してきた。 (『容疑者 X の献身』: p.239)

(194) 「自分としてはヌルいもの作っちゃったなあという気分」
しかし、この作品を見たプロデューサーが気に入り、ライブドアのウェブコンテンツとしてアニメを依頼してきた。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.51)

(195) 石神は無表情な顔を靖子に向けてきた。 (『容疑者 X の献身』: p.40)

(196) 赤ちゃんがおなかを蹴ってくる。

(197) 野良犬が僕にかみついてきた。

(198) 太郎が私の手を触ってきた。

(199) 眼鏡の奥の夫の細い目は、屈託がない。だが次の瞬間、背筋がゾツとし、鳥肌がたった。夫が「初乗りにつきあってよ～」と、甘えてきたのだ。

(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.33)

- (200) そのうちの一人の男子は、何度かユイさんと目が合うと、ニッコリ笑いかけてきた。
(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.34)
- (201) 近づいていくと彼女も石神に気づいたようだ。微笑み、小さく会釈してきた。
(『容疑者 X の献身』 : p.8)
- (202) 太郎が私のノートに落書きをしてきた。
- (203) 富樫が再び手を伸ばしてきて、カップを持っている彼女の手を握ろうとした。
(『容疑者 X の献身』 : p.21)
- (204) ドアを十センチほど開けると、すぐ向こうに富樫の顔があった。にっと笑ってきた。歯が黄色かった。
(『容疑者 X の献身』 : p.23)
- (205) 「だめだって」美里は靖子の手首を掴んできた。(『容疑者 X の献身』 : p.36)
- (206) 離婚して何年も経つのに、未だにつきまとってくるんです。お金を渡さないと帰ってくれなくて。
(『容疑者 X の献身』 : p.42)
- (207) 「湯川だ。よろしく」彼は石神に握手を求めてきた。
(『容疑者 X の献身』 : p.109)
- (208) 正門の前にある横断歩道の脇に、黒いコートを羽織った湯川の姿があった。石神を見てにこやかに手を振ってきた。
(『容疑者 X の献身』 : p.157)
- (209) 娘も横で頭を下げてきた。
(『容疑者 X の献身』 : p.383)

行為動詞

ここで言う行為動詞とは、「移動」の概念を含まない動詞群のことである。

- (210) 当社の HP をまねてくるところも出てきました。
- (211) (価格競争をしている) 向かいのスーパーが大幅に商品を値下げしてきた。
- (212) 20 代と 30 代の部下 2 人は、何かと言えば「確認してください」と丸投げしてくる。
(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.16)
- (213) IT 企業勤務で広告営業をする男性(29)は、会社が現場の苦しさも知らず、「売り上げ前年比 2 割増」と目標設定してくるのにあきれている。
(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.17)
- (214) 朝の会議がないと知れば、夫はなんだかんだ理由をつけて、送り迎えを押し付けてくるはず。
(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.32)
- (215) 巨人がピッチャーを代えてきた。
- (216) 「今何ヶ月？」と自分の息子と(私の息子を)明らかに比べてくる主婦。
- (217) 上司が決めてくることに従わなくちゃいけないというわけじゃない。
- (218) 気象庁は多少大袈裟に予想してくるのですが、こりゃあまたすごい数値を出してきました。
- (219) 石神は目を閉じた。草薙刑事たちはどのようなことを企み、行動しているの

か、次に何をしてくるか—精神を集中して彼は思考した。

(『容疑者 X の献身』: p.235)

また、特殊な実況型の文脈で見られるテクルの逆向態用法として、次のような例もあげておく。

(220) (フィギュアスケートの実況において)

浅田真央がトリプルアクセルを跳んできた。

(221) (サッカーの実況において)

本田圭佑が遠目からシュートを打ってきた。

(222) (サッカーの実況において)

香川真司が角度のないところからゴールを狙ってきた。

以上、V-v(I)型、逆向態用法のテクル文の用例を、前項動詞の種類別に提示した。

V-v(I)型、逆向態用法のテクルのヴォイス機能に関する性質については、第3章で詳しく議論することにして、ここでは、これまでと同様3つのテストにかけてその文法的性質を探ることとする。

まずは、対象移動動詞が前項にくる場合から見ていこう。

<ソレカラ挿入>

対象移動動詞が前項にくるテクル文の場合、前項動詞のテ形とクルの間に「それから」を挿入すると、下の例文(223)、(224)のように不自然な文になってしまう。V+V 型のテクル文のように、事態をわけて解釈をすることは可能ではあるが、かなり無理がある解釈となる。

(223)* 実家の母がみかんを送って、それから来た。

(224)* 太郎が僕にボールを投げて、それから来た。

<着点>

着点をとるか否かについては、例文(183)、(184)を見ればわかるように、複合動詞の前項にあたる「送る」「投げる」は、もともと3項動詞で二格(着点)を項にとる。

<否定のスコープ>

対象移動動詞が前項にくるテクル文の場合、次の例文(187)、(188)のように「誰モ～ナイ」構文を当てはめると、広い読みしか許されない。つまり、この種のテクル文はV-V型に近い性質を持っていると言える。

- (225) 誰も僕にみかんを送ってこなかった。
(W：誰も僕にみかんを送っていないし、ここにも来ていない。)
(N：なし)
- (226) 誰も僕にボールを投げてこなかった。
(W：誰も僕にボールを投げていないし、ここにも来ていない。)
(N：なし)

次に非明示的移動動詞、行為動詞が前項にくるテクル文について見ていく。結論から述べると、これらの動詞が前項にくる場合は、どちらも同じような振る舞いを示すため、ここでは合わせて見ていくことにする。

<ソレカラ挿入>

まずは、「それから」の挿入についてである。

- (227)* 彼の目が僕を見据えて、それから来た。
(228)* 友人が僕を誘って、それから来た。
(229)* 野良犬が僕にかみついて、それから来た。
(230)* ファンが僕に握手を求めて、それから来た。
(231)* 巨人がピッチャーを代えて、それから来た。
(232)* 香川真司が角度のないところからゴールを狙って、それから来た。

上の例文(227)から(232)はすべて日本語として不自然である。(227)の場合は、彼が少し離れた場所から一端僕を見据え、その後僕に近よってくるという意味であれば、あるいは言えるかもしれないが、この場合の主語は「彼の目」であるので、やはりかなり不自然な文であると言える。(228)の場合、友人が僕を今いる場所とは別の場所で僕を誘い、それから二人で今いるこの場所へ来たという意味であれば、言えないことはないかもしれないがこれもかなり不自然な文である。(229)の場合、前項の動詞があらわす行為「かみつく」が実現した段階で動作主は、動作の受け手である「僕」のそばにいるはずであり、そこから「来る」という移動が起こりうるはずがない。また、(230)の場合、ファンが少し離れた場所から「握手をしてくれ」と叫び、その後僕が今いるこの場所へ来たという意味であれば言えるかもしれないが、この表現も据わりが悪い。(231)の場合、話者がどこかで野球を見ていて、巨人がピッチャーを代えたのを見てから、今いるこの場所へ移動してきたという誰かに対する事実の報告のような意味であれば、言えるかもしれないがこれも不自然である。(232)については、解釈するとすれば香川がゴールを狙った後に話者のいる場所に来たという意味であるが、これも明らかに不自然である。

このように、これらの例は無理に解釈しようとすればできないことはないが、どれもかなり不自然な日本語であり、仮に言える判断できてももとの例文(186)、(190)、(197)、(207)、(215)、(222)のテクル文とは全く異なる意味をあらわしている。その意味で、前項動詞が同じ行為をあらわす動詞がくるとしても、V-v(I)型のテクル文はV+V型とは異なるタイプであると言える。

<着点>

次に着点を項にとるかどうかなを見ていくことにする。V-v(I)型のテクル文は二格をとる場合がある。しかし、この場合の二格は前項動詞がもともと項として持っていた二格であり、さらにこの二格は着点ではなく、動作、行為の受け手（被動作主）、対象をあらわしている。V-v(I)型、逆向態用法のテクル文は基本的には着点を項にとることができない。

<否定のスコープ>

最後に否定のスコープについて考えてみよう。

- (233) 誰も私を見上げてこなかった。
- (234) 誰も私にアニメの制作を依頼してこなかった。
- (235) 誰も私に笑いかけてこなかった。
- (236) 誰も私に手を振ってこなかった。
- (237) 誰も私に頭を下げてこなかった。
- (238) 誰も私に仕事を押し付けてこなかった。
- (239) 誰も私の息子と自分の息子を比べてこなかった。
- (240) 誰もトリプルアクセルを跳んでこなかった。

「誰モ～ナイ」構文をこのタイプのテクル文に当てはめると、これまでに基準からすれば、広い読みしかゆるされないということになる。つまり、上の例文のどれについても前項動詞のあらわす行為が否定されると同時に後項のクルも否定されていると言える。しかし、このV-v(I)型のテクル文においては、誰かが話者のいるところに移動して来るか来ないかという問いそのものに違和感を覚える。そしてこの違和感こそがV-v(I)型のテクル文において移動の意味が消失している証拠ではないかと思われる。

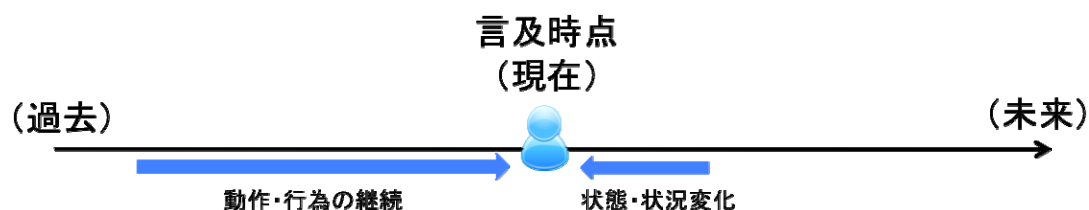
以上、空間的用法の4つの型について考察した。では次に、アスペクト用法の2つの型について見ていこう。

3.2 アスペクト用法について

テクルのアスペクト用法は、移動の本動詞「来る」、あるいはテクルの空間的用法が人間の持つ認知能力によってその意味が拡張し、アスペクトとしての機能を果たすようになったと考えられる¹¹⁾。V-v型に属するとしたこの用法は、当然、実質的な「移動」の意味はない。ここでは、アスペクト用法として「状態・状況変化用法」と「継続用法」の2つを提示する。

これら2つの用法は、次の図1のように、時間軸上の言及時点を基軸とする過去と未来からの直示的移動のイメージであらわすことができる。動的な時間の流れの中で、「言及時点（現在）」を話者が存在する点として固定化し、そこに「未来の状態」と「過去の状態」が「来る」と考えるのである。仮に言及時点を「現在」と仮定すると、まず、未来から現在への直示的移動は状態・状況変化用法につながり、過去から現在への直示的移動は継続用法につながる。

図1 アスペクト用法



それでは以下、それぞれの用法について見ていこう。

3.2.1 V-v(A1)型：状態・状況変化

まずはV-v(A1)型の状態・状況変化用法について見てみよう。この型に属するテクルは、次の例文の表すようにアスペクト的な性質を帯び事態における主体の様態や心情、さらには主体を取り巻く環境、状況などを含めた広い意味での漸次的な状態、状況の変化をあらわす。

(241) アー可笑しいこと。余り笑ったもんだから咽喉が渇いて来た。

（『浮雲』：p.169）

(242) またそれについて異議を申し立てたいという気持ちも湧いてこなかった。

（『1 Q 8 4 Book2』：p.428）

この用法は、図1において「未来」から「言及時点（現在）」へと向かう矢印によってあらわされている。例えば、例文(241)は「咽喉が潤っている（渇いていない）状態

¹¹⁾ この文法化現象については第4章で議論する。

から水分を欲する状態へと変化した」ということをあらわしており、普通に考えると、「現在の状態から未来の状態へと進んでいく」というような、現在から未来への進行を考えた方が妥当かもしれない。しかし、テクル形式のもとである本動詞「来る」に本来備わっている直示的な意味を考えた場合、図1のように時間軸上のある言及時点における状態を固定し、「未来の状態」が「言及時点（現在）の状態」に向かって時間軸上を移動すると考えると、より本動詞とのつながり、連続性を考慮した説明が可能となる。

ちなみに、この用法は時間軸上のどの点をプロファイルするかによって微妙な違いを表現できる。例えば、吉川（1976）が分類した「変化の過程」、「過程の始まり」は時間軸上（未来→言及時点（現在）間）のどこをプロファイルするのかという基準による違いであって、これは語用論的な問題でもあり、文脈や解釈によって個人差が出ると考えられる。

(243) だんだんおなかがすいてきました。(変化の過程)

(244) そのうちに、雨が降ってきました。(過程（動作・作用）の始まり)

そしてこの時、プロファイルする範囲は必ず「言及時点（現在）」を含んでいる。つまり、「変化の過程」では「言及時点（現在）」を含んだ未来側のより広い範囲をプロファイルするのに対し、「過程の始まり」では「言及時点（現在）」により近い範囲をプロファイルするということである。この両者の違いはあくまでも連続的であって境界はないものとする。

このように状態・状況変化をあらわすテクルは基本的に図1で示される時間軸上の未来から言及時点（現在）に向かう矢印に集約され、それに沿った形で、状況に応じて多様な表現を可能にしている。

この V-v(A1)型のテクル文の前項には基本的に状態変化動詞、メタファーの作用による状態変化・状況変化をあらわす移動動詞がくる。またこの型のテクル文は「だんだん」や「徐々に」など、漸次的変化をあらわす副詞と共起することが多い。

(245) 個々が自己研鑽に励めば、自然と会社の業績も上向いてくるものです。

(『AERA』 第22巻3号：p.82)

(246) いろんな側面からアルバムにかかわりたいという欲が出てきました。

(『AERA』 第23巻50号：p.54)

(247) 石神は大きく息を吸い、目を見開いた。「湯川学か」二十年以上前の記憶が、みずみずしく蘇ってきた。

(『容疑者 X の献身』：p.105)

(248) 湯川の目の焦点が徐々に合ってきた。

(『容疑者 X の献身』：p.146)

(249) 先程からの言動で、湯川が何を意識しているのか、草薙にもわかってきた。

(『容疑者 X の献身』：p.210)

- (250) 「おまえ、何がいたいんだ？」草薙は少し苛立ってきた。
(『容疑者 X の献身』: p.214)
- (251) ハンドルを握るのは久しぶりだが、走り始めて三十分もすると、運転自体には慣れてきた。
(『容疑者 X の献身』: p.219)
- (252) 車の数が増え、追尾するのが徐々に難しくなってきた。
(『容疑者 X の献身』: p.222)
- (253) 死体の顔まで潰しておいて、自転車の指紋を消し忘れるとは、鈍な犯人もいたものだ。だが、わざと残しておいたのだとしたら話は変わってくる。
(『容疑者 X の献身』: p.298)

3.2.2 V-v(A2) 型：継続

次にアスペクト機能を有する 2 つ目の用法である V-v(A2) 型の継続用法について見てみよう。この継続用法は図 1 おいて「過去」から「言及時点（現在）」に向かう矢印によってあらわされている。この型に属するテクルは、アスペクト的な性質を帯び、長期的・反復的な動作・行為の継続をあらわす。

- (254) おれは、性来構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒に思い出した。
(『坊っちゃん』: p.108)
- (255) 生まれて初めて数字と出会って以来博士が育んできた友好の情が、それぞれの形に反映していた。
(『博士の愛した数式』: p.98)

この用法については、時間軸と矢印の方向が同じなので、「過去の状態」が「言及時点（現在）」に向かって時間軸上を移動すると見ることは、それほど理解の難しいことではないであろう。この用法に関しては先行研究による見解とそれほど大差はないが、V-v(A1) 型の状態・状況変化用法とこの V-v(A2) 型の継続用法との違いについては多少説明する必要があるように思われる。

状態・状況変化用法と継続用法の大きな違いは、時間軸上の矢印の方向が逆向きであることで、状態・状況変化用法では、「未来における状態」が時間軸上を言及時点（現在）に向かって直示的に移動するため、言及時点がどこを指すか、あるいは時間軸上のどの部分をプロファイルするかによってル形もタ形も取り得る。一方、継続用法の方は過去からの行為の継続、習慣等が言及時点（現在）までずっと続いていることをあらわすため、タ形でしかあらわすことができない。

- (256) a. 試験当日になったら、やっぱり緊張してくるんじゃない。
b. 試験当日のことを考えると、だんだん気分が悪くなってきた。

- (257) a.* 試験当日は、それまで頑張ってくることを出せばいいだけだよ。
b. 試験当日は、それまで頑張ってきたことを出せばいいだけだよ。

この V-v(A2)型のテクル文の前項には、行為動詞、一部の状態をあらわす動詞がくる。
また、この型のテクル文では、「今まで」「これまで」といった副詞を挿入しても文の適格性が保たれる。以下、この型の用例を挙げる。

- (258) あいつ、今まで努力してきたことがようやく報われたって喜んでたよ。
(259) 人間とは、うしろめたく生きる動物である。私なぞは今年で 72 歳。相当うしろめたい人生を送ってきた。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.72)
(260) 兆円単位の利益をあげてきた自動車メーカーが、一気に赤字に転落し、地元を凍えさせている。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.23)
(261) 僕も人との出会いが楽しくて、この仕事を続けてきました。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.48)
(262) 辛いことはピッチに立って乗り越えてきた。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.58)
(263) 私、よく「強いね」と言われてきたけど、全然強くない。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.65)
(264) 今回の攻撃は、無条件にイスラエルを支持してきたブッシュ政権が終わる前の駆け込み的な要素が強い。(『AERA』 第 22 巻 3 号 : p.69)
(265) 仕事が忙しいから、とご近所とは距離を置いてきた。(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.31)
(266) ママになっても、家事や育児を完璧にこなしてきた。(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.34)
(267) 工業デザインを勉強してきた加藤もやりがいを感じた。(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.36)
(268) 湯川の話聞き、上には上がいるものなのだなと草薙は思った。彼は目の前にいる友人こそ天才だと思ってきた。(『容疑者 X の献身』 : p.96)
(269) 数学は何のために勉強するのか—毎年、誰かがその質問を発する。そのたびに彼は同じようなことを話してきた。(『容疑者 X の献身』 : p.156)
(270) 要するに、これまで花岡靖子や美里が草薙たちに行ってきた供述のすべては、彼女たちの意思によるものではなく、石神が後ろで糸を引くことによって成されたものだ、というのが湯川の推理だった。(『容疑者 X の献身』 : p.260)
(271) 自分の席につくと、机の下を覗き込んだ。そこに収納してあったファイルを何冊か取り出した。中身は授業とは全く関係がない。ある数学の難問について、彼が何年間も取り組んできた成果の一部だ。(『容疑者 X の献身』 : p.280)

- (272) 現在、というより、これまでずっと研究を続けてきた、といったほうが正確かもしれない。
(『容疑者 X の献身』： p.288)

以上が、アスペクト用法の 2 つの型である。

4. 結び

第 2 章の最後に、テクルの用法分類について空間的用法、アスペクト用法別にもう一度まとめておく。次の表 3 は空間的用法、表 4 はアスペクト用法の特徴をそれぞれまとめたものである。

表 3 テクルの空間的用法

	前項動詞	ソレカラ挿入	着点	否定のスコープ
V+V 型	行為動詞	○	×	N
Vm-V 型	様態移動動詞(無生物)	×	○	W
	様態移動動詞・付帯状況動詞			N/W
V-V 型	主体移動動詞	×	○	W
	ヲ格(経路)			N/W
V-v(I)型	対象移動動詞	×	○	W
	非明示的移動・行為動詞		×	/

表 4 テクルのアスペクト用法

	前項動詞	「だんだん」	「これまで」
V-v(A1)型	状態変化動詞 移動動詞(一部)	○	×
V-v(A2)型	行為動詞 状態動詞(一部)	×	○

以上の表 3、表 4 からわかるように、テクルの各種用法は統語的にそれぞれ異なった振る舞いをし、前項にくる動詞の種類も型によって異なる。

第3章

テクル文における逆向態用法の特徴

第1章で紹介したように、逆向態 (Inverse) というヴォイスは主に言語類型論の領域で研究が進められてきた。日本語の逆向態については、近年少しずつ注目されるようになってきてはいるものの議論はまだ十分になされておらず、受動態に関する先行研究と比べると、その数、歴史ともに遥かに及ばない。

第3章では、第2章で提示したテクルの6つの用法の中でも特に逆向態用法に焦点を当て、その特徴について議論する。テクルの逆向態用法は他の用法には見られない「嫌悪」、「驚嘆」、「未完了」という3つの特徴的な機能を有している。ここでは、特に V-V 型 (求心的移動用法) との比較を通じ、テクルの逆向態用法を実現する前項動詞の性質と上記3つの特徴の内実を明らかにする。

1. はじめに

第3章では、前章に引き続きテクルの用法について論じるが、ここでは特に「逆向態用法」に焦点を当てて論じる。

まず次節では、日本語の逆向態に関する数少ない先行研究の中から Nariyama (2000) をはじめとするいくつかの論考を概観し、テクルの逆向態用法に関する研究動向とその問題点について述べる。次に3節では、テクルの逆向態用法に関する3つの機能的特徴に注目し、V-V 型 (求心的移動用法) と比較しながら考察する。そして、最後に4節で本章をまとめる。

2. 先行研究

これまでのところ、日本語の逆向態について論じた先行研究はほとんどないと言っても良い。管見の限り、日本語の言語現象に逆向態と見られる言語現象があるということをも最初に指摘し、論じたのは Nariyama (2000) であると思われる。ここでは、日本語の逆向態に関する数少ない先行研究の中から Nariyama (2000)、Shibatani (2003)、住田 (2006)、古賀 (2008) を取り上げ概観することにしたい¹⁾。

¹⁾ その他にも住田 (2005, 2010) 等がある。

2.1 Nariyama (2000)

Nariyama (2000) は、もともとは逆向態について論じたものではなく、日本語における項の省略現象について論じたものである。しかし、Nariyama は、その中で次のように述べ、日本語の「くれる」、「くる」という2つの動詞が生産的に補助動詞として使用され、逆向態マーカーとして機能しているということについて指摘している。

The direct/inverse distinction is morphologically marked on the verb in Algonquian. Although Japanese has no lexical marking dedicated to signalling the direct/inverse distinction, there are two, in a sense portmanteau, verbs which encode the canonical meaning of the verb as well as the notion of inverse: benefactive verb *kureru* ‘to give’ and the directional verb *kuru* ‘to come’.

～中略～

Although there are only two such inverse verbs, they are highly productive, because they are also frequently suffixed to other verbs, taking on an extended use as serial verbs. In this case, these inverse verbs are bleached of their meanings (‘give’ and ‘come’) and often function more like ‘inverse markers’.

(Nariyama (2000 : 115) より)

他の言語と同様、日本語においても逆向態として文を表現するか否かは、人称・有生性のハイアラキーに従うということは第1章で述べた。Nariyama (2000) では、Silverstein (1976) のハイアラキーをもとに日本語における順向態 (direct)、逆向態の選択を支配するハイアラキーについて、次のようなものを提示している。

(1) 日本語における人称／有生性のハイアラキー

人 (1人称 > 2人称 > 3人称) > 有生物 > 無生物

日本語は、上の(1)のようなハイアラキーに従って、順向態や逆向態が選択されるとされている。次の「あげる」と「くれる」の例を見てみよう。

- (2) a. 私はあなたにプレゼントをあげた。
b.* あなたが私にプレゼントをあげた。
c. あなたが私にプレゼントをくれた。
- (3) a. 私は太郎にプレゼントをあげた。
b.* 太郎が私にプレゼントをあげた。
c. 太郎が私にプレゼントをくれた。

- (4) a. あなたが太郎にプレゼントをあげた。
 b.* 太郎があなたにプレゼントをあげた。
 c. 太郎があなたにプレゼントをくれた。
- (5) a. あなたが犬にほねをあげた。
 b.* 犬があなたにほねをあげた。
 c.? 犬があなたにプレゼントをくれた。

これらの例で示されているように、動詞「あげる」と「くれる」の選択は、基本的に事態参与者である動作主と被動作主の(1)のハイラーキーにおける位によって決定される。例文(2)の事態参与者は1人称と2人称であるが、1人称から2人称へと行為がなされる場合は「あげる」が、2人称から1人称へと行為がなされる場合は「くれる」が選択される。例文(2b)からもわかるように2人称から1人称へと行為がなされる場合に「あげる」を用いると非文になる。例文(3)、(4)についても同様のことが言える。ハイラーキーにおいて上位から下位へと行為がなされる場合(例文(3a): 1人称→3人称、例文(4a): 2人称→3人称)は「あげる」が選択され、逆に下位から上位へと行為がなされる場合(例文(3c): 3人称→1人称、例文(4c): 3人称→2人称)は「くれる」が選択される。ただし、例文(5c)のように動物から人へと行為がなされる場合は、やや不自然な文となる。これは「動物が具体的な何かを人にプレゼントする」という行為が一般常識からは考えられないことに原因があるとされ、このような場合は普通、日本語の授受動詞は用いることができないとされている。また、3人称から3人称へと行為がなされる場合は談話の文脈によってどちらの形式が選択されるかが決まる。

ここで注意すべきことが1つある。それは日本語では、(1)のようなハイラーキーにおいて人称が文法的に順向態や逆向態を決定するわけではないということである。Nariyama (2000) では、**In-group** と **Out-group** という用語を用いてこれを説明しており、この **In-group** と **Out-group** という概念は日本語の文法に深く組み込まれている共感度 (empathy)²⁾ に関する現象の典型であり、会社や家族といった話者を取り巻く社会的階層・関係性に基づくものである。ただし、この共感度はあくまで主観的、話者の任意の判断によるもので、必ずしも常に社会的階層・関係性を反映しているとは言いきれない。次の例を見てみよう。

- (6) あなたが弟にプレゼントをくれた。

例文(6)は2人称から3人称への行為をあらわしており、通常であれば動詞は「あげる」が選択されるはずである。しかし、3人称のプレゼントの受け手である「弟」は話

²⁾ ここで言う「共感度」とは、話者の視点やカメラアングルのことで、話者がどちらの事態参与者を心理的に近く感じるかということである (Nariyama (2000 : 118) を参照)。

者の身内 (In-group) であるため、この場合は2人称から1人称への行為をあらわしていることと同等であると判断され、「くれる」が選択されている。ただし、これも文脈次第であり、仮に動作主「あなた」が家族の誰かであれば、動詞は「あげる」が選択され得る。同じようなことが他の例についても言える。例えば、例文(4b)は普通に考えれば非文であるが、仮に3人称動作主の「太郎」が(話者の夫など) In-group に属している人であれば、(4b)は自然な文と判断される。このように日本語における順向態、逆向態の選択は In-group、Out-group という概念に即して判断されることになる。

Nariyama (2000) では、さらに本動詞の意味が弱化したベネファクティブの補助動詞テクレルと移動動詞テクルの逆向態マーカーとしての機能についても指摘している。

- (7) a. 私は太郎にお金を払ってあげた。
b. 太郎が私にお金を払ってくれた。
(8) a. 私は太郎に車を買ってあげた。
b. 太郎は私に車を買ってくれた。

まず、例文(7a)、(8a)において順向態をあらわす形式であるテアゲルは「何かモノを誰かに与える」という「あげる」本来の意味ではなく、「[お金を払う／車を買う]という行為によって、太郎にある種の好意のようなものを与える」という意味をあらわしている。一方、例文(7b)、(8b)の逆向態をあらわす形式テクレルは、行為の受け手側が与え手側の好意に対する感謝の意をあらわしている。また、この逆向態の形式を用いることは、ポライトネスをあらわす機能も有していると指摘している。

次に方向動詞 (directional verb) クルについてである。日本語の方向動詞についてもベネファクティブ動詞と同様のことが言えるが、方向動詞の場合は順向態としての形式がないという点がベネファクティブの場合とは異なると述べている³⁾。

クルの意味は、ハイアラーキーにおいて高位にある話者(あるいは話者の視点のある当事者)に向かう求心的移動であり、クルは本来的に逆向態としての機能を有する動詞であるとしている。

- (9) a. 私は太郎に電話した。
b. 太郎が私に電話してきた。
c.?? 太郎が私に電話した。

³⁾ Nariyama (2000) では、やりもらい動詞のうちアゲルを順向態、クレルを逆向態、モラウを逆動詞 (Converse verb) と見て分析している。本研究では移動動詞イクについては順向態としての機能を有する動詞と分析するが、Nariyama (2000) では、モラウと同じ逆動詞と見て分析している。分析の詳細については Nariyama (2000) を参照のこと。

上述したようにこの種の動詞については順向態としてのマーカ―はない。動詞が何の形態素もつかない無標であらわされる文が、テクル文（逆向態）に対応する順向態の文と見なされる。例文(9)で言えば、(9a)のように1人称から3人称へと行為がなされる場合、動詞には特別な形態素は何もついておらず無標であるが、(9b)のように3人称から1人称へと行為がなされる場合は、動詞にテクルがつかなければならない。もしテクルがつかなければ、(9c)のように受け入れられなくはないが不自然な文となる。

以上、Nariyama (2000) について概観した。Nariyama (2000) は、日本語の言語現象に逆向態という概念を最初に適応したという点で非常に重要な研究である。しかしながら、本来的な研究目的が別のところにあるということもあり、逆向態に関する記述においては提示された例文も少なく、ヴォイスとしての機能性やその特徴についてはあまり論じられてはいない。

2.2 Shibatani (2003)

次に Shibatani (2003) について概観する。Shibatani (2003) は、主に言語類型論的な立場から日本語の方向動詞 (directional verb) について分析を行っている。ここでは、イクとクルに関するいくつかの重要な指摘と、テクルの逆行態用法に関する記述を中心に見ていくことにする。

まず Shibatani の指摘で重要なのは、イクとクルの「非対称性 (asymmetry)」について言及している点である。次の例を見てみよう。

- (10) a. ケンが部屋に来た。
- b. ケンが部屋に行った。

(10a)では話者が部屋の中にいることが含意されているが、(10b)では必ずしも話者のいる場所からの移動をあらわす必要はない。クルは、着点の話者を直示的中心にとらえる場合に使用されるという制限がつく一方、イクは、話者が着点にも起点にもいない中立的な文脈でも使用できる。

しかしながら、次の例文(11)、(12)のように限られた空間を伴って描写されるような場合は、イクとクルは対称的な様相を呈する。

- (11) a. ケンが部屋から出ていった。
- b. ケンが部屋から出てきた。
- (12) a. ケンが部屋に入っていった。
- b. ケンが部屋に入ったきた。

まずイクの例について見ていくと、例文(11a)では話者が部屋の中にいることが含意され、(12a)は逆に話者が部屋の外にいることが含意されている。クルは、話者の位置が着点となり、話者は(11b)では部屋の外に、(12b)では部屋の中にいることになる。このようにある制限が課せられた場合は、イクとクルは対称性を示すこともある。

その他にも非対称性を示す例としては、次のようなものがある。

(13) ケンが学校に走って行った。

例文(13)のケンの移動についてである。この場合、話者のいる場所を起点とする解釈も可能であるが、話者がいない場所を起点とする解釈も可能である。

このように、Shibatani (2003) はクルとイクの非対称性について考察している。クルは直示的中心として話者（あるいは話者が特別に注目している人）を含意するということを示し、イクは話者から見た客観的な位置を示すとされている。また、これらの非対称性に関する議論は、クルとイクの拡張を理解する上でも重要であると述べられている。

Shibatani (2003) は、日本語においてクルとイクを補助動詞として使用する動機についても指摘している。上にあげた例文(11)、(12)については、次の例文(14)のようにクルやイクを使わずに言うことも可能である。

- (14) a. ケンが部屋から出た。
b. ケンが部屋に入った。

しかし、これらの表現はその事態に対する話者の立場（位置、見方など）があらわされていない。Shibatani によると、日本語は、特にインターアクティブな会話などでは、強く話者の立場をコード化することを強く好む言語であるとされている。そのため、例文(11)や(12)に比べると、(14)は話者の立場がコード化されておらず、何か不十分な感じがする。これは、その事態が起こっている時に話し手がどこにいるのか等、聞き手に余剰な命題情報が与えられていないからである。これがクルやイクを補助動詞として使用する動機の1つである。

次に別の観点からも動機について見てみよう。英語では方向性のない移動動詞が着点や起点をとることができるが、日本語ではそれができない。

- (15) a. Ken walked to school.
b. * ケンは学校に歩いた。
c. ケンは学校に歩いていった。

- (16) a. Mary swam to the boathouse.
 b.* マリーはボートハウスに泳いだ。
 c. マリーはボートハウスに泳いでいった。

例文(15a)、(16a)のように英語の walk や swim は着点をとることができるが、日本語の「歩く」や「泳ぐ」は(15b)、(16b)からもわかるように、着点をとることができない。このような場合、日本語で着点をあらわす場合は必ず(15c)、(16c)のようにイク（やクル）を後続させなければならない。このように日本語ではクルやイクの機能的特性を十分に活かし、表現の幅を広げているのである。

次に、逆向態に関する記述について見ていこう。言語類型論的に見て逆向態は順向態よりも形式的に有標であり、有標の逆向態／無標の順向態、あるいは有標の逆向態／有標の順向態といった組み合わせを持つ言語は確認されているが、無標の逆向態／有標の順向態という組み合わせの言語は確認されていないとされている。

- (17) a. ケンが花子にボールを投げた。
 b. 僕は花子にボールを投げた。
 c.* ケンが僕にボールを投げた。
 d. ケンが僕にボールを投げてきた。
 (18) a. ケンが花子に手紙を書いた。
 b. 僕は花子に手紙を書いた。
 c.* ケンが僕に手紙を書いた。
 d. ケンが僕に手紙を書いてきた。
 (19) a. ケンが花子に電話をした。
 b. 僕は花子に電話をした。
 c.* ケンが僕に電話をした。
 d. ケンが僕に電話をしてきた。

ここにあげた例文では、クルが後続しなくても着点をとることができる動詞が用いられている。それぞれ d の例が示しているように、3 人称から 1 人称へと行為がなされるような場合は動詞にテクルが付き、方向性のない行為を方向性のある移動表現へと転化している。

また Shibatani (2003) は、日本語では＜無標の順向態＞／＜有標の逆向態＞というシステムが構築されており、この点でクルとイクでは用法間に格差があるということを指摘している。例えば、上記の例文(17d)、(18d)、(19d)において、テクルをテイクに置き換えると非文になってしまう（例文(20)）。

- (20) a. * 僕は花子にボールを投げていった。
 b. * 僕は花子に手紙を書いていった。
 c. * 僕は花子に電話をしていった。

次に日本語の逆向態をコントロールしている人称のハイアラキーについて見ていく。第 1 章、そして Nariyama (2000) を概観した際にも指摘したことであるが、逆向態は言語全般的に人称／有生性のハイアラキーによってコントロールされている。Shibatani (2003) は、日本語の逆向態は次の(21)が示すような人称ハイアラキーによってコントロールされていると説明し、3 人称から 3 人称へと行為がなされる場合についてはさらに説明を加えている。

- (21) 人称のハイアラキー： 1 人称 > 2 人称 > 3 人称
 (22) a. 佐藤さんが娘に電話をした。
 b. 佐藤さんが娘に電話をしてきた。

例文(22)のように 3 人称から 3 人称へと行為がなされる場合は、注意しなければならないことがある。直示的中心に向かう方向をマークする対象として第一に選択されるのは「話者の場所」であるが、日本語ではそれを「話者の範囲 (speaker's sphere)」と捉え、話者に近い、あるいは関係の深い人を含めて広く捉え直す必要がある。例えば、例文(22a)において「娘」は佐藤さんの（或は他の誰かの）娘であると判断されるが、例文(22b)の「娘」は話者の娘と判断される。ただし、(22b)の文は、佐藤さんの娘が話者のところに来ていて、その娘に佐藤さんが電話をしたという解釈も可能である。

最後に受動態と逆向態との違いに関する Shibatani の考察を確認する。Shibatani (2003) では、順向態／逆向態、能動態／受動態は根本的な違いがあるが、日本語ではこの両者は同じ原理によってコントロールされていると指摘し、「話者の範囲」へと向かう「行為」について述べる時は受動態形式が必須とされ、「話者の範囲」へと向かう「移動」について述べる時は逆向態形式が必須とされると分析している。

- (23) a. 僕はケンをなぐった。(能動態)
 b. * ケンが僕をなぐった。(能動態)
 c. 僕はケンになぐられた。(受動態)
 (24) a. 僕はケンに招待状を送った。(順向態)
 b. * ケンが僕に招待状を送った。(順向態)
 c. ケンが僕に招待状を送ってきた。(逆向態)

しかし、この分析については疑問がある。受動態と逆向態の違いを「行為」か「移動」という点に求めることには無理がある。第2章で取り上げた例をいくつか見てもそれは明らかである。

- (25) 後ろの車が僕の車にしつこくクラクションを鳴らしてくる。
(26) 「石神が共犯だとして、彼の役割は一体どういうものだろう？」早速湯川が
質問してきた。 (『容疑者 X の献身』: p.239)
(27) (価格競争をしている) 向かいのスーパーが大幅に商品を値下げしてきた。

上の例文(25)、(26)、(27)の下線部分の前項動詞「鳴らす」「質問するする」「値下げする」は必ずしも「移動」の意味が含まれているとは言えない。仮に移動の解釈が可能だとしても、例文(25)であれば「クラクションの音」、例文(26)では「 」内の言表内容であり、これらはいずれも物体の実質的移動とは言えない。また例文(27)については移動の解釈は不可能である。つまり、受動態と逆向態の使い分けを単純に「行為」か「移動」かに求める Shibatani (2003) の分析は適切とは言えない⁴⁾。テクルの逆向態については、テクルの前項にくる動詞の性質をより細かく分類した上で、多くの用例について検討していく必要がある。

以上、Shibatani (2003) について概観した。Shibatani (2003) は言語類型論の知見を背景に、主にヴォイスという視点から日本語のクルとイクについて分析している点が非常に重要である。しかしながら、上述したように限られた用例分析に基づいて一般化を行っており、その意味でまだまだ分析が不十分な点が多いと言える。

2.3 住田 (2006)

住田 (2006) は、Shibatani (2003) の議論を踏まえ、まず日本語のテクル文に逆向態という概念を適用することの是非について、Thompson (1994) が提示した受動態と逆向態とを区別する5つの項目をもとに検討し、その妥当性を確認した上で、日本語における逆向態を意味・機能的側面、形式的側面から定義している⁵⁾。また、逆向態用法のテクル文に見られる特徴として「嫌悪性」と「未完了性」があることを指摘している点がこの論文の特徴と言える。しかし、この2つの特徴がどのような場合に生じるのかという問題については分析が不十分であり理論的説明がなされていない。これについては、本章の3節において詳しく議論していくことにする。

⁴⁾ 古賀 (2008) にも同様の指摘がある。

⁵⁾ これについては、第1章で発展的に議論している。

2.4 古賀 (2008)

古賀 (2008) は、Shibatani (2003) の分析を出発点としてヴォイスに関するクルの用法について論じ、受動構文、受益構文との比較からその機能を日本語のヴォイス体系の中に位置づけている。

- (28) ケンが部屋に入ってきた。
 (29) 外が暗くなってきた。
 (30) ハナコが手紙を書いてきた。

例文(28)において、動詞のクルが、動作主であるケンの「入る」という移動が話者の方向に向かっていることを表しているということからもわかるように「直示移動動詞「くる」の基本的語彙機能は、話者の方向への移動を表すことである」と指摘した上で、例文(29)、(30)の例が示すように「動詞「くる」は文法化によって、より抽象的な文法機能を獲得している」と述べている。

古賀 (2008) は、上述した Shibatani (2003) の逆向態と受動態の分布に関する一般化を否定し、両構文の選択は移動か行為かという主動詞の意味に起因するのではなく両構文の意味的、統語的、語用論的特徴に動機づけられると主張し、次の表 1 のようにまとめている。

表 1 日本語の逆向構文と受動構文の意味的、統語的、語用論的特徴

	逆行構文(「てくる」)	受動構文
意味	意図的動作者 状態化されていない 事象の行為に焦点 起動・開始アспект	動作者の意図性に制限なし 状態化されている 事象の結果状態に焦点 完了アспект
統語	動作者が主語の地位を維持 文法関係に変更なし 結合価に変更なし	動作者が斜格に降格 非動作者が主語に昇格 結合価が減少(間接受身以外)
語用論	非動作者の主題性が高い 動作者が比較的高い主題性	非動作者の主題性が高い 動作者が極端に低い主題性

本研究では、両構文の選択については、受影者（主に話者）が動作主の行為によって物理的、あるいは精神的に「ある程度の影響を受けている場合」に逆向態が、「かなり影響を受けている場合」に受動態が選択されると主張する。つまり、両言語の選択は、古賀 (2008) が主張する意味的、統語的、語用論的特徴が導く両言語形式のもつ「機能性の違い」に起因するということである。

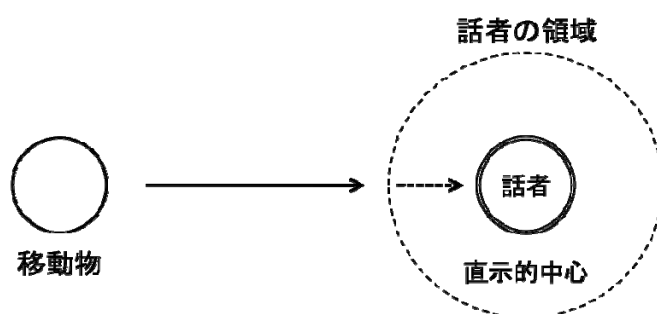
古賀（2008）では全体を通して興味深い考察がなされているが、ここでは特にアスペクトに関する考察と意図性、受影性に関する考察を中心に見ていくことにする。

まず、古賀（2008）は次のように述べ、テクルのアスペクト的特徴について言及している。

日本語の逆行構文⁶⁾の持つ最も興味深い特徴の1つは、そのアスペクト的特徴である。逆行構文における「てくる」は、事象が直示的中心に向かって出現することを表す。つまり、完了アスペクトの特徴が強い受動構文とは異なり、逆行構文は話者に向けて行われた事象の起動の局面に焦点を当てるため、起動・開始アスペクトの色合いを強く持つのである。（古賀（2008：248）より）

また、坂原（1995）を参考に図1のような「くる」のイメージスキーマを提示し、逆向態マーカーとして機能するテクルのアスペクト的特徴は、イメージスキーマの保存に動機づけられ、テクルは、人称の階層の下位に位置する参加者が話者に向けて行った行為を、話者が認識・知覚したことを典型的にあらわすと述べている。

図1 「くる」のイメージスキーマ（坂原 1995）



以上の考察をもとに、逆向態と受動態の振る舞いの違いを説明する。

- (31) a.* ハナコはケンを殴ったけど、(ケン) うまくかわした。
b.* 僕はケンに殴られたけど、うまくかわした。
c. ケンが僕を殴ってきたけど、うまくかわした。
- (32) a.* ハナコはケンの足を蹴ったけど、(ケン) なんとかよけた。
b.* 僕はケンに足を蹴られたけど、なんとかよけた。
c. ケンが僕の足を蹴ってきたけど、なんとかよけた。

⁶⁾ 古賀（2008）では *Inverse* に「逆行構文」、*Direct* に「順行構文」という訳を当て「逆行」、「順行」と表記しているが、本研究ではこれを「逆向」、「順向」と表記して扱っている。

例文(31a-b)、(32a-b)が示すとおり、能動／順向文、受動文では、動詞があらわす事態の結果を打ち消すことはできないが、例文(31c)、(32c)の逆向文の場合は、動詞のあらわす行為の結果を無効にすることができる。これは、事象の結果に焦点を当てるために完了アスペクトの色合いを強く持つ受動文に対し、逆向文が事象の起動、または因果連鎖の行為の局面に焦点を当てる構文であるため、行為の結果部分が構文のプロファイルから排除されることがあるためであるとされている。このように、例文(31)、(32)に見られる受動文と逆向文の振る舞いの違いを、両構文の焦点の相違とそれに関連するアスペクト的特徴から説明している。

次に、意図性と受影性についての考察について見ていく。古賀（2008）は、主語として統語的に実現される逆向文の動作者は、意図的に動詞事象を遂行する動作者でなければならぬが、受動文にはそのような制限がなく意図性をあらわす副詞、非意図性をあらわす副詞のどちらとも共起可能であるとしている。

- (33) a. 私はケンに {わざと／うっかり} 足を踏まれた。
b. ケンは私の足を {わざと／??うっかり} 踏んできた。
(34) a. 私はケンに {わざと／あやまって} 服にお茶をこぼされた。
b. ケンが {わざと／??あやまって} 私の服にお茶をこぼしてきた。

例文(33)、(34)の動詞「足を踏む」「お茶をこぼす」があらわす事象は、意図的にも非意図的にも行うことができる事象であるが、例文(33b)、(34b)のような逆向文で使えるのは意図的に行うことが可能な事象をあらわす述語に限られている。

ここで上記の例について検討してみたい。まず、例文(33b)、(34b)のようなテクル文が非意図的な副詞と共起しづらいという点については同意できるが、例文(33a)、(34a)についても同様に非意図的な副詞とは共起しづらいのではないだろうか。古賀は、提示した受動文について「括弧内の副詞が「私」の意図性を指す解釈も可能だが、ここで問題にしているのは、動作者の意図性に言及する解釈である」と脚注で述べてはいるが、「私はケンにうっかり足を踏まれた」についても「私はケンにあやまって服にお茶をこぼされた」についても、下線部の副詞が動作者の動作を修飾するとする解釈には無理があるように思われる。つまり、このテストを使って動作者の意図性の有無をはかることの是非について再度検討する必要があるのではないだろうか。また、古賀はこのような制限は「事象の起動を前景化し、行為の局面に焦点を当てる逆行構文の特徴と合致する」と指摘しているが、事象の起動を前景化することと意図性の有無とは無関係であり、逆向文の特徴と合致すると結論づけることはできない。

次に受影性について見ていく。

(35) a.? ケンが見てきた。

b. ケンがじろじろ見てきた。

古賀（2008）によると、例文(35a)において、コンテキストなしでは容認度が低くなるのは「見る」という事象によって話者が受ける受影性の度合いが低いからであり、(35b)のように「じろじろ」という副詞をつけると、副詞が動作者の意図性を強調するだけでなく、被動者である話者の影響性の高さも示唆するため、容認度が高くなるという。しかし、受影性の程度を副詞で分析しきれないことはいくつかの用例を見ればすぐにわかる。

(35) 野良犬が僕にかみついてきた。

(36) 隣の人が私の手を触ってきた。

(37) 後ろの車がクラクションを鳴らしてきた。

例文(35)、(36)、(37)では、特に副詞は用いられていないが、すべて容認される例文であり、また受け手側が物理的、心理的に影響を受けていることが十分に読み取れる。

以上に見てきたように、意図性や受影性の問題はヴォイスに限らず、動詞の自他の問題においても重要なテーマではあるが、逆向態の特徴として提示するのはかなりむずかしいのではないと思われる。ただし受影性については、第1章でも触れたように受動態との比較という観点からその特徴について記述することは可能であり、意味があることだと思われる。これについては、第5章でも議論する。

古賀（2008）では、受影性に関連する問題として、テクルの「受害」という機能についても言及し、受益のテクレル形式と比較しながら次のように述べている。

「てくる」を使った逆行構文が、話者の態度に関して中立的な事象を表し得ることとは、受害の意味が未だ慣習化の過程にあることを示唆する。この受害の意味は「てくれる」を使った逆行構文とのシステムティックな対比によって生まれると考えられる。
(古賀（2008 : 254）より)

古賀が「受害」と呼ぶ機能を、本研究では「嫌悪性」と呼んでいる。この「嫌悪性」については、次節と第5章で詳しく見ていくが、日本語ヴォイスの機能分布の隙間を埋める形でテクルが発展し、嫌悪性を帯びるようになったと考えられる。

以上、古賀（2008）について見てきた。古賀（2008）の主張については大筋で合意できる部分が多いが、分析の詳細については筆者と考え方が異なる部分もある。

2.5 山田 (2004)

山田 (2004) では、主にベネファクティブに関する表現形式 (テヤル、テアゲル、テクレル、テモラウ等) について詳細に考察されているが、その中でテクル文についても一部で論じている。山田が論じているのは本研究でいう V-V 型、V-v(I)型に相当する言語現象で、主に前項動詞を「移動」の観点からいくつかのタイプにわけ、そのタイプごとに方向性の観点からその特徴について論じている。

山田は、まず「移動」を大きく主体移動と対象移動にわけ、主体移動は、その移動を捉える話者は「行く (テイク)」も「来る (テクル)」も用いることができるが、対象移動は補助動詞としてのテクルのみが適用されるとし、その点が大きな違いであると指摘している。以下、山田の動詞分類について見ていく ⁷⁾。

2.5.1 主体移動動詞

主体移動動詞は、さらに主体位置変化動詞、言語付随型主体移動動詞、身体 (部位) 運動動詞の 3 種類に下位分類される。

①主体位置変化動詞

動作主体の位置変化を表す動詞。(例: 近づく、近寄る、向かう、迫る、押し寄せる、押し掛ける、追い掛ける、転校する、移る、上がる、下がる、出る、入る等)

この動詞類は基本的にその動作・行為自体に何らかの具体的・抽象的な移動の存在が感じられるもので、能動文で話者以外の参加者が話者の方向へ移動する場合に動詞単独では用いられないとされている。

- (38) a.* 金を落として困っていると一人の老婆が私に近づいた。
b. 金を落として困っていると一人の老婆が私に近づいてきた。
- (39) a.* 地響きをたてて大きなサイが私に向かった。
b. 地響きをたてて大きなサイが私に向かってきた。
- (40) a.* (バードウォッチング) 何万羽もの鳥が押し寄せた。
b. (バードウォッチング) 何万羽もの鳥が押し寄せてきた。
- (41) a.* 留守番をしていると、突然、電話がかかった。
b. 留守番をしていると、突然、電話がかかってきた。

また、主体位置変化動詞には遠心的方向性を表す「遠ざかる」「遠のく」「離れる」など遠心的な移動を含意する動詞類も含まれ、これらにはテイクが用いられるとされている。

⁷⁾ 議論の関係上、テクレル文に関する例文は省略する。

- (42) a.? 彼は、私から遠ざかった。
b. 彼は、私から遠ざかっていった。
(43) a.? 彼は、わがままばかりを言う私から離れた。
b. 彼は、わがままばかりを言う私から離れていった。

②言語付随型主体移動動詞

言語付随型主体移動動詞は「～かける」「～よる」などを後項に含み前項が発話をあらわす動詞類であることが多い。(例：話しかける、語りかける、問いかける、呼びかける、(疑問を) 投げかける、(質問を) 浴びせかける、言い寄る、迫る等)

また、この種の動詞は話者でない主題化されていない主語の場合、能動文は不自然であり、テクル文にする必要があると述べている。

- (44) a.* 道に迷って困っていた時、ひとりの老人が私に話しかけた。
b. 道に迷って困っていた時、ひとりの老人が私に話しかけてきた。
(45) a.* コンパの帰り、酔った勢いで課長が私に言い寄った。
b. コンパの帰り、よった勢いで課長が私に言い寄ってきた。

また、この種の動詞も話者が主語になった場合にテイクを用いることができるとされている。

- (46) かわいい女の子が座っていたので、話し掛けていった。
(47) コンパで好みの男の子が来ていたので、言い寄っていった。

③身体(部位)運動動詞

対象への接触が含意される二項動詞である。(例：噛み付く、食いつく、抱きつく、キス(を)する、蹴る、もたれる、触る、なでる) これらは通常、移動動詞には入れられないが、同じ対象に働きかける動詞である「殴る」「殺す」などとは異なり、テクルを用いて言うことができるとして、移動動詞の枠の中で考察している。

- (48) a. 池に指を入れたら、すっぽんが私の指に噛み付いた。
b. 池に指を入れたら、すっぽんが噛み付いてきた。
(49) a. 恋人が私にキスをした。
b. 恋人がキスをしてきた。
(50) a. 電車の隣に座っていた人が僕の肩にもたれたので、肩をつついた。
b. 電車の隣に座っていた人が僕の肩にもたれてきたので、肩をつついた。

- (51) a. 電車の中でちかんが私の身体を触った。
b. 電車の中でちかんが私の身体を触ってきた。

(52)? 隣に立っていた人がいきなり殴ってきた。

(53)* 凶悪犯が、私を殺してきた。

また、テイクが後接するか否かについては差が見られるため、これらは非典型的な主体移動動詞であるとしている。

(54)? けんかして、友達に咬み付かれたので、こんどは咬み付いていった。

(55)? いつも不意にキスをされてしまうので、きょうは私からキスをしていった。

(56)? 眠くなったので、恋人の肩にもたれていった。

(57)? いつも触られてばかりで悔しいので、こんどは私から触っていった。

2.5.2 対象移動動詞

対象移動動詞については、無対対象移動動詞、有対対象移動動詞、発話内容移動動詞、態度的な働きかけを表す動詞の4種類に下位分類している。

④ 無対対象移動動詞

この種の動詞は受け手の立場から捉えた動詞を持たない。(例：送る、(電話／声を)かける、届ける、提供する、伝える、通告する等)

(58) a.* 実家の母が私にお米を送った。

b. 実家の母が私にお米を送ってきた。

(59) a.* ひとりの村民が、不審な小包を私に届けた。

b. ひとりの村民が、不審な小包を私に届けてきた。

無対対称移動動詞の場合、主体ではなく対象の移動をあらわすため、テイクは使用できないとしている。

⑤ 有対対象移動動詞

この種の動詞は受け手の立場から捉えた動詞を持つ。(例：教える、預ける、貸す、売る等)

(60) a.? 道に迷った時、通りがかりの人が駅への道を私に教えた。

b.? 道に迷った時、通りがかりの人が駅への道を私に教えてきた。

(61) a.? お金を落とした時、ひとりの紳士が私にお金を貸した。

- b.? お金を落とした時、ひとりの紳士が私にお金を貸してきた。
- (62) a.? 空腹で困っている時、一人の少女が私にパンを売った。
- b.? 空腹で困っている時、一人の少女が私にパンを売ってきた。

例文(60b)、(61b)、(62b)が示すとおり、有対対象移動動詞は無対対象移動動詞とは異なりテクルを用いて表すと不自然になるとされている。山田（2004）ではこれについて、「教える」「預ける」「貸す」「売る」などの動詞類が、受け手の立場から捉えた「教わる」「預かる」「借りる」「買う」を持つためであると説明している。また、対となる表現形式を持つということは、話者が受け手である事象をテクルを付加するような文法的方略を用いずとも話者を斜格にすることなく表現することができるということであり、基本的にテクルを用いる必要がないと分析している。ただし、敢えてテクルを用いた場合は、冗長的であり何らかの強意的な意味をあらわすともしている。例文(63)、(64)、(65)が、そのような例である。

- (63) あたしと遊びにきたんではなく、あたしを見物にきたのよ。あたしは自分をコントロールできずガラス戸をおもいきりしめたわ。むかむか、むかむかしてしばらくはなにもできず時間を無駄にしちゃった。ところがようやく落ち着いて読書にかえろうとしたら、ああなんていうことでしょう、左前方一軒とび隣家の主婦が表で大声をはりあげて、ヴェランダに干した蒲団と毛布をとりこまなければ湿けると教えてきたの。畜生よ、本当に畜生だったらありゃ、しない。
- (64) 利息を付けて借りた金を返しに行ったら、今度はサービス期間ですからってさらに 100 万円貸してきやがった。
- (65) 通販で教材を買ったらあまりにひどい内容だったので返却した。そしたら今度は必要のない音楽 CD を売ってきやがった。

山田（2004）では、以上に見た動詞類以外に空間移動としてのテクルをとる動詞類としてさらに次の発話内容移動動詞と態度的な働きかけをあらわす動詞の 2 類を考える必要があるとしている。

⑥発話内容移動動詞

発話内容移動動詞とは、抽象的な「発話内容」が動作主から受け手に移動していると考えられる動詞類である。（例：話す、挨拶する、断る、答える）

- (66) a.* 教室に入り席に着くと、田中が先日の事件のことを話した。
- b. 教室に入り席に着くと、田中が先日の事件のことを話してきた。
- c.* ばくも田中に知っている情報を話していった。

- (67) a. * 道を歩いていると、地元の小学生が挨拶した。
 b. 道を歩いていると、地元の小学生が挨拶してきた。
 c. ? ぼくは、校長先生に挨拶していった。
- (68) a. * 予約してあったレストランが、食材が入らないからと(私の)予約を断った。
 b. 予約してあったレストランが、食材が入らないからと予約を断ってきた。
 c. * 食材が入らなかったで、予約していた客に予約を断っていった。

⑦ 態度的働きかけ動詞

この種の動詞は態度的な働きかけをあらわす。(例：招待する、誘う)

- (69) a. ?? 立花がぼくをパーティに招待した。
 b. 立花がぼくをパーティに招待してきた。
 c. * 私は、駅長をパーティに招待していった。
- (70) a. ?? ユースケが私をコンパに誘った。
 b. ユースケがコンパに誘ってきた。
 c. * ぼくは、みゆきをコンパに誘っていった。

これら2つの動詞類では(69a)、(70a)のように話者を斜格にした表現は自然さを欠き、(69b)、(70b)のようにテクルを用いてあらわさなければならない。一方、(69c)、(70c)のテイク文については、動詞ごとに差はあるが総じてやや不自然であると分析している。

以上のように、山田(2004)では、第2章で分類したテクル文のうちV-V型、V-v(I)型に属する現象に焦点を当てて分析している。しかしながら、これらの分析では分類した枠組みの中でいくつかの言語現象を確認したに過ぎず、全体として日本語のテクル文(あるいはテクレル文)の体系性を説明するには至っていない。

そこで、本研究では独自の動詞分類をもとにV-V型、V-v(I)型としてあらわれるテクル文を再考し、日本語のテクルの逆向態用法の特徴について明らかにする。

3 テクルの逆向態用法の特徴

では、前章で見たV-v(I)型テクルの逆向態用法に見られるいくつかの特徴について、V-V型の求心的移動用法と比較しながら考察していこう。

3.1 V-V型・V-v(I)型における前項動詞の分類

本研究では、移動という概念に段階性を設け、さらにこれに移動の意味を含まない行為動詞を加えて次のように動詞を分類し、これをもとにテクル文の言語現象を分析して

いくことにする⁸⁾。

【V-V 型・V-v(I)型における前項動詞の分類】

- [1] 主体移動動詞 (例：近づく、上がる、降りる、出る、入る等)
- [2] 対象移動動詞 (例：送る、投げる、渡す等)
- [3] 非明示的移動動詞 (例：にらむ、鳴らす、話しかける、なぐる等)
- [4] 行為動詞 (例：まねをする、選ぶ、代える等)

[1]は、動作主の物理的移動をあらわす動詞群、[2]は、動作主の行為によって生じる対象の移動をあらわす動詞群、[3]は、動作主の行為によって視線や音などが移動するいわゆる虚構移動⁹⁾、発話を含む言表内容の移動、また身体部位（「なぐる」は実際には「手」が動いている）など主語にも目的語にもあらわれない要素が移動することを潜在的に含む動詞群、[4]は、全く移動を含まない動作主体の行為のみをあらわす動詞群である。

そして、テクル文を V-V 型と V-v(I)型とに分類するにあたり、[1]の主体移動動詞と、主体の実質的移動を含まない[2]から[4]の動詞群との間に境界を設けることにする。つまり、V-V 型のテクルは前項に主体の移動をあらわす移動動詞をとり、V-v(I)型のテクルは、前項に主体の移動をあらわさない広い意味での行為動詞をとると結論づける。

・ V-V 型（求心的移動用法）： 移動動詞＋テクル
主体移動動詞

・ V-v(I)型（逆向態用法）： 行為動詞＋テクル
対象移動動詞
非明示的移動動詞
行為動詞

では、この新たな前項動詞の分類を用いて、テクル文の逆向態用法の特徴について、求心的移動用法と比較しながら考察していくことにする。まず、テクル形式の付与が義務的であるか否かという「テクル付与の義務性」に関する問題とテクル文の特徴の1つである「嫌悪性」をあらわす機能について考察する。そして、近年、スポーツ等の実況などで耳にするようになった「驚嘆」をあらわすテクル文について考察し、最後に、テクルの逆向態用法の一部に見られるテクル文がタ形をとった際に生じる「未完了性」について考察する。

⁸⁾ このセクションの考察に関しては、松本曜、高梨信乃両氏の示唆を得た。

⁹⁾ 虚構移動については松本（2004）を参照。

3.2 テクル付与の義務性と嫌悪性

テクル文の用例を数多く見ていくと、主動詞にテクル形式を必ず要求する場合とそうでない場合とがあることに気づく。これまで見てきた逆向態に関する先行研究でも指摘されていたように、逆向態マーカ―が付与されるのは、人称・有生性のハイアラーキーに基づいた当該他動的事象の文脈においてである。つまり、主に話者が「ソトと捉える人」から「ウチと捉える人」へと動作行為が及ぶ時に、逆向態マーカ―が動詞に付くということである¹⁰⁾。

また、V-V 型のテクル文があらわす事象は移動に関する事象であり、V-v(I)型は基本的には他動的事象である。2つの型があらわす事象はあらわす内容の質が大きく異なる。ただし、テクル形式には共通して求心的なダイクシスの機能が保持されており、ここではV-V 型については移動表現におけるダイクシスの観点から、V-v(I)型についてはヴォイス的な（行為の起こりとその展開の在り方に関する）ダイクシスの観点から、テクル付与の義務性および嫌悪性について考察する。

まずは、テクル付与の義務性について見ていこう。

[1] 主体移動動詞

まず、V-V 型のテクル文で前項に主体移動動詞がくる場合について見てみよう。

- (71) a. * 太郎が私に近づいた。
b. 太郎が私に近づいてきた。
(72) a. * 太郎が二階から（私のいる）リビングへ降りた。
b. 太郎が二階から（私のいる）リビングへ降りてきた。
(73) a. * 太郎が（私のいる）部室へ入った。
b. 太郎が（私のいる）部室へ入ってきた。

例文(71)、(72)、(73)を見てもわかるように、前項動詞に主体移動動詞がくる V-V 型のテクル文では、テクル形式を用いて複合動詞としてあらわさなければ、据わりの悪い不自然な日本語となってしまう。

[2] 対象移動動詞

次に、V-v(I)型のテクル文で前項に対象移動動詞がくる場合について見てみよう。

¹⁰⁾ 牧野 (1996) では、この「ウチと捉える人」と「ソトと捉える人」を「ウチ人称」、「ソト人称」という用語を用いて説明している。「ウチ人称」とは、話し手が話し手が発話時に心理的に自分のウチの人だと認知している人のことであり、「ソト人称」とは、話し手が発話時に心理的に自分のソトの人だと認知している人のことであるとされている。日本語において人称・有生性のハイアラーキーが関連する現象を説明する上では、この概念を用いることが最も適当であると考えられる。

- (74) a. * 実家の母が僕にみかんを送った。
 b. 実家の母が僕にみかんを送ってきた。
- (75) a. ??太郎が僕にボールを投げた。
 b. 太郎が僕にボールを投げってきた。
- (76) a. ??花子が僕にプレゼントを渡した。
 b. 花子が僕にプレゼントを渡してきた。

例文(74)、(75)、(76)のように前項に対象移動動詞がくる場合も、上と同様、テクル形式を用いて複合動詞としてあらわさなければ、据わりの悪い不自然な日本語になってしまう。

このように、主体移動動詞、対象移動動詞が用いられる場合は、テクル形式を付与することが義務づけられていると見ていいようである。

[3] 非明示的移動動詞

では、V-v(I)型のテクル文で前項に非明示的移動動詞がくる場合はどうであろうか。

- (77) a. ? 男が僕をにらんだ。
 b. 男が僕をにらんできた。
- (78) a. 後ろの車がクラクションを鳴らした。
 b. 後ろの車がクラクションを鳴らしてきた。
- (79) a. ? 学生が私に挨拶した。
 b. 学生が私に挨拶してきた。
- (80) a. 太郎が僕を殴った。
 b. 太郎が僕を殴ってきた。
- (81) a. 隣の人が私の手を触った。
 b. 隣の人が私の手を触ってきた。

例文(77)、(78)、(79)は、動作主（主体）の行為によって視線や音、あるいは発話を含む言表内容など抽象的なものが移動する例である。例文(80)、(81)については、一見すると（狭義の）行為動詞に分類できそうな例であるが、「後ろから殴ってきた」「横から手を触ってきた」のように表現できることから非明示的移動動詞に分類する。これらの例のように非明示的移動動詞が前項にくる場合は、[1]、[2]の場合とは様子が異なっている。この種の動詞については、多少不自然な感覚を覚える例もあるが、上の[1]と[2]の動詞群に比べると、テクル形式を付与しなくても自然に言える例も多く、必ずしもテクルの付与が義務的であるとはいいきれない。

[4] 行為動詞

次に、移動を含まない一般の(狭義の)行為動詞が前項にくる場合はどうであろうか。

- (82) a. (価格競争をしている) 向かいのスーパーが商品を値下げした。
b. (価格競争をしている) 向かいのスーパーが商品を値下げしてきた。
- (83) a. 巨人がピッチャーを代えた。
b. 巨人がピッチャーを代えてきた。
- (84) a. (合唱コンクールで) ライバル校は自由曲に静かな曲を選んだ。
b. (合唱コンクールで) ライバル校は自由曲に静かな曲を選んできた。

例文(82)から(84)に見られるような行為動詞が主動詞となる場合、特に義務的にテクル形式を付与する必要はなく。テクルを付与していない a の例文はそれぞれ自然な文と認められる。

次にテクル文に見られる「嫌悪性」について考察する。本研究で言う「嫌悪性」とは「受動表現に見られるような被害とまではいかないものの、それに準ずる心理的、精神的なストレス、圧迫感」を指す。このテクルの「嫌悪性」については、古賀(2008)等でも指摘されていた。上にあげた例文(71)から(87)までを見ていくと、「嫌悪性」の発生には前項動詞の種類ごとにある程度の傾向が窺える。

何らかの物質の移動をあらわす主体移動動詞、対称移動動詞が前項にくる例文(71)から(76)のテクル文においては、特に嫌悪の意味は生じていない。次に例文(77)から(79)の非明示的移動動詞が前項にくるテクル文を見ると、(79b)のように嫌悪の意味を感じない用例も存在するが、(77b)、(78b)、(80b)、(81b)のように嫌悪の意味が生じている例も数多く見られる。次に例文(82)から(84)の行為動詞について見ていくと、これについても嫌悪の意味(心理的、精神的なストレス、圧迫感を含む)が生じていると言える。

以上のことを踏まえ、この逆向態用法のテクル文に見られる「テクル付与の義務性」と「嫌悪性」については、次のような一般化ができる。

【テクル付与の義務性と嫌悪性との関係】

テクルの付与が義務的である場合は嫌悪の意味は生じにくい、テクルの付与が任意である場合は主動詞にテクルが付与されると嫌悪の意味が生じやすい

テクル付与の選択が自由であるということは、逆に言うとテクル形式を付与する動機が必要である。そして、その動機がまさにこの「嫌悪性」という意味・機能なのではないだろうか。つまり、話者がこれらの意味を言語として表現したいと思った場合に機能

的要請に従って動詞にテクルを付与して表現することになるのである。

ここで、上の例文で生じている「嫌悪性」について再度考えてみよう。例えば、例文(77a)や(80a)は、テクルが付与されていない文であるが、この文のあらわす命題がもともとネガティブな内容であるため、この嫌悪性を生じさせているのが本当にテクル形式によるものなのかと疑問に思われるかもしれない。また、使用される動詞の意味や文脈によっては当然のことながらこの嫌悪性という特徴が薄れる、あるいは全く出てこないということもあるだろう。例えば、次の例はどうであろうか。

- (85) a. 後ろの男が彼女のスカートの中を覗いた。
- b. 後ろの男が彼女のスカートの中を覗いてきた。
- (86) a. 小さな女の子が彼女のスカートの中を覗いた。
- b. 小さな女の子が彼女のスカートの中を覗いてきた。

例文(85)、(86)は同じ「覗く」という動詞を用いているが、(85)の方はもともとネガティブな文脈であるのに対し、(85)の動作主を「後ろの男」から「小さな女の子」に代えた(86)の方はそうではない。(86b)のテクル文が表す事態(命題)から直感的に感じられる嫌悪性はかなり薄れてしまう。そのため、このテクル文の「嫌悪性」という特徴は「スカートの中を覗く」という事態に対する一般常識から生じる「嫌悪」であって、テクル形式によってもたらされるものではないのではないかという疑問があっても不思議ではない。しかし、筆者はあくまで「嫌悪性」はテクル形式によって生じる意味・機能だと主張する。

- (87) a. 太郎が(私の)手を触った。
- b. 太郎が(私の)手を触ってきた。

例えば、例文(87)の述部があらわす「手を触る」という行為は、イメージ的に中立的と言える。しかしながら、(87a)と(87b)を比較すると明らかにテクル文の(87b)の方に嫌悪性が感じられる。つまり、例文(87b)から感じられる嫌悪性は、テクル形式が動詞に付与されることによってもたらされたものであると考えられるのである。

また「嫌悪性」については、他にもさらに注目すべき点がある。上の例文(85a)は、目の前で起こった事態を話者が客観的に捉えた言い方であるのに対し、(85b)の文のようにテクル形式を用いた場合は、「彼女」をウチの存在と捉えるため、話者は(85a)よりもその事態内部に入り込んだ言い方になり、直接影響を被る対象がたとえ「彼女」であったとしても、話者も心理的、間接的に影響を受けているという意味が生じ、「後ろの男」の行為に対するある種の嫌悪性が読み取れる。つまり、直接被害を被っている被動

作主以外の受影者を意味的にあらかず間接構造を持っていると言えるのである。

3.3 実況型文脈に見られる驚嘆の意味・機能

次に、テクルの逆向態用法が特殊な文脈で用いられる際に生じる機能について見ていこう。次の例文は、競技性のあるスポーツなどの実況中継において対戦相手国の選手に対してではなく、日本人選手の行為に対して日本人の実況アナウンサーが発する言葉の中に、ときどき聞こえてくる逆向態のテクル文である。

(88) (フィギュアスケートの実況において)

- a. 浅田真央がトリプルアクセルを跳んだ。
- b. 浅田真央がトリプルアクセルを跳んできた。

(89) (サッカーの実況において)

- a. 本田圭佑が遠目からシュートを打った。
- b. 本田圭佑が遠目からシュートを打ってきた。

(90) (サッカーの実況において)

- a. 香川真司が角度のないところからゴールを狙った。
- b. 香川真司が角度のないところからゴールを狙ってきた。

上の例文(88b)、(89b)、(90b)は、実況アナウンサーが競技者（動作主）の行為に対して驚嘆し、その驚きを競技を見ている視聴者に伝えるような表現となっている。このような場合のテクル形式の機能は、例文(88a)、(89a)、(90a)のように競技者の行為を客観的事実として捉えるのではなく、実況アナウンサーが主観的に動作主の行為を強調し、驚嘆や賞賛をあらわす機能と言える。

また、この驚嘆の意味・機能が生じるテクル文については、前項動詞の種類に制限がないというのも大きな特徴である。

(91) ウサイン・ボルトが 100 メートルを 9 秒 5 台で走ってきた。

(92) (大食い選手権で) 光貞はきしめん 5 玉を 20 分で食べてきた。

例文(91)の「走ってきた」は、V_m-V 型のテクル文に見られる様態移動をあらわす動詞で、例文(92)の「食べてきた」は、主に V+V 型に見られる行為動詞である。このように、実況型の文脈では前項動詞の種類に関係なく逆向態用法として驚嘆の意味・機能が生じる。

また、この種のテクル文では、動作主の行為によって実質的に影響を受ける対象がある場合（例文(89b)、(90b)）とない場合（例文(88b)、(91)、(92)）がある。しかし、いずれにしてもこのテクル文があらわす事象は間接構造をとり、この時の受影は視聴者へ

の受影を意味する。逆向文があらわす事象の直接構造と間接構造については、第6章で議論する。

3.4 未完了性

テクル文の逆向態用法では、もう1つの特徴が確認できる。それは、テクルがタ形と結合して「テキタ」と表示された場合、受動態のレル・ラレル文の場合とは異なり前項動詞の表す行為は必ずしも完了せず、未完了になる場合があるという特徴である。次の例を見てみよう。

- (93) a. 太郎が僕にぶつかった。
- b. 僕は太郎にぶつかられた。
- c. 太郎が僕にぶつかってきた。
- (94) a. 野良犬が僕に咬みついた。
- b. 僕は野良犬に咬みつかれた。
- c. 野良犬が僕に咬みついてきた。

上の例は、述語の前項動詞が虚構移動動詞でそれぞれ a が能動文、b が受動文、c が逆向文の例である。例文(93a)と(93b)を見ると「太郎が僕にぶつかった」という事態、つまり身体的接触（衝撃）を受けたということを意味に含むが、逆向態の例文(93c)の場合は必ずしも身体的接触があったとは限らない¹¹⁾。また例文(94)についても同様で、(94a)、(94b)のような能動態、受動態の場合は「野良犬が僕に咬みついた」状態、つまり、例えば「野良犬が僕の腕に咬みついて野良犬の牙が腕の皮膚に食い込んでいる」といった状態に至っていると考えられるが、(94c)のようにテクル文で表された場合は、必ずしもそのような状態に至っていると限らないのである。このことは次のテストで確認できる。

- (95) a. * 太郎が僕にぶつかったけど、僕はかろうじてかわした。
- b. * 僕は太郎にぶつかられたけど、かろうじてかわした。
- c. 太郎が僕にぶつかってきたけど、僕はかろうじてかわした。
- (96) a. * 野良犬が僕に咬みついたけど、僕はかろうじてかわした。
- b. * 僕は野良犬に咬みつかれたけど、かろうじてかわした。
- c. 野良犬が僕に咬みついてきたけど、僕はかろうじてかわした。

例文(95)、(96)からもわかるように、能動態や受動態を用いた文では「かろうじてか

¹¹⁾ 身体的接触があった可能性もある。

わした」のように身体的接触がなかったという意味を含んだ文を後続させると不自然な文になってしまうが、逆向態で表すと不自然な文にはならない。このようにテクルの逆向態用法にはタ形と結合して「テキタ」となった場合は、事態における行為が未完了になる場合がある。

それでは、このテクルの持つ未完了性という機能は、どのような場合に生じるのであろうか。上の例文(93)、(94)の主動詞（前項動詞）は、本研究の動詞分類で言えば非明示的移動動詞に分類される動詞であるが、この時、動詞の意味的性質として動作主と被動作主間の接触を語彙的に含んでいる点が重要となる。例えば、次の例にも同様の現象が見られる¹²⁾。

- (97) a. 太郎が僕の足を蹴ってきた。
b. 太郎が僕の足を蹴ってきたが、かろうじてかわした。
c. * 僕は太郎に足を蹴られたが、かろうじてかわした。
- (98) a. 彼女が僕に抱きついてきた。
b. 彼女が僕に抱きついてきたが、冷たくよけた。
c. * 僕は彼女に抱きつかれたが、冷たくよけた。
- (99) a. 太郎が僕の腕をつかんできた。
b. 太郎が僕の腕をつかんできたが、さっとよけた。
c. * 僕は太郎に腕をつかまれたが、さっとよけた。

例文(97)から(99)の前項動詞はいずれも有接触の非明示的移動動詞である。受動態をタ形で表示すると完了をあらわすため、それぞれcの文のように後続する文が前の内容を否定するような文がくると非文になってしまう。一方、テクル形式が付与されたbの例文では、テクルに未完了性の機能があるため、後続する文が前の内容を否定しても自然な文となる。

ただし、同じ非明示的移動動詞が前項にくるテクル文であっても、接触がないような動詞であれば、未完了の意味は生じない。

- (100) a. 後ろの車がクラクションを鳴らしてきた。
b. * 後ろの車がクラクションを鳴らしてきたが、鳴らすことができなかった。
- (101) a. 男が僕をにらんできた。
b. * 男が僕をにらんできたが、にらむことができなかった。

¹²⁾ 有接触を意味する動詞については、古賀（2008）でも本研究と同様の分析がなされている。

それでは、その他の動詞についてはどうであろうか。主体移動動詞から順に見ていくことにする。

- (102) a. 太郎が私に近づいてきた。
b.?? 太郎が私に近づいてきたが、近づけなかった。
(103) a. 太郎が私の部屋に入ってきた。
b.* 太郎が私の部屋に入ってきたが、入れなかった。

例文(102)や(103)のような主体移動動詞が前項にくる場合、例文(102b)、(103b)を見ればわかるように、基本的にテクルは未完了性をあらわさない。ただし、例文(102)については注意が必要である。「近づく」という動詞があらわすのは、「A と B が離れた場所にいたとして、A が移動することで B との距離がだんだん縮まっていく」という意味であるが、例文(102b)が不自然なのは、B が移動をせずじっとしていることを前提として A のその移動行為を否定した場合にそうなのであり、例えば B が A から逃げて同時に別の場所へ移動するような場合は、文脈として十分に成り立つと考えられる。次に対象移動動詞について見てみよう。

- (104) a. 実家の母が荷物を送ってきた。
b.* 実家の母が荷物を送ってきたが、送ることができなかった。
(105) a. ハナコが僕にプレゼントを渡してきた。
b. ハナコが僕にプレゼントを渡してきたが、渡すことができなかった。

対象移動動詞についても、非明示的移動動詞と同様、動詞の意味として動作主と被動作主の接触を含むか否かによって、未完了となるか否かが異なってくる。例文(104)では、「荷物を送る」という述部のあらわす行為は、荷物が母親の手を離れた段階ですでに完了しており、それを否定することはできないため例文(104b)は非文となる。しかし、例文(105)の「渡す」がテクル文の前項にくる場合は、未完了性をあらわすことができる。まず「渡す」という動詞があらわす移動のプロセスを考えてみる。A（渡し手）から B（受け手）へのモノの移動は、基本的には直接的な手渡しであると考えられる。この時、相手にモノ（この場合、プレゼント）を渡す瞬間、A と B との間にはある種の接触が起こる。つまり、この「渡す」という動詞は有接触の動詞に準ずる意味を含んでいるということである。このため(104b)とは異なり、(105b)は自然な文と判断されると考えられる。

次に、行為動詞について見てみよう。ここでは実況型文脈の場合も合わせて見ていくことにする。

- (106) a. 向かいのスーパーが商品を値下げしてきた。
 b.* 向かいのスーパーが商品を値下げしてきたが、値下げできなかった。
- (107) a. ライバル校は自由曲に静かな曲を選んできた。
 b.* ライバル校は自由曲に静かな曲を選んできたが、選べなかった。
- (108) (サッカーの実況において)
 a. 本田圭佑が遠目からシュートを打ってきた。
 b.* 本田圭佑が遠目からシュートを打ってきたが、打てなかった。
- (109) (フィギュアスケートの実況において)
 a. 浅田真央がトリプルアクセルを跳んできた。
 b.# 浅田真央がトリプルアクセルを跳んできたが、跳べなかった。

これまで収集した行為動詞の用例の中には、動作主と被動作主との接触を含意する動詞は含まれておらず、例文(106)から(108)からもわかるように、未完了性が生じるような用例はほとんどない。しかし、例文(109)の例のように、ジャンプはしたものの「トリプルアクセル」という技が成功しなかったという意味での未完了を意味する場合がある点には注意しなければならない。ただし、(109)のような実況においても、ジャンプが成功しなかった場合に「トリプルアクセルを跳んできた」と言えるのかどうかは疑問である。筆者の直感では、実況アナウンサーがジャンプの成功を確認、あるいは確信した場合に「跳んできた」と言う場合が多いのではないかと思われる。

以上をまとめると、テクル形式の未完了性という機能については次のように説明することができる。

【テクル文の未完了性】

前項動詞が非明示的移動動詞、対象移動動詞で、接触、あるいはそれに準ずる意味をあらわす場合にテキタ文が未完了の意味をあらわす

このように「未完了性」というテクルの機能は、逆向態用法のテクル文すべてに生じる機能ではなく、上記のような限定された性質を持つ動詞においてのみ生じる特徴であると言える。

4. 結び

以上、本章ではテクル文のうち V-v(I)型のテクルである逆向態用法に見られる特徴について、V-V 型の求心的移動用法と比較しながら考察した。以下、本章で行った主な分析および考察の結果をまとめる。

まず、本研究ではテクル文の V-V 型（求心的移動用法）と V-v(I)型（逆向態用法）の

分類について、前項動詞の種類に着目し、動作主体の実質的移動の有無によって、次のように定めた。

- ・ V-V 型（求心的移動用法）： 移動動詞＋テクル
主体移動動詞
- ・ V-v(I)型（逆向態用法）： 行為動詞＋テクル
対象移動動詞
非明示的移動動詞
行為動詞

そして、テクル形式が義務的に付与されるか否か、嫌悪性が生じるか否かについては前項動詞の分類ごとに検討し、次の表 2 のような傾向があることが明らかになった。

表 2 テクルの求心的移動用法と逆向態用法の性質

前項動詞の分類	義務性	嫌悪性
主体移動動詞	○	×
対象移動動詞	○	×
非明示的移動動詞	△	△
行為動詞	×	○

まず、前項動詞に主体移動動詞、対象移動動詞がくる場合は、テクル形式が義務的に付与され、嫌悪の意味が生じることはない。次に前項動詞が非明示的移動動詞となる場合は、V-V 型と V-v(I)型の間隔的な性質を持ち、テクル付与の義務性、嫌悪性の発生については、前項動詞の語彙的性質、文脈によってゆれがある。そして、移動の意味を含まない行為動詞が前項にくる場合はテクル付与の義務はないが、ほとんどの場合、テクルが主動詞に付与されると嫌悪の意味が生じることになる。そして、以上をまとめると、次のような一般化ができることを示した。

【テクル付与の義務性と嫌悪性との関係】

テクルの付与が義務的である場合は嫌悪の意味は生じにくい、テクルの付与が任意である場合は主動詞にテクルが付与されると嫌悪の意味が生じやすい

次に、本研究では、逆向態の持つ特徴としてテレビなどの実況といった特殊な文脈で起こる特徴について明らかにした。実況型文脈で起こるテクル文では、動作主の行為を強調し驚嘆や賞賛を意味する機能を引き起こす。ただし、この種のテクル文は、実況型

の文脈であれば、前項にくる動詞の種類には制限がない。これは次のように一般化できる。

【テクル文の驚嘆の意味・機能】

実況型の文脈では前項動詞の種類に関係なく主動詞にテクルを付与することで驚嘆の意味をあらわすことができる

最後に、本章ではテクルがタ形をとり「テキタ」となる場合に未完了性が生じる現象についても考察し、次のような一般化を行った。

【テクル文の未完了性】

前項動詞が非明示的移動動詞、対象移動動詞で、接触、あるいはそれに準ずる意味をあらわす場合にテキタ文が未完了の意味をあらわす

以上の3つの一般化によって示された機能的特徴は、いずれもテクル文の逆向態用法に見られる大きな特徴と言える。

第4章

移動動詞「来る」の文法化

第4章では、主に日本語の移動動詞「来る」がテ形補助動詞のテクルへと意味・機能を変化させていく文法化現象について検討し、その変化のメカニズムについて論じる。

言語の変化は様々な側面で起きる。本章で扱う文法化は言語変化の一種で、日本語に限らず、世界中の言語に見られる現象である。それ故、このテーマについてはこれまで数多くの先行研究で様々な観点から論じられてきた。しかしながら、そのメカニズムの詳細についてはまだまだ不明な点、理論的課題が数多く残されている。本研究では特に現代日本語のテクル形式に焦点を当て、これまでに築き上げられてきた文法化理論に基づき、その意味・機能変化の流れと文法化の度合い、変化の背景にあるメカニズムについて考察することで、理論的貢献を目指す。

1. はじめに

動詞や名詞といった語彙的要素である内容語が、特定の文脈で繰り返し使用されることによって、助詞や助動詞のような文法的な機能を果たす機能語へと変化するプロセスを「文法化 (Grammaticalization)」と言う。近年、この文法化現象に対する関心の高まりから様々な文法形式について、その意味・機能の変化と成立過程に関する記述や、背後にある諸々の要因について考察する論考が増えてきている。日本語においても様々な文法化現象に関する研究が進められているが、その変化のメカニズムについて詳細に記述されたものはそれほど多くはない。日本語のテクル形式の文法化についても同様に、テクル形式がもつ多義性とその意味・機能の変遷課程を詳細に分析した論考はほとんど見られない¹⁾。

Lass (1980) も述べているように、言語の変化は非常に複雑な現象であり、なぜ過去においてその変化が起こったのかを正確に述べる、あるいはもし起こるとすれば、いつその変化が起こるのかを予測するといったことはおそらく不可能である。そこで、本章でテクル形式の文法化現象について論じるにあたっては、その変化の潜在的要因を絶対的なものとしては捉えるのではなく、最もありそうな可能性として捉えているということを予め断っておきたい。このことを前提とした上で、これまでの先行研究によって築き上げられてきたいわゆる文法化理論に基づき、現代日本語のテクル形式の意味・機

¹⁾ テクル用法の意味・機能の派生について詳しく論じた先行研究としては、坂原 (1995) がある。

能変化の流れと文法化を引き起こすメカニズムについて論じていくことにする。

2. 文法化とは

文法化現象では統語上の独立性や語彙的な意味の消失、音韻的な縮小といった現象が見られる。文法化現象に関する理論的説明にうつる前に、まずは諸言語における文法化現象を概観し、文法化がどのような現象であるのかを把握する。

2.1 文法化の具体例

はじめに、英語における文法化の例について見てみよう。次の例文(1)は、Hopper and Traugott (2003) の冒頭で引用されているよく知られた文法化の例である。

- (1) Bill is going to go to college after all.

言語学的に見て、例文(1)の1つ目の *go* は補助動詞的な要素 (auxiliary)、2つ目の *go* は本動詞と分析される。しかし、これらは同音異義語ではなく、補助動詞的な *go* は「近い未来」をあらわす機能を持っていて、この機能は移動動詞 *go* から時代を経て派生してきたものと考えられている。

では、次の3つの例はどうであろうか。

- (2) Bill's gonna go to college after all.
(3) Bill's going to college after all.
(4) * Bill's gonna college after all.

例文(1)と(3)の *going to* は形式的には同じであるが意味・機能は異なる。(1)の *going to* は本動詞 *go* の直示的移動の意味を失い、近い未来をあらわす機能を担っているのに対し、(3)の *going to* は本動詞の意味を保持している。例文(2)の *gonna* は(1)の *going to* が音韻的に短縮した形式であるが、上記の通り移動の意味を失っているため、例文(4)のような文は非文となってしまう。

では次に、意志をあらわす本動詞から未来をあらわすテンスマーカーへと文法化したスワヒリ語の例について見てみよう²⁾。

- (5) a. a- taka ku- ja
 C1: PRES- want INF- come
 'He wants to come.'

²⁾ Heine (2003 : 580) による。

- b. a- taka- ye ku- ja
 C1:FUT-C1:REL INF-come
 ‘He who will come.’
- c. a- ta- ku- ja
 C1:FUT-INF-come
 ‘He will come.’

例文(5a)の「-taka」は「望む」という意味を持つ語彙的な動詞として使用され、(5b)の「-taka-」は関係節中において未来をあらわすマーカーとして、(5c)の「-ta-」は主節の中で未来をあらわすマーカーとして使用されている例である。まず、(5a)から(5b)に至る段階で、本来持っていた語彙的な意味が消失していることがわかる。また Heine (2003) によると、例文(5a)のように動詞「-taka」が語彙的な意味を保持した状態では典型的に有生物が主語に立つが、文法化がすすみ使用範囲が拡大すると、無生物でも主語に立てるようになったとされている。さらに「-taka」は独立語としての性質を失い、(5c)からもわかるように最終的には他の本動詞に付属している。また、「-taka」は音韻的に減少し「-ta-」となり接辞として機能するに至っている。

次に、日本語における文法化現象について見てみよう³⁾。

- (6) a. ものの名前を覚えるのは苦手です。
 b. 君にできないんだもの／もん、ぼくには到底無理だよ。
 c. 一応やってはみたものの、ちゃんとできているかどうか全く自信はない。
 d. すぐにやればいいものを、何をぐずぐずしているんだ。

例文(6)では、(6a)のように本来名詞である「もの」が、例文(6b)では原因・理由をあらわす「～から」に近い意味をあらわす接続助詞として機能している。また、例文(6c)では「の」を後続させ「ものの」という形式で、(6d)では「を」を後続させて「ものを」という形式で、それぞれ「～が／けれども」、「～のに」といった逆接をあらわす機能を担い、接続助詞化している。

以上の例のように、文法化では具体的な意味を持つ内容語から抽象的な概念へと変化し、文法的な機能を有する機能語へと変化していく。文法化による意味・機能の変化は、このような具体から抽象へ、内容から機能へとといった単一の方角へ進む。この一方向性は文法化の特徴のひとつとされている⁴⁾。

³⁾ 例文(6)は靱山 (2002 : 87) による。

⁴⁾ Hopper and Traugott (2003) を参照。

フランスの比較言語学者 Antoine Meillet は、文法化が一旦始まると「語彙項目＞形態素」という流れに沿って変化すると指摘した。しかし、Hopper and Traugott (2003 : 100) では、Meillet の言う文法化の流れは必ずしも正しいとは言えないとして、次のような文法化の流れを示した。

ある特定の文脈で使用される語彙項目 > 統語 (的) > 形態 (的)
(lexical item used in specific linguistic contexts > syntax > morphology)

文法化のプロセスでは、語彙項目が高度に制約された文脈の中で使われることによって統語的、形態的な機能を有するものとして再分析される。文法化を受ける語彙項目は、まず意味的にも一般的なものではない。ある文脈で使用される中でその文脈で必要とされる談話機能を果たすようになり、そして統語的に（構文を形成するなど）固定化され、最終的には語幹や接辞として形態的に融合していくというプロセスを経る。ただし、上記のような文法化のプロセスは、決して絶対的なものではなく、変化の流れの最初から最後まで変化する場合もあれば、途中で変化を止める場合もある。また場合によっては、その流れから外れることもある。

2.2 文法化に見られる現象

次に、文法化に見られる4つの現象について見ていこう。Heine and Kuteva (2002)、Heine (2003) では、文法化に見られる現象として、①脱意味化 (desemanticization)、②使用範囲の拡張 (extension)、③脱カテゴリー化 (deategorialization)、④音韻的減少 (erosion) の4つを挙げている。これらはそれぞれ意味論的、語用論的、形態・統語論的、音韻論的な問題とされ、互いに相関関係にある。

2.2.1 脱意味化

文法化は、語彙的な要素が特定の文脈で繰り返し使われることにより、より文法的な要素へと変化する現象を指すわけだが、意味的な側面からその変化の過程を見ると、その初期段階では語用論的推論による意味変化が起り、その後、元の語彙的な要素が持っていた具体的な意味が失われ、より抽象的で文法的な機能を帯びていく過程が見られる。この最終段階のことを「脱意味化」と呼び、*bleaching* と呼ばれることもある。ただし、この「脱意味化」という用語は、以上のように語彙的な要素がその意味内容を喪失するということに対して用いられることが多いが、ここでは、複数の文法機能を有する言語形式がその機能のいくつかを失ったり、比較的文法性の高い語がさらにより文法的、機能的な言語形式へと変化していく場合にも用いる。

2.2.2 使用範囲の拡張

次に使用範囲の拡張についてである。他の3つの項目が「喪失・減少」といった負の性質を持っているのに対し、この「使用範囲の拡張」は「幅を広げる」という意味で正の性質を持っていると言える。この使用範囲の拡張は語用論的側面が強く、語が使用されるその文脈において、話し手と聞き手が言葉を柔軟に再解釈し、その語が別の性質を帯びて使用されていく過程で、徐々にその幅を広げていくことになる。

2.2.3 脱カテゴリー化

ある言語形式がいったん新たな文法的意味を獲得すると、それは徐々に元のカテゴリーの特徴を失い分岐 (divergent) していく傾向がある。Hopper (1991 : 22) では、脱カテゴリー化について「文法化を経る言語形式は、形態マーカ―や名詞・動詞など主要カテゴリーのもつ統語に関わる特権的特徴を喪失、或は中和させ、形容詞・分詞・前置詞のような次に主要なカテゴリーの属性を帯びる傾向がある」と述べられている。

例文(7)の英語の例を見てみよう。

- (7) a. He stayed there for a while.
- b. While I was sleeping, he had gone out.

英語の *while* という語は古英語の *hwil* に由来する名詞で、現代英語でも例文(7a)のように名詞として使用することはできる。しかし、この語は文法化を経て現在では、(7b)のように接続詞として使用されることが多くなった。接続詞の *while* は形容詞に修飾されたり、文の主語や動詞の項の位置に来たりすることができないが、名詞としての特徴を失っており、逆に接続詞としての特徴を獲得している。

2.2.4 音韻的減少

音韻的減少とは、本章冒頭の例文(1)、(2)において *going to* が *gonna* になったり、*want to* が *wanna* になったりするなど、語と語の境界が音韻的に融合して一語のようになることである。日本語の「～てしまう (-te-simau)」が「～ちゃう (-chau)」となる例もこの音韻的減少の一例と言える。

2.3 文法化のメカニズム

次に文法化のメカニズムについて見ていこう。会話において、話し手が述べる発話内容が、全く誤解されることなく聞き手に伝わるとは限らない。また話し手の発話意図が文の表面的な意味とは別のところにある場合もある。したがって、聞き手は意識的であろうがなかろうが常に相手の発話内容に対して推論をはたらかせながら相手の発話意図を認識しなければならないことになる。文法化は、このような認知能力が基盤となっ

て起こる。以下では、文法化を引き起こす人間の認知能力に基づく再分析と類推、および推論について見ていく。

2.3.1 再分析と類推

再分析 (reanalysis) とは、ある表現形式の構造上のまとまりや組み合わせが、別のそれに変わるような規則の変更のことであり、類推 (analogy) とは、言語システム内において文法規則の適用範囲を拡大していくことを意味する。

「ハンバーガー (=hamburger)」という語について考えてみよう。「ハンバーガー」は、もともとドイツの「ハンブルグ (Hamburg)」から来た食べ物のある品目に対する呼び名で「Hamburg」に接尾辞「er」が付属したものであった。それが「ハム (=Ham)」と「burger」という組み合わせとして解釈されるようになり、さらに、ハムの代わりに「チーズ (=Cheese)」や「ビーフ (=Beef)」と入れ替えることが可能となった。

- (8) [Hamburg]+[er] ⇒ [Ham]+[burger]
[Cheese]+[burger] ⇒ [Cheeseburger]
[Beef]+[burger] ⇒ [Beefburger]

この現象の中で、「[Hamburg]+[er]」という構造が、「[Ham]+[burger]」と解釈されるようになった（規則が変更した）点が再分析であり、その変更された規則（「～バーガー」という構造）をチーズバーガーやビーフバーガーのように、これまで適用されていなかった語にまで適用範囲を拡大した点が類推ということになる。

2.3.2 推論

我々の日常生活には様々な情報が飛び交っているが、それら全ての情報を得ることは不可能である。我々は得られた一部の情報をもとに正しいと想定される知識を形成し、その知識を利用して、可能な事態を想定しながらさらに新しい知識を導こうとする。このような認知活動を推論と呼ぶ。ここでは、文法化において重要な役割を果たす推論について見ていくことにする⁵⁾。

Dahl は、テンス・アスペクトの多くは発話状況から推論される会話の含意が慣習化されることから派生しているという仮説を立て、そのプロセスについて次のように述べている (Dahl (1985 : 11))。

if some condition happens to be fulfilled frequently when a certain category is used, a stronger association may develop between the condition and the category in such a way that the condition comes to be understood as an

⁵⁾ Hopper and Traugott (2003)、大堀 (2002)、辻(編) (2002) を参照。

integral part of the meaning of the category.

(あるカテゴリーが使用される際にある状況が頻繁に起こると、その状況とカテゴリーとの間に強固な結びつきが生まれ、その状況がそのカテゴリーの統合された意味の一部として理解されるようになる。⁶⁾)

英語の時間と因果関係をあらわす *since* を例にこの推論について考えてみよう。

- (9) a. I have done quite a bit of writing since we last got together.
b. Since I have a final exam tomorrow, I won't be able to go out tonight.

例文(9a)では、2つの節がどちらも過去における事態をあらわしており、この場合の *since* は時間をあらわす読みとなる。一方、例文(9b)では前の節が非過去である状態をあらわしており、このような場合は因果関係の読みとなる。

では、次の例文(10)のような場合はどうであろうか。

- (10) Since Susan left him, John has been very miserable.

例文(10)の *since* は、「スーザンが彼のもとを去って以来、ジョンはとてもみじめだ」という時間の解釈と「スーザンが彼のもとを去ったので、ジョンはとてもみじめだ」という因果関係の解釈の2つが可能となり意味的に曖昧である。この例文(10)のような例が特定の文脈で頻繁に使用される中で派生的な意味(この場合は因果関係)が慣習化され、もともとは時間をあらわすだけであった *since* が、因果関係としての機能を担うように変化していったと考えられる⁷⁾。

本研究では、以上のように、ある形態素について文脈上得られる本義とは異なる解釈が頻繁に起こることで慣習化され、その形態素のひとつの意味として確立されていくプロセスを語用論的推論と呼ぶことにする。

文法化によって内容語から機能語へと語の意味・機能が変化する際、推論を導く認知能力の1つとしてメタファーの働きがあることが知られている⁸⁾。メタファーは、類似性に基づく比喩とされ、既存の知識や具体的なものを通して未知のもの、抽象的なものを理解するという機能を持つ。文法化においてメタファーが作用する例としてよくあげられるのは、「空間」から「時間」への変化である。Heine et al (1991) ではメタファ

⁶⁾ 訳は筆者による。

⁷⁾ より詳細な分析、および通時的分析については Hopper and Traugott (2003) を参照のこと。

⁸⁾ Heine et al (1991)、Bybee et al (1994)、Hopper and Traugott (2003) 等を参照。

一の作用によって体の部分をあらわす語から *behind* ような空間的意味を有する語が派生したり（「物体」>「空間」）、さらに *We are behind in paying our bills* といった例に見られるように、空間的意味を有する語から時間的意味を有する語が派生したりする（「空間」>「時間」）現象について議論されている。メタファーが作用する推論は概念的境界を越えるプロセスで、語のあらわす具体的な概念が抽象的な概念へと写像される。以下でも論じるが、V-v(A1)型、V-v(A2)型のテクルは、このようなメタファー的推論による意味・機能の変化と考えられる⁹⁾。

2.4 文法化の基準

大堀（2002、2005）は、文法化が進んだ場合にどうなるかを整理し、以下のように文法化の5つの基準としてこれを提示した。

- 〔1〕 意味の抽象性
- 〔2〕 範列の成立
- 〔3〕 標示の義務性
- 〔4〕 形態素の拘束性
- 〔5〕 文法内での相互作用

まず1つ目の意味の抽象性については、ここまでにあげた用例を見れば特に説明は必要ないであろう。2つ目の範列（パラダイム）とは、代名詞や格助詞のように、一定の文法機能をあらわし、相互に対立する少数のセットのことである。「ます」などは「敬語」という閉じたセットに組み込まれており、「へ」の文法化も「助詞」という範列へ参入した例とされている。3つ目は、特定の形態素による有標のマーカーが、ある機能をあらわすために要求されるということである。4つ目は「内容語から機能語へ」という変化そのものであり、先に提示した文法化の具体例では、どれもこの変化が起きており、文法化される形式がもともと持っていた語彙的性質を失うプロセスと密接に結びついているとされる。最後は、日本語では一致現象があまり見られないため、5つ目の基準が明確に当てはまるケースは少ない。「決して～ない」などのいわゆる否定の呼応現象はこれに当たるとされる。

3. 先行研究

次に、日本語の移動動詞「来る」の文法化について、先行研究がどのような考察を行っているのか、その概要をまとめる。

⁹⁾ この他、メトニミーが作用するプロセスについての議論もあるが、本研究での議論とは直接関係しないため、ここでは深く立ち入らないことにする。メトニミーによるプロセスについては Heine et al (1991)、Hopper and Traugott (2003) 等を参照。

3.1 クルの文法化に対する先行研究の見解

日本語の移動動詞「来る」の文法化については、これまで先行研究においても様々に論じられてきたが、多くの場合、本動詞「来る」から補助動詞テクルへのおおまかな変化の流れを指摘するだけにとどまっているものが多い。

例えば、吉川（1976）では、森田（1968）の考察と自身の考察を対照させながら、次のような例を挙げて移動動詞の補助動詞性について言及している。

- (11) 女中のおいて行った夕かんを読んでいる。
- (12) ヨットが走って行く。
- (13) 早くでばを持って来い。
- (14) 大きなももが流れて来ました。
- (15) 一休みしているうちにねむくなって来た。

吉川（1976）は、主に前項動詞の特徴を基に分析し、上の例文(11)から(15)のうち(11)から(13)のイク・クルは本動詞として、(14)と(15)のクルは補助動詞として働いているとし、特に(15)はアスペクトの機能を有していると指摘している。

次に寺村（1984）は、特にアスペクト的な側面に注目して、次のように文法化した補助動詞テイク・テクルについて述べている。

アスペクト形式としての～テクルは、動詞のテ形と移動の動詞クルとの結びつきが強まって、クルが文法形式化したものであること、他の二次的、三次的アスペクト¹⁰⁾の場合と同じであるが、その中でもとくに、次の～テイクと同様、どのような～テクルを、本動詞＋アスペクトの補助動詞とし、他をそうとしないかが問題になる。これは、より一般的には、述語の並列的な結合の度合いが次第に強くなって、ついには一つの（複合的な）述語になる、という問題であるが・・・

（寺村（1984：156）より）

また、三宅（2005）は多くの用例をあげて様々な日本語の文法化現象について論じているが、その中でテ形補助動詞の例としてテクル文をあげている。

- (16) 彼は待ち合わせ場所に歩いてきた。

¹⁰⁾ 寺村（1984）は、いわゆるル形、タ形といった動詞の活用形を一次的アスペクト形式、テ形に補助動詞が後接する形式を二次的アスペクト形式、動詞の連用形に補助動詞が後接する形式を三次的アスペクト形式としている。

(17) 彼は近ごろ頭髪が薄くなってきた。

(18) 彼はコンビニで雑誌を買ってきた。

例文(16)では、本動詞「来る」が本来持つ項（(16)の場合は着点）である二格「待ち合わせ場所に」が共起しているため、補助動詞とは言っても本動詞としての性質を失っていないことがわかるが、例文(17)ではそのような項が共起しておらず、さらに意味的にも移動の意味からアスペクト的な意味に抽象化しており、ほぼ助動詞化していると述べている。また、さらに例文(18)を挙げ、項としての着点が共起していない上に「コンビニで」は「買う」により認可されたもので「来る」によるものではないことから考えて、例文(18)を(16)と(17)の中間段階にある例と位置づけ、(18)のテクルは(16)よりも本動詞としての性質に欠けるが、一方で移動の意味は多少なりとも残しているため、(17)ほど意味の抽象化は進んでいないと分析している。

このように、日本語のクルの文法化に関する研究は、研究者により視点は様々であるが、考察の対象とする言語現象はほぼ同じであり、また多くの場合、本動詞「来る」から補助動詞テクルへの変化の過程の詳細については論じられていない。

3.2 坂原（1995）

テクルの意味・機能変化について考察した数少ない論考の1つに坂原（1995）がある。ここでは、坂原（1995）の分析の概要について確認する。

坂原（1995）では、動詞のテ形に「来る」がついた「V て来る」には、少なくとも5つの用法が見られるとし、それらを以下のように分類している。

まず第1の用法は、等位構造のテ形接続でVも「来る」も統語的自律性を保持している例文(19)のような「V て来る」とされている。

(19) 太郎が、私の家の火事のニュースを聞いて、来てくれた。

第2の用法は第1の用法の延長上にあり、Vあるいは「来る」の統語的自律性が多少とも制限され、複合動詞化が進んでいるような例である。第2の用法は、従属動詞と「来る」があらわす生起順によって、継起系と同時系の2つの下位クラスにわけられる。従属動詞のあらわす事態が「来る」以前に起きる解釈を継起系（例文(20)）、従属動詞が「来る」と同時進行の行為を指し、「来る」の様態をあらわす解釈を同時系（例文(21)）と呼んでいる。

(20) 太郎が、東京で遊んで来た。

(21) 太郎は、花子を連れて来た。

また、さらに継起系には2つの場合があり、単に V の起こる場所から話し手のいる場所への一方向的移動しかない場合と、クルの移動に先立ち、まず話し手のいる場所から V の起こる場所への移動がある、つまり往復移動をあらわす場合（例文(22a)）とがあるとされている。例えば、次の例文(22a)、(22b)は同じ解釈になる。

- (22) a. パンを買って来る。
- b. パンを買いに行って来る。

第3の用法は、同時系からの発展で、「来る」は文全体あるいは従属動詞が明示的あるいは非明示的に含む移動を強化し、それに方向を与えるようなものとされている。この用法はさらに、従属動詞が移動動詞で主語の移動があるもの（例文(23)）、従属動詞が物品の授与や言葉の伝達などをあらわし、目的語が移動するもの（例文(24)）、「来る」が受益、被害をあらわすもの（例文(25)）の3つの下位クラスにわけられる。ただし、受益、被害が比喩的な授与であることを考慮すれば、2つ目と3つ目のクラスはひとつにまとめても構わないとされている。

- (23) 太郎が帰って来た。
- (24) 太郎が本を送って来た。
- (25) 不況で、親会社が工賃を値切って来た。

第4の用法は、例文(26)のように「来る」が変化の出現をあらわす始動アスペクトをあらわし、さらに実際の空間移動から離れるようなものである。

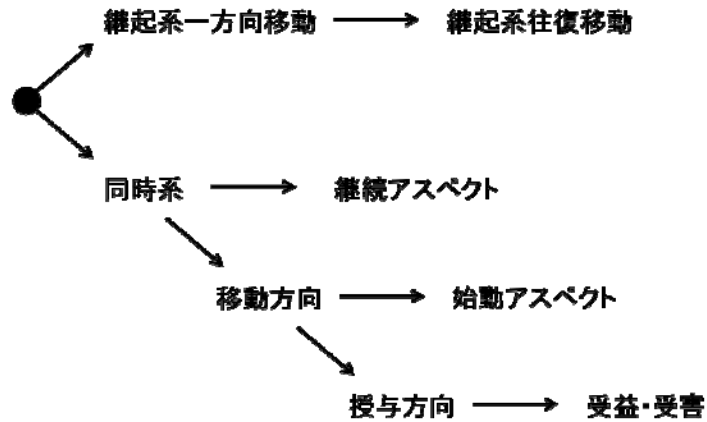
- (26) 空が明るくなって来た。

最後に第5の用法は、例文(27)のように、行為や事件の継続をあらわす継続アスペクトの表示となるものである。

- (27) これまでにも随分努力して来た。

坂原（1995）では複合動詞「V て来る」の用法を以上のように分類し、その派生関係を次のように図示した。

図1 複合動詞「V て来る」の用法の派生関係



以上の文法化理論、先行研究での議論、そして坂原（1995）が提示したテクルの派生関係をもとに、クルの文法化について考察していく。

尚、坂原（1995）と本研究で主張が主張が大きく異なる箇所は、図1の「同時系」から「移動方向」への派生についてであり、また「移動方向」から「授与方向」への派生については、変化の方向性については同意できるが、変化の過程に本研究独自の考察、および説明を加えることにしたい。

4. 考察

まず、本研究におけるテクル用法の分類を再確認した上で先行研究での議論を再検討し、テクルの各用法の派生関係と文法化現象のメカニズムについて考察していく。

4.1 テクル用法の6分類

第2章において分類したテクル用法の6つの型（空間的用法4種、アスペクト用法2種）とその用例は、以下のとおりであった。

【テクルの6用法】

空間的用法

- ・ V+V 型：独立動作
- ・ V_m・V 型：様態・付帯状況を伴う移動
- ・ V-V 型：求心的移動
- ・ V-v(I)型：逆向態

アスペクト用法

- ・ V-v(A1)型：状態・状況変化
- ・ V-v(A2)型：継続

<V+V 型の用例>

- (28) 水曜はレディースデーだから、バイト帰りに映画観てご飯食べて、楽しんできます。
(『AERA』 第 23 巻 50 号 : p.34)
- (29) 今日あの病院の中を見てきたが、それほど悪い環境ではなかった。
(『変身』 : p.308)
- (30) 「東和大学のものです。堂元教授の下で働いています」
準備してきた嘘をいった。
(『変身』 : p.150)

<Vm-V 型の用例>

- (31) 毎朝会社へ歩いてくる。
- (32) 学校へは自転車に乗ってきます。
- (33) 橘さんがポストカードとサインペンを持ってきた。
(『変身』 : p.36)

<V-V 型の用例>

- (34) 兄がうちに帰ってきた。
- (35) 両親が、いつ訪ねてくるかわかりませんからね。
(『変身』 : p.126)
- (36) 太郎が橋を渡ってきた。

<V-v(I)型の用例>

- (37) 野良犬が僕にかみついてきた。
- (38) 「今何ヶ月？」と自分の息子と（私の息子を）明らかに比べてくる主婦。
- (39) ドアを十センチほど開けると、すぐ向こうに富樫の顔があった。にっと笑ってきた。歯が黄色かった。
(『容疑者 X の献身』 : p.23)

<V-v(A1)型の用例>

- (40) アー可笑しいこと。余り笑ったもんだから咽喉が渴いて来た。
(『浮雲』 : p.169)
- (41) 石神は大きく息を吸い、目を見開いた。「湯川学か」二十年以上前の記憶が、みずみずしく蘇ってきた。
(『容疑者 X の献身』 : p.105)
- (42) 車の数が増え、追尾するのが徐々に難しくなってきた。
(『容疑者 X の献身』 : p.222)

<V-v(A2)型の用例>

- (43) 生まれて初めて数字と出会って以来博士が育んできた友好の情が、それぞれの形に反映していた。
(『博士の愛した数式』 : p.98)
- (44) あいつ、今まで努力してきたことがようやく報われたって喜んでたよ。

- (45) 数学は何のために勉強するのか—毎年、誰かがその質問を発する。そのたびに彼は同じようなことを話してきた。 (『容疑者 X の献身』: p.156)

4.2 各用法の文法化の度合い

ここで、上にあげたテクルの6つの用法について、どの型がどの程度文法化が進んでいるのかを考えてみたい。まずはじめに、本動詞「来る」の意味について考えてみる。移動を本義とする「来る」は、次のような3つの素性から成り立っていると考えられる。

「来る」: [move] [aspect] [COME]

クルは移動の意味が本義であり、空間的な移動をあらわす[move]の素性が第一要素となる。また、「移動」とは一般的に空間的な移動のことを意味するが、この「移動」は時間的な幅があってはじめて生じるものである。時間が止まった三次元の世界では移動は起こらない。この時間的な幅に関する素性を[aspect]とする。そして、クルの最も重要な素性としてダイクシスがある。[COME]は英語の *come* をあらわしているのではなく、話者を中心とする求心的なダイクシスの意味を象徴する記号である。

これらの素性を基準に意味的観点から上の7つの型のテクルの意味素性あらわすと次のようになる。

V+V 型: [+move] [+aspect] [COME]

Vm-V 型: [+move] [+aspect] [COME]

V-V 型: [+move] [+aspect] [COME]

V-v(I)型: [-move] [-aspect] [COME]

V-v(A1)型: [-move] [+aspect] [COME]

V-v(A2)型: [-move] [+aspect] [COME]

まず、意味的観点からすると V+V 型、Vm-V 型、V-V 型は本動詞のクルと変わりはなく、文法化はあまり進んでいないと言える。次に文法化が進んでいるのは、アスペクト用法の V-v(A1)型と V-v(A2)型で、これらは[move]の素性が弱化したテクルである。そして最も文法化が進んでいるのが、[move]だけでなく[aspect]の素性も消失した V-v(I)型のテクルということになる。

以上の分析は、主に脱意味化の観点からテクルの文法化の度合いを考えたものであるが、Shibatani (2007) では、本研究でいう V+V 型、Vm-V 型、V-V 型のテクルについて主に脱カテゴリー化の観点から分析し、「Vm-V 型>V-V 型>V+V 型」という序列をつけて文法化の度合いを提示している。本研究でも Shibatani (2007) で提示された文法化の度合いの序列については同意できる。これらのことを合わせて考えると、テク

ル用法の文法化の度合いは次のように提示することができる。

(46) テクル用法の文法化の度合い

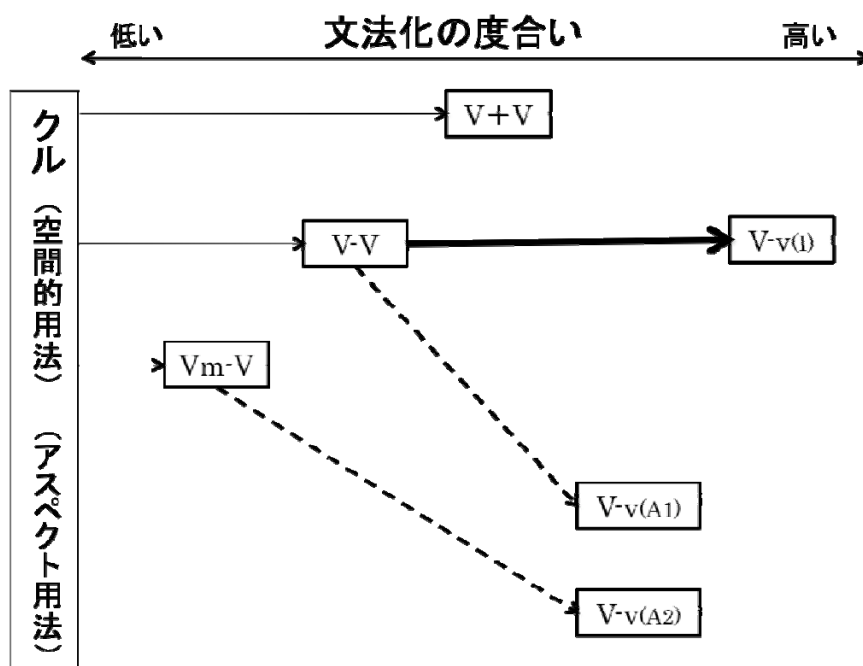
V_m-V 型 > V-V 型 > V+V 型 > V-v(A1)型/V-v(A2)型 > V-v(I)型

では、これらの各用法はどのように派生し、意味・機能を変化させてきたのであろうか。次に坂原（1995）の分析をもとに、テクル用法の新たな派生関係を提示する。

4.3 テクル用法の意味・機能変化

本研究では、テクルの各種用法の意味・機能変化の流れ（派生関係）とその文法化の度合いについて、次の図2のように主張する。

図2 テクル用法の派生関係と文法化の度合い



坂原（1995）による図1の派生関係において、本研究では、まず「継起系一方向移動」と「継起系往復移動」をV+V型にまとめ、「授与方向」と「受益・受害」をV-v(I)型にまとめることにする。以下、この点について説明を加える。

坂原（1995）では、継起系には例文(20)のような「継起系一方向移動」と例文(22a)のような「継起系往復移動」の2種類があるとし、これらをわけて考えた。

(20) 太郎が、東京で遊んで来た。(継起系一方向移動)

(22) a. パンを買って来る。(継起系往復移動)

しかし、次の例文(47)からもわかるように、例文(22a)と同じ「買って来る」という動詞であっても、文脈次第で一方向移動をあらわす場合がある。

(47) 山田: あれ、今日は弁当じゃないんだ。

田中: うん、作るの面倒だったから、今日はコンビニでパン買って来た。

例文(47)の文脈では、「田中」がクルの移動に先立って、今いる場所から「買う」という行為が起こる場所への移動があったことを必ずしも意味しない。つまり、「継起系往復移動」の意味は、その文脈によって生じる V+V 型テクルが持つ含意であり、これをひとつのカテゴリーとして分類する必要はないのではないかと思われる。

次に V-v(I)型についてであるが、これについては坂原(1995: 111)も「受益、被害が、比喩的な授与であることを考慮すれば、第2と第3のクラスは一つに纏めても構わない」¹¹⁾と述べているように、この分類の別については、V-v(I)型としてまとめることに問題はない。

では、本研究が主張する各型の派生について見ていこう。

4.3.1 V+V 型と Vm-V 型の派生

図1において継起系(V+V型)と同時系(Vm-V型)が派生するもとである黒い丸は、本動詞「来る」をあらわしていると考えてよい。ここから、それぞれ別々の方向に派生が生じている。まず、V+V型の派生について考えてみよう。坂原が「継起系」と呼ぶこの型の動詞結合は、なにもテ形補助動詞に限って見られるわけではない。次の例文(48)、(49)、(50)のように他の動詞においてもテ形接続が前項動詞のあらわす事態が起こった後に、後項動詞のあらわす事態が起こるという継起の解釈を引き起こす。

(48) 熱っぽかったので薬を飲んで寝た。

(49) 今日は友達とごはん食べて帰るから。

(50) 学校をさぼってしかられた。

V+V型のテクルも、他の動詞と同様にこの「継起」をあらわす形で社会で頻繁に使用され、次第に前項動詞とテクルとの結びつきが強化された結果、統語的自立性が制限され文法化が進んだと考えられる。

次に、Vm-V型について考えてみよう。Vm-V型についてもV+V型と同じことが言

¹¹⁾ ここで言う第2のクラスは「授与方向」、第3のクラスは「受益・被害」を指す。

える。坂原が「同時系」と呼ぶこの型の動詞結合でも、他の動詞において同じ現象が見られる。

- (51) 子供がお手玉をして遊んでいる。
- (52) 太郎がいびきをかいて寝ている。
- (53) 花子は大学合格を聞いて、飛び上がって喜んだ。

Vm-V 型のテクルも、このような「同時」をあらわす形が頻繁に使用される中で、文法化が進んだものと思われる。

ここで、より一般的な接続助詞「て」の機能性について論じた山口（1980）の分析について紹介する。山口（1980：256）は、接続助詞「て」の最も基本的な意味関係は、2つ（以上）の事態が、空間的にせよ時間的にせよ、ただ並列されているというだけの関係であると見てよいとし、そのような意味関係を「並列性」と呼んだ。そしてさらに、並列性の表現には2つ句の事態に、現実において「時間的に継起する関係の認められるもの」と「空間的に隣接共存する関係の認められるもの」とがあり、前者の関係を「継起性」、後者の関係を「共存性」と呼んだ。ここでの議論においては、V+V 型は「継起性」の関係から生じたもの、Vm-V 型は「共存性」の関係から生じたものと見ることができる¹²⁾。

4.3.2 V-V 型の派生

では、次に V-V 型テクルの派生について考えてみよう。この V-V 型の派生について坂原（1995）は、Vm-V 型（同時系）から派生したものと分析していた。山口（1980）の分析にあったように空間的に隣接共存する関係である「共存性」ということを考えれば、Vm-V 型からの派生ということは十分に考えられることであり、坂原の分析を否定することはできない。しかしここでは別の視点から坂原（1995）とは異なった派生の流れを考えてみたい。

ここまで議論してきたテクルは、現代日本語においてテ形補助動詞と呼ばれる一群のひとつに数えられる形式であるが、このテ形補助動詞群とその他の複合動詞は、形態的にテ形接続をとるか連用形接続をとるかという点で異なりはするが、動詞と動詞が結合するという点においては共通している¹³⁾。そこで、この両者を同じ土台の上で考え、「動詞+動詞」の組み合わせのパターンについて見ていくことにする。

由本（2001）では、日本語の<動詞(V1)+動詞(V2)>型の複合動詞を、2つの動詞の意味関係によって5つに分類している。

¹²⁾ その他、高橋（1994）では、これらを「継起関係」、「共起関係」と呼んで議論している。

¹³⁾ 益岡・田窪（1992：16）では、連用形接続によって動詞と動詞が結合する場合を「連用形複合動詞」、テ形接続によって結合する場合を「テ形複合動詞」と呼んでいる。

①並列関係（2つの類似の行為が平行して起こることをあらわす）

（例）忌み嫌う、耐え忍ぶ、ほめたたえる

②様態（V1はV2があらわす行為の様態を描写する）

（例）遊び暮らす、忍び寄る、すすり泣く

③手段（V1はV2があらわす行為の手段をあらわす）

（例）切り倒す、吸い取る、泣き落とす

④因果関係（V1はV2があらわす結果の原因をあらわす）

（例）待ちくたびれる、歩き疲れる、溺れ死ぬ

⑤補文関係（「V1すること {が/を} V2する」という意味関係）

（例）見逃す、使い果たす、話し終える、書き忘れる

以上のような5つの分類のうち「移動動詞＋移動動詞」の組み合わせである V-V 型のテクルは、特に2つの類似の行為が平行して起こることをあらわす①並列関係のパターンと類似した結合関係にあると思われる¹⁴⁾。上にあげた5つのパターンは、どれからどれが派生したという関係にあるわけではなく、それぞれ独立的で、もともと日本語に備わっていた動詞と動詞の組み合わせの型である。つまり、このことから推測すると、V-V型テクルはV+V型、Vm-V型とは別の派生であり、もともと日本語に備わっていた動詞と動詞の組み合わせパターンのひとつであったという可能性も十分にあり得るのである。

このことから、本研究では V-V 型テクルは Vm-V 型テクルから派生してきたのではなく、V+V型、Vm-V型とは異なる筋で本動詞から派生した型であると考ええる。

4.3.3 V-v(I)型の派生

空間的用法の最後として、V-v(I)型のテクルの文法化による意味・機能変化について考察する。これまでの先行研究でも、この V-v(I)型のテクルは V-V 型と同じグループに位置づけられる傾向が強かった。本研究でも基本的な考え方は先行研究に従うが、ここではより理論的観点から再度この文法化現象について考えてみたい。

V-V 型は主に前項動詞に移動動詞をとるので、その構成を[移動動詞]・[(テ)クル]とあらわすことができる。さらに前項にくる個々の移動動詞固有の語彙的意味を α とすると、V-V 型テクルの前項と後項の意味素性は次のようになる。

V-V 型の意味素性：[move][aspect][α]-[move][aspect][COME]

¹⁴⁾ 何（2010）では、この「並列関係」の組み合わせに「移動動詞＋移動動詞」があるとし、その例として「飛び跳ねる」をあげている。

この V-V 型は通時的観点からしても大変使用頻度の高い型である。そのため、社会の中で頻繁に使用されていくうちに、徐々に前項の移動動詞と後項のテクルに重複する [move] (と [aspect]) の意味素性が消失していったと考えられる。

V-V 型の意味変化： [move][aspect][α]-[move][aspect][COME]
 → [move][aspect][α]-~~[move][aspect]~~[COME]
 → [move][aspect][α]-[COME]

上記の変化により、後項のクルは前項動詞のあらわす意味に対して、直示的（求心的）方向性を付与する機能を担うマーカーへと変化していったと考えられる。そしてその後、類推により前項動詞の使用範囲の拡張が起こり、その結果、現代日本語では移動動詞だけではなく行為動詞も前項にとることができるようになったと考えられる。

(54) 「じょうだんじゃないのよ。あの子を見てると、行末私のつらい荷物になりそうな気がするの。なんとなくそうなの。あんただって仮りにあの子が好きだとして、あの子のことよく見てごらんさい。きっとそう思いになってよ。」と、駒子は島村の肩に手をかけて しなだれて来たが、突然首を振ると、・・・

（『雪国』：p.148）

(55) 「桑田の球威に押され・・・二打席連続三振を喫していますが・・・やはりここは直球で 押してくる でしょうか・・・桑田振りかぶって第一球めを・・・」

（『博士の愛した数式』：p.115）

例文(54)、(55)に見られるテクル形式には移動の意味はなく、また前項動詞が起こる前に求心的移動が含意されているわけでもない。これらの例は事態参与者が互いに関連し合うインターアクティブな他動的事象であり、V-v(I)型テクルのヴォイス機能（逆向態機能）は、このようなインターアクティブな文脈において使用される中で意味・機能が変化していったと考えられる。

4.3.4 V-v(A1)型と V-v(A2)型の派生

テクルのアスペクト用法は、ここまで見てきた空間的用法とは異なり、メタファー的推論により生じた意味・機能の変化であると考えられる。このテクルの意味・機能変化では、特に TIME IS A MOVING OBJECT（時間は移動する物体である）という存在メタファーによって時間が概念化され、未来は私たちが今いる現在（言及時点）へ向かって移動するモノと見なされる。ちなみに、このようなメタファーによる概念化は英語でも見られる現象である¹⁵⁾。

¹⁵⁾ Lakoff and Johnson（1980：41-44）を参照。

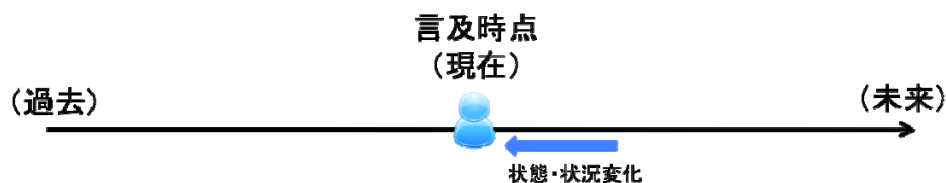
- (56) The time will come when...
 (57) I look forward to the arrival of Christmas.

このようなメタファーが作用し、例文(40)から(42)に見られるような状態・状況変化をあらわすアスペクトの機能が生じたと考えられるわけだが、次のような例文では、空間的移動をあらわす表現で状態・状況の変化をあらわしていることが見てとれる。

- (58) 次第に不快感が増幅し、軽い頭痛が訪れてきた。 (『変身』: p.182)
 (59) 寝ている時間が減り、それに反比例して食欲が戻ってきた。
 (『博士の愛した数式』: p.161)
 (60) そう言われると、いくらか興味が出てきたかもしれない。
 (『1Q84 Book1』: p.247)

例文(58)から(60)の「訪れてきた」「戻ってきた」「出てきた」は、いずれも V-V 型の複合動詞で本来は求心的移動の意味をあらわす動詞である。しかし、これらの文が実際にあらわしているのは、移動の意味ではなく状態の変化である。これは、それぞれの動詞があらわす空間的移動の概念が、下の図 3 のように時間軸上に未来から現在（言及時点）への移動の概念へと写像されることによって生じた現象と考えられる。この場合、移動するのは、上の例で言えば「頭痛」「食欲」「興味」という名詞によって示される主体の状態であり、それぞれ未来における「頭が痛い」「食欲がある」「興味がわく」という状態の在り方が時間軸上を現在（言及時点）の方へ移動することで状態の変化と捉えられるのである。

図 3 アスペクト用法 (V-v(A1)型)



では次に、V-v(A2)型のテクルについて見てみよう。この型のテクルの用法は、様態・付帯状況移動をあらわす空間的用法の V_m-V 型から、V-v(A1)型と同様、メタファー的推論によって図 4 のように時間軸上へと写像されることで、過去から現在にかけて前項動詞のあらわす行為を継続、(あるいは反復)しながら移動するという概念をあらわすことが可能となり、例文(43)、(44)、(45)のようなアスペクト機能を担うに至ったと考

えられる。

図4 アスペクト用法 (V-v(A2)型)



また、この V-v(A2)型についても、次のような例文では空間的移動をあらわす表現を用いて継続をあらわしている中間的な現象が見てとれる。

- (61) セーフハウスでは女たちは日常的にお互いの面倒をみて、自分たちがくぐり抜けてきた体験を語り合い、受けた痛みを分かち合うことが暗黙のうちに奨励されていた。
(『1Q84 Book1』: p.399)
- (62) あれから彼女がどんな人生を歩んできたのか、そして今どんなところにいるのか、どんなことが彼女を喜ばせ、どんなことが彼女を悲しませるのか、それだけでも知りたかった。
(『1Q84 Book2』: p.95)

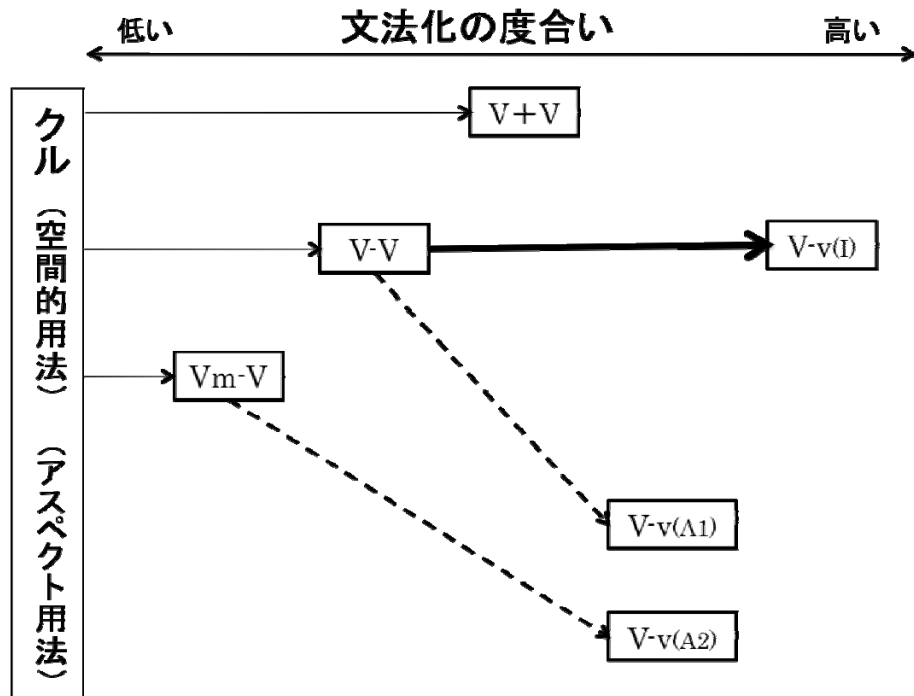
例文(61)、(62)の複合動詞「くぐり抜けてきた」、「歩んできた」は、本来的にはどちらも様態を伴った空間的な移動をあらわすが、これらの文であらわされている移動というのは、テクル文の主体が前項動詞のあらわす行為を過去から現在（言及時点）にかけて繰り返し行ってきたその経験の移動である。そして、その経験が時間軸上を過去から現在へとその跡を残しながら移動することで、継続の意味が生じているのだと考えられる。つまり、これも空間的な移動の表現に対してメタファー的推論が働いて生じた意味・機能であると言える。

以上、坂原（1995）が提示したテクル用法の派生関係を再検討し、本研究で提示した6つの用法の派生とそのメカニズムについてこれまでの先行研究とは異なる新たな可能性を探った。

5. 結び

本章では、日本語の移動動詞「来る」がテ形補助動詞のテクルへと意味・機能を変化させていく文法化現象について検討し、その派生関係と変化のメカニズムについて考察した。本章での議論を整理すると、移動動詞「来る」の文法化現象は図2のようにあらわすことができる。

図2 テクル用法の派生関係と文法化の度合い



まず、横軸の文法化の度合いについてであるが、左側が最も文法化の度合いが低く、統語的、意味的に見て内容語である本動詞「来る」に近いことをあらわしている。そして、右側に行くにつれて徐々に文法化の度合いが高まり、より文法的な機能語へと変化している状態であることをあらわしている。

次に縦軸についてであるが、上方に空間的用法、下方にアスペクト用法の各型を配置した。そして、本動詞「来る」からの派生関係を矢印で表示している。まず、独立動作をあらわす **V+V** 型、様態・付帯状況を伴う移動をあらわす **V_m-V** 型、求心的移動をあらわす **V-V** 型は、本動詞「来る」から前項動詞と後項動詞との結合関係の種類ごとにそれぞれ別々に派生した（細い矢印で表示）。次にメタファー的推論によって空間的用法からアスペクト用法が派生する。**V-V** 型から状態・状況変化をあらわす **V-v(A1)** 型が派生し、**V_m-V** 型から継続をあらわす **V-v(A2)** 型が派生した（点線矢印で表示）。そして最後に、空間的用法内において **V-V** 型から逆向態のヴォイス機能を有する **V-v(I)** 型が派生した。（太い矢印で表示）。

これまでテクルの文法化に関する様々な論考では、接続助詞「て」と移動動詞「来る」が結びついて「来る」の本動詞としての意味が弱化し、アスペクト機能を有するようになったといったように比較的単純に結論付けられることが多かったが、上の図が示すとおり文法化による意味・機能変化の詳細を分析すると、その派生関係はそれほど単純なものではなく、内部では複雑な変化をしていると考えられるのである。

第5章

日本語ヴォイスの機能分布

第5章では、ここまで論じてきた逆向態機能を帯びたテクル形式が、ベネファクティブマーカーとして機能する言語形式（テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウ）や受身マーカーとして機能する言語形式（レル・ラレル）等、他のヴォイス形式とどのような関係性を持ち、また機能面において、どのように役割を分担しているのかを検討する。

これまでの日本語のヴォイスに関する先行研究では、表現形式ごとに詳細に論じられることはあっても、日本語コミュニケーションにおいてヴォイス全体がどのように機能し、そしてどのように使い分けられているかといった観点から体系的に論じられることはほとんどなかった。そこで本章では、日本語コミュニケーションの中でも特にインターアクティブな他動的事象において、各ヴォイスマーカーが互いに関連性を持ちながら機能面において体系性をなしていることを示す。また、これらのヴォイスマーカーが全体として「主に話者（受影者）が他者に対して当該事態への自らの心的態度（中立的な評価・ポジティブな評価・ネガティブな評価）を示す¹⁾」という機能を持っていることも合わせて論じる。

1. はじめに

日本語コミュニケーションにおける多くの場合、話者はただ単に論理的事実をそのまま相手に伝えるのではなく、ヴォイス形式の持つ機能的特徴をうまく利用し、話者本人と聞き手との関係性にに基づき視点を様々に変えながら、論理的事実に自らの（その当該事態に対する）心的態度を重ねて円滑なコミュニケーションを図っている。例えば、次の例文(1)から(3)があらわす論理的事実は全て同じであるが、聞き手の感じ方、受け取り方はそれぞれ異なる。

- (1) 山田が私にクイズの答えを教えた。
- (2) a. 私は山田にクイズの答えを教えられた。

¹⁾ 本研究の目的の1つが日本語教育への応用可能性を探ることにあるため、本研究では「受影者」（心理的影響を受ける対象）という概念に、現実場面においてより使用頻度が高いと思われる「1人称話者」を当てて議論を進める。また、受動態（レル・ラレル文、テモラウ文）においては「受影者」という概念を用いるよりも「主語」と言った方が説明としてはより正確であると言えるが、主に逆向態を含めたより広い視野から議論を行う関係で、以下では、「受影者」という概念を用いることにする。

- b. 私は山田にクイズの答えを教えてもらった。
- (3) a. 山田が私にクイズの答えを教えてきた。
- b. 山田が私にクイズの答えを教えてくれた。

例文(1)は能動文の例で、動作主の「山田」が被動作主の「私」に「クイズの答えを教える」という行為を行ったという、当該事態を客観的に述べている文である。次に例文(2)を見ると、(2a)は動詞にレル・ラレル形式が、(2b)ではテモラウ形式が付属している。(1)の能動文と比較すると、両例文ともに動作主「山田」は降格して主語から斜格目的語となり、被動作主（受影者）である「私」が昇格して主語となっている。次に例文(3)を見ると、(3a)ではテクル形式が、(3b)ではテクレル形式が動詞に付属しているが、例文(2)の場合とは異なり、動作主、被動作主ともに例文(1)と格表示が同じであり、文は構造的に変化していない。このように、例文(2a)と(2b)、例文(3a)と(3b)は、それぞれ文構造について共通性を有するが、その一方で「受影者が動作主、あるいは動作主の引き起こす事態に対してどのような心的態度を表現しているか」という点で大きく異なる。例えば、例文(2a)と(3a)では、話者（私）の動作主の行為に対するネガティブな心的態度（評価）が感じられるであろうが、逆に例文(2b)、(3b)からはポジティブな心的態度が感じられるであろう。またさらに、例文(2a)、(3a)間におけるネガティブに感じる度合い、例文(2b)、(3b)間におけるポジティブに感じる度合いもそれぞれ異なるのではないだろうか。

このように、同じ論理的事実を表す文であっても、それぞれの文から感じられる文意は微妙に異なってくる。これは日本語ヴォイスの形態的、統語的、意味・機能的、語用論的性質の違いにより生じたものである。そこで本章では、数ある日本語のヴォイスの中でも特に日本語コミュニケーションにおいて主に話し手の感情を聞き手に伝える機能を有する「受動態」、「逆向態」に焦点を当て、レル・ラレル形式、テイク形式、テクル形式、そしてベネファクティブマーカ―となる各形式(テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウ)の構造的、機能的関連性について論じる。

2. 先行研究

本章の目的は、これまで日本語についてはあまり論じられてこなかった逆向態という概念を取り入れることではじめて見えてくる日本語ヴォイスの体系性を明らかにすることにある。逆向態という概念を取り入れることで、能動・順向態、逆向態、受動態という連続性を有するヴォイス体系を設定することが可能となり、さらにその体系の中でレル・ラレル文、テイク文、テクル文、テヤル文／テアゲル文、テクレル文、テモラウ文の機能的な棲み分けを位置づけることができるのである。

しかしながら、現在まで各ヴォイスのつながりに関する論考がまったくなかったわけで

はない。ここでは、ヴォイスのつながり、関係性について論じた先行研究をいくつか紹介したい。

2.1 山田（2004）の考察

まず、体系性に関して本研究とは異なる分析をしている山田（2004）について見てみよう。山田（2004）は主にベネファクティブの体系性について論じたものであるが、本研究で提示するヴォイスの体系性とは異なり、ヴォイスというカテゴリーの中だけで論じるのではなく、「方向性」という新たな文法カテゴリーを設定して分析している。

本研究で取り上げるベネファクティブという用語で括られる形式は、序章で見たとおり3系列7形式である。待遇的変異形は今おくとしても3系列を持つということは、能動-受動という対立に代表されるヴォイスや過去-非過去として表されるテンスといった文法カテゴリーが2項対立によるものであることと比較すると相対的に複雑である。

この複雑さは、いうまでもなく2つの要因が十字分類として掛け合わされた結果生じるものである。その2つとは、動作の仕手側・受け手側のどちらを主語にするかといういわばヴォイス的な要因と、話者自身もしくはそれに近い人という話者側の人が主語になるかそれとも斜格目的語になるかというという話者視点からの方向性と呼べる要因である。（山田（2004：15）より）

山田（2004）では、以上のようにベネファクティブを「2つの文法カテゴリーの複合形式群」と見なし、体系の複雑さを説明している。

確かに「方向性」という概念は逆向態とも深く関係する概念ではあるが、この概念は、人称、数、テンス・アスペクト、ヴォイス、モダリティといった他の文法カテゴリーのように言語学において広く認められている文法カテゴリーではない。また、「方向性」という概念は、本研究で扱っている「逆向態」という概念に含めることが可能であり、受動態と同じヴォイスという文法カテゴリーとして捉えれば、体系性をよりシンプルに説明できるだけでなく、汎言語的な広い視点から日本語の特徴を他の多くの言語と比較して位置づけることが可能になる。以上のことを踏まえ、本研究では山田（2004）が「2つの文法カテゴリーの複合形式群」と分析する言語現象は、ヴォイスという1つの文法カテゴリー内において分析すべき現象であるという立場に立って、議論を進めていくことにする。

2.2 テクルとテクレルの関連性

次に、古賀（2008）の分析を参照する。古賀（2008：255）では、日本語の順向範疇（動詞の無標形とテヤル）と逆向範疇（テクルとテクレル）を次の表1のようにまとめ

ている²⁾。

表1 日本語の順向範疇と逆向範疇

	順向範疇	逆向範疇
中立	動詞の無標形	てくる
受害	てやる	
受益		てくれる

古賀（2008）は、日本語には人称の階層によってその選択が決定される授受動詞が存在するとし、ヤルを語彙的順向形、クレルを語彙的逆向形と考えた（例文(4a, b)）。そして、テクルを使った逆向構文とテクレルを使った逆向構文の違いは例文(5)、(6)の容認度の違いから分析している。

- (4) a. 僕はハナコにボールを投げ {てやった／*てくれた}。
b. ハナコは僕にボールを投げ {*てやった／てくれた}。
(5) 知りたくもないのに、突然ケンは私に電話番号を {教えてきた／??教えてくれた}。
(6) 頼んだら、ケンは私に電話番号を {?教えてきた／教えてくれた}。

テクルを使った逆向構文の事象は、典型的に話者が予期していなかったものであり、そのため悪い影響を被ることが多く、テクレルを使った逆向構文の事象は常に話者に肯定的な影響を及ぼすものであるとされている。両構文の違いが、受ける影響が否定的なものであるのか肯定的なものであるのかと見る点においては同意できる。しかし、テクル文の事象だけが「話者が予期していなかったもの」であるわけではない。

- (7) a. 驚いたことに、太郎がアパートに来てくれた。
b.* 驚いたことに、太郎にアパートに来てもらった。
(8) a. 頼みもしないのに、太郎がアパートに来てくれた。
b.* 頼みもしないのに、太郎にアパートに来てもらった。

例文(7a)、(8a)はテクレル文、例文(7b)、(8b)はテモラウ文の例である³⁾。これらの例からもわかるように、「驚いたことに」や「頼みもしないのに」という表現はテクレル文とは共起できても、テモラウ文とは共起できない。テクレル文があらわしているのは、動作主である「太郎」が話者のために自らの判断で「アパートに来る」という行為を行

²⁾ 本研究で「順向」「逆向」と表記するものを、古賀（2008）では「順行」「逆行」と表記している。

³⁾ 高見・久野（2002：295）を参照。

ったということであり、受益者である話者は動作主の「太郎」に対して何の働きかけもしていない、つまり話者が太郎の行動を予期（期待）していたとは考えられない。一方、テモラウ文が「驚いたことに」や「頼みもしないのに」という表現と共起できないということから考えて、この構文では主語である話者が動作主の「太郎」に働きかけて彼の行為を引き起こさせたり、あるいはその行為や事象が起こることを期待していて、その行為や事象が実際に起こった結果、利益を得たということをあらわしていると言える。このようにテクレル文においても「話者が予期していなかった」ことが含意される場合があるのである。

次に順向範疇について見てみよう。

(9) 朝早く、太郎に電話を {した／してやった／*していった}。

順向範疇については、無標の動詞をとる文は話者の主観的態度に関して中立的であり、テイクは順向標識として機能しないため、逆向範疇に見られるような機能領域の棲み分けが順向範疇には存在せず、テヤルが二重の機能を果たすと分析している。例文(9)に見られるように、テヤル文では「太郎に頼まれたので朝早く電話した」という受益の解釈と、「いたずらで太郎に朝早く電話した」という被害の解釈があるとしている。

2.3 レル・ラレルとテモラウの関連性

テモラウは、他のヴォイスマーカーとは異なり、受動態としての特徴と使役態としての特徴をあわせ持つ形式である。結論から述べると、本研究ではテモラウ形式を受動態マーカーと見なして議論を進めるのであるが、ここでは、その理由について述べておきたい。まずは、テモラウを受動態（レル・ラレル）と捉えた論考について見てみよう。

寺村（1982）では、レル・ラレル文（特に間接受動文）がある事象の被害、迷惑をあらわすのとは逆に、うれしいこと、ありがたいことをあらわす場合には「～シテモラウ」「～シテクレル」という受益の補助動詞を使うと指摘し、次の表2のようにその対応関係をまとめている。

表2 格の立て方と効果

	受益	被害
行為与え手＝ガ格	客ガ来テクレル	
行為受け手＝ガ格 (与え手＝ニ格)	(私ガ)客ニ来テモラウ	(私ガ)客ニ来ラレル

- (10) a. 客ガ来タ (中立、客観的叙述)
b. 客ニ来ラレタ (迷惑、被害)

- c. 客ガ来テクレタ (受益)
- d. 客ニ来テモラッタ (受益)

例文(10a)のような中立で客観的に事態を叙述する能動文を、格関係を変えずに受益表現にするには(10c)のようにテクレル形式を用い、(10b)のような迷惑や被害をあらわす受動文を、格関係を変えずに受益表現にするには(10d)のようにテモラウ形式を用いればよいとされている。

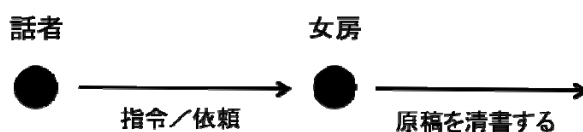
2.4 テモラウと使役

前節で見たように、レル・ラレル文とテモラウ文にはある種の対応関係が見られるが、先行研究の中には、テモラウ文を使役の下位に分類した論考もある。仁田（1992）では、使役を形態的観点から①単純動詞によるもの（例文(11)、(12)）、②「～（サ）セル」といった接辞をとるもの（例文(13)、(14)、(15a)）、③「～テモラウ」といった補助動詞をとるもの（例文(15b)）の3つに下位分類している。

- (11) 子供が窓ガラスを割った。
- (12) 父が息子を医者に育てた。
- (13) 父は子供を使いに行かせた。
- (14) 男は神戸に向けて車を走らせた。
- (15) a. 女房に原稿を清書させている。
b. 女房に原稿を清書してもらっている。

例文(15a)のセル・サセル文が指令的な使役であるのに対して、(15b)のテモラウ文は依頼的な使役をあらわしており、このテモラウ型の実役では、使役主も実際に動作主も人間であり、生起しうる動詞は意志動詞に限るとされている。このような仁田（1992）の分析は、例文(15)のあらわす一連の出来事の中で各参加者が引き起こした行為の連鎖に注目し、その因果関係の連なりに共通性を見出したものと考えられる。次の図1は、例文(15a)、(15b)のあらわす事象の因果連鎖（causal chain）をあらわしている⁴⁾。

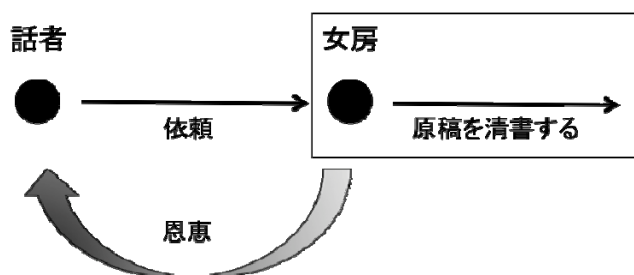
図1 例文(15a)、(15b)の因果連鎖



⁴⁾ Croft（1991）、Croft and Cruse（2004）、Talmy（2000）、大堀（2002）を参照。

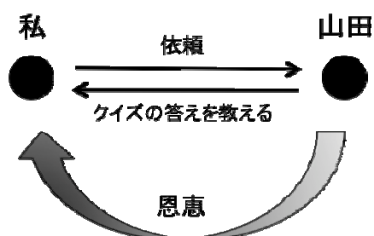
例文(15a)と(15b)の違いは、話者から「女房」への働きかけ（指令であるか依頼であるか）の違いにあり、上の図からもわかるように、両文は因果連鎖においては共通性を持っている。しかし、例文(15b)のテモラウ文においては下の図2が示すようにさらに「女房」の「原稿を清書する」という行為によって話者が恩恵を受けているという受影の意味が加わる。

図2 例文(15b)の因果連鎖と受影関係



ここで、例文(2b)のテモラウ文（「私は山田にクイズの答えを教えてもらった」）についても、上記と同様に考えてみよう。

図3 例文(2b)の因果連鎖と受影関係



テモラウ文には、例文(2b)（図3）のように、動作主の行為が被動作主（受影者）に向かい同時に恩恵も受けるといった受動態と同じ構図をとるものがある。これだけを見れば、テモラウ文を受動態と捉えることに何の問題もないように思われるが、その一方で、例文(15b)（図2）のように動作主の行為が受影者に向かわないテモラウ文も存在する。これらの例文は、「因果連鎖」と「受影関係」という2つの側面を持っている。仁田（1992）では、受影者からの「依頼」によって動作主が行動するという事態内における因果の連なりを重視してテモラウ文を使役の下位に分類し、動作主の行為によって生じる影響（恩恵）については、使役の問題からは切り離している。

本章で提示するヴォイスの機能分布は、事態内の因果連鎖ではなく、むしろ受影関係

に基づくパラダイムであるため、本研究では特にテモラウ形式の受影者が恩恵を受けることをあらかず機能を重視し、テモラウ文を受動態と見なして分析することにする。

3. 日本語のヴォイス

本節では、ここまでの議論を踏まえ、日本語の受動態と能動態、逆向態と順向態について整理し、各ヴォイス形式の特徴を規定する。ただし、本章での議論の目的はインターアクティブな事態における各ヴォイスの機能的な棲み分けを明らかにすることにあるため、以下の議論で分析の対象とするのは、「1人称 > ウチ人称 > ソト人称」というハイアラキーの下位から上位へと行為がなされる他動的な事象に限定する。

3.1 受動態と能動態

まず、通言語的に見てもヴォイス研究の中心テーマとされる受動態、能動態について、その形態的、統語的、意味・機能的特徴について考察する。

3.1.1 受動態とレル・ラレル文

日本語の受動文については古くから数多くの論考がある⁵⁾。ここでは、主に比較的広い範囲の受動文を分類した益岡（1991）を参考に、特に相互行為を表す事態に関する「受影受動文」と呼ばれる類のものを扱う⁶⁾。具体的には、以下の例がそれに当たる。

- (4) a. 太郎が私をなぐった。
b. 私は太郎になぐられた。
- (5) a. 泥棒が太郎の財布を盗んだ。
b. 太郎は泥棒に財布を盗まれた。
- (6) 私は昨日一晩中子供に泣かれた。

まず例文(4a)は、典型的な他動詞文である。そして、この他動詞文の動詞「なぐる」にレル・ラレル形式がついて動作主である「太郎」が主語の位置から降格し、代わりに被動作主である「私」が主語の位置に来ることで、(4b)のような受動文ができる。この時、(4a)はその受動文に対応する能動文とされる。さらに例文(5)を見ると、(5a)に見られるように、ノ格要素で目的語「財布」の持ち主である「太郎」が、(5b)のように受動文の主語に立つことができる。例文(6)の受動文は、対応する能動文を持たない。その

⁵⁾ 松下（1930）、三上（1953）、鈴木（1972）、益岡（1991）、益岡・田窪（1992）、柴谷（2000）等。

⁶⁾ 益岡（1991）は、まず特定の時空間に生起・存在する事象を表現する事象叙述の受動文を「事象叙述受動文」、ある対象の性質や特徴を表現する属性叙述の受動文を「属性叙述受動文」と呼んで分類した。そしてさらに、事象叙述受動文のうちある出来事から主体が何らかの影響を受ける事態を表す文を「受影受動文」、動作主の背景化が受動化の動機となる文を「降格受動文」とした。

ため外部要素が、受動文の主語になっている。以上の例(4b)、(5b)、(6)の受動文は、それぞれ相互行為を表す事態であり⁷⁾、さらに牧野(1996)の用語を借りると、その事態内における動詞の表す行為は、ソト人称からウチ人称へとなされている⁸⁾。さらにこれらの例では全て被害⁹⁾の意味が生じている。しかし、受動文には、次の例文(7)、(8)に見られるように、被害の意味が生じない中立的な心的態度を表す例もある。

- (7) a. 鈴木先生が太郎を呼んだ。
b. 太郎が鈴木先生に呼ばれた。
- (8) a. 先生が太郎の絵をほめた。
b. 太郎は先生に絵をほめられた。

以上のことを踏まえると、レル・ラレル文(受動態)は、①形態的、②統語的、③意味・機能的性質から、次のようにまとめることができる。

(9) レル・ラレル文(受動態)

- ① 動詞にレル・ラレルが付与される
- ② 文構造が変わる
- ③ a. 事態における行為はソト人称からウチ人称へと向かうことをあらわす
b. 中立、あるいはネガティブな心的態度を表示する

3.1.2 能動態

次は、能動態についてである。上の(9)の3つの観点から能動態を分析すると、まず、動詞には特別なヴォイスマーカーはつかないので、形態的には無標である。また、本来「能動態」とは、受動態が構造変化する前の対応する他動詞文のことを指すため、当然のことながら文の構造に変化はない。そして、他動詞文は基本的に客観的事実を描写する。そのためウチからソトへ、或いはソトからウチへという当該事態における行為の方向性に関する主観的な判断は任意となる。また、能動態において生じる話者の心的態度について考えると、直感的に「(4)なぐる」「(5)盗む」「(6)泣く」等の動詞はネガティブな感情、「(7)呼ぶ」は中立的、「(8)ほめる」はポジティブな感情と捉えることができるであろう。しかしながら、これらは各動詞の意味や、またその動詞が使用される文脈により判断は様々である。以上のことから(9)と同様に、能動態については、次のようにまとめることができる。

7) それぞれ、鈴木(1972)の「直接対象の受身」、「持ち主の受身」、「第三者の受身」に相当する。

8) ウチ人称、ソト人称については、第1章を参照。

9) 受動文の「迷惑」「被害」に関する論考としては、柴谷(1997)の分析を参照。

(10) 能動態

- ① 動詞にヴォイスマーカーは付与されない
- ② 文構造は変わらない
- ③ a. 事態における行為の方向性は任意
- b. ネガティブ、中立、ポジティブの各心的態度は、動詞の意味、文脈による

受動態、能動態に関する形態的、統語的、意味・機能的性質をまとめると以上のようなになる。

3.2 逆向態と順向態

次に逆向態と順向態の特徴について見ていこう。逆向態とテクル文については、第1章から第4章で既に議論したため、ここでその詳細について繰り返すことはしない。

3.2.1 逆向態とテクル文

第3章でも述べたが、近年、日本語のテクル文を逆向態用法と認める先行研究が増えてきている。Nariyama (2000)をはじめ、Shibatani (2003)、住田 (2006)、古賀 (2008) 等がある。逆向態という概念をどのように捉えるか、また日本語における逆向態をどのように考えるかは論者によって異なるが、本研究では、第1章の結びでも提示した通り、形態的、統語的、意味・機能的観点から以下のように規定し、特にテクル文については移動の意味が消失したものを逆向態と見なすことにする。

(11) 日本語における逆向態

形態的側面

ベネファクティブの場合はテクレル形式が義務的に、それ以外の場合はテクル形式が任意で、動詞に有標のマーカーとして付与される

統語的側面

動詞に有標マーカーが付与されても、もとの文構造に影響を及ぼさない

意味・機能的側面

ソト（の動作主）からウチ（の被動作主）へと動詞のあらわす行為がなされることをあらわし、動作主の行為により影響を受けた者（受影者）の話題性を高め、かつ動作主にもある程度の話題性を保持させる

テクル文には様々な用法があるが、主体の移動が生じない逆向態用法の例としては、次のようなものがあげられる。

(12) 山田が僕に話しかけてきた。

- (13) その娘も母親の隣で私に頭を下げてきた。
- (14) ハナコが僕を見てにこやかに手を振ってきた。
- (15) 隣の人が（私の）手を触ってきた。
- (16) 後ろの車がしつこくクラクションを鳴らしてくる。
- (17) 僕を見て女子高生がゲラゲラ笑ってきた。
- (18) その老婦人は、「いいですから」と断ってもしきりに席を譲ってくるので、仕方なく僕はその席に座った。

以上の例文(12)から(18)は、すべてソト人称からウチ人称（上記の例はすべて1人称）へと下線部の述部があらわす何らかの行為がなされている事態である。テクル形式のもとである本動詞「来る」が心的に中立であることからわかるように、テクル文は例文(12)から(14)のように、基本的にはプラスでもマイナスでもない中立的な心的態度をあらわす。しかしながら、例文(15)から(18)においても見られるように、住田（2006）が「嫌悪性」と呼ぶようなネガティブな意味を持って使用される場合もある。このようにテクルの逆向態用法においても、レル・ラレル文と同じように中立的な心的態度とネガティブな心的態度の両方をあらわす場合がある。

以上のことから、テクル文（逆向態）については、①形態論的、②統語論的、③意味・機能的性質の3項目について、以下のようにまとめることができる。

(19) テクル文（逆向態）

- ① 動詞にテクルが付与される
- ② 文構造は変わらない
- ③ a. 事態における行為はソト人称からウチ人称へと向かうことをあらわす
b. 中立、あるいはネガティブな心的態度を表示する

次に、テクル文の逆向態用法に対応するテイク文の順向態用法について見てみよう。

3.2.2 順向態とテイク文

受動態に対応するヴォイスに能動態があるように、逆向態に対応するヴォイスには順向態がある。テクル文の逆向態の用例ほど数多くはないが、テイク文にもこの順向態として機能していると見られる例が数例ある。ただし、この場合、ネガティブなニュアンスが生じるか否かの判断には、人により差があるため、ここでは中立的な心的態度をとるとする立場を取る。以下は、順向態の例である¹⁰⁾。

¹⁰⁾ 例文(20)はインターネット検索より引用。

- (20) 初めは別の子と帰っていたら、A 君と出会い、前に試合をして負けたのが悔しかったのか、いきなり息子ウルフのサッカーチームの悪口を言ってきたらしい。それで、言い合いになり、息子ウルフから殴っていったとの事。
- (21) でもふかえりが、たとえどんな理由があるにせよ意図的に父親を死に追い込んでいったとは、僕にも思えません。おそらく父親は彼女とは関係なく、何らかの理由によって死に向かっていたのではないのでしょうか。

(『1Q84 Book3』: p.367)

日本語の順向態は、ウチ人称の動作主がソト人称の被動作主に何らかの動作・行為を行うという事態を主観的に述べる場合に、文構造を変えずに順向態マーカー（テイク）がつく。しかし、テクルの逆向態用法に比べるとテイクの順向態用法は非常に用例数が少なく、現在、文法化の中途段階にあると考えられる。

以上をまとめると、テイク文（順向態）については、①形態的、②統語的、③意味・機能的性質の3項目について、以下のようなことが言える。

(22) テイク文（順向態）

- ① 動詞にテイクが付与される
- ② 文構造は変わらない
- ③ a. 事態における行為はウチ人称からソト人称へと向かうことをあらわす
b. 中立な心的態度を表示する

ここまで、レル・ラレル文、他動詞文、テクル文、テイク文を取り上げ、受動態と能動態、逆向態と順向態という4つのヴォイスについて概観してきた。次に、ベネファクティブに見られる3つのヴォイスについても上記と同様の規定を行う。

4. ベネファクティブ

次に恩恵の授受に関する表現、つまり、動詞に後接するテヤル／テアゲル、テクレル、テモラウの3系列4形式について取り上げる。これらベネファクティブについては、既に数多くの先行研究がある¹¹⁾。本章では各ヴォイス形式が持つ機能性が互いにどのような関係にあるかを明らかにすることを目的としているため、それぞれの形式を共通の視点をもって整理するにとどめ、ベネファクティブに関する言語現象の詳細については、ここであらためて論じることはいない。

¹¹⁾ 鈴木（1972）、久野（1978）、奥津（1983, 1986）、Shibatani（1994, 1996）、高見・久野（2002）、山田（2004）など。

4.1 ベネファクティブとヴォイス

テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウは、本動詞「やる／あげる、くれる、もらう」が動詞に「テ形」の形で後続し、それが文法化したものと見られ、基本的に恩恵の授受を表す形式とされている。またこれらは、前節で論じたレル・ラレル、テクル形式と同様、動詞に有標のマーカ―として付属し、生産性も非常に高い。次の例を見てみよう。

- (23) a. 太郎が花子にお金を貸してやった／貸してあげた。
b. 太郎が花子にお金を貸してくれた。
c. 花子が太郎にお金を貸してもらった。
(24) a. 僕は弟の宿題を見てやった／見てあげた。
b. 兄が（僕の）宿題を見てくれた。
c. 僕は兄に宿題を見てもらった。

例文(23)の3つの文は、動作主の「太郎」が行為の受け手である（行為の影響を被る受影者でもある）「花子」に「お金を貸し」という命題内容において本質的には変わらない。しかし、それぞれの文は視点の置き方が異なり、またそこに含まれるニュアンスにも差が生じている。例文(23a)では、視点は動作主である太郎側に置かれている。例文(23b)では、参与者の意味役割と格関係は同じであるが、視点は被動作主（／受影者）側に置かれている。例文(23c)になると、文構造が変わる。被動作主（／受影者）がガ格で、動作主がニ格で表示され、視点は被動作主（／受影者）側に置かれている。例文(23b)と(23c)は視点の置き方は同じであるが、(23b)が単に「太郎が花子にお金を貸した」ということを恩恵的に捉えられるのに対し、(23c)の場合は、「花子が太郎にお願いをして、太郎からお金を借りた」というニュアンスが生じるという違いがある。

次に例文(24)を見てみよう。例文(23)では、事態参与者がどちらも3人称であったが、例文(24)では1人称と3人称となっている。そのため、例文(24a)と(24b)および(24c)の間で命題内容に違いを設ける必要性が生じている。例文(24a)の事態参与者は「僕（兄）」と「弟」、例文(24b)、(24c)は「僕（弟）」と「兄」となっている。これは「宿題を見る」という述部のあらわす行為内容が、一般的に年上の動作主から年下の被動作主へとされる行為であるためである。また、ここで例文(23)と(24)の a、b の文（テヤル／テアゲル文、テクレル文）に注目すると、例文(23)では被動作主（／受影者）はニ格で表示されているが、例文(24)ではノ格であらわされている。この他にも被動作主（／受影者）はヲ格やト格、付加詞の「～ノタメニ」を伴ってあらわされることもある。

- (25) 先生が僕をほめてくれた。
(26) 僕は弟と遊んでやった。
(27) 今日は太郎の誕生日だったので僕たちは太郎のために歌を歌ってあげた。

このように被動作主（／受影者）は様々な格であらわされる。被動作主をどの格で表示するかは基本的に個々の動詞によって決まっているが、次の例文(28)のような違いも見られる。

- (28) a. ワトソンさんが私にダンスを踊ってくれた。
- b. ワトソンさんが私とダンスを踊ってくれた。
- c. ワトソンさんが私のためにダンスを踊ってくれた。

例文(28a)は、動作主の「ワトソンさん」が「私に見せるためにダンスを踊った」という意味をあらわし、(28b)の方は「私と一緒にダンスを踊った」という意味をあらわす。例文(28c)については、(28a)、(28b)のどちらの解釈も可能となり、意味的にあいまいであると言える。

また、以上で見てきたベネファクティブの補助動詞用法は、本動詞用法におけるモノの授受が他動詞であるのに対して、次の例文(29)、(30)に見られるように前接する動詞に自動詞が来ることができる。

- (29) 私は田中さんに自宅へ来てもらった。
- (30) 彼はみんなのために死んでくれたのだ。

ここまで見てきた例文からもわかるように、日本語のベネファクティブの補助動詞「テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウ」の各形式は、一般的には話者の相手に対する恩恵的な、ポジティブな心的態度をあらわす際に用いられる。しかし、これらの各形式は非恩恵的な表現として使われる場合もある。そこで、次に先行研究¹²⁾を参考にしながら非恩恵型ベネファクティブについて考察する。

4.2 非恩恵型ベネファクティブ

通常、ベネファクティブの形式は恩恵をあらわすのが基本的な機能であるが、時として好ましくない意味をあらわす場合もある。

4.2.1 非恩恵型テヤル

まずは、非恩恵型テヤルについて見ていこう。テヤル形式は恩恵をあらわす機能ではなく、「話者が相手に対するネガティブな意図を持って動作・行為を行う」ということ

¹²⁾ 由井（1997）、庵他（2001）、山田（2004）、日本語記述文法研究会（編）（2009）など。

をあらわす機能もある¹³⁾。

- (31) たまっていた愚痴を夫に言ってやった。
- (32) お前の勉強を邪魔してやる。
- (33) お前が花瓶を割ったこと、先生に言いつけてやる。

以上、例文(31)、(32)、(33)の3つの例からは、すべて恩恵の意味は感じられない。動作主である話者は、自らの意志で相手に対して個々の動詞句のあらわす行為を行っているが、その行為はどれも相手にとって恩恵とは言えないネガティブなものである。ただし、文脈が曖昧な場合は、同じ文であってもネガティブな意味だけではなく、ポジティブな意味もあり得るということである。次の例を見てみよう。

- (34) 助さん、格さん、懲らしめてやりなさい。

この例文(34)は、言わずと知れた『水戸黄門』の名台詞である。この文では、聞き手、立場によって、複数の解釈が可能である。例えば、懲らしめられる側の人間からすると、その後に起こる事態は明らかに恩恵的なものではないであろうし、一方、水戸黄門側からすれば、相手の悪事を正し、良い方向に導いてあげようという意図があると読み取ることができる。このようなテヤル文では、文脈、立場によって恩恵的な表現とも、非恩恵的な表現とも捉えることが可能となる。

4.2.2 非恩恵型テクレル

テクレル形式についても、非恩恵的な表現があるとされている。由井（1997）でも指摘されているが、大江（1977）は、次のような非恩恵的なテクル文を「恩恵ではないことを恩恵で表す皮肉用法」として説明している。

- (35) よくも恥をかかせてくれたな。
- (36) あいつがとんでもないミスをしてくれたよ。

本研究でも、このようなテクル文は、テクル形式が非恩恵的な意味を持っているというよりも皮肉として使用されているものと考ええる。特に例文(35)については、「よくも〜てくれた」のようにイディオム化していると考えられる。例文(36)は「あいつがミス

¹³⁾ ここでの議論とは直接関係ないが、非恩恵型テヤルには、次の例のように影響を与える相手が想定されない、話者の強い意志をあらわす表現として用いられることもある。

- (例) a. いつか偉くなってやる。
- b. 絶対、大学に合格してやる。

をした」おかげで大きな恩恵（損害）を受けたという言い方で、逆説的に言っているのである。また、このような非恩恵型テクレル文では、終助詞「な」や「ね」を伴うことが多い点にも注目すべきであろう。以上のことから、本研究では例文(35)、(36)のテクレル文に見られるネガティブな意味は、文脈から来る皮肉、テクレル形式が持つ限定された特別な用法と考えることにする。

4.2.3 非恩恵型テモラウ

非恩恵的テモラウとしては、次のような例がある。

- (37) 約束を忘れてもらっては困る。
- (38) 今さら謝ってもらっても許せない。
- (39) マイミク承認してもらったら、メルアドを要求された。

テモラウ形式は、節の中で他の形式を伴った形で使われる場合に、非恩恵的な意味が生じることがある。上の例で言えば、(37)の「テモラッテハ」、(38)の「テモラッテモ」、(39)の「テモラッタラ」のように、テモラウ形式単独ではなく他の形態素と結合する形で使用され、後続する部分には否定的な内容が来ている。逆に、テモラウ形式が単独で使われる場合は、基本的に恩恵の意味が出る。

このようなことから、非恩恵型のテクレル形式と同様、非恩恵型テモラウ形式の場合もかなり限定された特別な用法と言える。

以上の3種類のベネファクティブマーカー（テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウ）は、動詞に有標のマーカーが付属するという形態的特徴、文構造の変化の有無という統語的特徴、そして事態参与者のうち動作主と被動作主のどちらをウチ人称と捉えるのか、また当該事態に対して話者のどのような心的態度をあらわすかという意味・機能的特徴から考えて、各形式は順向態、逆向態、受動態として機能するヴォイスマーカーと捉えることができる。

以下、ベネファクティブの各ヴォイス形式の①形態的、②統語的、③意味・機能的性質の3項目についてまとめる。

(40) テヤル／テアゲル文（順向態）

- ① 動詞にテヤル、あるいはテアゲルが付与される
- ② 文構造は変わらない
- ③ a. 事態における行為はウチ人称からソト人称へと向かうことをあらわす
b. ポジティブ、あるいはネガティブな心的態度を表示する

(41) テクレル文 (逆向態)

- ① 動詞にテクレルが付与される
- ② 文構造は変わらない
- ③ a. 事態における行為はソト人称からウチ人称へと向かうことをあらわす
b. ポジティブな心的態度を表示する

(42) テモラウ文 (受動態)

- ① 動詞にテモラウが付与される
- ② 文構造が変わる
- ③ a. 事態における行為はソト人称からウチ人称へと向かうことをあらわす
b. ポジティブな心的態度を表示する

以上、日本語の各ヴォイス形式について形態的、統語的、意味・機能的特徴に基づき規定した。

5. 日本語ヴォイスと心的態度の関連性

次に、人間関係における感情的側面と日本語ヴォイスとの関係について見ていく。対人感情には、「好き嫌い」、「優越感や劣等感」、「尊敬や恐怖」等、様々な感情があるが、大別するとポジティブな感情とネガティブな感情、つまり、相手に対する好意的な感情（好き）と嫌悪的な感情（嫌い）にわけられるとされている¹⁴⁾。

日本語のヴォイスは、日本語コミュニケーションにおいて当該事態の内へ自らを投影することにより、それらがポジティブな事態なのかネガティブな事態なのかという心的態度を表示するのに利用されており、人間の感情と非常に興味深い関連性がある。以下、日本語ヴォイスの構造とそのメカニズムについて考察していく。

5.1 日本語ヴォイスの構造

前節までの分析を基に、各ヴォイスの文構造を形態的、統語的側面について公式化すると、以下のように表すことができる。

(43) 能動態 : [Ag]–[Pt]–V

順向態 : [Ag]–[Pt/(Aff)]–V+Dm (Dm : テイク、テヤル／テアゲル)

逆向態 : [Ag]–[Pt/(Aff)]–V+Im (Im : テクル、テクレル)

受動態 : [Pt/Aff]–[Ag]–V+Pm (Pm : レル・ラレル、テモラウ)

¹⁴⁾ 齋藤 (2007 : 87) を参照。

まず、記号についてであるが、Ag は動作主 (Agent)、Pt は被動作主 (Patient)、Aff は受影者 (Affected)、V は動詞 (Verb) である。また Dm は順向態マーカー (Direct marker)、Im は逆向態マーカー (Inverse marker)、Pm は受動態マーカー (Passive marker) をあらわしている。

能動態は多くの場合、受動態に対応する態として定義されることが多いが、一般的には「上位 (ウチ人称) の動作主の動作・行為が下位 (ソト人称) の被動作主へと向かう」場合の他動詞文を能動態と考えることもできる。そして、能動態を基準とし、順向態、逆向態、受動態には動詞に有標のヴォイスマーカーが付与され、意味役割として「受影者 (Aff)」が導入される。これは動詞に有標のマーカーがつくことで、話者が事態参与者となり、主観的な述べ方になるためである。例えば、次の例を見てみよう。

- (44) a. 太郎が私を殴った。 (能動態)
- b. 私は太郎に殴られた。 (受動態)
- c. 太郎が私を殴ってきた。 (逆向態)

例文(44)は、全て自然な文である。(44a)の能動文は、「私」という 1 人称代名詞を用いてはいるが、その事態に対して一歩引いた客観的な立場から当該事態を把握するような述べ方である。それに対して例文(44b)と(44c)では、「私」はその事態の当事者として主観的にその事態について述べている。つまり、動詞に有標のヴォイスマーカーがつくということは、主観的な述べ方を導くことにつながっていると言える。

次に受動態と逆向態に注目してみると、(43)の式において受動態では動詞にヴォイスマーカーが付与されるのと平行して、文構造も変化していることがわかる。その一方で、逆向態の文構造は特に変化していない。この違いが、次に述べるように受動態と逆向態における事態参与者の相対的な話題性に違いを生じさせることになる。テクルの逆向態用法には「嫌悪性」、「未完了性」という 2 つの特徴があった。この 2 つの特徴は、事態参与者の相対的な話題性に差が生じることと深く関わっている。日本語の受動態には、「被害受身」や「はた迷惑の受身」といった用語があることからわかるように、「被害性」をあらわすという特徴がある。これと逆向態の「嫌悪性」とを「受影者への影響の度合い」という点で比較すると、両者は同じネガティブな影響ではあるが、受動態で表現する方が、受影者に対するネガティブな影響が強いと感じられる。例えば、「後ろの男が (僕の) 彼女のスカートの中を覗いてきた」のように逆向態を用いるよりも、「僕は後ろの男に彼女のスカートの中を覗かれた」と受動態を用いた方がネガティブな影響は強く感じられる。

次に「未完了性」についてである。第 3 章で論じたように、逆向態用法のテクルがタ形であらわされたテキタ文では、前項動詞が接触、あるいはそれに準ずる意味をあらわ

す場合、未完了となる。その一方で、タ形表示の受動態は必ず事態の完了をあらわす。この点で比較すると、同じタ形表示で必ず行為が完了したことをあらわす受動態の方が、必ずしも完了したことをあらわさない逆向態よりも「受影者への影響の度合い」が大きいと言える。

以上のように、両ヴォイスの「嫌悪性と被害性」、「タ形表示における事態の完了／未完了」という2つの性質の違いから「受影者への影響の度合い」を考えた場合、受動態と逆向態の間には「受動態＞逆向態」という階層が成立つことがわかる。このことは、Givón (1994) の考察を照らし合わせても整合性が保たれている。Givón (1994) では事態参与者の相対的話題性に注目して、主に語用論的観点から4つのヴォイスを定義したわけだが、第1章の表1からもわかる通り、動作・行為を受ける側の話題性は逆向態よりも受動態の方が高いと考えられており、上記の事実は Givón (1994) の定義にも適合するのである。

5.2 日本語ヴォイスのメカニズム

ここまで見てきた4つの日本語ヴォイスは、次の3つの要素によってそのメカニズムを説明できると考えられる。1つ目は「動詞に有標マーカがつくか否か」という要素である。上でも述べたが、動詞に有標のマーカがついた場合は、事態を主観的に捉えたような述べ方になる。2つ目は「有標マーカの求心的な語彙的性質によって、当該事態における動作・行為の方向性を、人称・有生性のハイアラーキーの[上位→下位]から[下位→上位]へと変換できるか否か」という要素である。そして最後は「有標マーカが動詞につくことで文構造に変化を引き起こすか否か」という要素である。これら3つの要素が有機的に連関しながら、動作主と受影者（被動作主）に対する焦点化の度合をコントロールし、事態参与者の相対的な話題性の差を引き起こす原因となっている。以上をまとめると、以下の表3のようになる。

表3 日本語ヴォイスの形態、意味、統語構造と事態参与者の相対的話題性

態 [ヴォイスマーカ]	動詞の 有標性	下位 →上位	文構造の 変化の有無	事態参与者の 相対的話題性
能動態 [Ø (他動詞文)]	－	／	－	動作主 > 受影者
順向態 [テイク、テヤル／テアゲル]	＋	－	－	動作主 > 受影者
逆向態 [テクル、テクレル]	＋	＋	－	動作主 < 受影者
受動態 [レル・ラレル、テモラウ]	＋	＋	＋	動作主 << 受影者

表3を見ると、能動態から受動態に行くにしたがって、3つの項目の+が増加し、事態参加者の相対的な話題性が動作主から受影者へと転換し、さらに受影者の話題性が大きくなっていくことがわかる。このようなシステムは、単に動作主と受影者との相対的な話題性の度合を調整するという機能だけではなく、当該事態に対する話者の「中立的 (Neutral)」、「ネガティブ (Negative)」、「ポジティブ (Positive)」な評価、心的態度をあらわすという重要な役割も担っている。

5.3 日本語ヴォイスの機能分布

当該事態に対して、話者がどのような心的態度をとるかという意味・機能的観点から日本語ヴォイスを分析すると、以下の図4のようにまとめることができる。

図4 日本語ヴォイスの機能分布

機能 ヴォイス	Neutral	Negative	Positive
能動態	○ (他動性動詞)		
順向態	テイク	← ヤル / アゲル	
逆向態	テクル →	← テクレル	
受動態	レル・ラレル →	← テモラウ	

図4を見ると、日本語ヴォイスは中立的、あるいはポジティブな意味に基軸を置きながら、各領域の言語形式が、ネガティブな意味・機能を補完する形で意味拡張していることがわかる。順向態はテヤル形式が、逆向態はテクル形式が、受動態はレル・ラレル形式がそれぞれネガティブな意味を補完するマーカーとしても機能しており（太矢印で表示）、限定的な用法としてテクレル形式、テモラウ形式もネガティブな意味をあらわすことができる（細矢印で表示）。

また、意味・機能拡張の方向について見ていくと、「中立的」から「ネガティブ」へ、或いは「ポジティブ」から「ネガティブ」への拡張はあっても、その逆の方向、つまり「ネガティブ」から「中立」、或は「ネガティブ」から「ポジティブ」への拡張は見られない。これは大変興味深い傾向である。しかし、この傾向を生み出す原因については現段階では解明できていない。この問題は、上記のような意味・機能変化の傾向が言語に普遍的な性質であるのか、あるいは日本語に個別的な性質であるのかを含め、今後より多くの言語のヴォイス現象を詳しく考察した上で、慎重に検討していく必要がある課題である。

6. 社会心理学的観点からの考察

本章の最後に、社会心理学の分野における「態度」研究を少し紹介する。内藤（2007）によると Krech, et al. (1962) は、広範な実証データを基に、態度の構造を明らかにし、次のように概要を述べている。

[1] 態度の対象

対象は、個人の心理的世界に存在しさえすれば、何でもよい。言い換えれば、ある個人が特定の態度をとるかどうかは、その人の心理的世界に対象が存在するか否か、に依存している。

[2] 態度の成分

- ①認知的成分は対象に関するスキーマ(認知的枠組み)や知識、評価的信念からなり、望ましいか望ましくないか、良いか悪いかなどである。
- ②感情的成分は対象に対する情緒に関連しており、快か不快か、好きか嫌いか、として感じられるものである。
- ③行為的成分は態度と結びつく全ての行動的準備態勢を含むものであり、ポジティブな対象には援助したり報酬を与えたり支持するのに対し、ネガティブな対象は害したり罰したり破壊しようとする傾向である。

[3] 各成分の特性

態度の3成分はいずれも次の2つの特性を持つ。

- ①態度には方向だけでなく、好意とか非好意の程度、すなわち誘意度がある。
- ②態度の各成分を構成する要素ないしは領域の数と多様性、すなわち複合度には違いが見られる。

[4] 態度体系の一貫的特性

態度の3成分間で方向性および誘意度については、一貫性が実証的データにより支持されている。

[5] 態度の相互関連性

様々な態度は相互関連性を持つ。

[6] 態度群の協和的特性

態度はいくつかの群を構成しており、それぞれの群で内的な調和が見られるが、その程度は群によって異なる。

以上の分析は、日本語のヴォイスと非常に関連性が深いと思われる。まず日本語のヴォイスを使って、話者がある事態に対する心的態度をあらわす際、話者の心理的世界には必ず自らを投影させる事態、そして相互的影響関係にある相手（動作主）が存在している。

次に「認知的成分」「感情的成分」「行為的成分」の3つの成分について考えてみると、まず世界は常に変化しており同じ事態は二度と起こらない。しかし、次の第6章で示す認知モデルからもわかるように、人は外の世界で起こる様々な事象、事態を共通性の高いスキーマ（認知的枠組み）によって理解し、日本語ヴォイスの各形式は事態の捉え方を段階的に表示する上で重要な役割を果たしている。またそれぞれのヴォイス形式は、当該事態に対する中立的・ポジティブ・ネガティブといった評価を下すことにも関連があり、感情的成分も有している。行為的成分については、ここでは能動的な側面しか示されてはいないが、日本語のヴォイスについて言うならば、むしろ逆に受動的な側面での話者の心的態度を表示することが主な機能と言えるだろう。

また、受動態、逆向態はそれぞれ表示される心的態度の程度に差があり、さらに同じ受動態、同じ逆向態であっても、用いられる動詞の語彙的側面や文脈次第でその受影性や心的態度の程度は様々に異なる。このように日本語ヴォイスは、各々がある一定のまとまりを持った機能を有しながらも、話者が、把握した事態に対してどのような思い、感情を抱いているのかを、柔軟に幅広く表現するために機能している。

相手の行動、行為によって自分がどう感じているか、あるいは自分がどういう気持ちを持って相手に対して行動、行為を行っているかということを、言語によって明示的に示すということは、複雑な人間社会を生き抜く上では、非常に重要な要素になってくる。その意味で、日本語ヴォイスの機能性に関する研究は、円滑な社会生活の実現に向けた非常に意義のある研究であると言えるのである。

以上、日本語ヴォイスと心的態度の関連性、および機能分布について論じた。

7. 結び

本章では、日本語のヴォイス形式が各々の形態的、統語的、意味・機能的性質の違いに基づいて当該事態に対する話者の心的態度を表示する機能を担っているということを示した。

本章で提示した日本語ヴォイスの機能分布は、文法化の議論とも関係がある。まず、図4で示された機能分布は、大堀（2002, 2005）で提案されている文法化の5つの基準の1つ「範列（パラダイム）の成立」に相当する。つまり、テクル形式（逆向態用法）が日本語のヴォイス体系の中で、他のヴォイス形式と機能的役割を違えながらパラダイムに参入していることが示されたこと自体が、文法化が進んでいる1つの証拠となるのである。

また図4を見ると、順向態マーカ、テイク形式の発達が遅れている理由についても理解できる。テイク形式は中立的な意味・機能しかあらわさない。これはテヤル形式が既にネガティブな意味・機能を補完していて、機能的に拡張する必要がないためである。

つまり、機能的な観点からするとテイク形式の機能は能動態（他動詞文）とそれほど変わりがなく、逆向態マーカのテクル形式がネガティブな意味・機能を補完するという重要な役割を担っているのに比べると、意味・機能が拡張する動機が薄いのである。

本章の議論は日本語教育においても有益な知見を提示する。ある言語を用いて当該事態を表現する際、その事態に対して話者がポジティブな感情を持っているのか、ネガティブな感情を持っているのかという言語情報は、円滑な日本語コミュニケーションを実現する上で必要不可欠な情報である。特に、相互作用を伴うコミュニケーション場面では、相手の心情を察した上で次の言語行動を選択しなければ、不要な誤解を生じる危険性もある。ただ単純に事実を伝えるだけの日本語能力であれば、ある一定期間の学習を経れば十分に習得可能であるが、社会生活で生じる様々な事態に対して相手の立場を考えつつ、自分の感情を表現する日本語独特のコミュニケーションスタイルを身につけることは、日本語学習者にとってそれほど容易なことではない。今後は、本研究で得られた知見を日本語教育の現場で実際に活かす方法（教室でのロールプレイや教材製作等）を、より具体的に考えていきたい。

第6章

日本語ヴォイスの事象構造

認知文法 (Cognitive Grammar) は、1980 年代以来 Langacker らの研究を中心に発展した、人間の総合的な認知能力を強く意識した言語観に基づいた言語記述を目指す文法である。本章では第 5 章でその機能分布を体系的に示した日本語のヴォイス (受動態、逆向態) について、認知文法論的な立場から分析し、その認知モデルを構築することによりこれまでの先行研究では見えなかった文法と認知システムとの関連性を解明する。そして日本語におけるヴォイスの意味についても論じる。

まず 1 節では、本章での議論の下敷きとなる理論的枠組みとして、認知モデルを提示する際の主要概念となるイメージスキーマ、意味役割、プロファイルについて説明する。次に 2 節、3 節で日本語の受動態を、第 4 節で逆向態を認知モデルとして提示し、それぞれのヴォイスがあらわす事象の直接構造と間接構造について考察する。最後に 5 節で本章のまとめとして受動態と逆向態の意味について述べる。

1. はじめに

認知言語学では、カテゴリー化、空間認知、イメージ形成などの一般認知能力を言語の基盤的能力であると仮定し、これらの認知能力が複合的に機能することで言語という認知・行動が実現されると考える。

本章では、このような認知言語学の考え方を踏まえ、日本語の受動態と逆向態によってあらわされる事象構造を認知モデル化し、それを用いて受動態と逆向態の直接構造と間接構造について考察する。ここではまず、認知モデルを用いた考察に必要とされる主要な基本概念としてイメージスキーマ、意味役割、プロファイルとベースについて説明する¹⁾。

1.1 イメージスキーマ

まずはじめは「イメージスキーマ (Image Schema)」についてである。イメージスキーマの先駆的研究である Johnson (1987) では、人間が理解したり推理したりできるような有意義で互いが結びつき合う経験を持つためには、行動、知覚、概念作用がパ

¹⁾ 1 節における基本概念の説明は、Langacker (1987, 2008)、大堀 (2002)、河上 (1996)、辻(編) (2002)、松本 (2003) を参照。

ターンと秩序を兼ね備えてなければならないとし、「A schema is a recurrent pattern, shape, and regularity in, or of, these ongoing ordering activities.」(Johnson (1987 : 29)) と述べている。これらのパターンは、主に空間における身体運動、対照の操作、人間の知覚的相互作用のレベルで、意味ある構造を創出すると言う。

また辻(編) (2002 : 13) では、イメージスキーマとは、「種々の身体経験をもとに形成されたイメージを、より高次に抽象化・構造化し、拡張を動機づける規範となるような知識形態」であると述べている。

本研究では、このイメージスキーマという概念をもとに、日本語の受動態と逆向態があらわす個々の言語表現に見られる特徴を高次に抽象化・構造化しインターアクティブな他動的事象において機能するヴォイス (レル・ラレル文とテクル文) の認知モデルを構築する。

1.2 意味役割

意味役割 (semantic role) という語は、ここでは主に述語があらわす動作・行為などにおいて、その述語がとる名詞句が果たす意味的な役割に対して使用する。意味役割は単に名詞句個々の意味をあらわしているのではなく異なる述語が取る名詞句についてその意味的な共通性を抽出したもの、つまり意味的な共通項の集合体と考える。ここでは、主にインターアクティブな他動的事象におけるヴォイス機能を分析するという目的から、一般的にもよく知られている動作主 (agent)、被動作主 (patient)、対象 (theme) の 3 つの意味役割と、本研究の考察において特に重要な役割を果たす受影者 (affected) という意味役割について説明する。

- (1) 太郎が 次郎を 殺した。
動作主 被動作主

まず、例文(1)の「殺す」という動詞は 2 つの名詞句を必要とする。1 つは「殺す」という動作・行為を実行にうつした当人である「太郎」、もう 1 つは「殺す」という動作・行為を受けた側である「次郎」である。この場合、動作・行為の主体である「太郎」を「動作主」、動作・行為の受け手である「次郎」を「被動作主」と考える。では、次の例はどうであろう。

- (2) 花子が 水を 飲んだ。
動作主 対象

例文(1)と同様、例文(2)においても「飲む」という動詞は名詞句を 2 つ必要とする。しかしこの場合、「飲む」という動作・行為の主体である「花子」は「動作主」であり、

この点では(1)と共通であるが、もう 1 つの名詞句「水」は動作・行為を「受けた」とは言い難く、このように動詞のあらわす動作・行為を成立させる上で必要な内的な要素を「対象」と呼ぶことにする。

- (3) 太郎が 花子に プレゼントを あげた。
 動作主 被動作主 対象

では、例文(3)のような 3 項動詞の場合はどうであろうか。「あげる」という動詞は 3 つの名詞句を必要とする。1 つ目は「あげる」という動作・行為を実行する主体である動作主（「太郎」）、2 つ目は行為の受け手で被動作主（「花子」）、そして「あげる」という動作・行為が実現するためには動作主が被動作主に渡すモノ、移動物が必要であり、そのようなもの（この場合「プレゼント」）も対象に含まれる。

以上のことから、本研究における「動作主」、「被動作主」、「対象」という意味役割は、次のように定義することにする。

- (4) 動作主：動詞があらわす動作・行為を意志を持って行う主体
 (多くの場合は人であるが、モノ、組織、自然現象なども含む)
被動作主：動詞があらわす動作・行為によって直接的に影響を受ける主体
 (多くの場合は人であるが、受影者とつながりを持つモノなども含む)
対象：動詞があらわす動作・行為を成立させる上で必要な内的な要素
 (多くの場合はモノであるが、人をモノに見立てることもある)

ただし、これら意味的な概念を定義するに当たって、ここにあげた意味役割の定義が絶対的なものではないということは予め断っておきたい。特に被動作主 (Patient) と対象 (Theme) に関しては、研究者によって考え方が様々に異なる。両者をそれほど区別せずに同じような概念として扱う研究者もいれば、明確に区別して扱う研究者もある。その際、その違いについて言及しているものは少ない。実際のところ、この意味役割という概念は少なからず個別言語の文化的側面が反映されていると考えられるため、それらをひと括りにして扱おうとすれば、当然のことながら無理、矛盾が生じてくることは目に見えている。分析のためのツールであるこの概念について普遍的な定義を求めるが故に、当の研究に使えないものになってしまっただけでは本末転倒である。よって、曖昧に扱わざるを得ない事情があるということを断った上で、本研究ではひとまず(4)のように一応の基準を設けて考察を進めることにする。

本研究における意味役割の定義の特質は、「被動作主」は「人」が中心であり、「対象」は「モノ」が中心であるとしている点にある。実際には、その名詞句が「人」をあらわす名詞句であったとしても、それをモノ的に見る場合であれば「対象」と見なすことも

あるであろうし、逆に「モノ」をあらわす名詞句であっても、それを「人」と見るような場合であれば、「被動作主」と見ることもある。

では、次に「受影者」について見てみよう。「受影者」は日本語のヴォイス、特に受動態と逆向態を分析する上で特に必要とされる意味役割である。次の例を見てみよう。

- (5) 私は 息子を 先生に ほめられた。
受影者 被動作主 動作主
- (6) となりの男が (私の) 娘に 言い寄ってきた。
動作主 受影者 被動作主

例文(5)は受動態の例、例文(6)は逆向態の例である。例文(5)では動作主である「先生」の「ほめる」という動作・行為の直接的な受け手となっているのは、被動作主である「息子」であるが、間接的・心理的には「私」も影響を受けており、このような名詞句を「受影者」と呼ぶことにする。例文(6)では、動作主である「となりの男」の「言い寄る」という動作・行為が被動作主である「娘」に及んでいる。この時、普通はあまり言語表現されはしないが話者であり、「娘」の親である「私」も間接的・心理的に影響を被っていると言え、この場合の「私」も受影者ということになる。以上のことから本研究では「受影者」という意味役割を次のように定義する。

- (7) 受影者：動作主が行った動作・行為によって何らかの（間接的・）心理的影響を受ける人

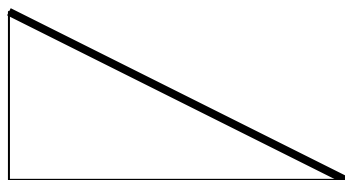
以上、意味役割にはこの他にも一般的に使用されるものがいくつかあるが、本研究ではインターアクティブな他動的現象における言語現象に的を絞って考察するため、以上に挙げた4つの意味役割を中心に議論を進めることにする。

1.3 プロファイルとベース

認知言語学には、知覚心理学の「図」と「地」という概念を基盤とする「プロファイル (profile)」、「ベース (base)」という概念がある。「ベース」は背景的要素で「地」を構成し、「プロファイル」は前景化された「図」に対応する。例えば、次の図1の直角三角形の「斜辺」という語について考えてみよう。「斜辺」という語の意味を記述するには、まず空間という認知領域における形状に注目する必要がある。つまり「斜辺」という語の意味を規定するには、単に1本の直線を想起するだけでは不十分であり、まず直角三角形という3本の直線からなる概念化された形状全体をベースとした上で、さらに90度の角に面する直線を「斜辺」と規定するのである。この時、話者はこの形状全体を心に描き、その部分構造である特定の1本の直線に注目するわけだが、このよう

に特定の部分に注目し、焦点化することを「プロファイルする」と言い、注目、焦点化された部分を「プロファイル」と呼ぶ。

図1 直角三角形の「斜辺」



認知文法では、概念内容が同じであっても捉え方が違えば意味が異なるを考える。その捉え方の違いの1つに「際立ち」というものがある。ある特定の認知領域において背景的要素として機能する「ベース」と、焦点化され、際立ちの大きい「プロファイル」と呼ばれる部分とに分かれることになる。ある事態における2つの事態参加者が共にプロファイルされているという場合、両者の際立ちには違いがある。このような関係において最も際立ちの大きい部分を「トラジェクター (trajector)」と呼び、次に際立ちの大きい部分を「ランドマーク (landmark)」と呼ぶ。

では、次節よりこれらの概念を用いて日本語の受動態と逆向態を認知モデル化し、その事象構造について考察していく。

2. 受動態の先行研究

日本語の受動態、受動文については、これまで数多くの先行研究で様々に論じられてきた。本研究では先行研究における受動文の分析、分類基準を再検討した上で受動表現の認知モデルを構築し、そのモデルをもとにして先行研究を包含する形で受動文の統合的説明を試みる。

ここでは、数ある受動文に関する先行研究の中でも、意味的な観点から分類した松下 (1930)、主に文構造とそれに伴う意味によって分類した三上 (1953)、形態的な観点から分類した鈴木 (1972)、そして、受動表現をそれまでの先行研究以上に広く捉えて考察した益岡 (1991) の4つの先行研究について概観する。

2.1 松下 (1930)

まず、松下 (1930 : 150-161) は、レル・ラレル文のうち受身・可能表現などについて「被動」という文法範疇を立て、その中でも受身表現を特に「実質的被動」と呼んだ。そしてさらにそれを「単純の被動」と「利害の被動」とに分けた。以下は、その対応例である。

- (8) 子どもが犬に噛まれる。 (利害の被動)
 (9) 国旗は高く壇上に掲げられた。 (単純の被動)

利害の被動は「被動の主を一人格として取扱い其れが或るものの動作に由って利害を被る意をあらわす被動」、単純の被動は「利害を被る意味その他特殊の意味の無い被動」とされ、「日本固有の言ひ方ではない。正統の口語には全く用いない。欧文直訳風を混和した文語の口語化にのみ用いられる」とされている。

2.2 三上 (1953)

三上 (1953 : 98-111) は、主に西洋文法との比較から論じ、日本語の受動文を「まともな受身」と「はた迷惑の受身」とに分けた。次の能動文(10a)における主格要素「甲ガ」を「甲ニ」に変え、動詞を受身の形に変えると受動文になるが、その空白になった主格部分を外部から補ったものが例文(10b)である。このような受動文を、例外なく迷惑の感じが伴うものばかりであるので「はた迷惑の受身」と呼び、能動文(10a)のヲ格要素「丙」、ニ格要素「乙」が、空白になった主格部分を補った(10c)(10d)のことを、動詞の意味次第で恩恵にも迷惑にもなり平気なことも起こるが、その迷惑にしてもはた迷惑ではなく真っ向からの被害であることから「まともな受身」と呼んだ。

- (10) a. 甲ガ乙ニ丙ヲ紹介シタ。
 b. 己ガ甲ニ乙ヘ丙ヲ紹介サレタ。
 c. 乙ガ甲ニ丙ヲ紹介サレタ。
 d. 丙ガ甲ニ乙ヘ紹介サレタ。

三上 (1953) は、このようにこの 2 種の受動文の性質に違いを見出し、日本語動詞の自他も受身の成否によって分類することが可能であると主張した。この分類基準は、現代のいわゆる直接受身、間接受身の違いに通じる基準となっている。

2.3 鈴木 (1972)

鈴木 (1972 : 274-284) は、受動文にしたときに対応する能動文のどの格要素が主語になるかという基準によって受動文を「直接対象の受身」「相手の受身」「持ち主の受身」「第三者の受身」の 4 つに分類した。以下、それぞれを具体的に見ていくことにする。

[1] 直接対象の受身

まず直接対象の受身とは、いわゆる能動文の動詞の示す動きの直接対象(「～を」)を主語としてあらわすような受動文のことである。例(11a)(12a)において動詞の直接対象であるヲ格要素は(11b)(12b)ではそれぞれガ格要素となっている。

- (11) a. 二郎がさち子をなぐった。
b. さち子が二郎になぐられた。
(12) a. 大関が横綱を投げ飛ばした。
b. 横綱が大関に投げ飛ばされた。

[2] 相手の受身

相手の受身とは、いわゆる能動文の動詞の示す動きの相手（「～に」）を主語としてあらわすような受動文のことである。

- (13) a. 野良犬が太郎にかみついた。
b. 太郎が野良犬にかみつかれた。
(14) a. 太郎は花子に算数を教えた。
b. 花子は太郎に算数を教えられた。

また例(15)に見られるように、能動文でト格要素だったものが、受動文で主語になる場合もある。

- (15) a. 太郎は花子と絶交した。
b. 花子は太郎から絶交された。

[3] 持ち主の受身

持ち主の受身とは、もとになる動きの対象の持ち主（ノ格要素）を主語としてあらわす受動文である。この場合、もとの文の対象語はそのまま残る。

- (16) a. スリが（太郎の）財布をすった。
b. 太郎がスリに財布をすられた。
(17) a. 先生が（花子の）絵をほめた。
b. 花子が先生に絵をほめられた。
(18) a. 友達が（次郎の）背中をたたいた。
b. 次郎が友達に背中をたたかれた。

[4] 第三者の受身

第三者の受身とは、もとになる動詞によって迷惑を受ける第三者（能動文には登場しない要素）を主語としてあらわす受動文である。

- (19) a. 雨が降った。
b. 僕は雨に降られた。
(20) a. 隣の息子が一晩中レコードをかけた。
b. 私たちは隣の息子に一晩中レコードをかけられた。

以上が、鈴木（1972）による分析である。

2.4 益岡（1991）

益岡（1991）は、まず特定の時空間に生起・存在する事象を表現する事象叙述の受動文を「事象叙述受動文」と呼び、ある対象の性質や特徴を表現する属性叙述の受動文を「属性叙述受動文」と呼んで分類した。そしてさらに、「事象叙述受動文」のうちある出来事から主体が何らかの影響を受ける事態をあらわす文を「受影受動文」、動作主の背景化が受動化の動機となる文を「降格受動文」とした。以下、益岡（1991）による分類を挙げる。

[1] 事象叙述受動文

① 受影受動文

- (21) 私はそのことで親に叱られた。
(22) 太郎は電車の中で隣の人に足を踏まれた。
(23) 花子は子供に泣かれて、よく寝られなかった。
(24) 鈴木さんは部下に突然辞められた。

② 降格受動文

- (25) 答案用紙が回収された。
(26) 会場の近くに臨時の休憩所が作られた。
(27) 代表団が現地に派遣された。

[2] 属性叙述受動文

- (28) 花子の家は高層ビルに囲まれている。
(29) XはYに含まれる。
(30) この商品は多くの人に親しまれている。
(31) 鈴木さんは陶芸家として知られている。

益岡（1991）は、基本的には松下（1930）とそれほど変わるところはない。益岡（1991）では、まず松下氏が扱った言語現象全体を、「事象叙述受動文」と呼び、それをさらに「降格受動文（「単純の被動」に対応）」と「受影受動文（「利害の被動」に対応）」とに

わけた。益岡（1991）で特徴的なのは、ある対象の性質や特徴を表現するものを「属性叙述受動文」と呼んで分類した点である。それらは、先行研究ではほとんど論じられてこなかった言語現象であった。

以上、受動態、受動文を考察する上では欠かせない先行研究を概観した。次節からは以上の先行研究をもとに受動態、受動文の認知モデルについて見ていこう。

3. 受動態の認知モデル

前節で4つの先行研究を概観したが、これらは受身の研究史上どれもが重要である。以下の分析では用法名称の重複を避けるため、ひとまず仮の分類基準として益岡（1991）による分類（受影受動文・降格受動文・属性叙述受動文）と、直接受身・間接受身の区分²⁾をもとに、受動文の事象構造を認知モデル化していくことにする。また、本章において受動態、受動文という場合、レル・ラレル文のことについて述べるものとして議論を進める。

3.1 直接受動文

まず、受影受動文のうち直接受動文に当たるものについて考えていこう。直接受動文とは、対応する能動文を持つ受動文のことを言う。次の例を見てみよう。

- (32) a. 野良犬が私を咬んだ。 (能動文)
b. 私は野良犬に咬まれた。 (受動文)
(33) a. 太郎が次郎をなぐった。 (能動文)
b. 次郎は太郎になぐられた。 (受動文)

上の例文(32b)、(33b)は直接受動文、例文(32a)、(33a)がそれぞれの直接受動文に対応する能動文である。能動文の(32a)、(33a)において目的語であった被動作主の「私」「次郎」は直接受動文(32b)、(33b)では主語になり、本来、主語の位置にあった動作主の「野良犬」「太郎」は斜格目的語になっている。

まず、例文(32)、(33)があらわす事態の核となる動詞に注目してみよう。例文(32)、(33)があらわしているのは、動作主が被動作主に対して動詞（「咬む」「なぐる」）のあらわす行為を行うというインターアクティブな他動的事象であるが、この2つの他動詞が持っている「動作主」「被動作主」という意味役割とそれぞれの動詞があらわす行為の方向性を認知モデルとしてあらわすと次の図1のようになる。

²⁾ 直接受身か間接受身かの区別は、対応する能動文を持つか否かという基準によって区別する。また以下の議論では直接受身と直接受動文、間接受身と間接受動文は同じ意味を表すものとする。

図1 他動詞の認知モデル

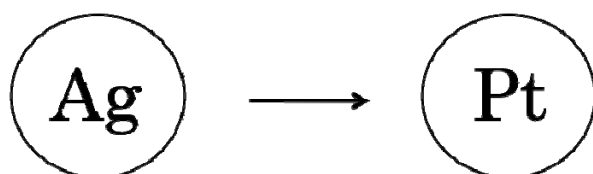


図1において、Agは動作主 (Agent)、Ptは動作主の動作・行為の受け手である被動作主 (Patient) をあらわしており、矢印「→」は「動作主の動作・行為の方向」をあらわしている。このモデルは個々の他動詞があらわす動作・行為と意味役割の関係性を意味するが、実際に文として言語化される場合、能動態や受動態など何らかのヴォイスの形態をとらなければならない。そこで、次に能動態の認知モデルについて考えてみると、能動態の認知モデルは次の図2のようになる。

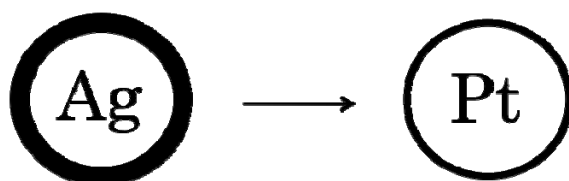
図2 能動態の認知モデル



図2では太さの異なる2つの○がある。図1で表示した意味役割の○を合わせると全部で太さの異なる3種類の○があることになる。○の太さはプロファイルの度合いをあらわしており、最も太い○はトラジェクターとして主語をあらわし、2番目に太い○はランドマークとして目的語をあらわしている³⁾。

そして、動詞の認知モデル (図1) と能動態 (図2) の認知モデルが合成され、次の図3のような能動文の認知モデルができる。

図3 能動文の認知モデル



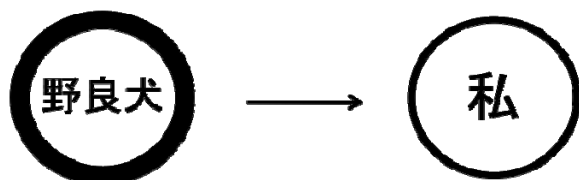
³⁾ 以下の議論では、トラジェクターとランドマークは「tr」「lm」と表示するのではなく、○の太さにより区別することにする。

このように、以下の議論では図2のような態（ヴォイス）の認知モデルと、態と動詞の認知モデルが合成された図3のような文（例えば、能動文）の認知モデルとをわけて考える。

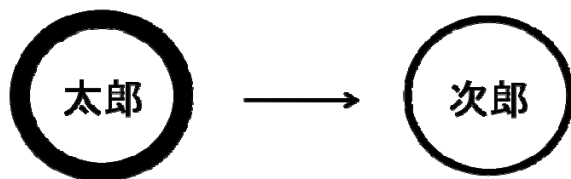
図3のモデルでは、相対的に話題性の高い動作主が、話題性の低い被動作主に対して何らかの動作・行為を行うということがあらわされている⁴⁾。このモデルは、無限に生成される能動文（他動詞文）を抽象化した上位スキーマであり、その下位には個々の具体的な事例が存在する。例えば、具体的に例文(32a)、(33a)の意味役割を代入すると、次の図4のような形で認知モデルに反映されることになる。

図4 例文(32a)、(33a)の認知モデル

(32a)



(33a)



では次に、受動態の認知モデルについて見ていこう。ここで扱う受動態のモデルは受影受動文を想定しており、受影受動文には直接構造と間接構造とがある。直接構造を持つ受動態の認知モデルは次のようにモデル化される。

図5 受動態の認知モデル（直接構造）



まず、能動態のモデルとの違いに注目していくと、プロフィールされる対象が異なっている（左右が入れ替わっている）ことがわかる。最も話題性の高いトラジェクターには

⁴⁾ ただし、この場合の被動作主は動作主に比べて相対的に話題性が低いだけであり、被動作主もある程度の話題性を保持している。

受影者 Aff (Affected) の意味役割が与えられており、ランドマークの要素から影響の方向をあらわす波線矢印が受影者に向かって伸びている。

そして、能動態の場合と同様、動詞の認知モデル（図1）とこれとを合成すると次のような認知モデルが形成される。

図6 直接受動文の認知モデル

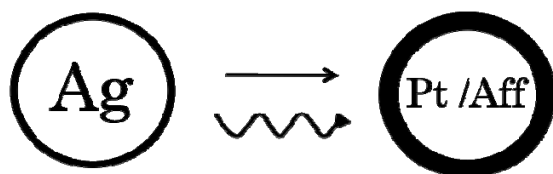
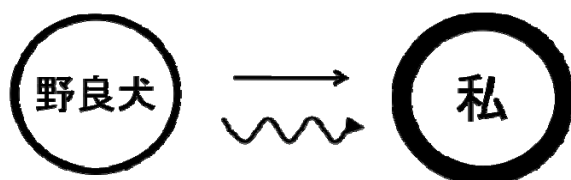


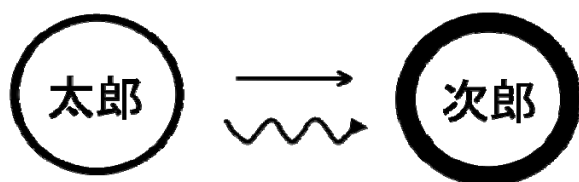
図6の認知モデルは、「ある動作主（Ag）がある被動作主（Pt）に対して何らかの行為を行い、被動作主がその影響を被る」という事態内容をあらわしている。また、これも上の図3と同様、無数の直接受動文を抽象化した上位スキーマである。この認知モデルに例文(32b)、(33b)を代入して表示すると図7のようになる。

図7 例文(32b)、(33b)の認知モデル

(32b)



(33b)



ここで、能動態と受動態の大きな違いについて触れておきたい。能動文である例文(32a)、(33a)は、動作主の「野良犬」「太郎」が「咬む」「なぐる」という動作・行為を被動作主の「私」「次郎」に対して行ったという事態を客観的に述べた文である。一方、受動文である例文(32b)、(33b)では、動作主の動作・行為を被動作主が受けているということだけではなく、さらに被動作主が受影者として、その動作・行為によって何らかの心理的影響を受けているということも合わせて述べられている。つまり、受動態では、受影の方向をあらわす波線矢印と受影者という意味役割があることによって、事態に対

する話者の主観的な見方が反映された述べ方になっているのである。

次に被動作主の格に関する問題についても触れておきたい。ここまでの例では、被動作主は能動文においてヲ格をとっていた。それでは、鈴木（1972）における「相手の受身」のようにニ格をとるものや、ト格をとるものはどのように扱えば良いのであろうか。次の例文を見てみよう。

- (34) a. 学生たちが山田先生を批判した。
b. 山田先生が学生たちに批判された。
(35) a. 部長が私に転勤を命じた。
b. 私は部長に転勤を命じられた。
(36) a. 太郎が花子と絶交した。
b. 花子は太郎に絶交された。

上の例文(34b)は鈴木（1972）でいう「直接対象の受身」、例文(35b)、(36b)は「相手の受身」である。鈴木（1972）では、このように主に被動作主の格によって受動文を分類しているが、受動文の事象構造を考える上では、被動作主の表面的な格形式は意味を成さない。例えば、能動文(34a)、(35a)、(36a)における被動作主の格表示を見てみると、(34a)の被動作主「山田先生」はヲ格、(35a)の被動作主「私」はニ格、(36a)の被動作主「花子」はト格でマークされている。その一方で、例文(34)、(35)、(36)におけるそれぞれの動作主の行為に注目すると、(34)は「批判する」、(35)は「転勤を命じる」、(36)は「絶交する」であり、それぞれの動詞が持つ具体的な意味内容は異なるものの、動作主が被動作主に対して「何かを伝える」という点で共通し、事象構造としては非常に類似しているため、これらの例文は同じモデルであらわすことが可能となる。イメージスキーマというのは、様々な経験を基に形成されたイメージをより高次に抽象化、構造化した知識形態であり、そういった意味では表層的な格表示の違いを予測するような分析には不向きだが、逆に別々の現象に見えるものに共通性を見出すことができるという点で優れている。

また、このように異なる格表示の被動作主を同じ認知モデルを用いて論じることの是非については、日本語と文法的に非常に近い関係にある韓国語との比較からも、有益な示唆が得られる。次の例を見てみよう。

- (37) 철수가 영미를 만났다.
Cholsu-NOM Yongmi-ACC meet-PAST-DC
(チョルスがヨンミに会った)

- (38) 나는 회사원이 되었다.
 I-TOP office worker-NOM become-PAST-DC
 (私は会社員になった)

例文(37)、(38)を見れば明らかなように、同じ意味内容をあらわす場合であっても言語によって動詞が必要とする格は異なる。日本語では同じ二格で表される要素であっても韓国語では日本語のヲ格に相当すると考えられる「을格」で表示されたり、ガ格に相当すると考えられる「가 (이) 格」で表示されたりする。例文(37)は、日本語で言えば「チョルスがヨンミに会った」という意味であるが、韓国語をそのまま直訳するなら「太郎が花子ヲ会った」のような言い方をしていると言える。また例文(38)は、日本語では「私は会社員になった」という意味であるが、韓国語を形式的に直訳するならば「私は会社員ガなった」のような言い方をしていると言える。韓国語のように世界の言語の中で最も日本語と類似点の多い言語であっても、表面的な格表示には違いがあるのである。

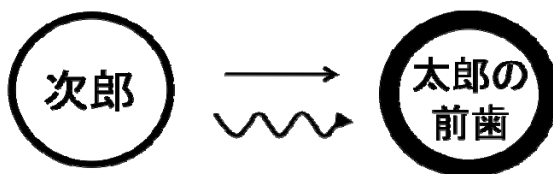
以上のことから、例文(34b)、(35b)、(36b)のような受動文についても図6の認知モデルに反映されると考える。

では次に、下の例文(39)、(40)について考えてみよう。例文(39b)、(40b)はそれぞれの被動作主が「XのY」という形をとっており、その形を保ったまま受動文の主語になっている例である。例文(39b)、(40b)を図6の直接受動文の認知モデルに代入すると、図8のようになる。

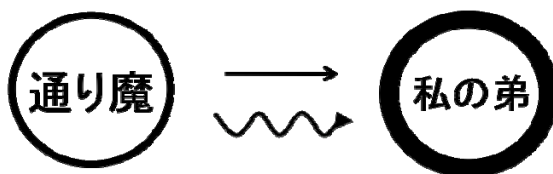
- (39) a. 次郎が太郎の前歯を折った。
 b. 太郎の前歯が次郎に折られた。
 (40) a. 通り魔が私の弟を殺した。
 b. 私の弟が通り魔に殺された。

図8 例文(39b)、(40b)の認知モデル

(39b)



(40b)



ここで重要となるのが、被動作主句の「X の Y」という形である。例文(32b)、(33b)の場合は、図7のモデルからもわかるとおり、受け手である「私」「次郎」は、被動作主であると同時に受影者でもあった。しかし、例文(39b)や(40b)のように受け手が「X の Y」の形をとる場合は、Yが被動作主、Xが受影者となる。この時、被動作主Yにくる名詞は「身体部分、持ち物、親族・知人」などをあらわす名詞である場合が多い。例えば例文(39)では、被動作主の「前歯」はノ格要素「太郎」の身体部分であり、例文(40)では、被動作主の「弟」は「私」の身内である。これらの例では、受影者がノ格で表示されており動詞が必要とする項ではないため、次節でとりあげる間接構造の受動文と比べると、事態を客観的に述べた言い方になり受影者が受ける影響は比較的少ないものを感じる。

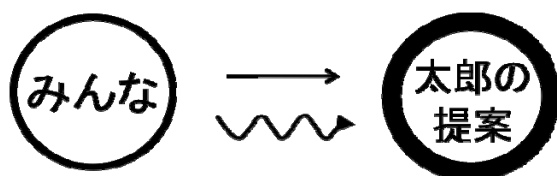
このように「X の Y」が主語となる受動文には、この他にも次の例文(41)や(42)のようにYが漢語名詞で、Xとの結びつきが強い具体的な内容を含意する命題をあらわすものがある。

- (41) a. みんなが太郎の提案を支持した。
 b. 太郎の提案がみんなに支持された。
 (42) a. 太郎が私の将来をめっちゃめっちゃにした。
 b. 私の将来が太郎にめっちゃめっちゃにされた。

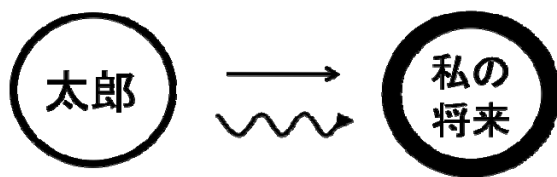
例えば、例文(41)の「提案」、(42)の「将来」という漢語名詞は、「身体部分、持ち物、親族・知人」ではないが、(41b)、(42b)はともに自然な文である。ただし、これらの名詞は必ず具体的な内容を持つものでなければならない。この例文(41b)、(42b)を認知モデルであらわすと次の図9のようになる。

図9 例文(41b)、(42b)の認知モデル

(41b)



(42b)



ここまでが、直接構造を持つ受影受動文に関する分析である。直接受動文では、「動作主の動作・行為が被動作主（受影者）へと向かい、受影者（被動作主）がその影響を受ける」という事象構造内の一連の流れがすべて同じステージ上で起こっており、対応する能動文を持つ。これが直接受動文の大きな特徴の1つと言える。

では次に、間接構造を持つ受影受動文について見ていこう。間接受動文は直接受動文とは異なり対応する能動文を持たないことが大きな特徴と言える。

3.2 間接受動文

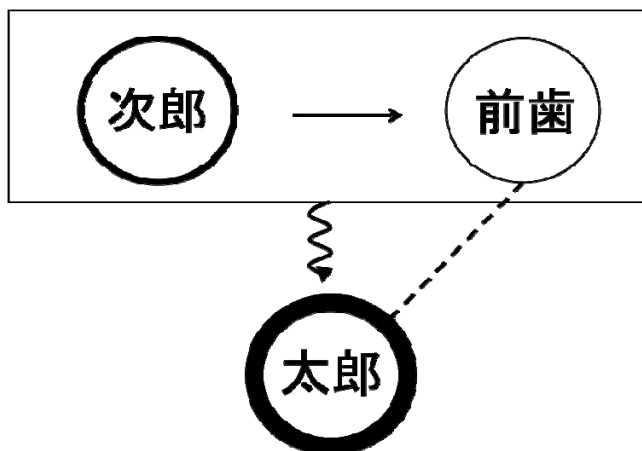
3.1 節では直接構造を持つ受動文の認知モデルについて見てきたが、特に例文(39)、(40)のように被動作主が「XのY」という形式をとるような受動文については、次のように受影者を主語に立てて表現することも可能である。

(39)c. 太郎は次郎に前歯を折られた。

(40)c. 私は通り魔に弟を殺された。

例文(39c)、(40c)では、例文(39a)、(40a)のノ格要素である受影者の「太郎」と「私」がそれぞれ主語に立っており、動詞「折られた」「殺された」の項となっている。この項と認定されるか否かという点が例文(39b)、(40b)とは大きく異なっており、これら例文(39c)や(40c)は、図8や図9のような直接受動文の認知モデルとは異なったモデルであらわされる必要がある。例文(39c)、(40c)は次の図10のような認知モデルで表される。

図10 例文(39c)、(40c)の認知モデル
(39c)



(40c)

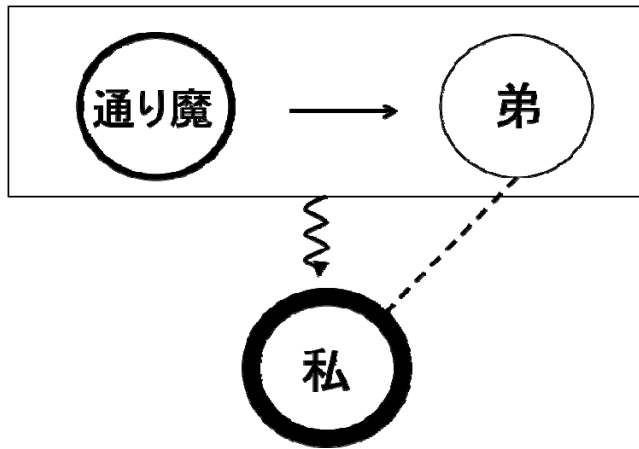


図10の認知モデルでは、被動作主句の「XのY」のXとYがわけて表示され、点線で結ばれている。この点線はXとYの属性関係をあらわしており、Yにくる名詞句は、Xの「身体部分、持ち物、親族・知人」、あるいはXとの結びつきが強い「具体的な内容を含意する命題」となる。

ここで、図10を図8の直接受動文の認知モデルと比較すると、図10では被動作主と受影者が分離して示されている点が図8とは大きく異なる。図10では被動作主はプロフィールされず、分離された受影者は事態の外側に出てトラジェクターとしてプロフィールされている。そして、この図10の認知モデルは「動作主が被動作主に対して、ある動作・行為を行った」という事態全体が、受影者に影響を与えているという間接的な構造をあらわしている。

このような認知モデルであらわされる受動文は、受影の原因となる動作主と受影者とが別々のステージにいるため能動文との対応関係を持つことができず、さらに被害性の意味が生じる。

例文(39)から(42)のような例は、図8、9のような直接構造を持つ受動文としてあらわすことも、図10のような間接構造を持つ受動文としてあらわすことも可能であるが、次の例文(43)、(44)のような場合は、間接受動文としてあらわすことはできても、直接受動文としてあらわすと不自然さが生じてくる。

(43) a.?? 私の裸が太郎に見られた。

b. 私は太郎に裸を見られた。

(44) a.* 私の横が太郎に座られた。

b. 私は太郎に横に座られた。

例文(43)、(44)において受影者と被動作主は何らかの関連性を保っている。例えば(43)の被動作主の「裸」は、受影者の「私」の身体部分ではなく身体の状態であり、また(44)の「横」は「私」に隣接する空間である。しかし、いずれの場合も例文(39)、(40)に比べると被動作主としての性質が薄れており、このような例については図8、9の認知モデルではなく図10のような認知モデルにおいてのみ反映されることになる。

以上の分析からは、受動態があらわす事象構造内部の連続性が見えてくる。例文(39)から(42)のように直接構造と間接構造の両方が可能な受動文から、例文(43)、(44)のように間接構造のみが可能な受動文へとシフトしており、これは「XのY」形式におけるXとYの関係性、及び被動作主としてのYの性質が影響していると考えられる。

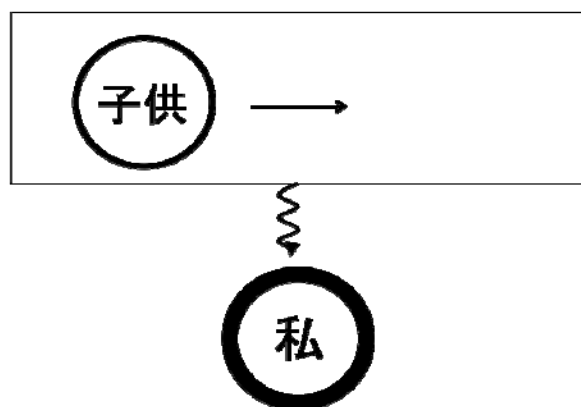
では次に、下の例文(45)、(46)のような場合はどのような分析が適当であろうか。これについて考えていきたい。

- (45) a. 昨日一晩中子供が泣いた。
b. 私は昨日一晩中子供に泣かれた。
(46) a. 雨が降った。
b. 私は雨に降られた。

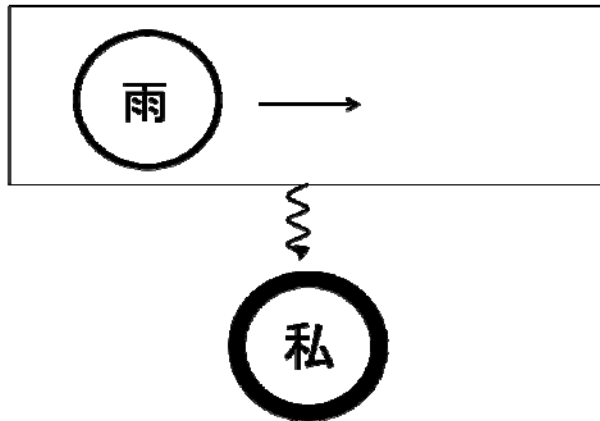
例文(45a)、(46a)は能動文であり例文(45b)、(46b)は受動文であるが、これらはいずれも対応関係にあるわけではない。受動文(45b)、(46b)の主語には能動文(45a)、(46a)とは全く関係のない別の項、受影者「私」が来ており、この受動文(45b)、(46b)があらわしているのは、能動文(45a)、(46a)のあらわす事態に「私」が影響を受けているということである。

これらの受動文(45b)、(46b)を認知モデルであらわすと次の図11のようになる。

図11 例文(45b)、(46b)の認知モデル
(45b)



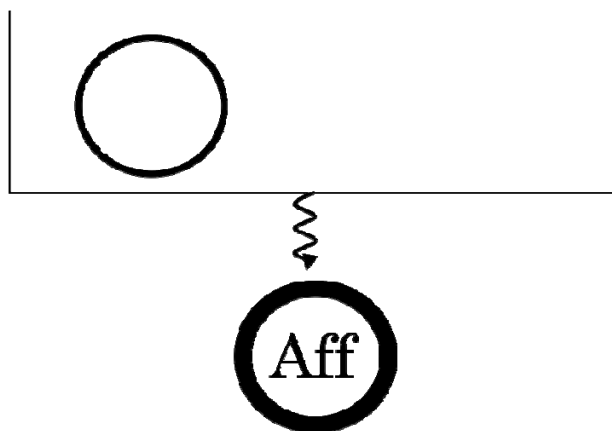
(46b)



例文(39c)、(40c)の図10の認知モデルと比べると、上の図11では被動作主をあらわす○と、その○と受影者を結びつける点線が消失していることがわかる。つまり、この図11のモデルは、動作主が被動作主に対して何らかの動作・行為を行ったという事態によって受影者が影響を受けるのではなく、動作主の単独の動作・行為が引き起こした事態が受影者に何らかの影響を与えるということをあらわすのである。例えば、例文(45b)に見られるように、動作主である「子供」が「一晩中泣いた」という事態全体が受影者である「私」に影響を与えたということをあらわしている。同様に、例文(46b)では、「雨が降った」という事態が「私」に影響を与えたということをあらわしている。この種の認知モデルでは、動作主の行為によって誰か(受影者)が何らかの影響を受けるような事態であれば文として成立することになる。

以上のような用例から、それらの上位スキーマとして間接構造を持つ受動態の認知モデルを、次のようにあらわすことができる。

図12 受動態の認知モデル(間接構造)



上の図12のような認知モデルを事象構造に持つ受動文の例としては、上の例以外にも次のようなものがある。

- (47) 私はライバル社の記者に特ダネを書かれた。
- (48) かわいがっていた一人娘にとうとう結婚された。
- (49) 突然夫に死なれて途方に暮れている。

上の例文(47)から(49)では、二格をとる動作主の動作・行為が単独で引き起こした事態が受影者（この場合、すべて話者）に影響を与えており、このような間接構造における影響は「被害」となる。

以上、ここまでの議論では受動態の中でも特に受影受動文を取り上げ、直接構造、間接構造それぞれの認知モデルについて見てきた。では次に、本研究の本来の目的からは少しはずれるが、益岡（1991）のいう降格受動文と属性叙述受動文の認知モデルについても少し考えてみよう。

3.3 降格受動文

降格受動文とは、特定の時空間に生起・存在する事象を表現する事象叙述の文の一種で、この受動文の特徴としては、動作主を主語の位置から降格させ代わりに動作の対象を主語として表現し、背景化された動作主は一般に存在が含意されるだけで表面にはあらわれないという点があげられる。また、降格受動文は受影受動文と異なり動作主を二格で表現できない。動作主をあらわす場合は例文(50c)、(51c)のようにニヨッテという形式を用いなければならない⁵⁾。

- (50) a. 試験官が答案用紙を回収した。
b.* 答案用紙が試験官に回収された。
c. 答案用紙が（試験官によって）回収された。
- (51) a. ボランティアの人たちが会場の近くに臨時の休憩所を作った。
b.* ボランティアの人たちに会場の近くに臨時の休憩所が作られた。
c. （ボランティアの人たちによって）会場の近くに臨時の休憩所が作られた。

それでは、このような降格受動文はどのような認知モデルであらわされるのであろうか。結論から先に述べると、降格受動文のもとになる受動態の認知モデルは、次の図13のようなモデルを想定する。このモデルは2つの要素のうち右側にくる要素（対象）がトラジェクターとしてプロファイルされることをあらわしている。このとき、左側の要素（動作

⁵⁾ 益岡（1991：106-108）を参照。

主) はプロファイルされておらず、ランドマークではないことには注意が必要である。

図 1 3 受動態の認知モデル (降格受動文)



そして、この受動態の認知モデルに下の図 1 4 のようなモデルであらわされる動詞が合成されて、図 1 5 のような降格受動文の認知モデルができる。降格受動文は基本的に図 1 4 のようなスキーマを持つ他動詞をとり、表現の主観性という観点からすると事象の生起を中立的な立場から客観的に表現した文となる (益岡 (1991 : 109))。

図 1 4 降格受動文となる動詞

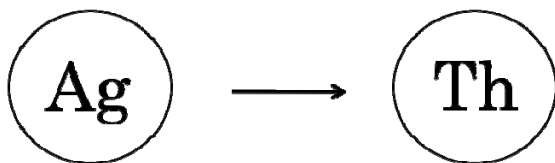
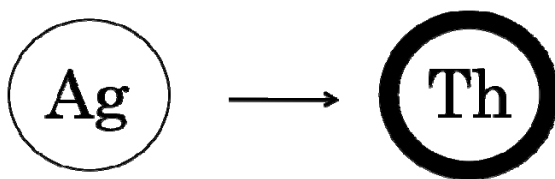


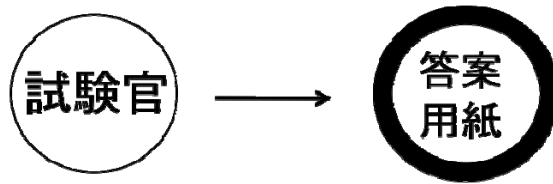
図 1 5 降格受動文の認知モデル



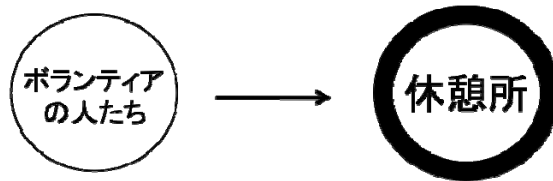
上述したように降格受動文では、動作主を表現しようとする場合、ニ格ではなくニヨッテという形式をとらなければならない。図 1 5 の認知モデルにおいて動作主がプロファイルされていないのはこのためである。このような降格受動文の認知モデルに例文 (50c)、(51c) の意味役割を代入すると次のようになる。

図 1 6 例文(50c)、(51c)の認知モデル

(50c)



(51c)



降格受動文の主語に立つ要素は主に無生物の名詞。これらの名詞は対象 Th(Theme) としての意味役割を持つ。例文(50c)の「答案用紙」は、試験官が回収した対象であり、例文(51c)の「休憩所」は、ボランティアの人たちが作った対象である。

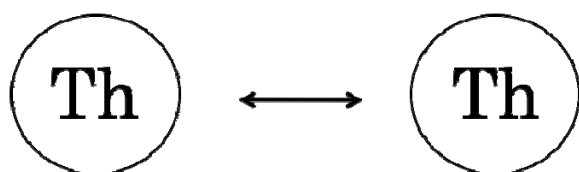
3.4 属性叙述受動文

属性叙述受動文とは、ある対象の性質や特徴を表現し、その対象の属性を述べる文である。次の例文(52b)、(53b)を見てみよう。

- (52) a. Y は X を含む。
b. X は Y に含まれる。
- (53) a. 高層ビルが花子の家を囲んでいる。
b. 花子の家は高層ビルに囲まれている。

上の例文(52)、(53)における動詞があらわす意味は、ここまで見てきた受動文とは異なり動作・行為ではなく主語と二格要素の関係性である。またこの事象には2つの対象が参与しており、片方の対象がもう片方の対象の性質や特徴を表現する。特徴づけられる対象が主語として、特徴づける対象が二格で表示される。以上のことから、属性叙述受動文になる動詞群をスキーマ化すると次のようにあらわすことができる。

図 1 7 属性叙述受動文を形成する動詞



また、特徴づける側の対象が二格で表示されていることから、属性叙述受動文のもとになる受動態は次のような認知モデルを想定する。この場合のモデルでは、降格受動文の場合（図 1 3）とは異なり、左側にくる要素がランドマークとしてプロファイルされることになる。

図 1 8 受動態の認知モデル（属性叙述受動文）



そして、図 1 7 と図 1 8 が合成され、次のような属性叙述受動文の認知モデルが完成する。

図 1 9 属性叙述受動文の認知モデル

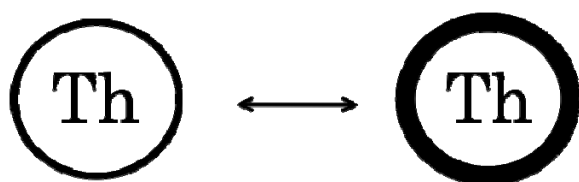
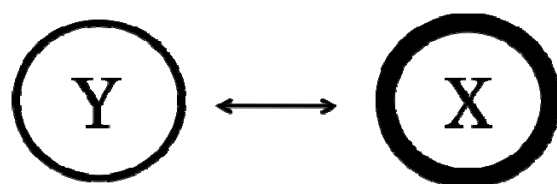
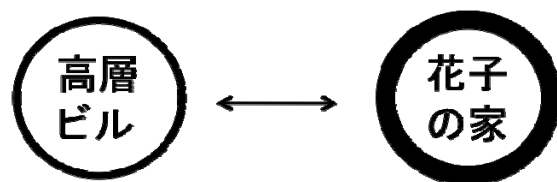


図 1 9 の認知モデルは、ランドマークの対象によってトラジェクターの対象に関する属性が述べられるということを意味している。この認知モデルを用いて例文(52b)、(53b)をあらわすと次のようになる。

図 2 0 例文(52b)、(53b)の認知モデル
(52b)



(53b)



以上、益岡（1991）の分類を参考に、受影受動文、降格受動文、属性叙述受動文の事象構造をそれぞれ認知モデルとしてあらわし考察した。次に以上の考察を踏まえ、先行研究における受動態の分類を再検討する。

3.5 先行研究の再検討

ここまでに提示した認知モデルと 4 つの先行研究（益岡（1991）、鈴木（1972）、三上（1953）、松下（1930））との関係をまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1 先行研究による受動文の分類と認知モデルの関係

認知モデルの種類	益岡(1991)	鈴木(1972)	三上(1953)	松下(1930)
A(図19,20)	属性叙述受動文			
B(図15,16)	降格受動文 (事象叙述受動文)	直接対象の受身	まともな受身	単純の被動
C(図6,7)	受影受動文 (事象叙述受動文)	相手の受身		利害の被動
D(図8,9)		持ち主の受身		
E(図10)			はた迷惑の受身	
F(図11)		第三者の受身		

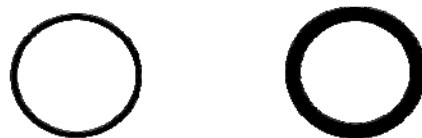
表 1 は、認知モデルと各先行研究における分類との対応関係を示した表である。左側の縦軸 A から F は、ここまで見てきた認知モデルを種類別にグループ分けしたもので、（ ）内に対応する図の番号を付してある。ここで再度、A から F にグループわけした受動文の認知モデルの種類（左側）と、それらに対応するヴォイスの認知モデル（右側）

についてまとめておく。

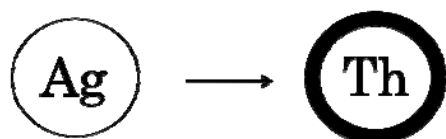
A：図 19、20



<受動態（属性叙述受動文）>



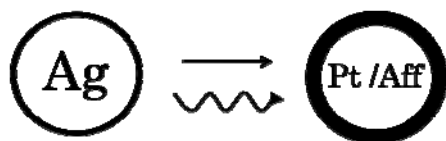
B：図 15、16



<受動態（降格受動文）>



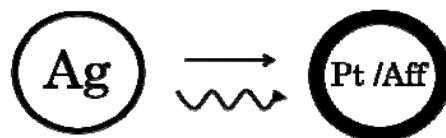
C：図 6、7



<受動態（直接構造）>

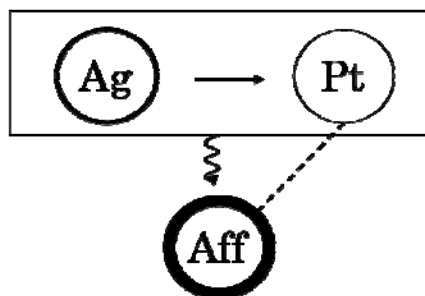


D：図 8、9



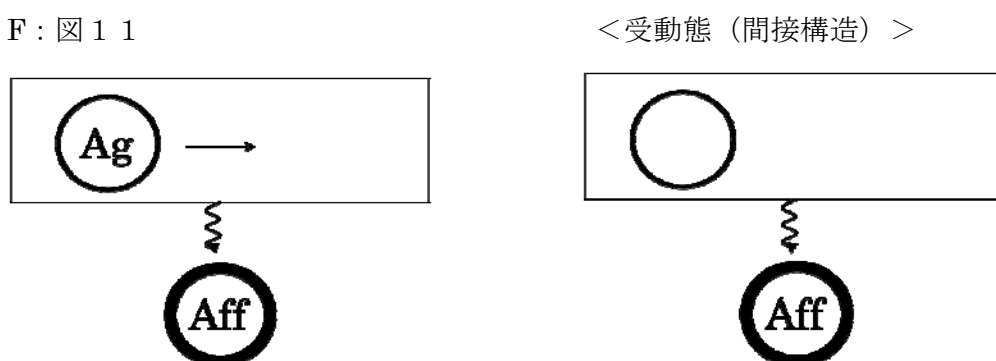
上に同じ

E：図 10



下に同じ

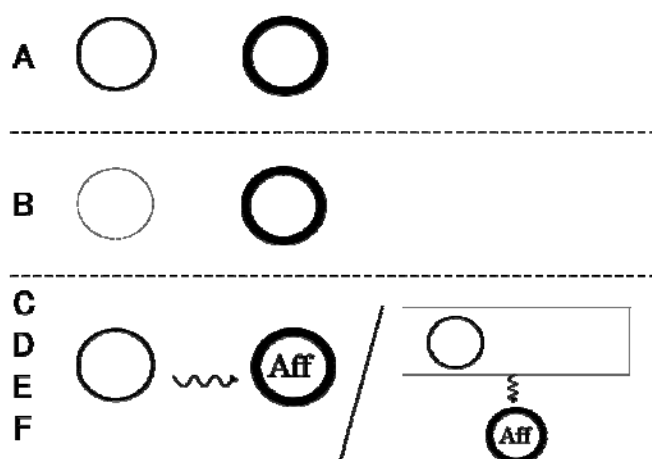
F：図 1 1



ここで、もう一度表 1 を見てみよう。表 1 を見るとそれぞれの先行研究の分析による受動文の分類線（表 1 の点線）は、鈴木（1972）の「直接対象の受身」「相手の受身」間の分類線を除き、すべて認知モデルの分類線に集約されることがわかる⁶⁾。では、先行研究による分類を、認知モデルを用いて分析しなおすとどのようなことが言えるであろうか。以下、先行研究ごとに考察していく。

【益岡（1991）の分類について】

益岡（1991）では、受動文は「属性叙述受動文」、「降格受動文」、「受影受動文」の 3 種類に分類されていた。この分類されたカテゴリーを認知モデル（A～F）と対応させると次のようにまとめることができる。属性叙述受動文は A、降格受動文は B、受影受動文は CDEF の認知モデルにそれぞれ対応している。



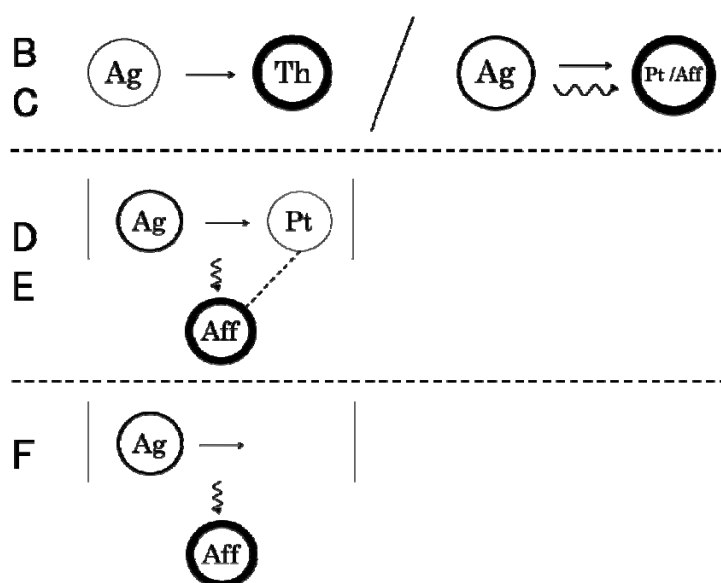
上の図を見ると、益岡（1991）の分類は、受動態が持つ事象構造の多義に基づいて分類されていることがわかる。ただし、CDEF のグループでは直接構造、間接構造という違いはあるもののこれについては区別をせず受影性をあらわす機能を有するグルー

⁶⁾ これらを別々にわけない理由については 3.1 節で述べた。

ブとしてまとめられている。

【鈴木（1972）の分類について】

鈴木（1972）では、受動文は「直接対象の受身」、「相手の受身」、「持ち主の受身」、「第三者の受身」の4種類に分類されていた。このうち直接対象の受身と相手の受身を上述したようにひとまとめにして考えると、分類された3つのカテゴリーは、認知モデルとそれぞれ次のように対応していると見ることができる。直接対象の受身と相手の受身は BC、持ち主の受身は DE、第三者の受身は F の認知モデルにそれぞれ対応している。

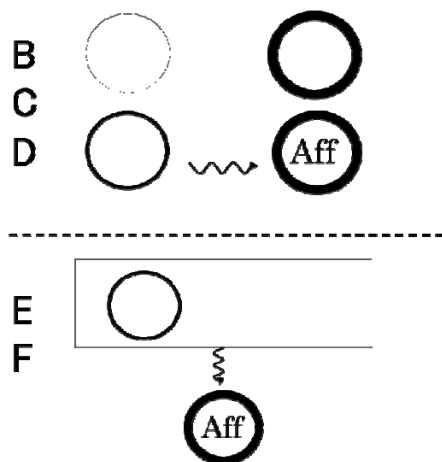


上の図から言えることは、鈴木（1972）における受動文の分類は、動作主の動作・行為が向かう「相手」の性質に基づいて分類されているということである。まず、認知モデル BC のグループでは、その「相手」は、動作主の動作・行為が直接的に向かう対象となる。次に DE のグループでは、動作主の動作・行為が向かう「相手」が「X の Y」という形式をとる名詞句の Y であり、この時 Y は被動作主、X はいわゆる Y の「持ち主」である受影者となる。最後に F のグループでは、動作主の動作・行為がどこにも向かわない、すなわち「相手」がゼロであるか、あるいは受影者とまったく関係のない対象に対して動作主の動作・行為が向かう。このような違いによって受動文を分類していると分析することができる。

【三上（1953）の分類について】

三上（1953）では、受動文は「まともな受身」と「はた迷惑の受身」の2種類に分類されていた。ここでは益岡（1991）と同様に三上氏による受動文の分類カテゴリー

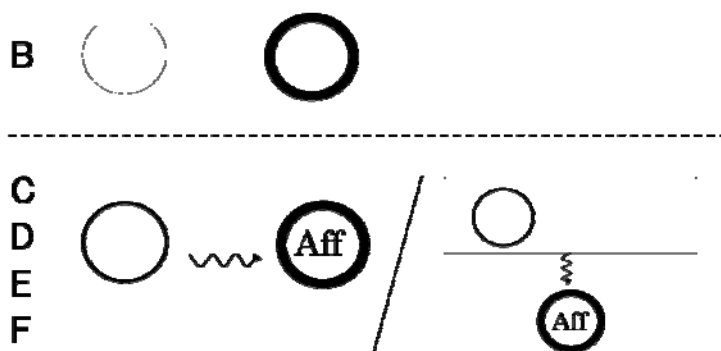
と受動態の認知モデル（B～F）と対応させると、次のようにまとめることができる。
 まともな受身は BCD、はた迷惑の受身は EF の認知モデルにそれぞれ対応している。



上の図を見ればわかるとおり、三上（1953）の受動文の分類は、受動文のあらわす事象構造が、受動態の直接構造をとるか間接構造をとるかの違いによって分類されている。また、三上氏が間接構造を「はた迷惑」と名付けたことからわかるように、この間接構造では基本的にいわゆる被害の意味が生じる。

【松下（1930）の分類について】

松下（1930）では、受動文は「単純の被動」と「利害の被動」の2種類に分類されていた。これまでと同様、松下氏による受動文の分類と受動態の認知モデルとの対応関係をまとめると次のようになる。単純の被動は B、利害の被動は CDEF の認知モデルにそれぞれ対応している。



上の図から考えると、松下（1930）の分類は、受影性があるか否かの違いを分類の基準としていると言える。松下氏は、直接受動文であろうが間接受動文であろうが被害

の意味等が見うけられる類の受動文を「利害の被動」とし、そのような意味が生じないその他の受動文を「単純の被動」と名付けている。一方、認知モデルから見出せるこの「受影性の有無」という基準は、動作主の動作・行為によって受影者が受ける心理的影響があるかないかという基準であり、その影響（受影）の性質は関係がない。

以上、4つの主要な先行研究による受動文の分類を認知モデルを用いて再検討した。先行研究では、それぞれが異なる角度、視点から受動文を分析し、分類してきたわけだが、本研究での分析では認知モデルという同じ土台の上で違った角度から各カテゴリーの特徴を考察することが可能となる。上にあげた4つの先行研究が日本語の受身研究において大変重要な論考であることは言うまでもないことであるが、このように学問上どれもが重要な論考である場合に、それらを同じ土台の上で議論できることは非常に有意義なことであると考ええる。

4. 逆向態の認知モデル

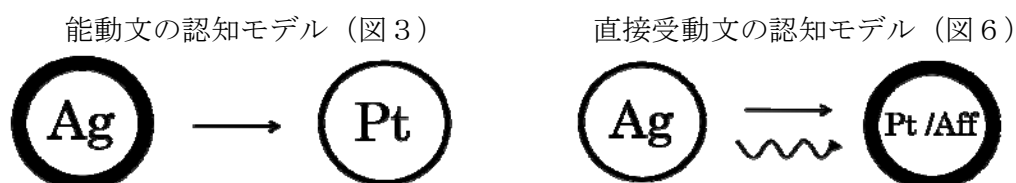
次に、日本語の逆向態に関する認知モデルについても考えてみよう。ただし、以下の議論で逆向態、逆向文という場合、テクル文の逆向態用法を想定しているものとする。

4.1 直接逆向文

まずは、次の例文を見てみよう。例文(54a)は能動文、(54b)は受動文、(54c)は逆向文の例である。

- (54) a. 野良犬が私に咬みついた。 (能動文)
- b. 私は野良犬に咬みつかれた。 (受動文)
- c. 野良犬が私に咬みついてきた。 (逆向文)

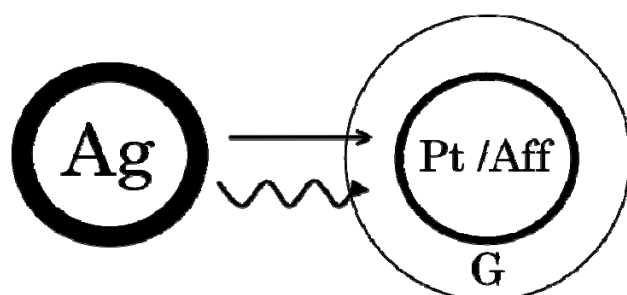
ここで、上の例文と対応する認知モデルについて考えてみる。例文(54a)の能動文と(54b)の直接受動文に対応する認知モデルは、下のようなものであった。



上の比較図を見ればわかるとおり、能動文と直接受動文との違いは、動作主の動作・行為によって生じる影響の方向性（波線矢印）とその影響を受ける受影者 Aff の有無、

そして事態参与者のどちらをより強くプロファイルするかという違いであった。これはそれぞれ、動詞に有標のマーカが付くか否かという問題と、文構造が変化するか否かという問題と相関している。それでは、例文(54c)の逆向文はどのような認知モデルであらわすことができるであろうか。直接構造を持つ逆向文の認知モデルは、次の図2 1のようにあらわすことができる。

図2 1 直接逆向文の認知モデル



ここで、図2 1の認知モデルと図6の直接受動文の認知モデルとを比較すると、両者の違いは、まず事態参与者に対するプロファイルの仕方にあることがわかる。両者は、ともに動詞に有標のマーカが付くため、動作主の動作・行為によって生じる影響の方向性をあらわす波線矢印と、その影響を受ける受影者の意味役割を持つが、受動文が文構造を変化させるのに対して、逆向文では文構造を変化させない。この違いが認知モデルにおけるプロファイルの仕方の違いとしてあらわれているのである。事態参与者に対するプロファイルの仕方という点では、直接逆向文は能動文と同じということになる。

次に逆向態の大きな特徴に注目したい。世界の諸言語に見られる逆向文の大きな特徴として、人称・有生性のハイアラーキーに支配されるヴォイスという特徴があった。日本語の逆向態の場合、「1人称 > ウチ人称 > ソト人称」というハイアラーキーで現象を説明することができる⁷⁾。このことを認知モデルに反映させ、他のヴォイスとの区別する。ここでは、認知文法のグラウンディング (grounding) という概念を応用する。グラウンディングとは、辻(編) (2002 : 59) によると「ある事物が、話し手、聞き手、および両者の間で共有されている知識に対する位置が特定されて叙述されること」とされている⁸⁾。日本語の逆向文は、人称・有生性のハイアラーキーにおいて、下位の者が上位の者へ、つまりソト人称名詞句から (1人称を含む) ウチ人称名詞句へと行為がなされる事象を言語としてあらわした文である。この時、話者はその談話において意図する指示対象 (この場合、受影者) へと聞き手の注意を向けさせる。これを本研究では受影者を囲む円内に「G」と表示することで、受影者がグラウンディング要素として同定

⁷⁾ 第1章を参照のこと。

⁸⁾ Langacker (2008) も参照。

されることをあらわすことにする。

では、他の例についても少し見てみよう。下の例文(55)から(58)では、いずれも動作主が被動作主および受影者(これらの例では話者)に対して直接的な動作・行為を行い、同時に心理的影響を与えている。このような様々な逆向文をイメージスキーマとしてあらわした認知モデルが図21のモデルであり、例えば(55)における事態参与者をこの認知モデルに代入すると、次の図22のように表示することができる。

- (55) 太郎が僕をなぐってきた。
- (56) (じゃんけんで) 相手は最初にパーを出してきた。
- (57) 母はいつも僕に小言を言ってくる。
- (58) 酔ったおじさんが自分の人生を語ってきた。

図22 例文(55)の認知モデル

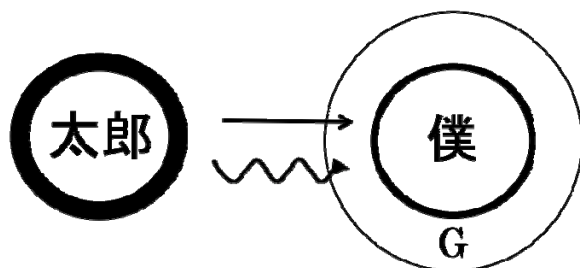
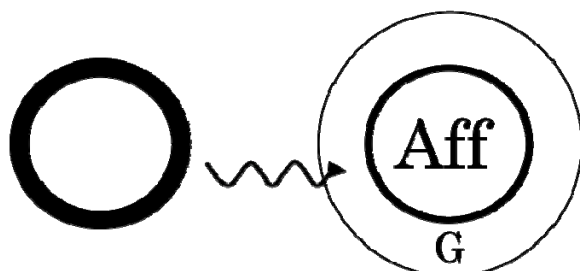


図22の直接逆向文の認知モデルは、直接受動文と同様、図1のような他動詞のモデルと逆向態のモデルとが合成されたモデルである。そこで、合成された他動詞のモデルを差し引くと、逆向態(直接構造)の認知モデルは次のようになる。

図23 逆向態の認知モデル(直接構造)

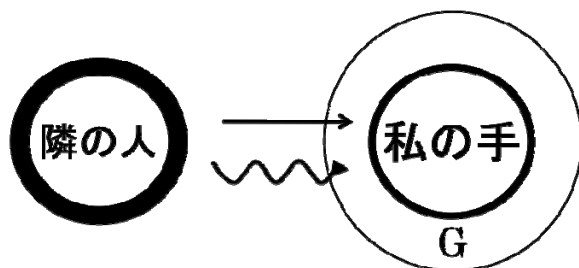


では、次に被動作主が「XのY」という形式をとっている場合について考えてみよう。次の例文(59)、(60)、(61)は、上の直接逆向文の認知モデル(図21)であらわすことができる。例えば、例文(59)における事態参与者をこの認知モデルに代入すると、次の図24のように表示することができる。この時、被動作主には主に身体部分、持ち物、

親族・知人等、受影者（主に話者）にとってウチとなる名詞句が来る。

- (59) 隣の人が私の手を触ってきた。
(60) 太郎が私のノートに落書きをしてきた。
(61) 「今何ヶ月？」と自分の息子と（私の息子を）明らかに比べてくる主婦。

図 2 4 例文(59)の認知モデル



例文(59)の被動作主である「手」は身体部分、(60)の被動作主「ノート」は持ち物、(61)の被動作主「息子」は親族であるが、いずれの場合も心理的影響を受けているのは、被動作主というよりも、それらと関係の深い受影者の「私」である。そして、この場合の受影者が受ける心理的影響は、テクルの逆向態用法が持つ特徴の1つである嫌悪性であり、ネガティブな性質を持つものである⁹⁾。では次に、逆向文の間接構造についても考えてみよう。

4.2 間接逆向文

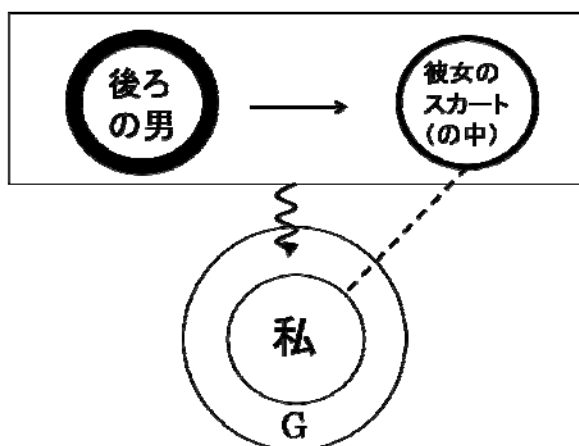
次に、逆向文の間接構造について考える。逆向文の間接構造については、次の例文(62)を取り上げる。

- (62) 後ろの男が彼女のスカートの中を覗いてきた。

この例文(62)では、動作主である「後ろの男」の「スカートの中をのぞく」という行為によって直接影響を受けた被動作主は「彼女」であるが、この時、この「彼女」と関係の深い「私（話者）」が間接的に心理的影響を受けていることも合わせて読み取ることができる。このことを考慮して逆向文の間接構造を考えると、次の図 2 5 のような認知モデルとしてあらわすことができる。

⁹⁾ 第3章、第5章での議論を参照。

図 2 5 例文(62)の認知モデル



ここで注目してほしいのは、プロフィールのされ方である。受動態、受動文の間接構造と比較すると、逆向態、逆向文の間接構造では受影者がプロフィールされていないという点が大きく異なる。逆向態、逆向文の間接構造における受影者はプロフィールされない要素であるため、項としてあらわすことができない。しかしながら、日本語では特に1人称（ウチを含む）を省略して述べるが多いため、機能上、特に問題はないようである。

では、次のような例はどうだろうか。

(63) 巨人がピッチャーを代えてきた。

(64) (合唱コンクールで) ライバル校が自由曲に静かな曲を選んできた。

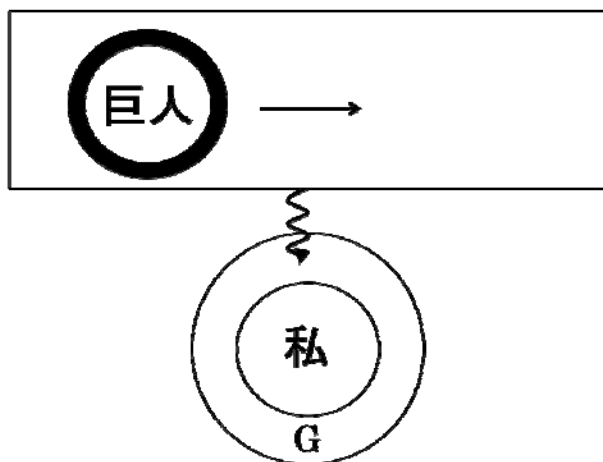
例文(63)において、動作主「巨人」の「ピッチャーを代える」という行為を直接受ける被動作主は相手チーム（例えば「阪神」など）である。また、この文の発話者（受影者）は必ずしも相手チームに所属する人であるとは限らない。ファンの1人である可能性も十分にある。例文(64)の場合、（話者にとっての）「ライバル校」は、コンクールで歌う曲として「静かな曲を選」んだだけであり、その行為は誰に対するものでもない。これらの例において、動作主の行為の相手と想定できる要素を項として反映しようとする非文になってしまう。

(65)* 巨人が私の阪神にピッチャーを代えてきた。

(66)* ライバル校が我々に自由曲に静かな曲を選んできた。

そこで、このような例文に対応する認知モデルとしては、次の図26のようなものを想定する。

図26 例文(63)の認知モデル



上の例文(63)に対する認知モデルでは、受影者の「私」はプロフィールされていない。そのため、阪神ファンで受影者の「私」の存在は、読みとることは可能であるが、項としては表示することはできない。

このような例は他にも数多くある。次の例を見てみよう¹⁰⁾。

- (67) 上司が決めてくることに従わなくちゃいけないというわけじゃない。
(68) 気象庁は多少大げさに予想してくるのですが、こりやあまたすごい数値を出してきました。

例文(67)、(68)の例を見ると、動作主の動作・行為を受ける被動作主は特に存在しない。もちろん、想定するとすればできないことはない。想定するとすれば、例文(67)であれば動作主の「部下」、(68)であれば「テレビ視聴者」或いは「一般市民」といった漠然とした対象を想定することになるであろう。しかし、想定することは可能であってもヲ格やニ格をとるような項としてあらわすことはできないのである。

さらに、このような間接構造をとる逆向文としては、第3章で取り上げたスポーツの実況などでよく耳にする驚嘆、賞賛を意味する逆向文もこれに相当する。

- (69) (フィギュアスケートの実況において)
浅田真央がトリプルアクセルを跳んできた。

¹⁰⁾ 例文(67)、(68)は、インターネット上にあった用例である。

(70) (サッカーの実況において)

本田圭佑が遠目からシュートを打ってきた。

(71) (サッカーの実況において)

香川真司が角度のないところからゴールを狙ってきた。

(72) (陸上競技の実況において)

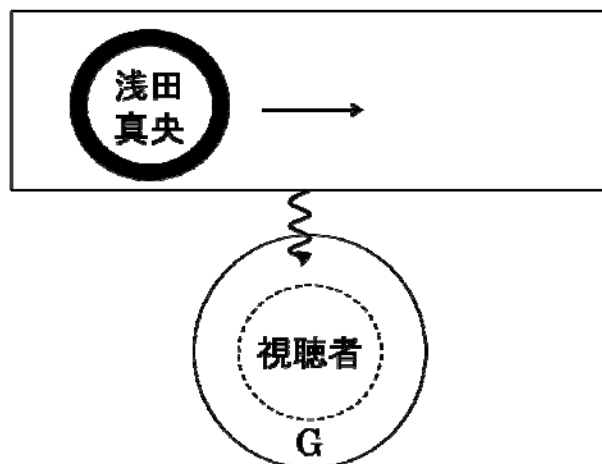
ウサイン・ボルトが 100 メートルを 9 秒 5 台で走ってきた。

(73) (大食い選手権の実況)

光貞はきしめん 5 玉を 20 分で食べてきた。

上の例文(69)から(73)に見られる逆向態マーカのテクルの機能は、当該競技における動作主の行為を強調して、その競技を見ている視聴者にその驚き（あるいは賞賛）を伝えるものであり、もはや動作主の行為によって影響を被る具体的な受影者と呼べるものは存在しない。そこで、例文(69)から(73)のように実況型の文脈において見られる逆向文の認知モデルは、次のように間接構造を持つ事象としてあらわすことにする。下の図 2 7 は、例文(69)の認知モデルである。

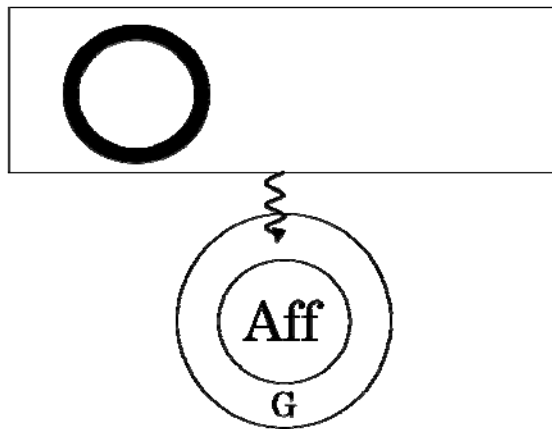
図 2 7 例文(69)の認知モデル



この種の逆向文の認知モデルでは、図 2 7 のように仮想受影者として「視聴者」を想定し、点線の○でこれをあらわすことにする。

ここまで間接構造を持つ逆向文の用例を見てきたが、その上位スキーマとしては次の図 2 8 のような認知モデルを逆向態（間接構造）として提示する。

図 2 8 逆向態の認知モデル（間接構造）



この図 2 8 の認知モデルは、受影者に対するプロフィールの有無、グラウンディングの有無という違いはあるものの、事象構造としては図 1 2 の受動態（間接構造）と同じことをあらわしている。

以上、本章ではインターアクティブな他動的事象における日本語の受動態と逆向態の直接構造と間接構造を認知モデルとしてあらわし、それぞれについて考察した。

5. 結び

認知モデルを用いてヴォイスを再検討すると、これまでの先行研究では見えてこなかった同じ受動態の用法間における共通性や相違点、およびそのメカニズムが見えてくる。そしてさらに、これまではその関係性がほとんど語られることのなかったレル・ラレル文とテクル文の関係についても共通の土台の上で統合的な説明を与えることができる。この意味において、本研究はいくらか学問に貢献できたのではないかと信じたところである。

最後に、本章のまとめとして「ヴォイスの意味」について考えてみたい。本章では、日本語のヴォイスの中でも特に受動態（レル・ラレル文）と逆向態（テクル文）の事象構造について認知文法論的な立場から分析を行った。これまでの日本語のヴォイスに関する先行研究では、多くの場合、文のあらわす意味と文の構造を詳細に分析してその内実を説明し、それらを踏まえて各グループに最も適当と思われる名称をつけることで「分類」されてきた。しかし、ここでは特に「～用法」といった類の名称をつけることはせず、代わりに各ヴォイスの事象構造をスキーマ化した認知モデルそのものを、いわゆる「ヴォイスの意味」として位置づけることにしたい。

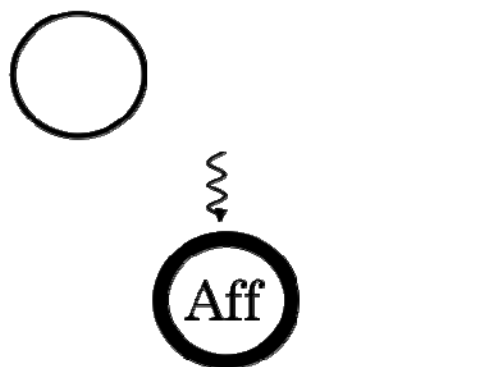
日本語の各受動文に対応する受動態の認知モデル、各逆向文に対応する逆向態の認知モデルをまとめると、次のようになる。

受動態の意味

受影受動文
(直接構造)



受影受動文
(間接構造)



降格受動文

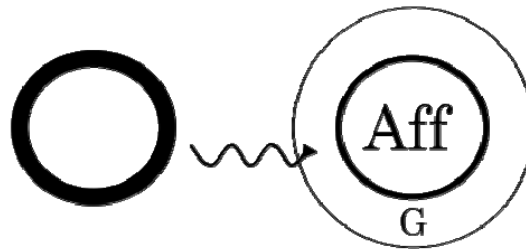


属性叙述
受動文

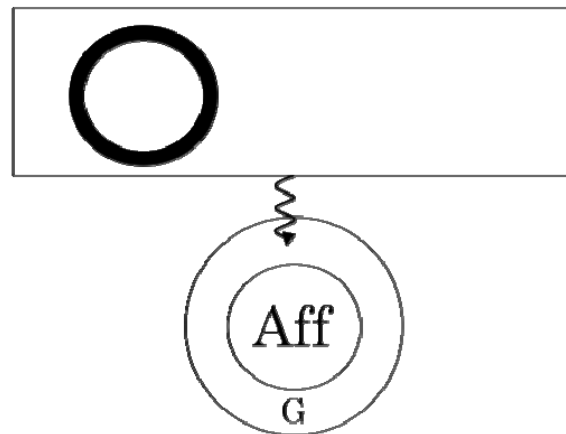


逆向態の意味

逆向文
(直接構造)



逆向文
(間接構造)



上記のように、日本語の受動態と逆向態は事象構造に関して構造的な多義性を有している。受動態には4つの意味があり、逆向態には2つの意味があると考えることができる。ここで言う日本語の「ヴォイスの意味」とは、事象構造内の事態参与者の意味役割とそれらに対するプロファイルの施し方によって定められるフレーム的な意味である。

終章

結論と今後の展望

1. 本研究のまとめ

本研究では、現在の日本語学においてはまだ定着しているとは言えない「逆向態」という概念を、移動動詞「来る」のテ形補助動詞であるテクル形式の分析を通じて日本語のヴォイスの分析に導入し、これまでにはなかった視点から、日本語の複数の言語形式（レル・ラレル、テクル、テイク、テヤル／テアゲル、テクレル、テモラウ）に見られるヴォイス現象を統一的に説明し、日本語のヴォイスの特性を明らかにした。

それでは、各章ごとの結論について整理しよう。

第1章では、主に言語類型論の分野で研究が進められてきた「逆向態 (Inverse)」というヴォイスの下位概念について概観し、それを日本語のテクル文、テクレル文に適応することの是非について Klaiman (1991)、および Thompson (1994) の分析を参考に検討した。

検討の結果、日本語のテクル文、テクレル文を逆向態と捉えることは十分に可能であり、本研究では、日本語の逆向態を形態的、統語的、意味・機能的、語用論的側面から次のようにまとめた。

<日本語における逆向態>

形態的側面

ベネファクティブの場合はテクレル形式が義務的に、それ以外の場合はテクル形式が任意で、動詞に有標のマーカ―として付与される

統語的側面

動詞に有標マーカ―が付与されても、もとの文構造に影響を及ぼさない

意味・機能的側面

ソト（の動作主）からウチ（の被動作主）へと動詞のあらわす行為がなされることをあらわし、動作主の行為により影響を受けた者（受影者）の話題性を高め、かつ動作主にもある程度の話題性を保持させる

語用論的側面

「1人称 > ウチ人称 > ソト人称」というハイアラーキーの下位から上位へと行為がなされる他動的事象において逆向態は起こりうる

第2章では、クルの補助動詞用法に見られる多義性について議論した。接続助詞テと移動動詞クルが結びついたテクル形式については、これまでも数多くの先行研究で論じられてきたが、本研究ではそれらの先行研究における議論を踏まえて、空間的用法4種、アスペクト用法2種の合計6種類の用法を定め、前項にくる動詞の種類、および統語的振る舞いから各用法の特徴についてまとめた。本研究が定めたテクルの6用法は以下の通りである。

【テクルの6用法】

空間的用法

- ・ V+V 型：独立動作
- ・ V_m-V 型：様態・付帯状況を伴う移動
- ・ V-V 型：求心的移動
- ・ V-v(I)型：逆向態

アスペクト用法

- ・ V-v(A1)型：状態・状況変化
- ・ V-v(A2)型：継続

第3章では、テクルの6用法の中でも特にヴォイス機能を持つ V-v(I)型（逆向態用法）に焦点を当て、V-V 型（求心的移動用法）との比較から考察した。まず、V-V 型と V-v(I)型は、前項にくる動詞の種類によって以下のように区別する。

- ・ V-V 型（求心的移動用法）：移動動詞＋テクル
主体移動動詞
- ・ V-v(I)型（逆向態用法）：行為動詞＋テクル
対象移動動詞
非明示的移動動詞
行為動詞

また V-v(I)型（逆向態用法）は、他の用法には見られない「嫌悪」、「驚嘆」、「未完了」という3つの特徴的な機能を有しており、次のような一般化ができる。

【テクル付与の義務性と嫌悪性との関係】

テクルの付与が義務的である場合は嫌悪の意味は生じにくい、テクルの付与が任意である場合は主動詞にテクルが付与されると嫌悪の意味が生じやすい

【テクル文の驚嘆の意味・機能】

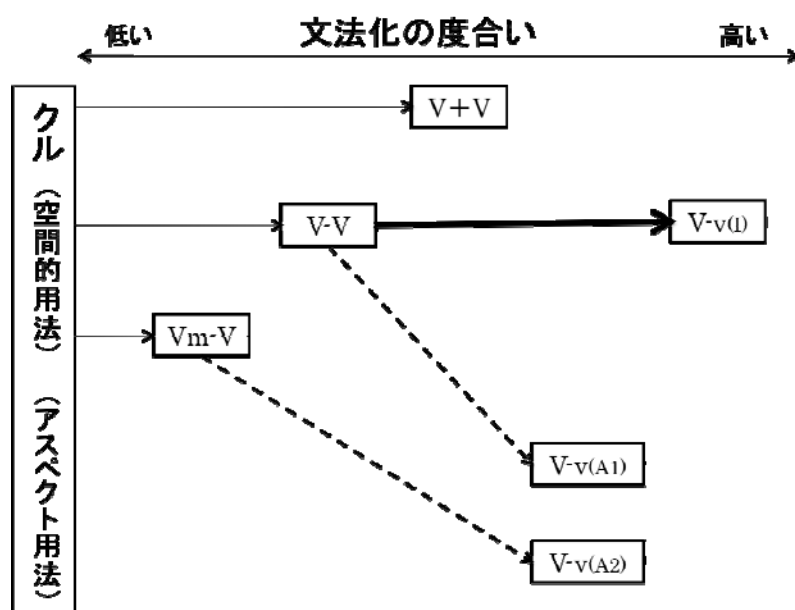
実況型の文脈では前項動詞の種類に関係なく主動詞にテクルを付与することで驚嘆の意味をあらわすことができる

【テクル文の未完了性】

前項動詞が非明示的移動動詞、対象移動動詞で、接触、あるいはそれに準ずる意味をあらわす場合にテキタ文が未完了の意味をあらわす

第4章では、日本語の移動動詞「来る」の文法化現象について論じた。主に言語学分野でこれまでに築き上げられてきた文法化理論に基づいてテクルの意味・機能変化の流れと文法化の度合い、変化の背景にあるメカニズムについて考察し、テクルの各用法が生じてきた文法化の過程について論じた。テクルの6つの用法の派生関係とそれぞれの文法化の度合いをまとめると、次の図のようになる。

＜テクル用法の派生関係と文法化の度合い＞



これまでテクルの文法化については、接続助詞テと移動動詞クルが結びついてクルの本動詞としての意味が弱化し、アスペクト機能を有するようになった、といったように単純に論じられることが多かったが、本研究で示したようにテクルの文法化現象を詳細に分析するとその派生関係はそれほど単純なものではないことが確認できた。

第5章では、逆向態機能を有するテクル形式、ベネファクティブのテヤル・テアゲル、テクレル、テモラウ形式、受動態マーカーとして機能するレル・ラレル形式がそれぞれどのような関係性を持ち、また機能面において、どのように役割を分担しているのかについて検討した。

これまでの先行研究では、各ヴォイスの表現形式ごとに詳細に論じられることはあっても、日本語コミュニケーションにおいて複数のヴォイスがどのように機能し、そしてどのように使い分けられているかといった観点から体系的に論じられることはほとんどなかった。第5章では、日本語コミュニケーションの中でも特にインターアクティブな他動的事象において、上述した各ヴォイスマーカーが互いに関連性を持ちながら機能面において体系性をなしていることを以下の図のように機能分布として提示し、日本語のヴォイスが各々の形態的、統語的、意味・機能的性質の違いに基づいて、当該事態に対する話者の心的態度を表示する機能を担っているということを示した。

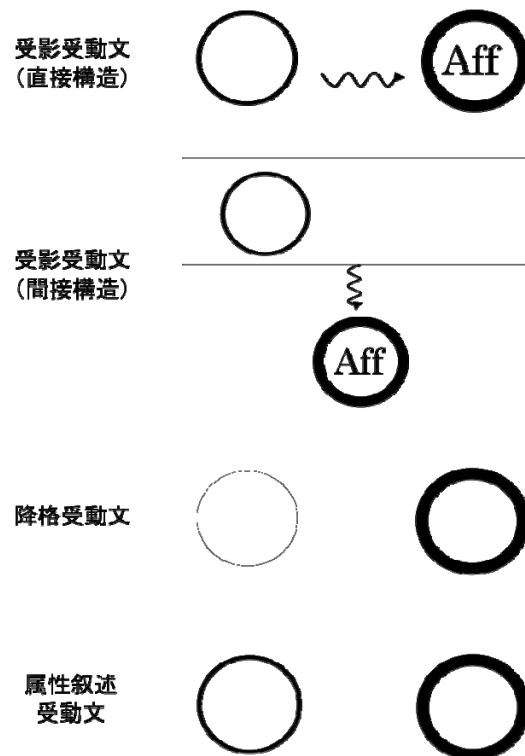
＜日本語ヴォイスの機能分布＞

機能 ヴォイス	Neutral	Negative	Positive
能動態	Ø (他動性動詞)		
順向態	テイク	←	ヤル / アゲル
逆向態	テクル →	←	テクレル
受動態	レル・ラレル →	←	テモラウ

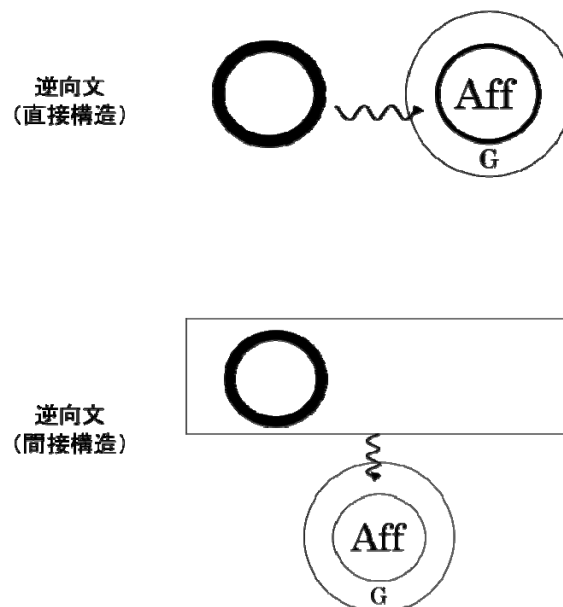
第6章では、受動態と逆向態の事象構造について認知文法論的な立場から認知モデルを用いて分析、検討した。特に受動態については、これまで先行研究で論じられてきた受動文の分類について再検討し、認知モデルという共通のメカニズムに沿って分析することで、これまでは見えてこなかった用法間の共通性や相違点を明らかにした。

また、各受動文、逆向文があらわす事象構造における事態参与者の意味役割と、それらに対するプロファイルの施し方によって定められるフレーム的な意味を「ヴォイスの意味」と捉え、日本語の受動態と逆向態の意味を次のようにあらわした。

< 日本語の受動態の意味 >



< 日本語の逆向態の意味 >



以上が、各章のまとめである。

2. テクルの文法化研究について

日本語の移動動詞「来る」、およびその補助動詞テクルに関する研究は質・量ともにすでにかかなりの蓄積がある。しかし、それらの多くは共時的な研究であり通時的に言語現象を1つ1つ細かく見ていくような研究はそれほど多くない。文法化の研究は共時的観点から論じるものもあるが、それは通時的な研究の土台があつてはじめて意味を持つ。本研究は、主に共時的観点からテクルの機能性について論じてきたが、今後は、本研究における分析と文献資料とを対照させながら、実証的に文法化による意味・機能変化のメカニズムを解明していきたいと考えている。

3. 言語研究の言語教育への応用について

言語類型論や対照言語学の発展に伴い、言語の普遍性だけでなく、言語間の差異に関する研究もこれまでにかなり蓄積されてきた。言語教育の分野は、それらの研究成果を基に数多くの教科書や問題集を世に送り出してきた。その意味で、現在の言語教育は一昔前と比較しても驚くほど進歩したと言える。

しかし逆に、対照研究が進めば進むほど、言語教育に必要とされる未知の部分は徐々に幅を狭め、現在ではその大部分が研究し尽くされたのではないかと思うほど、言語研究を教育に応用するための新たな知見を見つけるのが大変難しい状況となっている。

現在、日本語教育に限らず言語教育の分野において最も重要なのは、「学習者が学習言語をうまく運用できるようになること」であつて、「学習者が学習言語の文法の詳細を知っている」ことではない。「使えてなんぼ」の側面があるのである。その一方で、現在の言語研究者の仕事と言え、言語現象を様々な視点からこれまで以上により細かく分析し、それを記述する、あるいは、それを積み上げていくことで言語の普遍性や、いわゆる言語理論と呼ばれるものを追究していくのが主流と言える。このように、言語教育の分野と言語研究の分野とでは、各々が目指すところが大きく異なりまた求められているものの質にも大きな隔たりがある。一見簡単そうに思える教育への応用も、実は大変難しいものになっている。

以上のような状況下にあつて、本研究では、特に第5章、第6章において言語教育分野への応用を意識した議論を行った。第5章では、これまでの言語研究の成果を踏まえ、「インターアクティブな他動的現象に関連する日本語のヴォイス」という日常会話でも遭遇頻度の高い文脈に限定し、そこに見られる言語機能と話者の感情との関連性について論じた。そして第6章では、主に認知文法論的立場から、受動文と逆向文があらわす事象構造を認知モデルとしてあらわし、言語運用に関する研究を行うための土台作りを行った。今後は、これらの成果を踏まえて実データを基に、スキーマを視覚から脳へと

刷り込んでいくような映像教材の作成に向け、研究を続けていくつもりである。映像教材の完成はまだ先の話になるが、この研究がうまく行けば、言語研究を教育分野へ応用する新しい形を示せたことになるのではないかと考えている。

【用例の出典】

小川洋子『博士の愛した数式』（新潮文庫）新潮社. 2005.

川端康成『雪国』（岩波文庫）岩波書店. 1952.

清少納言／池田亀艦・岸上慎二(校注)「枕草子」『枕草子 紫式部日記』（日本古典文学大系）岩波書店. 1958.

夏目漱石『坊っちゃん』（新潮文庫）新潮社. 1950.

東野圭吾『変身』（講談社文庫）講談社. 1994.

東野圭吾『容疑者 X の献身』（文春文庫）文藝春秋. 2008.

二葉亭四迷／十川信介(校注)『浮雲』岩波書店. 2004.

村上春樹『1Q84 Book1』新潮社. 2009.

村上春樹『1Q84 Book2』新潮社. 2009.

村上春樹『1Q84 Book3』新潮社. 2010.

『AERA（アエラ）』朝日新聞社.

【参考文献】

日本語文献

- 秋元実治. 2002. 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房.
- 荒木一雄・安井稔(編). 1992. 『現代英文法辞典』 三省堂.
- 庵功雄. 2001. 『新しい日本語学入門 ―ことばのしくみを考える』 スリーエーネットワーク.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘. 2000. 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘. 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク.
- 池上嘉彦. 1999. 「日本語らしさの中の〈主観性〉」『言語』1月号. 大修館書店.
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』 講談社.
- 井上和子. 1989. 「主語の意味役割と格配列」久野暲・柴谷方良(編).『日本語学の新展開』, pp.79-101. くろしお出版.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究：主観性をめぐって』 南雲堂.
- 大江三郎. 1977. 「コンテキストと文法(5)(6)」『英語青年』123-3,4. 研究社.
- 大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』 東京大学出版会.
- 大堀壽夫. 2005. 「日本語の文法化研究にあたって ―概観と理論的課題―」『日本語の研究』1-3, pp.1-17.
- 岡村裕美. 2007. 「詞辞分類の可能性 ―「れる・られる」を例に―」『ことばの論文集 ―安達隆一先生古稀記念論文集―』, pp.121-135. おうふう.
- 奥津敬一郎. 1983. 「授受表現の対照研究 ―日・朝・中・英の比較―」『日本語学』2巻4号, pp.22-30. 明治書院.
- 奥津敬一郎. 1986. 「やりもらい動詞」『国文学解釈と鑑賞』51巻1号. 至文堂.
- 奥津敬一郎. 1992. 「日本語の受身文と視点」『日本語学』11巻8号, pp.4-11. 明治書院.
- 尾上圭介. 2003. 「ラレル文の多義性と主語」『言語』32巻4号, pp.34-41. 大修館書店.
- 何志明. 2010. 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ ―日本語教育の観点から―』 笠間書院.
- 影山太郎. 1989. 「〈動詞の言語学〉動詞と態」『言語』18巻9号, pp.58-61. 大修館書店.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論 ―言語と認知の接点―』 くろしお出版.
- 梶井恵子. 1997. 『日本語の機能表現形式 ―「て形」のすべて―』 凡人社.
- 金子亨. 1989. 「〈動詞の言語学〉動詞と格関係」『言語』18巻9号, pp.70-73. 大修館書店.

- 河上誓作(編著). 1996. 『認知言語学の基礎』 研究社出版.
- 川村大. 2003. 「受身文の学説史から: 「被影響」の有無をめぐる議論について」『言語』 32 巻 4 号, pp.42-49. 大修館書店.
- 川村大. 2004. 「受身・自発・可能・尊敬 一動詞ラレル形の世界一」 尾上圭介(編). 『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』 朝倉書店.
- 川村大. 2008. 「動詞ラレル形とその周辺」『日本言語学会 夏期講座 2008 Seminar Handbook』, pp.282-313. 日本言語学会.
- 岸本秀樹. 2009. 『ベーシック生成文法』 ひつじ書房.
- 金珉秀. 2000. 「授受動詞の意味分析 —「もらう」と「受け取る」を中心に—」 草薙裕(編). 『現代日本語の語彙・文法』, pp.51-70. くろしお出版.
- 金水敏. 1991. 「受動文の歴史についての一考察」『国語学』 164, pp.1-14. 国語学会.
- 金水敏. 1992a. 「場面と視点 一受身文を中心に—」『日本語学』 11 巻 8 号, pp.12-19. 明治書院.
- 金水敏. 1992b. 「欧文翻訳と受動文 一江戸時代を中心に—」『文化言語学 一その提言と建設—』, pp.562-547. 三省堂.
- 國廣哲彌. 1982. 『意味論の方法』 大修館書店.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』 大修館書店.
- 久野暲. 1983. 『新日本文法研究』 大修館書店.
- 栗原由加. 2005. 「定位のための受身表現 一非情物主語の二受身文の一類型—」『日本語文法』 5 巻 2 号, pp.180-195.
- 古賀裕章. 2008. 「「てくる」のヴォイスに関連する機能」 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明(編). 『ことばのダイナミズム』, pp.241-257. くろしお出版.
- 児玉一宏・野澤元. 2009. 『言語習得と用法基盤モデル』 研究社.
- 近藤泰弘. 2000. 「10. ダイクシス (敬語・指示・人称)」『日本語記述文法の理論』, pp.483-543. ひつじ書房.
- 齋藤勇. 2007. 「感情と人間関係」 齋藤勇(編). 『人間関係の心理学 第 2 版』, pp.87-104. 誠信書房.
- 阪倉篤義. 1975. 「日本語的な思考 一受益態をめぐる—」『言語』 4 巻 1 号, pp.19-26. 大修館書店.
- 坂原茂. 1995. 「複合動詞「V て来る」」『言語・情報・テキスト』 vol.2, pp.109-143.
- 坂原茂. 2003. 「ヴォイス現象の概観」『言語』 32 巻 4 号, pp.26-33. 大修館書店.
- 佐藤喜代治. 1969. 「18. て (で) 一接続助詞<古代語・現代語>」 松村明(編). 『古典語現代語 助詞助動詞詳説』 pp.443-448. 学燈社.
- 佐藤琢三. 2005. 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院.
- 澤田淳. 2007. 「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質 —「てくれる」構文の受益者を中心として—」『日本語文法』 7 巻 2 号, pp.83-100.

- 澤田淳. 2008. 「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性 ―タ形「テキタ」と「テイッタ」の非対称的な分布に注目して―」『日本語の研究』4 巻 4 号, pp.63-69.
- 篠原和子. 2007. 「時間のメタファーにおける図と地の問題」楠見孝(編). 『メタファー研究の最前線』, pp.201-216. ひつじ書房.
- 志波彩子. 2005. 「2 つの受身 ―被動者主役化と脱他動化―」『日本語文法』5 巻 2 号, pp.196-212.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析 ―生成文法の方法―』大修館書店.
- 柴谷方良. 1997. 「「迷惑受身」の意味論」川端善明・仁田義雄(編). 『日本語文法 体系と方法』, pp.1-22. ひつじ書房.
- 柴谷方良. 2000. 「ヴォイス」 仁田義雄・益岡隆志(編). 『文の骨格』, pp.119-186. 岩波書店.
- 杉本孝司. 1998. 『意味論 2 ―認知意味論―』くろしお出版.
- 鈴木重幸. 1972. 『日本語文法・形態論』むぎ書房.
- 鈴木重幸. 1980. 「動詞の「たちば」をめぐる」『教育国語』60, pp.20-29. むぎ書房.
- 住田哲郎. 2005. 「「～てくる」の多義構造とその機能性について」『国文学研究ノート』39, pp.54-40. 神戸大学「研究ノート」の会.
- 住田哲郎. 2006. 「日本語「～てくる」の逆行態用法」『日本語学研究』17, pp.73-86. 韓国日本語学会.
- 住田哲郎. 2009. 「受影受動文の事象構造とイメージスキーマ」『国文論叢』41, pp.62-49. 神戸大学文学部国語国文学会.
- 住田哲郎. 2010. 「日本語コミュニケーションにおけるヴォイスの機能」『日語日文学研究』74-1, pp.165-186. 韓国日語日文学会.
- 高橋太郎. 1985. 「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4 巻 4 号, pp.4-23. 明治書院.
- 高橋太郎. 1994. 「3. 動詞の中止形（～シテ）とその転成をめぐる」『動詞の研究 ―動詞の動詞らしさの発展と消失―』, pp.89-101. むぎ書房.
- 高橋太郎. 2003. 『動詞 九章』ひつじ書房.
- 高見健一. 1997. 『機能的統語論』くろしお出版.
- 高見健一. 2002. 「談話研究・機能的構文論の展望」『言語』31 巻 6 号, pp.94-105. 大修館書店.
- 高見健一・久野暲. 2002. 『日英語の自動詞構文』研究社.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社.
- 谷口一美. 2004. 「2. 行為連鎖と構文 I」中村芳久(編). 『認知文法論 II』, pp.53-87. 大修館書店.
- 辻幸夫(編). 2002. 『認知言語学キーワード事典』研究社.
- 角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版.

- 坪井栄治郎. 2003. 「受影性と他動性」『言語』32 卷 4 号, pp.50-55. 大修館書店.
- 坪井美樹. 2005. 「テ型接続形式と文法化」『国語と国文学』82-11, pp.13-25.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 豊田豊子. 1974. 「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1, pp.77-96. 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 内藤哲雄. 2007. 「態度と人間関係」齋藤勇(編).『人間関係の心理学 第2版』, pp.105-118. 誠信書房.
- 二枝美津子. 2004. 「被動者 —主語文の認知言語学的分析」池上嘉彦他(編).『認知言語学論考 No.3 2003』, pp.93-141. ひつじ書房.
- 二枝美津子. 2007. 『格と態の認知言語学：構文と動詞の意味』世界思想社.
- 仁田義雄. 1992. 「3 ヴォイス・アスペクト・テンス」玉村文郎(編).『日本語学を学ぶ人のために』, pp.52-73. 世界思想社.
- 仁田義雄. 1997. 『日本語文法研究序説 日本語の記述文法を目指して』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(編). 2009. 『現代日本語文法2』くろしお出版.
- 野田尚史. 1991. 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄(編).『日本語のヴォイスと他動性』, pp.211-232, くろしお出版.
- 橋元良明. 2001. 「授受表現の語用論」『言語』30 卷 5 号, pp.46-51. 大修館書店.
- 早津恵美子. 2005. 「現代日本語の「ヴォイス」をどのように捉えるか」『日本語文法』5 卷 2 号, pp.21-38. くろしお出版.
- 日野資成. 2001. 『形式語の研究 —文法化の理論と応用—』九州大学出版.
- 廣瀬幸生. 2001. 「授受動詞と人称」『言語』30 卷 5 号, pp.64-70. 大修館書店.
- 細江逸記. 1928. 「我が国語の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」『岡倉先生記念論文集』, pp.96-130.
- 堀江薫. 2003. 「日本語と韓国語の認知言語学的対照研究」『日本語学』22 卷 10 号, pp.63-73. 明治書院.
- 堀江薫・プラシャント, パルデシ. 2009. 『言語のタイポロジー』研究社.
- 堀口和吉. 1983. 「〈はた迷惑の受身〉考」『山邊道』27, pp.37-48. 天理大学国語国文学会.
- 堀口純子. 1987. 「「～テクレル」「～テモラウ」の互換性とムードの意味」『日本語学』6 卷 4 号, pp.59-72. 明治書院.
- 牧野成一. 1996. 『ウチとソトの言語文化学 —文法を文化で切る—』アルク.
- 益岡隆志. 1982. 「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82, pp.48-64.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法 —日本語文法序説—』くろしお出版.
- 益岡隆志. 1991. 「受動表現と主観性」仁田義雄(編).『日本語のヴォイスと他動性』, pp.105-121, くろしお出版.

- 益岡隆志. 1992. 「日本語の補助動詞構文 —構文の意味の研究に向けて—」『文化言語学 —その提言と建設—』, pp.546-532. 三省堂.
- 益岡隆志. 2001. 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30 巻 5 号, pp.26-32. 大修館書店.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 —改訂版—』くろしお出版.
- 松浦とも子. 2003. 「「使役型でもらう」構文の日中対照研究 —中国語母語話者の授受表現における母語の影響—」『早稲田大学日本語教育研究』3, pp.111-124. 早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 松下大三郎. 1930. 『標準日本口語法』中文館書店. (白帝社より復刊 1961 年)
- 松本曜. 1997. 「空間移動の言語表現とその移動」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』, pp.125-230. 研究社.
- 松本曜. 2004. 「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4 巻 1 号, pp.111-128.
- 松本曜(編). 2003. 『認知意味論』大修館書店.
- 三上章. 1953. 『現代語法序説』刀江書院.
- 南不二男. 1993. 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 三宅知宏. 2005. 「現代日本語における文法化 —内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1-3, pp.61-76.
- 宮地裕. 1965. 「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63, pp.21-33.
- 宮地幸一. 1969. 「補助動詞」『文法』1 巻 7 号, pp.85-89. 明治書院.
- 村木新次郎. 1986. 「ヴォイスの輪郭」『国文学 解釈と鑑賞』51 巻 1 号, pp.64-73. 至文堂.
- 梶山洋介. 2002. 『認知意味論のしくみ』研究社.
- 森田良行. 1968. 「「行く・来る」の用法」『国語学』75, pp.75-87.
- 森田良行. 2006. 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房.
- 森田良行. 2007. 『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版.
- ヤコブセン, ウェスリー・M. 1989. 「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良(編). 『日本語学の新展開』, pp.213-248. くろしお出版.
- 山口堯二. 1980. 『古代接続法の研究』明治書院.
- 山田敏弘. 2004. 『日本語のベネファクティブ —「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論：文法のゲシュタルト性』大修館書店.
- 山本裕子. 2000. 「「くる」の多義構造 —「くる」と「～てくる」の意味のつながり—」『日本語教育』105, pp.11-20.
- 由本陽子. 2001. 「第 10 章 複雑述語の形成」影山太郎(編). 『日英対照 動詞の意味と構

文』 pp.269-296. 大修館書店.

由井紀久子. 1997. 「日本語動詞における意味の抽象化過程の研究：補助動詞用法を持つ動詞の意味分析」『大阪大学文学部紀要』 37, pp.1-152.

吉川武時. 1976. 「現代日本語動詞のアスペクト研究」金田一春彦(編). 『日本語動詞のアスペクト』 pp.155-327. むぎ書房.

林青樺. 2009. 『現代日本語におけるヴォイスの諸相：事象のあり方との関わりから』くろしお出版.

和栗夏海. 2005. 「属性叙述受動文の本質」『日本語文法』 5 卷 2 号, pp.161-179.

鷺尾龍一. 1997. 「他動性とヴォイスの体系」鷺尾龍一・三原健一. 『ヴォイスとアスペクト』(日英語比較選書 7), pp.1-106. 研究社出版.

英語文献

- Andrew, Avery D. 1985. The major functions of the noun phrase. In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description (volume 1: Clause Structure)*. New York: Cambridge University Press.
- Brinton, Laurel J. and Elizabeth Closs Traugott. 2005. *Lexicalization and Language Change*. New York: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan. 2010. *Language, Usage and Cognition*. New York: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Language of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clausner, Timothy C. 2005. Image schema paradoxes: Implications for cognitive semantics. In B. Hampe (ed.) *From Perception to Meaning: Image Schemas in Cognitive Linguistics*. Cognitive Linguistics Research 29, 93-110. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Clausner, Timothy C. and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10-1, 1-31.
- Comrie, Bernard. 1981a. *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard. 1981b. *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Basil Blackwell. 松本克巳・山本秀樹訳『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房, 1992.
- Cooreman, Ann. 1987. *Transitivity and Discourse Continuity in Chamorro Narratives*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: the Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. New York: Oxford University Press.
- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. Oxford: Blackwell.
- Dahlstrom, Amy. 1991. *Plains Cree Morphosyntax*. New York/London: Garland Publishing, Inc.
- Das Gupta, Kamallesh. 1971. *An Introduction to the Nocte Language*. Shillong: North East Frontier Agency.

- Delancey, Scott. 1981. An interpretation of split ergativity and related patterns. *Language* 57, 626-657.
- Fillmore, Charles J. 1968. The Case for Case. In E. Bach and R. T. Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Givón, Talmy. 1990. *Syntax: An Introduction*, vol. II. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Givón, Talmy. 1994. The pragmatic of de-transitive voice: Functional and typological aspects of inversion. In T. Givón (ed.) *Voice and Inversion*. TSL #28, 3-44. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Grady, Joseph E. 2005. Image schemas and perception: Refining a definition. In B. Hampe (ed.) *From Perception to Meaning: Image Schemas in Cognitive Linguistics*. Cognitive Linguistics Research 29, 35-55. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Haspelmath, Martin. 1990. The grammaticalization of passive morphology. *Studies in Language* 14-1, 25-72.
- Haspelmath, Martin. 1994. Passive participles across languages. In Barbara A. Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice: Form and Function*. TSL #27, 151-177. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Heine, Bernd. 1993. *Auxiliaries: Cognitive Forces and Grammaticalization*. New York: Oxford University Press.
- Heine, Bernd. 2003. Grammaticalization. In Brian D. Joseph and Richard D. Janda (eds.) *The Handbook of Historical Linguistics*. 575-601. Malden, MA: Blackwell.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. 1991. On some principles of grammaticalization. In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*. vol.2, TSL #19, 17-35. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press. 菅野盾樹・中村雅之訳『心のなかの身体』紀伊国屋書店, 1991.
- Johnson, Mark. 2005. The philosophical significance of image schemas. In B. Hampe (ed.) *From Perception to Meaning: Image Schemas in Cognitive*

- Linguistics*. Cognitive Linguistics Research 29, 15-33. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Keenan, Edward L. 1975. Some universals of passive in relational grammar. *Papers from the Eleventh Regional Meeting*, 340-352. Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- Keenan, Edward L. 1985. Passive in the world's languages. In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description (volume 1: Clause Structure)*, 243-281. New York: Cambridge University Press.
- Klaiman, M. H. 1991. *Grammatical Voice*. New York: Cambridge University Press.
- Krauss, Michael E. 1985. A survey of major Alaskan language types. In Winfred P. Lehmann (ed.) *Language Typology 1985*. CILT #47, 169-185. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Krech, David, Richard S. Crutchfield and Egerton L. Ballachey. 1962. *Individual in Society: A Textbook of Social Psychology*. McGraw-Hill Book Company, Inc.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店, 1986.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundation of Cognitive grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1996. A constraint on progressive generics. In Adele E. Goldberg (ed.) *Conceptual Structure, Discourse and Language*, 289-302. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. 山梨正明監訳『認知文法論序説』研究社, 2011.
- Lass, Roger. 1980. *On Explaining Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 2005. *Argument Realization*. New York: Cambridge University Press.
- Marchese, Lynell. 1986. *Tense/Aspect and the Development of Auxiliaries in Kru Languages*. (Summer Institute of Linguistics, Publications in Linguistics 78.)

- Arlington, TX: Summer Institute of Linguistics and University of Texas, Arlington.
- Masuoka, Takashi. 1981. Semantics of the benefactive constructions in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics*, Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics vol.14, 67-79.
- Matthews, Peter H. 1997. *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*. New York: Oxford University Press.
- Nariyama, Shigeko. 2000. Referent Identification for Ellipted Arguments in Japanese. Ph.D. dissertation, Department of Linguistics and Applied Linguistics, University of Melbourne.
- Newman, John. 1996. *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Rude, Noel. 1994. Direct, inverse and passive in Northwest Sahaptin. In T. Givón (ed.) *Voice and Inversion*. TSL #28, 101-119. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. Passives and related constructions: A prototype analysis. *Language* 61-4, 821-848.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The languages of Japan*. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1994. Benefactive Construction: A Japanese-Korean Comparative Perspective, *Japanese-Korean Linguistics* 4, 39-74.
- Shibatani, Masayoshi. 1996. Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. In M. Shibatani and S. A. Thompson (eds.) *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*, 157-194. New York: Oxford University Press.
- Shibatani, Masayoshi. 2003. Directional verbs in Japanese. In Erin Shay and Uwe Seibert (eds.) *Motion, Direction and Location in Languages : In Honor of Zygmunt Frajzyngier*, 259-286. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Shibatani, Masayoshi. 2006. On the conceptual framework for voice phenomena. *Linguistics* 44-2, 217-269.
- Shibatani, Masayoshi. 2007. Grammaticalization of motion verbs. In B. Frellesvig, M. Shibatani and J. C. Smith (eds.) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, 107-133. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Shibatani, Masayoshi and Sung Yeo Chung. 2007. On the grammaticalization of motion verbs: A Japanese-Korean comparative perspective. In Naomi Hanaoka McGloin and Junko Mori (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 15, 21-40. Stanford: CLSI Publications.

- Silverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Sohn, Ho-Min. 2001. *The Korean Language*. New York: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Thompson, Chad. 1987. *Voice and Obviation in Athabaskan and Other Languages*. Ph.D dissertation, University of Oregon, Eugene (ms).
- Thompson, Chad. 1994. Passive and inverse constructions. In T. Givón (ed.) *Voice and Inversion*. TSL #28, 47-63. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Wolfart, H. C. 1973. *Plains Cree: A Grammatical Study*. Transactions of the American Philosophical Society.
- Yeon, Jaehoon. 2003. *Korean Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. London: Saffron.

2011 年 12 月 21 日
博士 (学術)